

戦国出土資料と上古中国語声母研究

野原 将揮

目次

目次	i
はじめに	1
0.1 本論文の目的と基本原則	1
0.1.1 本論文の目的	1
0.1.2 基本原則	2
0.2 本論文の構成	8
0.3 中古音声母体系	9
第1章 上古音声母体系再構の歴史	11
1.1 清朝考証学者の声母研究	11
1.1.1 銭大昕(1728-1804)の研究	12
1.1.2 段玉裁(1735-1815)の「同諧聲者必同部也」(「六書音均表」)	16
1.1.3 章炳麟(1869-1936)の研究	16
1.1.4 黄侃(1886-1935)の研究	17
1.1.5 清朝考証学者の研究に対す評価	18
1.2 Bernhard Karlgren	18
1.3 董同龢	20
1.4 Sergej Jaxontov (Yakhontov)	21
1.5 Edwin G. Pulleyblank	24
1.6 李方桂 (Fang-kuei, Li)	25
1.7 第一口蓋音化—河野学説—	26
1.8 第一口蓋音化—Axel Schuessler—	27
1.9 鄭張尚芳、潘悟云	29
1.10 William H. Baxter、Laurent Sagart	31
第2章 本論文の研究方法	36
2.1 本論文の研究方法—仮借と通仮—	36
2.1.1 仮借と通仮について	36
2.1.1.1 仮借について	36
2.1.1.2 仮借の具体例	37

2.1.1.3 仮借と通仮	38
2.1.1.4 形音義の関係について	41
2.2 形声文字について	44
2.3 研究対象とする通仮例	45
2.4 諧声・通仮可能範囲	45
2.4.1 声母（音節初頭子音）の喉頭特徴	47
2.4.2 声調	47
2.4.3 開合の違い（円唇性の有無）	48
2.5 戦国竹簡を研究対象とする意義	50
2.5.1 押韻、諧声関係の欠如と「復元の強度」	50
2.5.2 対象とする時代・地域の特定	51
2.5.3 後世の修正が加えられていない資料	52
2.5.4 出土資料の欠点	52
 第3章 出土資料の通仮と声母体系	 54
3.1 唇音 P（両唇破裂音）、鼻音 M	55
3.1.1 先行研究	55
3.1.2 破裂音 *p-, *ph-, *b-	55
3.1.3 鼻音 *m-	59
3.1.4 小論	60
3.2 T-type と L-type	60
3.2.1 先行研究	60
3.2.2 T-type	63
3.2.3 L-type	68
3.2.4 由来不明の語	71
3.2.5 小論	73
3.3 牙音 K と喉音 H（軟口蓋破裂音・摩擦音と口蓋垂破裂音）、鼻音 NG	74
3.3.1 牙音 K : 牙音 K	79
3.3.1.1 「仇讎」の上古音再構	82
3.3.1.2 牙音 K : 牙音 K 一合口	84
3.3.2 牙音 K : 匣母 l 類	86
3.3.3 牙音 K : 喉音 H	93
3.3.4 鼻音 NG : 鼻音 NG	95
3.3.5 小論	97
3.4 齒音 TS（齒茎摩擦音・摩擦音 S）	98

3.4.1	齒茎破擦音 TS	98
3.4.2	小論	100
第 4 章 無声鼻音 HN、preinitial *s-、書母 sy-の再構		102
4.1	無声鼻音再構の歴史	102
4.1.1	出土資料に見える無声鼻音の例	108
4.1.2	「好」と丑声字	110
4.1.2.1	「好」について	110
4.1.2.2	「𠂔」について	111
4.1.2.3	「𠂔」と「𠂔」は会意文字か形声文字か	113
4.1.2.4	丑声字と無声鼻音	113
4.1.2.5	「好」の上古音再構	115
4.1.2.6	丑声字と単語家族	115
4.1.2.7	「好」と「薺」	116
4.1.3	戦国期の無声鼻音と摩擦音化	117
4.2	preinitial *s-と「西」「訊」の上古音再構	118
4.2.1	preinitial について	118
4.2.2	声符「人」と preinitial *s-	120
4.2.3	「千」の上古音価	121
4.2.4	「西」の上古音再構	122
4.2.5	「訊」の上古音再構	125
4.2.6	「西」を声符とする語	128
4.2.7	他の例—「娥」、「𠂔」	129
4.2.7.1	「娥」	129
4.2.7.2	「𠂔」	130
4.3	書母 sy-の再構	131
4.3.1	先行研究	131
4.3.2	*ST に由来する書母 sy- (T-type)	133
4.3.3	無声側面音*hl- ([ɭ]) に由来する書母 sy- (L-type)	139
4.3.4	無声鼻音*hn- ([ŋ]) に由来する書母 sy-	142
4.3.5	由来不明の書母 sy-	143
4.3.6	閩語と上古音—書母 sy-を例に—	147
4.4	「少」の上古音再構	149
4.4.1	「少」の諧声関係	149
4.4.2	主な研究者の再構音	150

4.4.3 出土資料中の「少」	151
4.4.3.1 甲骨文	151
4.4.3.2 金文	151
4.4.3.3 戦国楚簡	152
4.4.3.4 秦簡	152
4.4.3.5 漢簡	153
4.4.4 文字構成要素としての「少」	154
4.4.4.1 疏母歌部「沙省声」	154
4.4.4.2 精母薬部「雀省声（?）」	154
4.4.4.3 心母宵部 {小} の字音と通仮	155
4.4.4.4 T-type 薬部「勺」、宵部「趙」	155
4.4.5 出土資料から見た「勺」「少」「趙」の字音再構	156
4.4.5.1 「勺」の上古音	156
4.4.5.2 「少」の上古音	156
4.4.5.3 「趙」の上古音	156
4.4.5.4 閩語の「少」	157
おわりに	160
参照文献	162

はじめに

本章では本論文の目的、基本原則、研究方法、構成、中古音体系について述べる。本論文では伝統的な中国語音韻学の術語（たとえば声母）を用いるが、言語学で用いられる一般的な用語を括弧内に適宜示す。また本論文では特に示さない限り新字体を使用するが、便宜上旧字体を使用することもある。

0.1 本論文の目的と基本原則

0.1.1 本論文の目的

本論文の目的は上古中国語の声母（頭子音）体系を再構することである。甲骨文も含めた文字資料に基づくならば、中国語には少なくとも 3500 年以上の歴史がある。したがって研究対象となる時代を可能な限り細かく区分する必要がある。時代区分には諸説あるが、いま一例として藤堂明保（1967:33）を挙げると以下のようにある：

- 1) 太古漢語（Proto-Chinese）殷代～西周（前 15C～前 10C）
- 2) 上古漢語（Old-Chinese）東周～春秋戦国～秦漢～三国（前 7C～後 4C）
- 3) 中古漢語（Ancient-Chinese）六朝～隋唐（後 6C～後 10C）
- 4) 中世漢語（Middle-Chinese）宋～元～明（後 11C～後 16C）
- 5) 近代漢語（Modern-Chinese）清代～現代（後 17C～後 20C）

従来、上古音の研究と言うと主に 1)太古漢語と 2)上古漢語（以下、上古中国語）の研究が中心であり、藤堂（1967:33）の示す太古中国語の上限から上古中国語の下限にはおよそ 2000 年という年月がある。これでは対象とする時代があまりに広すぎると言わざるを得ない。シナ・チベット祖語まで視野に入れる場合は、さらに時代をさかのぼって議論するため、上古音の枠組みはさらに広くなる。無論、さらなる細分化を試みる研究者も少なくないが、資料の制約上、これ以上の細分化は極めて難しい。そしてこれこそが上古音研究を困難にさせる障碍の一つであった。

ところが近年になって上古中国語研究を取り巻く環境は変わりつつある。20 世紀以降、中国各地―特に長江流域―で先秦時代から漢代までの竹簡や帛書が陸続と発見され、思想や歴史等の分野から多くの注目を集めている。歴史言語学に目を向けると、古文字学を専門とする研究者による議論が盛んに行われていることが看取される。音韻面からのアプローチは他の分野と比べるとそれほど多くないが、今後増加するに違いない。それは出土資料の持つ特性が言語史の研究にとって極めて有用であるからである¹。おおまかに言えば、出土資料の特性として時代や地域性が比較的明確である点、発見に至るまで後世の手が加えられていない点、伝世文献に見えない新たな言語現象（伝世文献に見えない通仮等）が

¹ 詳細は第 2 章「本論文の研究方法」 § 2.5「戦国竹簡を研究対象とする意義」にて述べる。

ある点などが挙げられる。

本論文の目的はこれら出土資料の中でも特に戦国中期から後期の出土資料を主な研究対象として、当時一すなわち戦国期一の声母体系を再構することである。論文中では、戦国竹簡に限らず甲骨、金文、秦漢期の資料に言及することもある。本稿で再構された戦国時代の声母体系は、それより以前一すなわち殷周期、さらに欲を言えばシナ・チベット祖語一の音韻体系や戦国時代以降一すなわち秦漢以降一の音変化を考察する上での一つの定点となると考えられる。

0.1.2 基本原則

上古音を再構するに当たり、基本的な態度を明確にしておきたい。本節は主に Baxter (1992:17-25) および Baxter and Sagart (2014) に従っている。以下、7項目に分けて述べていきたい：

1. 再構された体系が自然言語として不自然でないこと、類型論的に矛盾しないこと

たとえば松本克己(1984:5-6)は「歴史言語学者は歴史言語学者であるかぎり、再建された言語状態を可能な限り言語のあり得べき実相に近づけるべく努めなければならないのである。(中略)言語のいわば普遍相に照らして—sub facie universali—再建された言語状態を吟味することは、今日の歴史言語学にとってきわめて緊急の課題であり、また、このような吟味を通してはじめて再建の現実性も保証されるであろう」として、言語類型論的な視座から歴史言語学の進むべき方向性について述べており、本稿もこれに従う。これは至極当然のことに思えるが、従来の研究では自然言語として不自然であり、類型論的にも矛盾していると思しき音韻体系が多く見られた。たとえば王力(1980)は7種の半母音(semivowels)を上古音の韻母に認めており、やはり批判の対象となっている²。さらに Baxter (1992:21)は李方桂(1971/1980)が主母音の前に*-j-, *-i-, *-ji-の三種を再構することについても信じがたいとしている。

「類型論的に矛盾しないこと」というのは実際には判断が難しいが、少しでも類型論的に矛盾しないような体系を再構するほうが、仮説の蓋然性がより高いとすることができるだろう。たとえば上古音には無声鼻音*ɲ-が再構されるが、無声鼻音*ɲ-が存在するということは無声鼻音*ɱ-, *ɳ-が存在することを意味している。Maddieson (1984:6)は鼻音に関する含意法則(implicational law)について以下のように述べている：

I . If a segment is a nasal, it is voiced.

² Baxter (1992:21): “the system recently proposed Wáng lì (1980b) allows a total of seven different semivowels and semivowel combinations in medial position before the main vowel: *-e-, *-i-, *-y-, *-u-, *-o-, *-iu-, and *-yu-; I doubt if any known language has such an array.”

IV. A voiceless nasal is more likely to have a bilabial place of articulation than any other place.

V. Most languages have at least one nasal.

VI. A language with any nasals has /*n/.

VII. The presence of /m/ in a language implies the presence of /*n/.

この無声鼻音であるが、上古音研究でもしばしば議論の対象となり、やはり類型論的に支持しがたい再構がなされることがある。無声鼻音については § 4.1 「無声鼻音再構の歴史」にて詳述する。

II. オッカムの剃刀 (Ockham's Razor) (Baxter1992:22-23)

Baxter1992:22 には次のようにある：

Assumption 3: Hypotheses which tie a number of phenomena together are to be preferred over hypotheses which account for only one phenomenon at a time.

これはつまり「一つの現象を説明する仮説より多くの現象を説明する仮説のほうが好まれる」ということである。Baxter (1992:22) は「藍」と「監」を例としてあげる。「監」は「藍」の諧声符であるため、それぞれ同音あるいは類音であったと推定される。ところが「藍」の中古音は *lam*、「監」は *kæm* であり、声母 (*l:k*) だけでなく主母音 (*a:æ*) も異なる。したがって Karlgren (1954/1992:70) は「藍」を **glâm*、「監」を **klam* と再構するが、ここで Karlgren は 3 つの仮説をとっている。① **l*-の再構 (二重子音の再構)、② 上古音の段階に **-â-* と **-a-* の区別を設ける、③ 上古において **-â-* と **-a-* が互いに押韻・諧声可能であったと想定する、という 3 つの仮説である。これに対して Jaxontov (1960a/1986:42-27) は **l*-を再構するが、この仮説は Karlgren の①～③の仮説を網羅するものである (**l*-が主母音に影響を与えたと考える)。近年ではこの **l*-を **r*-で再構するのが通説となっており、Baxter (1992:22) は以下のように再構する³：

藍 *lán* < *lam* < **g-ram*

監 *jiān* < *kæm* < **kram*

このほかたとえば鄭張尚芳 (2003) は中古音三等韻に対応する上古音に **-j-* を認めず短母音を再構するが、章組 (三等) には **-j-* を認めており⁴、これは余剰的である。またそもそも三等韻に介音を認めない以上、章組 (三等) に **-j-* を認めるということは、体系的に矛盾を孕

³ Baxter and Sagart (2014) では「藍」 **[N-k]r̥am*、「監」 **[k]r̥am* と再構される。

⁴ たとえば「書」を **hlja* と再構する。三等韻に **-j-* を認めないのであれば、**hla* とすべきである。ちなみに本論文では「書」を **sta* と再構する (第 4 章 § 4.3 「書母 *sy-* の再構」)。

んでいると言わざるを得ない。

III. 仮説演繹法 (Hypothetico-deductive approach) (Baxter and Sagart (2014:5))

言語学は言語を科学的に分析することであり、データに基づき仮説を提起しさらに検証を加えなければならない。本論文では仮説演繹法を基礎として上古音の再構を進める。仮説演繹法はしばしば帰納的過程と演繹的過程に分類されるが、これはたとえば手持ちのデータから仮説を導き出し（帰納法）、その仮説を具体的な例で検証し、その結果を予想する（演繹法）ことである。

ここでは T-type と L-type を例に簡単にまとめておきたい。T-type と L-type は Pulleyblank (1962:114-115) によって示された仮説 (L-type hypothesis) である。Pulleyblank は主に諧声系列の分布をもとに中古音の舌音（正歯音も含む）が上古音の T-type と L-type に由来するとの仮説を提起している。これが帰納的過程である。野原（2009:67-85）では当該仮説の正否を問うべく、戦国時代の出土資料中に見える通仮の状況を検証し、戦国時代には T-type と L-type は通仮しないという結果を得ている。さらに諧声関係を欠く幾つかの語についても出土資料に見える通仮をもとに T-type か L-type かを判断している。これが演繹的過程である。このようにして漸く Pulleyblank の仮説が確からしい—すなわち蓋然性が高い—ということが明らかとなったと言える。T-type と L-type については第3章 § 3.2「T-type と L-type」にて詳述する。

IV. 同時代資料—出土資料—の活用

本論文冒頭で述べたとおり、上古音研究の障碍の一つに対象とする時代があまりに広いことが挙げられる。本論文では戦国竹簡に見える通仮を研究対象とし、上古音（特に戦国時代の音体系）を再構することを目的とするが、すべての語が出土資料中に見えるわけではない。大部分の語については当然のことながら従来の資料に頼らざるを得ない。その際、あまりに時代が異なる資料を用いることは理想的ではない。後世の手が加えられている可能性があるからである。

たとえば Baxter and Sagart (2014:63) は {聞} を表す「𦇧」を例に、その背景にある音変化と声符の変更（「昏」→「門」）について述べている。先秦の出土資料では {聞} を表す場合、「𦇧」のように「昏」を声符とする字が用いられたが、秦の睡虎池秦簡以降では「門」を声符とする「聞」が用いられるようになっている。「門」の主母音は*-ə-であり⁵、本来は「聞」と「昏」の主母音*-u-とは異なるが、唇音声母の前で*-ə-と*-u-は合流したと推定される⁶：

⁵ 『詩経』「邶風・北門」では「殷」「貧」「艱」と押韻するため、「門」の主母音を*-ə-とするのは妥当である。

⁶ Baxter and Sagart (2014:63) はさらに「門」に*-r 韻尾 (coda) を考えており、「聞」「昏」には*-n 韻尾を

聞 *mu[n] > *mjun* > wén
昏 *m̥u[n] > *x̥un > *xwon* > hūn
門 *m̥ə[r] > *mwon* > mén

また今本『老子』十八章には「國家昏亂」とあるが、これに対応する各文献では次のように表記されている：

表 0.1.2.1 『老子』「國家昏亂」

今本『老子』十八章	國家昏亂	昏：*m̥u[n] > *x̥un > <i>xwon</i> > hūn
北京大学西漢『老子』	國家 ^昏 亂	昏：*m̥u[n] > *x̥un > <i>xwon</i> > hūn
馬王堆帛書甲本	邦家 ^悶 乳	門：*m̥ə[r] > <i>mwon</i> > mén
馬王堆帛書乙本	國家 ^悶 乳	
郭店楚簡『老子』丙本 3	邦蒙 ^昏 亂	昏：*m̥u[n] > *x̥un > <i>xwon</i> > hūn

-ə-「門」と-u-「昏」の表記が混在しており、唇音声母のもとで*-ə-と*-u-に区別が無かったことが分かる。興味深い点は馬王堆帛書『老子』では甲本乙本ともに「門」と表記されており、{昏}が未だ摩擦音化していなかったことが看取される（仮に摩擦音化していたとするならば、「門」を声符に持つ字を用いることができない可能性が高い）。

このように時代の異なる資料の扱いには十分注意が必要である。もちろん非同時代資料を比較することで音変化を詳細に記述できるという側面もある。

V. 閩語との比較

Baxter and Sagart (2014) では閩祖語 (Proto-Min) を研究の中心に据えて上古音声母の再構を試みている。Norman (1973, 1974 等) による閩祖語には*p-, *ph-, *-p, *b-, *bh-, *-b の 6 種の声母が再構される。たとえば「飛」は建陽で[ye⁹]、建甌で[ye³]、邵武で[p'ei³]と実現されるため閩祖語には弱化声母 (softened stops) *-p が再構される⁷。Baxter and Sagart (2014) はこの Norman の閩祖語を上古音に取り入れ*Cə を再構し、母音間で子音が弱化 (lenition) すると想定する。たとえば「飛」は*Cə.pə[r]のように再構される⁸。

この*Cə 仮説の正否は未だ明らかではないが、閩語が中古音以前の特徴を有していることは明白であり、上古音研究に閩語のデータを活用することについては疑問の余地がない。

再構しているため、この頃「門」の*-r が*-n に変化したと考えている。

⁷ Norman (1986:375-384) は閩祖語の弱化声母は prenasalized stops に由来するとして*N-を想定する。

⁸ Baxter and Sagart (2014:46) は lenition の共時的な例として福州方言に言及している（福州方言等では「声母類化」と称される）。福州方言を中心とする閩東語では母音間や鼻音に後続する場合に音節初頭子音が弱化する例が見られる。

第4章 §4.3「書母 sy-の再構」でも挙げるように、中古音書母に対応する閩語の[ts] ([tɕ]等) と[tsʰ] ([tɕʰ]等) の区別は上古音に由来しており、閩語のデータを用いることでより確度の高い再構が可能となる。ただし本論文で示す上古音は閩祖語の弱化声母を考慮した再構形ではない。これは出土資料に見える通仮字の振る舞いを基準に当時の上古音を再構するというのが本稿の方針であるからである。

VI. シナ・チベット祖語

上古音研究を進める前に、チベット・ビルマ諸語との関係についても態度を明確にしておく必要があるだろう。本論文の主たる目的は戦国期の上古音声母体系の再構である為、原則としてチベット・ビルマ諸語のデータを再構の主たる論拠として用いることはない。また戦国期以前の上古音を再構する場合においても、チベット・ビルマ諸語との比較にはやはり慎重を期すべきであると考えている。近年、鄭張尚芳氏、潘悟云氏、Laurent Sagart 氏、William H. Baxter 氏を上古音研究の「新派」と一括りにすることがあるが⁹、シナ・チベット祖語に関する見解についてはそれぞれ大きく異なる。これは上古音研究をすすめる上で重要な相違点であり、そういった意味においてもこれらの研究者を「新派」という語で一つに分類することはあまり適切ではないと考える。

また近年、Sino-Tibetan-Austronesian という考え方が提出されているが、これに関しては今後の研究が待たれる¹⁰。

VII. Minimal Old Chinese (OCM) について

“Minimal Old Chinese (OCM)”とは Schuessler (2009) によって示された、いわば最大公約数としての上古音体系である。Karlgren 以降の研究者によって上古音研究は大きな進歩を遂げ、それに伴い様々な仮説が示されてきた。結果、研究者間の差が大きく広がり、同じ上古音のはずが恰も別の言語のように見えることすらある¹¹。そこで示されたのが、この Schuessler (2009) による OCM である。最大公約数的な上古音とするために、不確かな仮説、再構音を複雑にするような仮説は排除し、広く認められ且つシンプルな仮説を採用し、簡単な表記法で表記されている。

この“Minimal Old Chinese”という考え方とここから導き出された上古音は特に上古音を二次的に利用する研究者にとって極めて有用である。その反面、上古音そのものを研究する立場からすると必ずしも有用ではない。たとえば「奭」の再構音は以下のように表され

⁹ 筆者の過去の論文でもこれらの研究者を「新派」と称している。

¹⁰ Sagart (1993) 等を参照されたい。これに賛同する中国国内の研究者もあり、たとえば邢公畹 (1991:1-14)、鄭張尚芳 (1995/2005:442-446) 等はこれを「華澳系」と称す。

¹¹ Schuessler (2009: ix): “Since the publication of *GSR*, historical linguists have tried to simplify and systematize Karlgren’s reconstructions, have suggested emendations or their own OC system which sometimes look as different from each other as if they were different languages.”

る：

表 0.1.2.2 OCM の表記と「爽」の再構音

Schuessler (2009) OCM	*hjak
Baxter and Sagart (2014)	*[q ^h](r)Ak

表 1.2.2 のように Schuessler (2009:110) の OCM と Baxter and Sagart (2014:360) の表記は大きく異なる。Baxter and Sagart (2014) の角括弧 “[] ” は再構音の蓋然性が低い場合に付されるものである。また主母音の *-A- は中古音への例外的な音変化が見られるため、敢えて大文字で表記される。

このように Baxter and Sagart (2014) の再構音は見かけ上極めて複雑であり、上古音を二次的に利用する研究者にとっては扱い難いと言わざるを得ない。これに対して、OCM の表記は簡潔かつ明瞭であり、近年示された口蓋垂音仮説や咽頭化仮説を採用していない。したがって OCM を “フレンドリーな” あるいは “親切的な” 表記と評する研究者もある。しかしながら、上古音研究を進める研究者にとっては再構音の蓋然性の高さを一目で理解できる Baxter and Sagart (2014) の表記のほうがより “親切” であるということもできる。このように上古音を扱う立場によってその評価は異なる。

本論文の再構音は OCM に近い表記をとるが、すべての再構音に Baxter and Sagart (2014) の再構音も付すことで、いずれの研究者にとっても “フレンドリー” な表記を目指す。たとえば以下のとおり（本論文において「爽」を *hl- に再構する点については 3.2 「T-type と L-type」にて述べる¹²⁾）：

表 0.1.2.3 「爽」の再構音

	OC	BS	MC	Note
爽	*hlAk	*[qh](r)Ak	書昔三 syek	Amoi: ts ^h oi?

OC： 本論文の再構音

BS： Baxter and Sagart (2014a、2014b) の再構音

MC： 中古音

本論文では以上の 7 つ原則を基に上古音声母体系の再構を進めていく。

¹²⁾ 「爽」は上博楚簡『緇衣』18 号簡に𠄎とあり、ここでは『尚書』「君爽」を表す。

0.2 本論文の構成

本論文は全4章からなる。

第1章では「上古音声母体系再構の歴史」と題し清朝考証学から最新の研究までを簡単にまとめる。特に本稿と関連のある声母の研究を中心に扱う。§1.1「清朝考証学者の声母研究」、§1.2「Bernhard Karlgren」、§1.3「董同龢」、§1.4「Sergej Jaxontov (Yakhontov)」、§1.5「Edwin G. Pulleyblank」、§1.6「李方桂 (Fang-kuei, Li)」、§1.7「第一口蓋音化—河野学説—」、§1.8「第一口蓋音化—Axel Schuessler—」、§1.9「鄭張尚芳、潘悟云」、§1.10「William H. Baxter, Laurent Sagart」として、上古音声母研究の大まかな流れについて紹介する。

第2章「本論文の研究方法」では本論文の研究方法について述べる。§2.1「本論文の研究方法—仮借と通仮—」、§2.2「形声文字について」、§2.3「研究対象とする通仮例」、§2.4「諧声・通仮可能範囲」では仮借と通仮、その範囲について簡単にまとめる。§2.5「戦国竹簡を研究対象とする意義」では、上古音研究の問題点を挙げるとともに、戦国竹簡の利点について述べる。

第3章「出土資料の通仮と声母体系」では各声母について論じる。§3.1「唇音 P (両唇破裂音)、鼻音 M」、§3.2「T-type (歯茎破裂音) と L-type (歯茎側面音)」、§3.3「牙音 K と喉音 H (軟口蓋破裂音・摩擦音と口蓋垂破裂音)、鼻音 NG」、§3.4「歯音 TS (歯茎破裂音・摩擦音 S)」について述べる。第3章では楚簡中に見られる通仮例を基に上古音声母体系を概観したい。ただし第一口蓋音化と上古の口蓋垂音に由来する中古音以母 *y*-については本稿では扱わないため、今後の研究に委ねたい。

第4章「無声鼻音 HN、preinitial *s-、書母 *sy*-の再構」では、§4.1「無声鼻音再構の歴史」、§4.2「preinitial *s-と「西」「訊」の上古音再構」、§4.3「書母 *sy*-の再構」、§4.4「「少」の上古音再構」について述べる。第4章ではより具体的な問題について検討を加える。

0.3 中古音声母体系

上古中国語の声母体系を論じる前に中古音の声母体系をまとめておきたい。

本稿では Baxter (1992:60-61) および Baxter and Sagart (2014:15-16) の表記法に一部修正を加え用いる：

表0.3.1 中古音声母の表記法

<i>p</i> (幫)	<i>ph</i> (滂)	<i>b</i> (並)	<i>m</i> (明)			
<i>t</i> (端)	<i>th</i> (透)	<i>d</i> (定)	<i>n</i> (泥)	<i>l</i> (來)		
<i>tr</i> (知)	<i>trh</i> (徹)	<i>dr</i> (澄)	<i>nr</i> (娘)			
<i>tsy</i> (章)	<i>tshy</i> (昌)	<i>dzy</i> (禪)	<i>ny</i> (日)	<i>sy</i> (書)	<i>zy</i> (船)	<i>y</i> (以)
<i>ts</i> (精)	<i>tsh</i> (清)	<i>dz</i> (從)			<i>s</i> (心)	<i>z</i> (邪)
<i>tsr</i> (莊)	<i>tsrh</i> (初)	<i>dzr</i> (崇)			<i>sr</i> (疏)	<i>zr</i> (俟)
<i>k</i> (見)	<i>kh</i> (溪)	<i>g</i> (群)	<i>ng</i> (疑)			
<i>ʔ</i> (影)				<i>x</i> (曉)	<i>h</i> (匣)	<i>hj</i> (于)

- ① 表記を簡便にするため、有気音を *-h*-で表し、そり舌音の知組と莊組を *-r*-で表し、硬口蓋音である章組に *-y*-を付加する。以母も *-y*-と表記する。疑母については *ng*-と表記する。
- ② 網掛け部分はいわゆる今変紐に当たる声母であり、介音等によって音変化を被った声母である。これに対して網掛けの無い声母は古本紐であり、介音などの影響を受けない中古音一等韻の声母である。Baxter (1992:60-61) では邪母 *z*-や群母 *g*-も中古音の分布に基づき網掛け部分と同じ声母群—今変紐 (Baxter (1992) は “complex initials” と称す) —に収める。
- ③ 全濁声母 (有声破裂音) について、Karlgren は中古音の並母 *b*-、定母 *d*-、群母 *g*-に対応する上古音声母に有声有気音 ([bʰ], [dʰ], [gʰ]) を再構するが、後の研究によって修正が加えられ、現在では無気音で再構するのが通説となっている¹³。その根拠はいくつも挙げられるが、その中でも興味深いのが遠藤 (2001:306) の統計で、子音の有／無標性から Karlgren の再構音を否定する¹⁴。類型論的視点からも、Karlgren の有声有気音は支持し難いと言えよう。
- ④ 軽唇音 (唇齒音) は上古音と関係が無いためここでは扱わない。
- ⑤ Karlgren は知組を硬口蓋破裂音と考えたが、羅常培 (1931:121-157) の梵漢対音研究以降はそり舌音と考えられている (ただし異論もある)。
- ⑥ 中古音で泥母と娘母は相補分布を成すため娘母を泥母に帰属させるのが一般的だが、

¹³ 勿論 Karlgren のように再構することで、**b*-、**d*-、**g*-を他の声母 (以母等) に再構できるという利点はある。以下、Karlgren の有声有気音 **b*ʰ- は **bh*- のように **-h*- で有気性を示す。

¹⁴ 遠藤 (2001:306) では、『広韻』の子音出現回数を比較し「像高本汉那样对全浊音构拟有标记性较高的带音送气音是不合适的」とする。

本稿では泥母を*n-*とし娘母を*nr-*としておく¹⁵。

- ⑦ 「常母」と「船母」の音価を入れ替える。船母の字が少ないことや、上古音の体系から言ってもこの入れ替えは妥当である。
- ⑧ 曉母*x-*と匣母*h-*について、多くの北方方言では軟口蓋摩擦音[x]、[ɣ]で実現され、南方方言では声門摩擦音[h]、[ɦ]で実現されることが多いため、中古音の曉母と匣母をどのように再構するかについての議論があるが、音韻論的立場から言えば問題とはならない。ただし、上古音からの音変化を推定する場合にはやはり無視できない現象である。
- ⑨ 声調の表記については、上声を-Xとし、去声を-Hとする。

参考として、三根谷徹（1972：52）の中古音声母体系に一部修正を加えたものも挙げる：

表 0.3.2 三根谷徹（1972:52）の中古音声母体系

p-系	p-（幫）	p'-（滂）	b-（並）	m-（明）			
pj-系	pj-（方）	p'j-（芳）	bj-（符）	mj-（武）			
t-系	t-（端）	t'-（透）	d-（定）	n-（泥）	l-（来）		
t̚-系	t̚-（知）	t̚'-（徹）	d̚-（澄）				
tś-系	tś-（章）	tś'-（昌）	dź-（常）	ń-（日）	ś-（書）	ž-（船）	j-（以）
ts-系	ts-（精）	ts'-（清）	dz-（從）		s-（心）	z-（邪）	
tʂ-系	tʂ-（莊）	tʂ'-（初）	dʒ-（崇）		ʃ-（疏）	ʒ-（俟）	
k-系	k-（見）	k'-（溪）	g-（群）	ŋ-（疑）	x-（曉）	ɣ（匣于）	'（影）
kj-系	kj-（居）	k'j-（去）	gj-（渠）	ŋj-（魚）	xj-（許）		'j（於）

¹⁵ 泥母と娘母を区別する方言もある。

第1章 上古音声母体系再構の歴史

本章では清朝考証学者の研究から近年の主要な研究を簡単に整理し、従来の問題点と今後の課題について確認しておきたい。上古音声母研究の大まかな流れを整理するため、本論文と関係のある研究および特に提起すべき点についてのみ挙げる。より詳細な先行研究については、第3章「出土資料の通仮と声母体系」および第4章「無声鼻音 HN、preinitial *s-、書母 sy-の再構」で取りあげる。

1.1 清朝考証学者の声母研究

周知のごとく清朝考証学者の関心は主に韻部の分部問題に向けられていた。清朝の学者は多くの用例を挙げて分部問題に取り組むが、その中でも『詩経』等の韻文、異文、声訓、直音、読若等の整理に重きが置かれていた。上古音韻部分部の嚆矢とされるのが明末清初の考証学者・顧炎武（1613-1682）である。顧炎武の『音楽五書』、『古音表』の10部説はあまりに有名であるが、顧炎武の議論は韻部にとどまり声母に関する詳細な議論は見えない。顧炎武の研究を契機として、江永（1681-1762）、戴震（1723-1777）、錢大昕（1728-1804）、段玉裁（1735-1815）、孔広森（1753-1787）、江有誥（1773-1851）、王念孫（1744-1832）等の清朝を代表する考証学者が後に続くが、議論の中心はやはり韻部であって、声母について論じられたものはごく僅かである¹⁶。清朝考証学者の声母研究に対する評価は「研究者少、發明少、貢獻少（李葆嘉 2012:5）」というように、あまり評価されない。李葆嘉（2012:7）はその要因を次のように述べている：

清儒的古声研究，规模没有古韵研究那样大，成果没有古韵研究那么显著，这固然受古声研究材料—异文的零散性、谐声的复杂性—的制约，然亦与汉人知韵而昧声（钱大昕所云“叠韵易晓，双声难知”）的天然语音感知方式，以及由此而来的重韵轻声文学传统有关。

「汉人知韵而昧声的天然语音感知方式」という点についてはその根拠がよく分からないが、資料の制約（「异文的零散性、谐声的复杂性」）や押韻を重視する傾向（「重韵轻声文学传统」）は確かに存在し、これらが声母研究に力が注がれなかった要因の一つであることについては異論ないだろう。

声母に関する研究は錢大昕、章炳麟（1869-1936）、黄侃（1886-1935）等の登場を契機に

¹⁶ たとえば戴震『声類表』は他の清朝学者と同様に「声類」を「韻部」の意味に用いている。従来、「声母」は「字母」、「紐」等と称することが多かった。戴震『声類表』にも声母の分類が見えるが、わずか二十声母しか無く、影、以、微母を一括りにし、疑母を精組に配す等、些か不可解である。疑母を精組に配す理由として李葆嘉（2012:60-61）は精組と疑母が文献中で関係を有すること、疑母字が呉、湘、客、贛語等で[nj]と実現されること等を挙げる。

本格的に始まったと言えよう¹⁷。錢大昕、章炳麟、黃侃等は異文、声訓、諧声関係を頼りにして、上古音にはいわゆる今変紐が無かったことを明らかにし、これら今変紐が古くは古本紐に由来することを突き止めている。三氏による成果が現在の上古音声母研究の土台となっていることは言うまでもない。

また上古音研究におけるひとつの道筋を示したものとして段玉裁の研究を挙げないわけにはいかない。段玉裁が述べた「同諧聲者必同部也」（「六書音均表」）一すなわち同じ諧声符を持つ文字は同じ韻部に帰属する一という仮説はその後の研究に大きな影響を与えるものである。この段玉裁による「高らかな宣言¹⁸」は韻部について述べたものであるが、これは声母についても同様のことが言える。つまり諧声系列を整理することにより声母の諧声可能範囲をある程度定めることができるのである。段玉裁のこの宣言は後の上古音研究の方向性を明示したと言える。

以下、錢大昕、章炳麟、黃侃の声母に関する研究を簡単にまとめておきたい：

1.1.1 錢大昕(1728-1804)の研究

錢大昕による『十駕齋養新録』では經学、小学、史学、官制、地理、姓名、典籍等が論じられるが、特に小学を論じた巻四と巻五は上古音の声母を考える上で重要である。以下、声母に関わる箇所（巻五）を挙げる：

- ・ 「古無輕唇音」（『十駕齋養新録』巻五）

凡輕唇之音，古讀皆爲重唇。詩，凡民有喪，匍匐救之，檀弓引詩作扶服。家語引作扶伏。又誕實匍匐。釋文，本亦作扶服。左傳昭十〔三〕年，奉壺飲冰以蒲伏焉。釋文，本又作匍匐。蒲，本亦作扶。昭二十一年，扶伏而擊之。釋文，本或作匍匐。史記蘇秦傳，嫂委蛇匍匐。范雎傳，膝行蒲服。淮陰侯傳，俛出袴下蒲伏。漢書霍光傳，中孺扶服叩頭。皆匍匐之異文也。

「匍」は中古音並母 *b*-であり、「扶」は非母あるいは奉母一すなわち輕唇音（唇齒音）一であるからそれぞれ声母が異なるが、『詩經』の「匍匐」を『礼記』檀弓篇では「扶服」とあり、『孔子家語』では「扶伏」とあること等を挙げ、古くは輕唇音が存在しなかったとしている¹⁹。閩語や粵語等では輕唇音が重唇音（両唇破裂音）で実現されることや、諧声系列からも古くは輕唇音が無かったことが明らかである。また *f* から *p* への音変化よりも *p* から *f* への音変化のほうがより自然（naturalness）である。

¹⁷ 黃侃の研究は主に民国期に出されたものであるが、その基本となる考え方は清代に育まれたため清朝考証学者と見なすのが一般的である。ただし、「黃侃不仅是清一代最后一位大古音学家，同时也是近代最早的一位大古音学家（李嘉保 2012:273）」とも称される点は興味深い。このほか陳新雄（1993:445-454）は「黃侃應該是民國以來審音派的開創人」とする。

¹⁸ 古屋昭弘（2010:8）。

¹⁹ 顧炎武や江永も重唇音と輕唇音に関して言及しているが、輕唇音が存在しなかった点を明確に示していない。

表 1.1.1.1 輕唇音（唇齒音）—「匍」「扶」の再構音

	OC	BS2014	MC
「匍」	*b ^s a	*[b] ^s a	並模一平 <i>bu</i>
「扶」	*b(r)a	*m-[p]ra	並虞三平 <i>bju</i>

錢大昕は明母と微母について次のように述べている（『十駕齋養新録』卷五）：

古讀望如茫。釋名，望茫也。遠視茫茫也。周禮職方氏，其澤藪曰望諸。注，望諸明都也。疏，明都卽宋之孟諸。古音孟如芒。

「望」は微母であるが、『釈名』では「望は茫なり」とあり、『周礼』の「望諸」の鄭玄注に「望諸、明都なり」とあること等を引き、微母「望」がもともとは「茫」や「明」と同じく明母 *m*-であったとする。現代諸方言においてもしばしば微母字が両唇鼻音で実現される²⁰。

表 1.1.1.2 輕唇音（唇齒音）—「望」「茫」「明」の再構音

	OC	BS2014	MC
望	*mang/s	*maŋ/-s	明陽三平／去 <i>mjaŋg/H</i>
茫	*m ^s ang	*m ^s aŋ	明唐一平 <i>mang</i>
明	*mrang	*mraŋ	明陽三平 <i>mjaeng</i>

次に舌音（齒茎破裂音等）について見てみよう：

・ 「古無舌上音」（『十駕齋養新録』卷五「舌音類隔之說不可信」）

古無舌頭舌上之分。知徹澄三母，以今音讀之，與照穿牀無別也。求之古音，則與端透定無異。說文沖讀若動。…古讀陳如田。說文，田，陳也。齊陳氏後僞田氏。陸德明云，陳完奔齊，以國爲氏而史記謂之田氏。是古田陳聲同。呂覽不二篇，陳駢貴齊。陳駢卽田駢也。

上古音には舌頭音と舌上音の区別が無いというのが錢大昕の主張である。その根拠として、たとえば中古音澄母 *dr*-「沖」が『説文』で「讀若動」とされていること等を挙げる²¹。「動」は中古音定母 *d*-であるから、澄母 *dr*-と定母 *d*-に区別が無いことになる。このほか春秋時代の齊に出奔した陳の公子・陳完（陳敬仲あるいは田敬仲）を例に中古音澄母 *dr*-「陳」

²⁰ 現代諸方言では、たとえば「微」は広州[mei²]、福州[mi²]というように実現される（『漢語方音字彙（第二版）』2003:172）。また微母を[v]や[f]のように唇齒摩擦音で実現する方言もある。錢大昕も「吳音則亡、忘、望亦讀重唇，北音又轉爲喻母」のように方言に言及している（『十駕齋養新録』卷五「古無輕唇音」）。

²¹ 『説文』「沖，涌搖。从水沖。讀若動」とある。「沖」は冬部*-ungで「動」は東部*-ongであるが、中古音ではいずれも東韻一、三に収められる（「表 1.1.1.3 「舌頭音・舌上音—「沖」「動」の再構音」MC 参照）。

と定母 *d*-「田」が通用する例を挙げている：

表 1.1.1.3. 舌頭音・舌上音一「沖」「動」「陳」「田」の再構音

	OC	BS2014	MC
沖	* <i>drung</i>	*[d]ruŋ	澄東三平 <i>drjuwng</i>
動	* <i>dʰongʔ</i>	*[Cə-m-]tʰoŋʔ	定東一上 <i>duwngX</i>
陳	* <i>lrin</i>	* <i>lrin</i>	澄真三平 <i>drin</i>
田	* <i>ʰin</i>	* <i>ʰiŋ</i>	定先四上 <i>den</i>

王力（1985/1987:23）によると、「古無娘母」を証明したのも錢大昕のようだが²²、「古無娘母」という考え方に関しては徐用錫（1657-1736）に遡るらしい²³。

・ 「古人多舌音」（『十駕齋養新録』卷五「舌音類隔之說不可信」）

古人多舌音，後代多變爲齒音，不獨知徹澄三母爲然。…今人以舟、周屬照母。轉、啞屬知母。謂有齒舌之分。此不識古音者也。考工記，玉、柳、雕、矢、磬。注，故書彫或爲舟。是舟有雕音。詩，何以舟之。傳云，舟，帶也。古讀舟如雕，故與帶声相近。

錢大昕の意図するところは、中古章組 *TSy-*や中古音知組 *Tr-*の多くが古くは舌音であったということである。たとえば「舟讀若雕」等を例に挙げるが、「舟」は中古章母 *tsy-*、「雕」は端母 *t-*である。韻部については、下表 1.1.1.4 「古人多舌音一「雕」「周」「舟」」にもあるように、「周声」と「舟声」は同じ幽部に属すものの主母音は異なるが、『詩經』では*-u と*-iw はしばしば押韻する²⁴：

表 1.1.1.4 古人多舌音一「雕」「周」「舟」の再構音

	OC	BS2014	MC
雕	* <i>tʰiw</i>	* <i>tʰiw</i>	端蕭平 <i>tew</i>
周	* <i>tiw</i>	* <i>tiw</i>	章尤平 <i>tsyuw</i>
舟	* <i>tu</i>	* <i>tu</i>	章尤平 <i>tsyuw</i>

また錢大昕は喉音（影 *ʔ-*、曉 *x-*、匣 *h-*、于 *hj-*）にも言及している（『十駕齋養新録』卷五「字母」²⁵）：

²² 王力 1985/1987:23 「章炳麟作《古音娘日二纽归泥说》，企图证明先秦没有娘日两个声母。说古无娘母是对 的（这是钱大昕证明的了）」。

²³ 李葆嘉（2012:26）。

²⁴ たとえば『詩經』「衛風・竹竿」で「漣」*-iw、「舟」*-u、「遊」*-u、「憂」*-u が押韻する。

²⁵ 当該箇所に関して、『潜研堂文集』卷十五「答問十二」にも同様の記述があるが、「于」と「於」に関する箇所から記述が異なる。

凡影母之字，引而長之，卽爲喻母。曉母之字，引長之稍濁，卽爲匣母。匣母三四等字，輕讀亦有似喻母者。古人於此四母，不甚區別。如「榮懷」與「杌隍」均爲雙聲²⁶，今人卽有匣喻之別矣。「噫嘻」、「於戲」、「於乎」、「嗚呼」皆疊韻兼雙聲也。今卽以「噫」、「於」、「嗚」屬影母，「嘻」、「戲」、「呼」屬曉母，「乎」屬匣母。又如「于」、「於」同聲亦同義，今卽以「于」屬喻母，「於」屬影母。

喉音に対しては、字音の近似性と双声という視点から上古の人々が影 ʔ -、曉 x -、匣 h -、于母 $h\text{-}$ を区別していなかったと論じる。しかし、これについてはやや説得力に欠けると言わざるを得ない。匣母 h -の分布は極めて複雑であり、Karlgren以降、匣母 h -は群母 g -に帰属すると考える研究者も多い。また錢大昕は「于」と「於」を「同聲亦同義」とし、東晋に「于」が喻母（于母）に、「於」が影母に分かれたとするが、「于」は于母魚部合口であり、「於」は影母魚部開口であるため、「同声」であったとは言い難い²⁷。

表 1.1.1.5 喉音一「于」「於」の再構音

	OC	BS2014	MC
于	* g^wa	* $\text{g}^w(\text{r})\text{a}$	于虞平 hju
於	* ʔa	* $[\text{ʔ}]\text{a}$	影魚／模平 ʔjo

Karlgren (1926) 以降、「于」「於」に関しては議論が多くあり、「于」が動詞に由来し、「於」が「烏」に由来するとされるように、それぞれ起源が異なることから直ちに「同声同義」とは言えそうにない²⁸。

・ 「古無牙音説」

錢大昕は牙音についても興味深い見解を述べている：

「翁」从公聲，「扞」从干聲，「鎬」从高聲，「浩」从告聲，「嫌」从兼聲，「酣」从甘聲，「挾」从夾聲，「見」有現音，「降」有洪音，「皋」有浩音，「茄」有荷音，「囂」有敖音，「元」有杭音，「感」有憾音，「甲」有狎音，「夏」有賈音。然卽牙音、喉音本非兩類，字母家別而二之，非古音之正矣。

²⁶ 「杌」と「隍」は疑母であるから関係が無い（王力（1956/1986:294）「按“杌隍”乃疑母双声，与匣喻无关」）。これに対して、李葆嘉（2012:94）は嘉定方言で疑母が $[\text{h}]$ で実現されることと関係があると当初は指摘していたようである。

²⁷ 開合の違いは上古音において極めて重要である。古屋昭弘（2008:211-228）を参照されたい。

²⁸ 潘悟云（1997:20）は喉音全体に口蓋垂音を再構し、于母合口に関しては、合口性は後発のものとして、** g- > * $\text{g}^w\text{-}$ というように口蓋垂音が合口性を引き起こしたと考えている。この仮説が正しいとすると「于」と「於」を「同音」と見なすこともできるが、「于」と「於」のそれぞれの歴史的変化を鑑みるに、そのようには考え難い。Karlgren（1926）を契機に様々な議論が展開されてきた。たとえば郭錫良（1997:131-138）、聞宥（1985:4-48）、魏培泉（1993:717-786）等多数。近年、日本国内でも戸内俊介（2007:164-180）、宮島和也（2015:114-134）等がある。

たとえば「翁」は中古音影母ʔであるが、その声符は見母 *k*-の「公」である。「嫌」は中古音匣母 *h*-であるが、その声符「兼」は見母 *k*-である。したがって、上古音では牙音と喉音は二種ではなく、一種であったとする。牙音と喉音の扱いについては現在でも研究者の見解に出入りが見られ、近年では牙音と喉音の一部に口蓋垂音を認める考え方が有力な仮説の一つとなりつつある（後述 § 1.9「鄭張尚芳、潘悟雲」、§ 1.10「William H. Baxter、Laurent Sagart」参照）²⁹。

1.1.2 段玉裁(1735-1815)の「同諧聲者必同部也」（「六書音均表」）

段玉裁の研究の中で声母に関する部分はそれほど多くないが、「同諧聲者必同部也」という考えが後の上古音研究の進むべき方向を示したという意味において極めて重要である。たとえば魏建功（1935:116）に「…也可以說從前只是論論《詩》、《書》中的少數字音，到了這個方法〔筆者注：諧声符に基づく研究〕才有純粹研究上古音時代的音系全部的意思」と評されるように押韻や声訓、異文等が主要な研究対象であった時代にあつて、段玉裁によるこの仮説は漢字の大部分を研究の射程範囲に収めることができるため、上古音研究史においてまさに画期的である。

ところが段玉裁の声母研究に対する評価は韻部や文字学の研究に対する評価に比べると遥かに低い。たとえば段玉裁は『説文解字』においてしばしば「双声」を用いて解説を加えているため、多くの研究者がこの「双声」を分類することによって段玉裁の声母に対する考え方を整理しようと試みているがそれほど大きな成果は見られない。

1.1.3 章炳麟(1869-1936)の研究

章炳麟にも数多くの研究があるが³⁰、その中でも声母の研究という点「娘日二紐埤泥説」が有名である：

- ・ 「娘日二紐埤泥説」

古音有舌頭泥紐、其後支別、即舌上有娘紐、半舌半齒有日母。于古皆泥紐也。何以明之。涅从日聲。『廣雅・釋古』涅、泥也、涅而不緇、亦爲泥而不滓。是日泥同音也。

章炳麟は諧声符を同じくすること（「涅从日聲」）、そして声訓（と思しき）「涅泥也」を根

²⁹ 近年の研究は錢大昕の見解と共通する点があり、たとえば潘悟雲（1997:10-27）はすべての喉音に口蓋垂音を再構する。これに対して、Baxter and Sagart（2014）等は、潘悟雲の仮説に一部修正を加えて採用する。たとえば見母 *k*-「公」は影母ʔ-「翁」の声符となるため、Baxter and Sagart（2014）は「公」を *C.qʰong (> *kuwng*) と再構し、「翁」を *qʰong (> *'uwnɡ*) と再構する。このように影母ʔ-、曉母 *x*-、于母 *h*j- と見母が諧声関係にある場合、見母字は *C.q- のように再構される。これに対して、喉音と諧声関係を有しない見母 *k*-「工」については中古音と同様に軟口蓋破裂音が再構される (*kong > *kuwng*)。詳細は 1.10「William H. Baxter、Laurent Sagart」を参照。

³⁰ 「自三十九歲亡命日本，提獎光復，未嘗廢學。東國佛藏易致，購得讀之，其思益深。始治小學音韻，遍覽清大師撰，猶謂未至。久乃專讀大徐原本，日翻數葉，至十餘周。以説文正文比較，疑義冰釋。先後成《小學答問》、《新方言》《文始》三書，又為《國故論衡》。」（『太炎先生自訂年譜』）

拠に日母が泥母に帰すとの考えを示している。それぞれの再構音は以下のとおり：

表 1.1.3.1 娘日二紐歸泥説—「日」「涅」「泥」の再構音

	OC	BS2014	MC	Note
日	*nit	*C.nik	日真入 <i>nyit</i>	
涅	*nʰit	—	泥先入 <i>net</i>	
泥	*nʰəj/s	*C.nʰ[əj] ³¹	泥齊入 <i>nejH</i>	pHM: hni ^A

『広雅』の「涅、泥也」は声訓のように見えるが、厳密には前者が質部であり、後者が微部であるため韻部が異なる。

1.1.4 黄侃(1886-1935)の研究

章炳麟に師事したのが黄侃である。黄侃は『音略』にて 19 種の基本声母を「古本紐」と定めており、これは後世の研究に対しても大きな影響力を有していると言って良いだろう。

・『音略』「略例」

今聲據字母三十六，不合廣韻，今依陳澧説，附以己意、定爲四十一。古聲無舌上、輕唇、錢大昕，所證明。無半舌日及舌上娘，本師章氏所證明。定爲十九，侃之説也。前無所因，然基於陳澧之所攷，始得有此。

・『音略』「古聲」

古聲數之定，乃今日事。前者錢竹汀知古無輕唇，古無舌上。吾師章氏知古音娘日二紐歸泥。侃得陳氏書，始先明今字母照、穿數紐之有誤。既已分析，因而進求古聲，本之音理，稽之故籍之通假，無絲毫不合，遂定爲十九。吾師初不謂然，後乃見信。其所著荊漢微言，論古聲類，亦改從侃説矣。

以下、中古音における 19 種の基本声母（古本紐）を挙げる：

表 1.1.4.1 「古本紐」

唇音				舌音					齒音				牙音			喉音		
幫	滂	並	明	端	透	定	泥	來	精	清	從	心	見	溪	疑	影	曉	匣
<i>p-</i>	<i>ph-</i>	<i>b-</i>	<i>m-</i>	<i>t-</i>	<i>th-</i>	<i>d-</i>	<i>n-</i>	<i>l-</i>	<i>ts-</i>	<i>tsh-</i>	<i>dz-</i>	<i>s-</i>	<i>k-</i>	<i>kh-</i>	<i>ng-</i>	<i>ʔ-</i>	<i>x-</i>	<i>h-</i>

古本紐 19 声母を除く声母がいわゆる「今変紐」であるが、「古本紐」が一等韻あるいは四

³¹ Baxter and Sagart (2014) は泥 {mud}、と泥 {impeded, obstructed (Lunyu)} の音価を別にしており、前者を *C.nʰ[əj] とし、後者を nʰər(?)s とするが、去声の根拠は『論語』「子張篇」「致遠恐泥」であり、これは『經典釈文』「論語音義・子張第十九」に「泥，乃細反」とある。前者の *C.- は pHM を根拠とするのだろうか。

等韻に現れる声母であるのに対して、「今変紐」は二等韻や三等韻に対応する声母（たとえば非組、知組、章組等）であり、これは今変紐が後の音変化に因るものであることを示唆している。

1.1.5 清朝考証学者の研究に対する評価

先述のように、清朝考証学者の興味は主に韻部に向けられており、韻部の研究と比較すると声母の研究はそれほど進んでいるとは言えない。李方桂（1971:2-3）は清朝考証学者による上古音研究への貢献として、①詩経等の押韻研究、②段玉裁による諧声符の分類、そして③中古音体系との関係、以上の3点を挙げる。このいずれもが韻部の研究を主としており、声母に対する研究は韻部研究に比べると遥かに少ない。「同諧聲者必同部也（「六書音均表」）」という上古音研究の方向性を決定づけた段玉裁でさえ声母研究においては特に取りあげるべき仮説を示していない。しかしながら、たとえば黄侃の「古本紐」「今本紐」という考え方は歴史的な変化を考える上での基本的な考え方であり、この考え方無しに音韻史の研究を進めることはできない。たとえば李方桂（1983:1-6）も「声母の類」と「韻母の組み合わせ」によって、上古音から中古音までの変化を考察する重要性について述べているが、ここでいう「声母の類」のうち「声母第一類」が基本声母、すなわち古本紐を指す。

このように清朝考証学者の声母に対する研究は韻部への貢献と比べると少ないが、後世の研究の基盤となったという点について異論はないだろう。

以下、清朝考証学者以降の代表的な研究者の中で本論文と関係のある仮説を簡単に紹介したい。

1.2 Bernhard Karlgren

周知のごとく、Karlgren の登場は中国語音韻史研究においてまさに画期的であった。Karlgren というとやはり *Études sur la phonologie chinoise* が最も有名である³²。本書は、はじめて中古音の音価を比較言語学的手法を用いて（アルファベットで）記述したと評されるが、実際には日本漢字音、朝鮮漢字音、ベトナム漢字音、中国諸方言のデータを中古音の枠組みに当て嵌めたに過ぎないと指摘される。Karlgren によって拓かれた中国語音韻史の研究は、Karlgren の再構音に対する反駁・修正を基礎にして進歩してきたと言えよう³³。

Karlgren による *Compendium of Phonetics in Ancient and Archaic Chinese* (1954) は自身の最

³² 中国語訳に趙元任、羅常培、李方桂による『中国音韻学研究』がある。

³³ 具体的な音価はもとより、中古音、上古音の位置付けに関してもしばしば批判の対象となる。たとえば Karlgren による中古音と上古音の関係・概念およびその研究手法は Norman and Coblin (1995:577) によって以下のようにまとめられている：“In summary, then, Karlgren’s historical model posits Archaic Chinese as the dialect of Hernan in 1000 B.C. This language is viewed as the direct origin of the Chang’an dialect of 600 A.D., called Ancient Chinese. Ancient Chinese became the *Tarne koine*, which then supplanted most other current vernaculars, first in the lower-middle and higher classes and later more generally. The study of Chinese historical phonology is then the study of the development of Archaic Chinese to Ancient Chinese and of Ancient Chinese to the “nonvulgar” elements of the modern dialect.”

新研究をまとめたものであり、以前の *Grammata serica* から大きな変化はない (*Grammata serica recensata* として 1957 年に修正版もある)³⁴。

Karlgren の声母体系で特徴的な点は、いわゆる中古音の全濁声母（有声破裂音）に対応する上古音価である。Karlgren は中古の全濁声母（並母 *b-*、定母 *d-*、群母 *g-*、從母 *dz-*）に有声有気破裂音 (*b^h*, *d^h*, *g^h*, *dz^h*) を再構する³⁵。これは中古音平声全濁声母（有声破裂音）が北京語で無声有気音に変化することを鑑みたものであり、Karlgren によると、*b^h* > *p^h* という変化の方が *b-* > *p^h* という音変化に比べて自然 (naturalness) であるという見解に基づく³⁶。Karlgren はこれら有声有気音を上古音に投影させ、**b^h*、**d^h*、**g^h*、**dz^h* と再構する。この見解はすでに否定されているが³⁷、利点もある。Karlgren の体系では有声有気音が基本声母に再構されるため、有声無気音を他の声母に再構する余裕が生まれるからである。そこで Karlgren は中古音以母 *y-* を上古音 **d-*（あるいは **z-*）、中古音于母 *hj-* を上古音の **g-* に帰すというように、また二重子音 (consonant cluster) を **bl-*、**gl-* と再構する。これは有声音が脱落しやすいという見解に基づく (**d* > *y-*、**bl-* > *l-*)³⁸。

また Karlgren (1954/1992) は硬口蓋破裂音とそり舌音を再構している。ここでは硬口蓋破裂音について簡単に紹介しておきたい³⁹。たとえば「単」を **tân* と再構する一方で、「戦」を **tjan* > *tsjân* (*tsyenH*) と推定する。しかし「単」は中古音一等韻端母 *t-* であり、「戦」は三等韻章母 *tsy-* であるから相補分布 (complementary distribution) をなしており、上古音声母に **t-* と **t̥-* の違いを設ける必要はない。しかも Karlgren は「単」を **-ân*、「戦」を **-jan* としており、介音の有無や母音に違いを設けた点は余剰的な処置である⁴⁰。**Karlgren* 以降は寧ろ介音 **-j-* 等を再構することで、よりシンプルな声母が推定されている。ちなみに近年では三等韻 (Type-B) と非三等韻 (Type-A) の違いは **-j-* 介音ではなく、母音の長短や緊緩や咽頭化の有無等の違いに起因すると考えられている。

Karlgren の功績の一つが二重子音を体系的に再構した点である⁴¹。たとえば中古音見母 *k-* 「監」と来母 *l-* 「藍」のような諧声関係がある場合、Karlgren はあり得る可能性として、3

³⁴ *Grammata serica* に対する評価も以前の著作とあまり変わらない。たとえば Baxter (2015:4) は “Still no comparative method, still no phonological analysis. In subsequent decades other linguists tried to phonemicize Karlgren’s reconstructions, mostly without doing significant new research on the sources themselves” 等と批評している。

³⁵ Karlgren の有気音の表記は *b^h* であるが、ここでは *h* で有気性を表す。

³⁶ Karlgren (1954/1992:10) “a direct evolution *b-* > *p^h* is phonetically exceedingly improbable. We have therefore to reconstruct Anc. voiced aspirates....In Hakka, the aspiration has been preserved, but the voiced became voiceless: *k^h*, *t^h*, *p^h*, *ts^h* throughout.”

³⁷ ただし董同龢 (1944)、王力も有声有気音を再構する。王力は『漢語史稿』の段階では有気音を再構しているが (王力 (1957/1988:95-97))、『漢語語音史』ではやはり無気音に改めている (王力 (1985/1987:20))。Karlgren の仮説に対して自然さ (naturalness) や類型論的な視座から修正を加えた論文にはたとえば遠藤 (2001:304-317) がある。

³⁸ たとえば Karlgren (1954/1992:63) “but *g-* and *d-* have been lost before a following *j*, just as e. g. in Swedish *djup* has become *jup* and *giuta* has become *juta*.”

³⁹ Karlgren のそり舌音は董同龢 (1944) 以降で修正が加えられる。

⁴⁰ 本稿 1.2 基本原則で述べた「オッカムの剃刀」に反する例の一つである。

⁴¹ 二重子音の存在については Edkins (1876:190) が示唆しているが、必ずしも体系的ではない。

つの再構形 (a~c) を挙げる⁴² :

	MC		MC
a.	監 <i>klam</i>	<i>kaem</i>	: 藍 <i>glâm</i> <i>lam</i>
b.	監 <i>kam</i>		: 藍 <i>klâm</i>
c.	監 <i>klam</i>		: 藍 <i>lâm</i>

このように a~c の 3 つの再構形の可能性があるが、Karlgren は「藍」*lam* に対応するシャム語 {indigo} が *k'ram* (古シャム語 *gram*) であることを根拠に「藍」の上古音を **glâm*、「監」を **klam* と再構する⁴³。Karlgren 以降の研究者は概ねこの方針を取る。ただし主母音に関しては、中古音二等韻に対応する上古音の **-l-* (**-r-*) が主母音に影響を与えたと考えられるため (Jaxontov (1960a/1986))、Karlgren のように主母音に **-a-* と **-â-* の対立を負わせる必要のないことはすでに述べたとおりである (§ 0.1.2 「基本原則」)。

このほか Karlgren (1954/1992:69) の体系で二重子音とされるもののうち、たとえば「黒」と「墨」、「忽」と「勿」、「海」と「毎」、「耗」と「毛」等は董同龢 (1944) 以降になると二重子音ではなく無声鼻音が再構される (§ 3.5 「無声鼻音 HN」) :

	Karlgren	OC	MC
忽	<i>*xm̥wət</i>	<i>*hm̥ʰut</i>	<i>xwot</i>
勿	<i>*mj̥wət</i>	<i>*mut</i>	<i>mj̥ut</i>

また Karlgren はいわゆる第一口蓋音化とされる語に **t̥-* を再構する :

	Karlgren	OC	MC
支	<i>*t̥i̯ɛ̯g</i>	<i>*ke</i>	<i>tsye</i>
技	<i>*g̊i̯ɛ̯g</i>	<i>*greʔ</i>	<i>gjeX</i>

これは **t̥-* と **k-* が音声的に近似しているため諧声関係が成り立つという見解に基づくものであるが、董同龢以降の研究によって修正が加えられている。第一口蓋音化については § 1.7 「第一口蓋音化—河野学説—」、§ 1.8 「第一口蓋音化—Axel Schuessler—」にて述べる。

1.3 董同龢

董同龢の『上古音韻表稿』(1944) の末尾の表は上古音の枠組みや中古音との関係が一目瞭然であるため大変便利である。

董同龢 (1944) の上古音体系において現在でもなお影響のある仮説の一つは無声鼻音の

⁴² Karlgren (1954/1992:70) は「束」と「闕」を例にするが、本稿では「監」と「藍」に取り替えた。

⁴³ Karlgren が述べるとおり、「藍」は周辺言語において互いに近似した音形が見え、借用語か同源語の可能性が高い。Schuessler (2009:347) 等参照。

再構である。上述のとおり (§ 1.2 「Bernhard Karlgren」)、たとえば「黒」と「墨」、「忽」と「勿」、「海」と「毎」、「耗」と「毛」のように中古音曉母 *x*-と中古音明母 *m*-の諧声関係が見られる場合、Karlgren (1954/1992) は**xm*-のような二重子音を再構する。この Karlgren による二重子音再構に対して、董同龢 (1944) は「他〔筆者注：Karlgren〕這種做法自然算不得問題的正式解答。只可以說他在表示有那麼一層關係而已」として、無声鼻音**m̥*を再構する。現在ではこの董同龢の無声鼻音が最も有力な仮説と言って良いだろう。ところが董同龢による無声鼻音再構は中古音明母 *m*-と曉母 *x*-の諧声関係に留まり、たとえば中古音泥母 *n*-と透母 *th*-、曉母 *x*-との諧声関係などについては議論されていない。無声鼻音再構の先行研究に関しては第 4 章 § 4.1 「無声鼻音再構の歴史」にて検討を加える。このほか董同龢は Karlgren が**t̥*-と再構していた語一第一口蓋音化を経る語一に口蓋化した**k̥*-を再構する。

1.4 Sergej Jaxontov (Yakhontov)

Jaxontov (Yakhontov) には数多くの名著があるが、上古音声母研究については以下の 3 点が重要である⁴⁴：

(1) 二等韻と*-l-の再構

中古音二等韻に対応する上古音を如何に再構するかという問題の解決の糸口を示したのが Jaxontov である。すでに述べたとおり、たとえば Karlgren (1954/1992:70) は中古音二等韻に一等韻とは異なる主母音を再構する (監**klam*、藍**glâm*)。王力はそれぞれに同じ主母音を再構するが、介音*-*e*- (合口の場合には*-*u*-を*-*o*-にする) を二等韻に再構する (監**keam*、藍**lam*)。これに対して、Jaxontov (1960a/1986:42-47) は二等韻と来母 *l*-が密接な関係にあることから⁴⁵、*-*l*-が主母音に影響を与えたと推定する⁴⁶。つまり二等韻には**kl*-、**pl*-のように*-*l*-があり、*-*l*-が主母音の音変化を促し、*-*l*-が失われた後に主母音の違いが二等韻と一四等韻の弁別的役割を担うようになったと考えている。Jaxontov は中国語内部の資料だけでなく、たとえばチベット語、タイ語等との比較も根拠の一つに挙げている：

表 1.4.1 Jaxontov (1960a/1986:46) の比較

	Jaxontov OC	TB, Tai	OC > MC
八	*plet	Tibetan: <i>brgyad</i>	*p ^s ret > <i>peat</i>
百	*plak	Tibetan: <i>brgya</i>	*p ^s rak > <i>paek</i>
馬	*mla ²	Burman: <i>mrang</i> ²	*m ^s ra? > <i>maeX</i>
江	*klong	Tai: <i>khlong</i> “canal”	*k ^s rong > <i>kaewng</i>
甲	*klap	Tibetan: <i>khraḥ</i>	*k ^s rap > <i>kaep</i>

⁴⁴ Jaxontov の論著に関しては唐作藩、胡双宝による中国語訳『汉语史论集』(1986 年)を参照している。

⁴⁵ 二等韻には来母字が極端に少ない。たとえば「冷」、「榮」等があるのみである。

⁴⁶ Pulleyblank (1962:110) も“I had independently come to the same conclusion before I learned of Yakhontov’s paper”として、期せずして同じ仮説にたどり着いていたと述べている。

表 1.4.1 の右列 (OC > MC) のように現在では*-l-ではなく*-r-が再構されるが、これは Pulleyblank や李方桂等の研究によるところが大きい。この Jaxontov の仮説によって、二等韻には自動的に*-r- (Jaxontov は*-l-) が推定されるため、二等韻「監」と一等韻「藍」のような諧声関係の説明はより容易になった。その一方で、「各」や「洛」のようにどちらも一等韻の場合は問題となるが、Jaxontov は「各」は本来 {至る} という意味の二等韻「格」であり、{個々、それぞれ} という意味の一等韻「各」は後の仮借によるものと考えているようである。してみると {至る} という意味の {各} は*krak (> *kaek*) と再構され、{個々、それぞれ} という意味の {各} は*kak (> *kak*) と再構される。「洛」については*g.rak となる。

(2) *sN の再構

中古音明母 *m*-と曉母 *x*-の諧声関係を説明するために、董同龢 (1944) が無声鼻音**ɱ*-を再構することはすでに述べたとおりであるが、中古音曉母 *x*-と諧声関係にあるのは明母 *m*-だけでなく疑母 *ng*-等にも及ぶ。また中古音泥母 *n*-と透母 *th*-の諧声関係があり、これらを体系的に説明するために Jaxontov (1960a/1986:47-52) は*sN (大文字 N で鼻音を代表する) 等を再構する：

表 1.4.2 Jaxontov *sN-

	例 MC
*sm- > *x ^w m- > x(^w)-	荒 <i>xwang</i> (亡 <i>mjang</i>)
*sng- > *xng- > x-	化 <i>xwaeH</i> (訛 <i>ngwa</i>)
*sn- > *thn- > th-	灘 <i>than</i> (難 <i>nan/H</i>)

本稿ではこの種の*sN-については認めない。たとえば Jaxontov に*sm-と再構される「荒」の諧声関係を見てみると、中古音明母 *m*-の「亡」諧声関係があるが、実際には中古音心母 *s*-「喪」とも諧声関係にある⁴⁷。本稿の体系では中古音心母 *s*-に音変化する鼻音（ここでは「喪」）に*sN-を再構するため、共時的な体系において「荒」に*sN-を再構することはできない。「荒」については*hm^sang と再構する。

また中古音泥母 *n*-の「難」を声符にするのは中古音透母 *th*-の「灘」だけではなく、中古音曉母 *x*-の「漢」もあり、「灘」を*sN-と再構するだけでは「漢」との諧声関係を説明することができなくなる。

Jaxontov (1960a/1986:47-52) のように鼻音と中古音曉母 *x*-等との諧声関係に*sN-を認めることはできないが、本論文で再構する無声鼻音の前段階—たとえばシナ・チベット祖語の段階—に*sN-という声母があった可能性については否定できない (*sN- > *hn- > x-)。無声

⁴⁷ ただし異論もあり、「亡声」でないとする見解もある (大西 (2009:62))。本稿も積極的には認めない。

鼻音に関しては本稿 § 3.5 「無声鼻音 HN」を参照されたい。

(3) 円唇母音 (rounded vowels) の再構と円唇軟口蓋破裂音**KW*・摩擦音**HW*

現在の上古音体系は 6 母音体系であるが、これは主に二つの仮説から構成される。そのうちの 하나가円唇母音仮説 (The rounded-vowel hypothesis) であり、もうひとつが前舌母音仮説 (The front-vowel hypothesis) である。前者が Jaxontov (1960b/1986:53-77) による貢献である。

中古音の合口介音 *-w-* に関して、Karlgren はシンプルに上古音に **-w-* を再構するが、Jaxontov は上古音に介音 **-w-* は存在しなかったと考えている。これは中古音の合口韻母が軟口蓋破裂音／摩擦音の声母の後にしか現れないという分布が見られるからである。Jaxontov (1960b/1986:53-77) ではこの分布に基づき上古の介音 **-w-* の代わりに円唇性を帯びた軟口蓋破裂音**KW* と摩擦音**HW* が再構される。ところが実際には**-n* 韻尾 (**-t*、**-j*) という条件のもとで鋭音声母 (ここでは歯茎音) にも合口韻母が現れる。したがってこの場合は円唇母音**-o-*あるいは**-u-*が再構される。**-o-*は上古のある段階で二重母音化し**-wa-*となる。たとえば元部を例に見てみよう：

表 1.4.3 Jaxontov—元部

元部**-an*

單	dān	<	tan	<	*tʰan
戰	zhàn	<	tsyenH	<	*tans

元部**-on*

端	duān	<	twan	<	*tʰon
短 ⁴⁸	duǎn	<	twanX	<	*tʰon?

念のため*元部**-en* も挙げておこう：

元部**-en*

肩	jiān	>	ken	>	*kʰen
縣 ⁴⁹	xiàn	>	hwen/H	>	*gwʰen

⁴⁸ 「短」は『説文』で「豆声」とされる。従来の再構では「短」は**tʰuan?*のように再構されるため侯部**-o*の「豆」を声符にするとは考えにくかったが、円唇母音仮説により「短」は**tʰon?*と再構され、「豆」は**dos*と再構されるため、両者の関係をより理解しやすくなった。

⁴⁹ 基本的に重紐 A あるいは仮四等韻には**-en* が再構されるため、中古音で合口**-w-*の場合には円唇性の母音**-on*ではなく、円唇軟口蓋音**KW*が再構される。興味深い点は清華簡『繫年』99号簡にて「𠂔(間)」という表記で{縣(動詞)}を表す例が見られることである。前者は開口であり、後者は合口である。通常、開合が異なる場合には互いに通仮しないが、この場合「縣」の合口性は声母が担っており、「間」と「縣」は主母音(**-en*)を同じくするため通仮したのかもしれない。

このように元部は*-an、*-on、そして前舌母音仮説によって*-en に分けられる。このように一つの韻部に数種の母音が再構される点は、伝統的な韻部の概念を覆すものではあるが、この分類は押韻資料だけでなく、出土資料中からも支持される。

1.5 Edwin G. Pulleyblank

Pulleyblank も多くの著作を残しているが、その中でも 1962 年の *The Consonantal system of Old Chinese* が特に有名である。ここでは Pulleyblank の 2 つの仮説について簡単にまとめておきたい。

(1) *-rj-仮説

Pulleyblank (1962:111-114) は重紐三等 B と来母 l-に諧声関係がある点を指摘し、これに対応する上古音に*-rj-を再構する可能性を示唆する⁵⁰。たとえば以下のとおりである：

戀：*r^hon > lawⁿ > luán 變：*prons > pjen^H > biàn

律：*rut > lwit > lù 筆：prut > pit > bǐ

「變」と「筆」はともに重紐三等 B である。これらの語が来母 l-と諧声関係を有しているため、これに対応する上古音に*-rj-あるいは*-r-が再構される⁵¹。この*-rj-は第一口蓋音化を防ぐ役割も担っており、たとえば「技」のような重紐三等 B の語は口蓋音化を生じない⁵²。

(2) L-type 仮説 (The L-type hypothesis)

Pulleyblank (1962:114-119) は中古音の舌音及び章組の一部が上古の T-type と L-type に由来することを諧声系列の分類によって導き出している。当初、Pulleyblank (1962: 114-119) はいわゆる L-type に*-l-ではなく、*ð-あるいは*θ-を考えていたが、後にこれを*-l-、*lh-に改めている (Pulleyblank (1973:116-117))。以下「兌声」を例に L-type の音変化を見ておこう：

表 1.5.1 L-type の例

兌	*l ^h ots > dwaj ^H > dùì	Type A
脱	*hl ^h ot > thwat > tuō	Type A
悦	*lot > ywet > yuè	Type B
説	*hlot > sywet > shuō	Type B

⁵⁰ Pulleyblank (1962) では*-l-を再構する。Pulleyblank (1962:111-114) には再構音が付されていないため、本稿の再構音を挙げておく。

⁵¹ この仮説に異論を唱える研究もあるが、近年では*-r-を考えるのが主流となっている。

⁵² 重紐と第一口蓋音化の関係については河野六郎 (1950/1979:227-232) にてすでに言及されている。

Type-A（非三等韻）の*ɸ-は中古音定母 *d*-に音変化し、同じく Ttype-A の無声流音*hl̥-は中古音透母 *th*-へと変化する。これに対して Type-B（三等韻）の場合、*l-は中古音以母 *y*-へ音変化し、*hl-は中古音書母 *sy*-に変化する。諧声系列の分類を根拠に新たな声母を再構した Pulleyblank の発見は極めて意義深い。当該仮説に関しては、第 3 章「出土資料の通仮と声母体系」§ 3.2「T-type と L-type」においてさらに検討を加える。

1.6 李方桂 (Fang-kuei, Li)

李方桂の研究は 1971 年に『清華學報』に発表された「上古音研究」に集約されており、当該論文は上古音体系を簡潔明瞭に論じている。注目すべきは冒頭部分で「我們的主要目的是考察各人的意見，採取他們對上古音系有啟發的地方，綜合起來提出一個假想系統，看他是否可以解釋各種分歧的現象，滿足各方面的要求」としており、これは Schuessler (2009) の Minimal Old Chinese (OCM) という考え方に近い。したがって李方桂の上古音体系はそれ以前の研究と比べると、やはりシンプル且つ明瞭である。

李方桂 (1971:8) はまず諧声原則について簡単な仮説を示している：

(一) 上古發音部位相同的塞音可以互諧。

- (a) 舌根塞音可以互諧聲，也有與喉音（影及曉）互諧的例子，不常與鼻音（疑）諧。
- (b) 舌尖塞音互諧，不常跟鼻音（泥）諧。也不跟舌尖的塞擦音或擦音相諧。
- (c) 唇塞音互諧，不常跟鼻音（明）相諧。

(二) 上古的舌尖擦音或塞擦音互諧，不跟舌尖塞音相諧聲。

この枠組を逸脱する諧声関係の場合は、たとえば二重子音や無声鼻音などの何らかの処置を加えなければならない。近年では李方桂の枠組よりもさらに細かく分類される箇所もあるが、基本的な考え方については現在も変わらない。

中古音以母 *y*-に対応する上古音に関して Karlgren (1954) は *d-あるいは *z-を再構するが⁵³、李方桂 (1971:10) はタイ語への借用語「酉」が [r] で実現されること (Li (1945:336))、また *Alexandria* が「烏弋山離」で表され⁵⁴、「弋」が *lek* に宛てられることを根拠に、以母が *r-あるいは *l-のような音であったと推測する。したがってたとえば「弋」は *rək、「余」は *rag 等と再構される。加えて、中古音幫母 *p*-「筆」と諧声関係のある「聿」は *brjət のように再構される⁵⁵。Karlgren が *z-と再構した邪母 *zy*-「祥」の声符を為す「羊」等については、*r に *-j-を加える：

⁵³ 「楊」 *djang、「羊」 *zjang 等 (Karlgren (1954/1992:108-109))。

⁵⁴ 『漢書』「列伝・西域伝」。

⁵⁵ 同じく「筆」と諧声関係にある来母 *l*-「律」については *brj-ではなく、*bljət と再構される (李方桂 (1971:35))。

表 1.6.1 李方桂 (1971) 以母再構

李方桂 (1975) の音変化		李方桂 (1971:45)	OC	MC
OC *r- > MC ji- (y-)	羊	*rang	*gang	yang
OC *rj- > MC zj- (zy-)	祥	*rjang	*sgang	zjang

また李方桂は中古音知組 *TR*・莊組 *TSR* に*-r-を再構するが、これは声母のそり舌性、二等韻の主母音の音変化を説明することを意図したものであり、Jaxontov (1960a/1986) のように二等韻と来母 *l*-との関係を射程に捉えたものではない⁵⁶。

近年の研究によると、中古音書母 *sy*-は少なくとも上古の 5 種あるいは 6 種の声母に由来すると考えられている⁵⁷。李方桂 (1971:11) は書母 *sy*-がしばしば齒茎破裂音と諧声関係にある点および方言において無声無気破擦音[ts]あるいは無声有気破擦音[tsh]で実現される点に言及しており、大変示唆的である。特に中古音書母 *sy*-に対応する語が方言において破擦音で現れる点は上古音研究にとって極めて重要である。書母 *sy*-の再構と閩語との関係に関しては第 4 章 § 4.3 「書母 *sy*-の再構」にて検討を加える。

また無声鼻音に関しても、董同龢の見解をさらに発展させ、泥母 *n*-と透母 *th*-の諧声関係、疑母 *ng*-と曉母 *x*-の諧声関係についても無声鼻音を認めている⁵⁸。

このほか Li (1936:121-128) は中国語、チベット・ビルマ諸語、タイ・カダイ諸語、ミャオ・ヤオ諸語の系統関係を認めており、この見解は後世への影響が極めて大きくとりわけ中国の研究者から支持されている。中国語の系統関係をどのように考えるかによって再構される上古音体系にも出入りが生じることがあるため、各研究者のシナ・チベット祖語に対する見解にも注意しなければならない。

1.7 第一口蓋音化—河野学説—

「第一口蓋音化」という語は近世音における口蓋音化—「尖団の合流」—以前に起こった口蓋音化という意味で「第一」とされ、河野六郎 (1950/1979:227-232) において初めて明らかにされたものである⁵⁹。たとえば「技」「祇」「枳」等はそれぞれ中古音で牙喉音に読まれるが、「技」の声符「支」は中古音章母 *tsy*-、「祇」の声符「氏」は中古音禪母 *dzy*-、「枳」の声符「只」は中古音章母 *tsy*-である。ちなみにこれらの声符「支」「氏」「只」は日本漢字音では「シ」あるいは「ジ」であり、牙喉音の痕跡を見いだせない。僅かに「支」が「キ」或いは梵語の *ke* に宛てられるのみである⁶⁰。してみると「支」「氏」「只」は牙喉音に由来

⁵⁶ 宮本徹 (2001:2)。これは李方桂が来母を*-l-と再構することからも明白である。また李方桂の二等韻への*-r-再構は藤堂明保 (1957) の影響を受けたものであるらしい (平山久雄 (1993/2005:84))。

⁵⁷ Karlgren は*-s-と再構するに留まる。

⁵⁸ 李方桂 (1971:14) 「除去清鼻音の唇音聲母，我想仍有別的清鼻音聲母。...我在貴州調查黑苗的語言的時候，就發現他們的清鼻 *ŋ*-聽起來很像是 *ŋth*-，因此我們可以想像*-hn-變為*-hnth-，再變為 *th*-的可能。」

⁵⁹ 海外の研究者が必ずしも河野学説に言及しない点は実に残念である。

⁶⁰ 河野六郎 (1950/1979:228)。

し、口蓋音化を経たと推定されるのである：

表 1.7.1 支声・臣声の再構音

	OC	MC	
支	*ke	章組 : <i>tsye</i>	← 口蓋音化
技	*greʔ	見組三等 B : <i>gjeX</i>	← *-r-が口蓋音化を阻止
岐	*ge	見組三等 A : <i>gjie</i>	← 言語層の違いによって口蓋音化の有無に違い有り
臣	*gin	章組 : <i>dzyin</i>	← 口蓋音化
緊	*kinʔ	見組三等 A : <i>kjinX</i>	← 言語層の違いによって口蓋音化の有無に違いあり
堅	*kʰin	見組仮四等 : <i>ken</i>	← Type-A は口蓋音化しない

このように牙喉音の後に前舌母音*-i-あるいは*-e-がある環境において (___i or e)、口蓋音化が生じると考えられる⁶¹。ところが語によっては口蓋音化すべき環境にあるにも拘らず、口蓋音化を経ない語もある。この点に関しては、研究者によって扱いが異なるが、たとえば「技」は重紐三等 B であるため、*-r-（あるいは*-rj-）が口蓋化を妨げたと考えられる。これに対して「岐」「緊」は「技」と異なり重紐三等 A であるため*-r-が再構されないが、口蓋化しない。これについては以下で述べるように口語層と文語層の違いや方言差等を想定するほかない。

河野学説の中で重要な点は第一口蓋音化を経た語とそうでない語に関して、「口語層（白話層）」と「文語層」という層による違いを指摘した点である。上掲表の重紐三等 A であるにも拘らず口蓋音化しない「岐」がこれに当たる。このほかたとえば河野（1950/1979）によると、「頸」は口蓋音化を経ることが予想されるにも拘らず、中古音で見母 *k*-または群母 *g*-に読まれる⁶²。口蓋化した音は「頤」という字が有しており、この字が「頸」の口語形（白話形）であると推定される。同様の例として古屋（2006:212）では「吉」「姁」を例に挙げる。

1.8 第一口蓋音化—Axel Schuessler—

Schuessler（1996:197-211）は口蓋音化を 2 種に分類する：

Type- I : *K > TSY/___front vowel

まず Type- I は「前舌母音*-i-, *-e-」という環境のもと生じる口蓋音化であり、たとえば「臣」「旨」「示」「支」「只」「氏」、「兒」「堯」「執」等がある（Schuessler1996:198）。これ

⁶¹ 河野学説によれば、「介音*-i-を持つ口語層の語」が口蓋化を起こす。「前舌母音*-i-, *-e-の場合口蓋化する」という説は Baxter（1992:211）に拠る。

⁶² 「頸」 *jīng* < *gjieng* / *kjiengX* < **geng* / *kengʔ*と変化する。

に対して、「前舌母音*-i-、*-e-」がある環境にも拘らず、口蓋音化しなかった「遣」*khjienX* や「企」*khjieX* 等については声母が有気音（溪母 *kh-*）であるため口蓋音化が起こらなかったと推定する。

また口語層（白話層）と文語層という言語層を取り入れた河野学説に対して、Schuessler (1996:205) は「緊」等を例に口蓋音化した方言とそうでない方言の存在を示唆している⁶³。古屋 (2006:211) で「河野の言う文語層が有力な他方言からの借用によって成立したと見れば、両者は同じことになる」と述べられているように、文語と口語（白話）が混在する現代諸方言の現状から見ても河野学説は今でもなお有力である。

Type-II : *KL > TSYH / __all vowels

Schuessler によると、Type-II の口蓋音化は原則として（１）前舌母音だけでなく全ての母音で生じ、（２）中古音昌母 *tsyh-* とだけ関連し、軟口蓋音と *l- が連続する環境で生じる。たとえば「齒」「車」「處」「出」「川」等があり、これらの語は中古音昌母 *tsyh-* であり、且つ TB 等の諸言語で l- と関連する。

一例を挙げておこう。「川」は中古音昌母であるが (MC: *tsyhwen*)、馬王堆帛書『六十四卦』等で中古音溪母の {坤} *khwon* を表す。「坤」の上古音価は *kh^hun であるから、通仮関係にある「川」も同じく牙喉音に由来する可能性が高い。さらにチベット文語で {川} は *klun* である（オーストロアジア語の *krung* と関連する）。これらの語は中国語の「江」*k^hrong との関連が認められるため、直ちに「川」に *l- を再構することはできないが、中古音曉母 *x-* の「訓」が『説文』で「川聲」とされることから「川」が牙喉音系声母を有していた蓋然性は依然として高い。「川」に牙喉音系声母を考える研究者には Schuessler をはじめ、Baxter (1992)、趙彤 (2006:62)、大西 (2007:65) 等がある。Baxter (1992) は「川」を例外的に口蓋音化したものとして *KHju/on とするが、Baxter and Sagart (2014:166) は「川」を *t._lun と再構しており、「川」に牙喉音系声母を再構する案を破棄しているようである⁶⁴。

また Schuessler (2010:305-310) は第一口蓋音化の時期に関して前漢の間とする。してみると第一口蓋音化を経ていない語を有する閩語は前漢の頃に分かれた可能性が高いが、第一口蓋音化の時期に関しては研究者によって異なるため、さらなる検証を要する。第一口蓋音化の時期に関しては大西 (2014a:557-562) に詳しい。

すでに述べたとおり (§ 0.1.2「基本原則」)、Schuessler (2009) は Minimal Old Chinese (OCM) という方針で上古音体系についてまとめており、特に上古音を二次的に利用する場合には有用である。

⁶³ Schuessler (1996:205) “緊 *kjien*^B 4 looks very much like an unpalatalized dialect variant of 紆 *tšjen*^B. For this etymon we have also a good WT cognate: *k^hyil-ba ‘to wind, twist’, < ST *kil.”

⁶⁴ これは「訓」「順」との関係を説明するための処置であり、「訓」を *_lu[n]-s、「順」を *Cə.lu[n]-s と再構することで、それぞれ通用可能とする。ただしこのように再構した場合、「坤」との関係を説明することが難しくなる。「坤」については *^h[k^h]u[n] と再構している。

1.9 鄭張尚芳、潘悟云

鄭張尚芳と潘悟云の上古音体系は「鄭張—潘系統」と称されるように共通点が多い⁶⁵。「鄭張—潘系統」には数々の仮説があるが、声母に関する功績の一つが口蓋垂音の再構である。以下、中古音影母ʔを例に潘悟云（1997:10-24）の見解について簡単にまとめておきたい。

潘悟云（1997:10-24）は、たとえばタイ・カダイ語（The Kra-dai⁶⁶）において、{烏} *ka*¹: *ʔa*¹: *qa*¹ という音韻対応が見られることを根拠に、{烏}の祖形に**qa*を再構し⁶⁷、中古音影母ʔは上古音の*q-に由来すると推定する。漢語内部の論拠として Pulleyblank（1962:88）を引き、楼蘭文書に見える *Khema* が『漢書』「西域伝・扞彌国」では「扞弥」とされ、顔師古がこれに「烏」という音注を付していること等を挙げる⁶⁸。さらに潘悟云は *khema* の *h* が有気音を表しているのではなく、調音点が後ろ寄りであることを示すものであるという Pulleyblank の指摘を挙げる⁶⁹。確かに、*khema* の *kh-* が有気音の[k^h]を表していたのであれば、*khema* に中古音影母ʔの「扞」ではなく、中古音溪母 *kh-* の語で *khema* を表すこともできたはずである。ところが実際にはそうではなく、中古音影母ʔの「扞」が *kh-* に宛てられているというのは示唆的である。また『漢書』の「扞彌国」は『後漢書』になると「拘彌國」と表記されるが、これは「扞」がすでに*q->ʔという音変化を経ていたこと示すものである。「拘」は中古音見母 *k-* であるから、すでに声門閉鎖音となっていた「扞」よりは *khema* を表すのには都合が良かったはずである。

潘悟云（1997:14）はさらに中古音影母ʔの「影」の本字が中古音見母 *k-* の「景」であることや、「公」と「翁」の関係、さらに「一」の閩語の白話音が厦門 *tsit*⁷、建瓯 *tsi*⁷、潮州 *tsek*⁷、汕頭 *teek*⁷ のように破擦音で読まれること等を挙げる。

潘悟云（1997）は影母ʔだけでなく他の喉音も口蓋垂音に由来すると考えている：

⁶⁵ 「鄭張—潘系統」という語は鄭張尚芳（2003:595）等に見える。両者の上古音体系には共通点が多いが、もちろん相違点も少なくない。そのうちの一つが明母 *m-* 「眇」と書母 *sy-* 「少」の再構音である。§ 4.1「無声鼻音再構の歴史」を参照されたい。

⁶⁶ Ostapirat（2000）に従い The Tai-Kadai language を The Kra-dai language と称す。

⁶⁷ 潘悟云等がタイ・カダイ語と中国語の親族関係を認めていることには注意されたい。潘悟云（1997:11）は“很多西方学者并不认为侗台语与汉语有亲缘关系，上面所作的比较〔タイ・カダイ語との比較〕也许还不足以说明汉语“乌”的原始形式是**qa*。”として、このほかチベット・ビルマ諸語の例も列挙する。

⁶⁸ 『漢書』「西域伝上」「西通扞彌國四百六十里」の顔師古注に「顔師古曰扞音烏」とある。『後漢書』では「拘彌」とある。

⁶⁹ Pulleyblank（1962:88）“If we suppose that the original was something like **qama* or a **qwama*, it could, I think, account for both Han dynasty forms **w-* and **k-* (with rounding of the vowel instead of -*w-*) as alternative ways of expressing a foreigner uvular. The Kharosthi *kh-* in *khema* may likewise not indicate aspiration but be attempt to express the throaty quality of an uvular.”

表 1.9.1 潘悟云「喉音考」

OC		MC	
*q-	>	ʔ-	影母
*qh-	>	x-	曉母
*g- (Type-B)	>	gʲ-	群母
*g- (Type-A)	>	h-	匣母
*g- (Type-A)	>	h-	匣母
*g- (Type-B)	>	hʲ-	于母 ⁷⁰

Baxter and Sagart (2009:221-244) 等も潘悟云 (1997) を採用し、口蓋垂音を再構する。群母 *g-*、匣母 *h-*、于母 *hʲ-*を取り巻く問題に関しては第 3 章「出土資料の通仮と声母体系」 § 3.3 「牙音 K と喉音 H」にて紹介する。

無声鼻音についても述べて置かなければならない。上述したように、中古音の明母 *m-*、泥母 *n-*、疑母 *ng-*は中古音曉母 *x-* (または透母 *th-*) としばしば諧声関係を有するため、Karlgren は **xm-* のような二重子音を再構している。その後、董同龢 (1944) は明母 *m-* と曉母 *x-* の諧声関係を説明するために無声鼻音を再構している。ところが董同龢 (1944) の無声鼻音は明母 *m-* と曉母 *x-* に限られており、泥母 *n-* : 透母 *th-*・曉母 *x-*、疑母 *ng-* : 曉母 *x-*・透母 *th-* の諧声関係には無声鼻音が再構されていない。無声鼻音をこれらすべての諧声関係まで拡張したのは Pulleyblank (1962) や李方桂 (1971) である。ただし Pulleyblank (1962) も李方桂 (1971) も泥母 *n-* と透母 *th-* の関係は認めるものの、泥母 *n-* と曉母 *x-* の関係については不問に付している。

これに対して鄭張尚芳 (2003:109) は泥母 *n-* と諧声関係にある透母 *th-* を **nh-* と再構し、泥母 *n-* と関係にある曉母 *x-* を **hn-* と再構する。前者 (**nh-*) は無声鼻音 [ŋ] であり、後者 (**hn-*) は preinitial の **h-* が **n-* に前置された二重子音 [h̥n] である。以下のように **HN* 型と **NH* 型のよう二種に分類される：

表 1.9.2 鄭張尚芳 (2003) 二重子音 *HN 型

hm-悔	hŋ-謔	hn-漢	hr-嚙	hl-哈	後に曉母 <i>x-</i>	Type-A
hmj-少	hnj-攝	hnj-攝		hlj-舒	後に書母 <i>sy-</i>	Type-B

表 1.9.3 鄭張尚芳 (2003) 無声鼻音 *NH 型

mh [m̥ ^h]	撫	ŋh [ŋ̥ ^h]	哭	nh [n̥ ^h]	灘	rh [r̥ ^h]	寵	lh [l̥ ^h]	胎
-----------------------	---	-----------------------	---	-----------------------	---	-----------------------	---	-----------------------	---

⁷⁰ 于母に合口が多いのは口蓋垂音の調音点が後ろよりであることに起因し、開口から合口化したと推定している。例：于 {*v-*} **ga* > **g^wa*、往 **gaŋ* > **g^waŋ* というように合口性は後発とする。これは「于 {*go*}」、「往 {*go*}」が開口の語「假」「格」「行」等と同じ単語家族 (word family) を為すという見解に基づく。つまりこれらの語は開口に由来し単語家族をなしていたが、後に口蓋垂音を声母に持つ「于」と「往」が合口化したと考えているようである (潘悟云 (1997:20))。

表 1.9.2 によると、いわゆる Type-A（非三等韻）は中古音曉母 *x-* へと変化し、Type-B（三等韻）は中古音書母 *sy-* へと変化する。これはおそらく **hnj- > *xj- > sy-* という音変化を想定したものであろう⁷¹。このように二重子音 **HN* 型と無声鼻音 **NH* 型の 2 種の声母を再構することによって、すべての諧声関係を説明することができるため非常に体系的である。しかしその反面、共時的な体系に二重子音 **hn-* と無声鼻音 **nh-* が存在していたとは考え難いし、言語体系として自然さ（naturalness）に欠けると言わざるを得ない。また類型論的にも支持され難いだろう⁷²。

近年では方言的な違いを想定することで（**hn- > th-*（西方：*x-*））、この不均衡さを説明する仮説が有力である。詳しくは第 4 章 § 4.1 「無声鼻音再構の歴史」にて述べる。また本稿では「少」と明母 *m-* 「杪」「眇」等との諧声関係を認めないため、表 1.9.2 に見えるような **hmj-* は認めない。この点に関しては第 4 章 § 4.3 「書母 *sy-* の再構」以降で述べたい。

また鄭張尚芳（2003:171-187）は三等韻への **-j-* 再構に関しても否定的であり、Starostin（1989:325-329）と同様に主母音の長短にその違いを負わせている。ところが、たとえば上掲表 1.9.2 にも見えるように書母 *sy-* のような章組に関しては依然として **-j-* を認めており、この点に関しては一貫性に欠けると言わざるを得ない。音韻論的にも **-j-* を認める必要はないのではないだろうか。

1.10 William H. Baxter、Laurent Sagart

近年の上古音研究において画期的なものといえば、やはり 1992 年に出版された William H. Baxter 氏の *A Handbook of Old Chinese Phonology* であろう⁷³。本書の特徴は詩經の押韻に統計学的な処理を加えた部分であり（第 3 章、第 10 章）、「前舌母音仮説」、「円唇母音仮説」、そして「六母音仮説」の妥当性について詳細に論じられている。また本稿 § 0.1.2 「基本原則」で述べたとおり、本稿の基本原則はこの Baxter（1992）の大部分を踏襲している。特に上古中国語の定義として、『詩經』の押韻、周代の諧声文字、中古音、現代中国諸方言を説明できるような体系でなければならないと述べており⁷⁴、慎重な態度で上古音を再構していることがうかがえる。

これに対して、Laurent Sagart 氏には著書の *The Roots of Old Chinese* をはじめ数々の論考があり、形態論的な研究が進められている。近年では中国語の親族関係に関して、Sino-Tibetan-Austronesian という仮説も示しており、注目される。

⁷¹ 鄭張尚芳（2003）が「少」を **hmjew?* というような二重子音を推定するのにに対して、潘悟云は **m̥hjew?* というように無声鼻音を再構する。

⁷² 無声鼻音の後に気音門を再構する点は余剰的である。

⁷³ 2014 年にきこ書房より日本語訳版が出版されている。詳しくは野原（2015:59-71）を参照されたいが、本書には誤植や誤訳が少なくないため原書を参照しなければならない。

⁷⁴ Baxter（1992:24）“Assumption 4: A reconstruction of Old Chinese should account for the rhymes of *Shījīng*, the *xiéshēng* characters of Zhou-dynasty script, the phonological system of Middle Chinese, and the modern Chinese dialect.”

2000 年代前半期になると、Baxter 氏と Sagart 氏は共同研究を始め、幾つかの論文を発表し、2014 年には *Old Chinese: A New Reconstruction* を上梓している。1992 年の *A Handbook of Old Chinese Phonology* が保守的な体系とするならば、2014 年に出版された *Old Chinese: A New Reconstruction* は書名の如く新たな試みが加えられており、挑戦的な体系と言えよう。

Baxter and Sagart (2014) の上古音体系にはこれまでに見られないような特徴があり、たとえば閩祖語 (Proto-Min) を全面的に取り入れた点⁷⁵、ミャオ・ヤオ語 (The Hmong-Mien language) やベトナム諸語 (The Vietic languages)、タイ・カダイ語 (The Kra-dai languages) における借用語を重視した点が特に際立っている。その結果、多岐にわたる接頭辞 (prefix)、接尾辞 (suffix) はもとより、接中辞 *r- (infix) まで積極的に認めている。非常に複雑であるため、ここでは一例として接頭辞 *k- の例を挙げておこう。たとえば「紙」の再構音は以下のように推定される：

表 1.10.1 Baxter and Sagart (2014:37) の「紙」の再構音

	Chinese		Lakkia	VN	Ruc	pMin
紙	*k.təʔ > tsyeX > zhǐ ‘paper’		khjei 3	giây [zɛi B1]	kəcáj	*tš-

「紙」は『説文』によると氏声とされるが、「氏」は「祇」の声符とされるため従来の研究では第一口蓋音化の例と見なされ、たとえば *keʔ > dzyeX > shì のように再構される。これに対して Baxter and Sagart (2014:37, 156) は表 1.10.1 にあるように借用語（と思しき語）との比較により *k.təʔ と再構する。

牙喉音に関して、Sagart and Baxter (2009:221-244) は潘悟云 (1997:10-24) に基づき口蓋垂音を導入するが、若干の修正を加えている：

表 1.10.2 Sagart and Baxter (2009:226) 口蓋垂音

Old Chinese	conditions	Middle Chinese	
*q- *q ^w - *q ^ɕ - *q ^{wɕ} -	(everywhere)	ʔ(ʷ)-	影
*q ^h -	before front vowel ? ⁷⁶	sy-	書
	otherwise:	x-	曉
*q ^{wh} - *q ^{hɕ} - *q ^{whɕ} -	(everywhere)	x-	曉
*G-	(everywhere)	y-	以
*G ^w -	before *i or *e, no medial *-r-	y-	以
	otherwise:	hj-	于
*G ^ɕ - *G ^{wɕ}	(everywhere)	h-	匣

⁷⁵ Starostin (1989) も閩祖語 (Proto-Min) との比較を通して、上古音に *p-、*ph-、*b-、*bh- を認める。

⁷⁶ 前舌母音 *-i-、*-e- の前で *qh- > *xj- > sy- という口蓋音化を想定したもののか。

潘悟云（1997）と異なる点は、中古音以母 *y-* の一部が上古の **g-* (**g^w-*) に由来するとした点である。たとえば「與」、「夜」、「羊」、「容」等の中古音以母 *y-* の語がこれに当たる。これらの語はいずれも見組 *K* 等と諧声関係を有すため⁷⁷、**g-* が再構される。「羊声字」の例を挙げておこう。Sagart and Baxter (2009:231)⁷⁸ :

表 1.10.3 Sagart and Baxter—羊声—

羊	<i>*g(r)an</i> > <i>yang</i> > <i>yáng</i>	‘sheep’	PTB: <i>*yan</i> ~ <i>*g-yan</i> ‘sheep / yak’ ⁷⁹
洋	<i>*g(r)an</i> > <i>yang</i> > <i>yáng</i>	‘a great expanse of water’	WT: <i>yangs-pa</i> ‘wide, broad, large’
祥	<i>*s-gan</i> > <i>zjang</i> > <i>xiáng</i>	‘auspicious’	WT: <i>g.yang</i> ‘happiness, blessing’
羌	<i>*C.q^han</i> > <i>khjang</i> > <i>qiāng</i>	‘Western tribes’	
姜	<i>*C.qan</i> > <i>kjang</i> > <i>jāng</i>	‘a family name’	

従来、中古音溪母 *kh-* の「羌」は **khang* と再構され、中古音見母 *k-* の「姜」は **kang* と再構されていたが、**g-* と諧声関係を有すため、「羌」「姜」のような見組にも口蓋垂音 (**q-* 或いは **qh-*) が再構されることに注意されたい。これと同様に、たとえば中古音以母 *y-* 「與」と諧声関係を有す中古音見母 *k-* 「舉」も **C.q(r)a?* と再構される。以下のように、preinitial **C*. (tightly attached preinitials) が口蓋垂音 (*q-*, *qh-*) に先行する場合に⁸⁰、軟口蓋音 (*k-*, *kh-*) に変化すると推定される⁸¹ :

**C.q-* > **C.k* > **k-* 例：「姜」「舉」
**C.qh-* > **C.kh-* > **kh-* 例：「羌」「公」⁸²

Sagart and Baxter (2009) は「口蓋垂音は口蓋垂音とのみ諧声関係を有し、軟口蓋破裂音は軟口蓋破裂音とのみ諧声関係を有す」という原則に基づいて牙音と喉音を再構しているため、「與」を **ga?* のように口蓋垂音で再構したからには、これと諧声関係にある「舉」を **ka?* と再構することはできない。必ず口蓋垂音で再構しなければならないということになる（「舉」 **C.qa?*）⁸³。

同様に、影母 *ʔ-*、曉母 *x-*、于母 *h_j-* と諧声関係を有しないグループ (velars only) には上古音に軟口蓋破裂音を再構し、諧声系列上で影母 *ʔ-*、曉母 *x-*、于母 *h_j-* を有すグループ (Mixed)

⁷⁷ Karlgren (1954) で **g-* と再構された語に対応する。

⁷⁸ 「姜」「羌」のような中古音見母 *k-* や溪母 *kh-* は Sagart and Baxter (2009:231) では **Cə.q^h-* と再構されるが、Baxter and Sagart (2014:43-46, 385) では **C.q^h-* のように minor syllable ではなく、preinitial **C*. に変更されている。minor syllable は presyllables と称されるが、Matisoff によって sesquisyllables と称される。

⁷⁹ Matisoff (2003:523)。

⁸⁰ Sagart and Baxter (2009) の段階では **Cə + q-/qh- > k-/kh-* と推定されている。

⁸¹ *C* と *q-* の間の「*.*」は共時的に形態論的な関係性が明らかでない時に付される。ハイフンがある場合は接頭辞 (prefix) を意味する。

⁸² 『説文』によると古文「容」の声符は「公」とあるため、「容」**[g](r)on*、「公」は **C.q^oon* と再構される。

⁸³ ここでは **-r-* の有無は無視している。

には口蓋垂音を再構する。Sagart and Baxter (2009:235) :

表 1.10.4 Sagart and Baxter (2009) 牙喉音

rhyme	velars only	Mixed: velars and ʔ-, x-, hj-
*-o (侯部)	葦 (GSR109)	句 (GSR108)
*-o (侯部)	侯 (GSR113)	后 (GSR112)
*-oŋ (東部)	工 (GSR1172)	公 (GSR1173)
*-ok (屋部)	角 (GSR1225)	殼 (GSR1226)

GSR= *Grammata serica recensa*

「velars only」列のグループは中古音見組 K とのみ諧声関係を有すグループ、「Mixed」列のグループには中古音影母 ʔ-、曉母 x-、于母 hj- と諧声関係を有すグループが列挙されている。前者には上古音の *K が再構され、後者には *Q が再構される (Q で口蓋垂音を代表する)⁸⁴。このような Sagart and Baxter (2009) の原則が、出土資料中でどのような振る舞いを見せるかについては § 3.3 「牙音 K と喉音 H」にて紹介するが、本論文においても解決には至っていない。

上述のとおり、tightly attached preinitial *C が口蓋垂音に先行する場合、口蓋垂音は軟口蓋破裂音へと変化する。また鼻音の preinitial が付加される場合があり、これは中古音疑母 ng- への変化を想定したものである：

表 1.10.5 Baxter and Sagart (2014:128) 「五」「午」

五	*C.ŋʰaʔ	>	nguX	>	wǔ
午	*[m].qhʰaʔ	>	nguX	>	wǔ

「五」と「午」は中古音で同音 ngu であるが、Baxter and Sagart (2014:128) は上古の異なる声母に由来すると考えている。「五」はチベット・ビルマ諸語との比較から見ても *ŋ- に由来することは確実であるとする一方で⁸⁵、「午」については中古音昌母 tsyh- 「杵」との諧声関係により、*t.qʰaʔ と再構する。これらの二つの語は後に合流するが、上古では通用不可とのことである。「午」と「杵」の関係については無声鼻音で再構する余地もあり、今後さらなる検討を加える必要があるだろう。

このほか Baxter and Sagart (2014) はいわゆる Type-A (一、二、四等韻) に咽頭化 (Pahryngealization) を認めるが、これは Norman (1994:397-408) の仮説を採用したもので

⁸⁴ ただし Baxter and Sagart (2014b) では「句」を *[k](r)os とするように、まだ声母を確定していない。

⁸⁵ Baxter and Sagart (2014:128) “Sino-Tibetan comparisons strongly suggest that the velar nasal is original in 五 wǔ < nguX and other words written with this phonetic: 吾 ŋʰa > ngu > wú ‘I, my’, WT nga, WB ŋa, Lahu ŋà, Proto-Tibeto-Burman *ŋa ‘I, me’ (Matisoff 2003:487)”

ある⁸⁶。咽頭化子音再構は以下の点を考慮したことによる：

1. Type-A and type-B syllables rhyme together freely in Old Chinese, suggesting that the distinction was a feature of the syllable onset rather than the rhyme.
2. In the later stages of Chinese, vowels in type-A syllables have lower reflexes than in Type-B syllables; cross-linguistically, it is common for vowels to be lowered when adjacent to pharyngealized consonant.
3. Alveolars, velars, and laterals generally palatalized in Type-B syllables but failed to palatalize in type-A syllables.
4. Hàn-time transcriptional practice, as well as loans to Kra-dai and Hmong-Mien languages, indicate a uvular pronunciation for original velar initials in type-A syllables (Norman 1994 and references therein). The development of pharyngealized velars to uvulars has parallels in other languages.

咽頭化に関してはアラビア語等に見えるが、基本的には歯茎音等にのみ咽頭化子音が見えるだけであり、Baxter and Sagart (2014) の上古音体系のようにすべての子音に咽頭化と非咽頭化の対立 (Cʰ : C) があるわけではない。このように咽頭化仮説は類型論的には支持されないようである。したがってこの点に関しては Baxter and Sagart (2014) も現時点では咽頭化仮説が他の仮説よりは自然であるとするに留まり、将来、別の仮説を認めることもあり得ると考えているようである。

以上、清朝考証学者から近年の研究までを極めて簡単に紹介してきた。実際には多くの研究者が無数の仮説を立てているが、主要な仮説は上に挙げたとおりである。本章で取り扱っていない仮説に関しては、第 3 章「出土資料の通仮と声母体系」および第 4 章「出土資料の通仮と声母体系」でさらに詳しく述べたい。

⁸⁶ Baxter (1992) の段階では従来のごとく三等韻に *j- を認めていたが、1998 年には主母音に長短の違いを認める Starostin (1989:325-329) の仮説を採用する (Baxter (1998:72))。

第2章 本論文の研究手法

第2章では本論文の研究手法とその意義について述べる。

2.1 本論文の研究手法—仮借と通仮—

すでに述べたとおり、本論文では戦国中期から後期頃の竹簡を主な研究資料とする。主に分析の対象となるのは竹簡に見える通仮（または仮借、当て字の用法）という言語現象であるため、本章ではまず「仮借と通仮」、「形声文字」について簡単にまとめておきたい。

2.1.1 仮借と通仮について

2.1.1.1 仮借について

「仮借」または「通仮」とはいわゆる当て字の用法である。当て字とは、たとえば一人称 {we, I} の語を表記する際に、一人称 {we, I} を表す字が無い場合、同音の（戈の一種を表す）象形文字である「我」字を一人称 {we, I} の語に当てることである。

仮借は古来より指事・象形・象声・会意・転注とともに六書の一つに数えられ、漢字の構成・造字法の基礎の一つである。「六書」という語の初出は『周礼』であるが⁸⁷、六書の内容に関する具体的な記述は漢代の文献において漸く確認することができる⁸⁸。たとえば『漢書』『芸文志・六芸略』に「古者八歳入學、故周官保氏掌養國子、教之六書、謂象形、象事、象意、象聲、轉注、假借、造字之本也」とある。『周礼』鄭玄注には「六書、象形、會意、轉注、處事、假借、諧聲也」とある。

より具体的に説明を加えているのは、周知の如く後漢の許慎による『説文解字』である。『説文解字』は六書について以下のように記している（網掛けは押韻箇所）⁸⁹：

周禮八歳入小學、保氏教國子、先以六書。

一曰指事、指事者、視而可識、察而可見⁹⁰、上下是也。

二曰象形、象形者、畫成其物、隨體詰詘、日月是也。

三曰形聲、形聲者、以事爲名、取譬相成、江河是也。

四曰會意、會意者、比類合誼、以見指撝、武信是也。

五曰轉注、轉注者、建類一首、同意相受、孝老是也。

六曰假借、假借者、本無其字、依聲託事、令長是也。

（網掛けで示したように）それぞれ押韻していることから、この六書に対する解説は許

⁸⁷ 『周礼』「地官・保氏」「六藝、一曰五禮、二曰六學、三曰五射、四曰五馭、五曰六書、六曰九教。」

⁸⁸ 今後、新たな出土資料中に六書に関する記述が現れることもあるかもしれないが現時点では漢代である。

⁸⁹ 裘錫圭（1988）は六書説を漢代の古文派に由来する説とする。

⁹⁰ 段注ではこれを「察而見意」とする。押韻から見ると「見意」が良いだろう。

慎自身による言説というよりは寧ろ「古くから六書の教授に口頭で伝えられたもの」と考えるのが良いだろう⁹¹。いずれにしても『説文』の記述によると、六書に言う仮借とは「本無其字、依聲託事」、すなわち「もともと字の無い語に対して既存の同音字を当てる」ということであるらしい⁹²。

しかしここで許慎が「令」と「長」を仮借の例として挙げている点は理解し難い⁹³。裘錫圭(1989:102)も「大概汉代学者心目中的假借，就是用某个字来表示它的本意（造字时准备让它表示的意义）之外的某种意义。至于这种现象究竟是由词义引申引起的，还是由借字表音引起的，他们并不想分辨」としている。すなわち、漢代以降の学者は仮借に関して「引申（派生）」によるものなのか、「音」に依るものなのかを明確に区別していなかった可能性があるというのである。しかもこの「引申（派生）」と「仮借」の混同は漢代以降も根強く、清朝考証学者の戴震でさえ引申を仮借に帰属させていたようである⁹⁴。

もちろん南宋の戴侗のように「古人謂令長爲假借。蓋已不知假借之本義矣。所謂假借者謂本無而借於他也。……所謂假借者，義無所因，特借其聲，然後謂之假借」として許慎以来の仮借に疑義を呈している例も見受けられる⁹⁵。また段玉裁も“凡古語詞皆取諸字音，不取字本義”としており、仮借を意味ではなく音に依るものと見なしている（『説文解字注』十三篇上十五b「緹」）⁹⁶。本稿では「依聲託事」すなわち音による用法のみを仮借とする⁹⁷。

2.1.1.2 仮借の具体例

仮借は当時の漢字音を生々しく伝える言語手段のひとつであり、新たな語の漢字を生成する際、六書の内でも最も効率的且つ生産的な手法であつたに違いない。「本無其字」とされる語（特定の字を持たない語）に同音あるいは類音の文字を当てることで、その語を表すことができたからである。その字に意符が加えられて形声文字になることもあり得るし、仮借字が本来の語義を失い、新たな語の専属の文字となる場合もあったであろう。段玉裁も幾つか例を挙げている（「卷十二・西部・西」）：

日在_西方而鳥_西。上西，即下文東西之西也。下西，西之本義也。故因_西爲東_西之_西。此說六書假借之例。假借者，本無其字，依聲託事。古本無東西之西，寄託於鳥在巢上之西字爲之。

⁹¹ 河野（1994b:27）参照。

⁹² 宋・戴侗『六書故』六書通釈、清末孫詒讓『古籀述林』『與王子莊論假借書』等参照。

⁹³ 段注は「令」とは本来「發號」の意味、「長」とは本来「久遠」の意味とし、「縣令」「縣長」を表す語が無かったために「令」と「長」が借りられたとする。つまり「令」と「長」は本来「長官」と言う意味を持たないが、仮借によって「長官」と言う意味に取られたということである。朱駿声は「令長」を転注に移し、「朋」、「来」を仮借に移している。

⁹⁴ 裘錫圭（1988:103）。

⁹⁵ 戴侗『六書故』六書通釈。戴侗は「令長」を引申（派生）と考えている。

⁹⁶ 根岸（1982:60）参照。

⁹⁷ 語によっては音形と語義が近似しているため、仮借ではないにも拘らず仮借のように見える例もあり、寧ろ同形異義語と考えるべき例も多い。たとえば「少」という表記はしばしば「小」を表すため、「少」と「小」の通仮と見なされることがあるが、これは「少」と「小」のそれぞれの音形と語義が近似しているだけで、両者に音韻論的な繋がりはない（§4.3「書母 sy-の再構」、§4.4「少の上古音再構」参照）。

凡許言以爲者類此。韋本訓相背，而以爲皮韋。鳥本訓孝鳥，而以爲鳥呼。來本訓瑞麥，而以爲行來。朋本古文鳳，而以爲朋黨。子本訓十一月易氣動萬物滋，而以爲人僂。後人習焉不察，用其借義而廢其本義，乃不知西之本訓鳥在巢。韋之本訓相背。朋之本訓爲鳳。逐末忘本，大都類是。微許君言之，鳥能知之。

段玉裁は「西」について、古文には {west} を表す字が無かったため、{鳥が巢の上にいる様} を表す同音（あるいは類音）の「西」字を用いて {west} を表したとしている⁹⁸。しかし後世の人々は「西」の本義 {鳥が巢の上にいる様} を忘れ去り、借義 {west} を専ら用いると指摘している。

また「來」はもともと {wheat} を表していたが、{come} と同音（あるいは類音）であることから専ら {come} を表すようになる。一方、{wheat} を表す場合には、「來」に「攷」が加えられた「麥」が用いられるようになるというような例も挙げている⁹⁹。

このように仮借の成立過程は多様であったと思われるが、いずれにしても仮借という行為が発生した時に、仮借字と被仮借字（＝仮借によって表される語）は非常に近似した音であったはずである。したがって理論的には、「同時代の資料に見える仮借字」を整理し分析を加えることで当時の音韻体系の全体像を比較的鮮明に映し出すことが可能である。また本論文で扱う出土資料は比較的時代が明確な資料である。この特性を活かすことで、時代、方言、言語層の問題をある程度取り除いて、あるいは加味して議論することができる。出土資料の利点はまさにここにある。

2.1.1.3 仮借と通仮

ところで「仮借」と「通仮」という語の違いは一体どこに在るのだろうか。ここではあまり深入りしないが、本稿の立場を明確にしておきたい。

仮借と通仮の関係に関する議論は諸説紛々としており、歴史的に見ても仮借と通仮の区別は曖昧であることが多いが¹⁰⁰、仮借と通仮を明確に区別する研究者の多くが以下のように定義する：

⁹⁸ 「西」の具体的な音価等については後述する（§4.2「preinitial *s-と「西」「訊」の上古音再構」）。

⁹⁹ 興味深いのは「來」が之部であり、「麥」が職部であることである。統計的にみても、平入通押は多くないが、「來」と「麥」はその例外的な現象の一つである。Baxter and Sagart (2014:231) は “We supposed that the final *-k was lost in unstressed position, and the form without *-k was restressed, replacing the original full form.” とする。これは Baxter (1992:325-332) でも議論されているように、「來」が入声だけでなく平声としばしば押韻していることも根拠の一つに挙げている。声調毎の通押関係の統計については平山久雄 (1986:1-24) 等を参照されたい。

¹⁰⁰ たとえば段玉裁『説文解字注』には“至於經傳子史，不用本字，而好用假借字”とあり、(伝統的な「仮借」の定義（「本無其字」）に従えば）ここでの「仮借」は「通仮」をあらわしていると思われる（「不用本字」とあるため）。また王力『古代漢語』では“所謂古音通假，就是古代漢語書面語言裏同音或音近的字的通用和假借。…假借字的產生，大致有兩種情況，一種是本有其字，而人們在書寫的時候，寫了一個同音字…第二種是本無其字，從一開始就借用一個同音字來表示”とあり、通仮と仮借という語に明確な区別を設けていない。

- ◆ 「仮借」：字の無い語に既存の同音字を当てる（「本無其字，依聲託事」）
- ◆ 「通仮」：字の有る語に同音あるいは類音の字を当てる（「本有其字，依聲託事」）

いまこの定義に従うと、たとえば仮借とは、一人称 {we, I} の語を表記する際に、もともと一人称 {we, I} を表す字が無いため戈の一種である「我」字を一人称 {we, I} の語に当てることである。

これに対して、通仮とは {朝 morning} を表す「早」字がすでに存在するにも拘らず、同音の「蚤」字を借りて {朝 morning} に当てることを指すことである¹⁰¹。それぞれの再構音は以下のとおり：

表 2.1.1.3.1 「我」「早」「蚤」の音価

	OC	Baxter & Sagart	MC
我	*ngʰajʔ	*ŋʰajʔ	疑歌一上 <i>ngaX</i>
早 ¹⁰²	*tsʰuʔ	*Nə.tsʰuʔ	精豪一上 <i>tsawX</i>
蚤	*tsʰuʔ	*tsʰuʔ	精豪一上 <i>tsawX</i>

また仮借とは「もともと字の無い語に既存の同音字を当てる」ことであるため、比較的文字数が少ない時代一たとえば殷周期に一に多用される。一方、通仮は「字の有る語に同音あるいは類音の字を当てる」ことであるため、殷周期よりも時代が下っても多用されることになる。通仮が用いられる要因としては、たとえば書き手が本来の字を思い出せなかったり、繁雑な漢字を避けて簡単な字を選んだり、方言的な要素等があると考えられる¹⁰³。この点に関して、すでに後漢の鄭玄が「其始書之也，倉卒無其字，或以音類比方假借爲之，趣于近之而已。受之者非一邦之人，人用其郷，同言異字，同字異言，于茲遂生矣（陸德明『經典釈文』序）」と述べている。

趙彤（2006:7-9）も仮借と通仮は本来区別されるべきであるとして、仮借を「固定的」、通仮を「臨時的」と定義し、それぞれ区別する態度をとるが、実際の研究においてこの二つの現象を厳密に区別することは非常に困難であるともしている。趙彤（2006:7-9）のように「仮借＝固定的」とし、「通仮＝臨時的」と断定することが可能かどうかについては判断しかねるが、当て字の現象を「固定的」と「臨時的」という概念で二種に分類する点は重要な視点である。

¹⁰¹ 『孟子』離婁章句下篇「蚤起，施從良人之所之」、『詩經』豳風・七月「四之日其蚤」。

¹⁰² 「早」について、Baxter and Sagart（2014:88, 95）は閩祖語（Proto-Min）の弱化声母（the softened initial）*ts と Proto-Hmong-Mien の*ntsɿouX を考慮し、「早」を*Nə.tsʰuʔと再構する。

¹⁰³ 孫凌安（1990:74）、陳重平（2004:85-87）等参照。孫（1990）はさらに“通假的產生比假借要晚，大約始于商周時代。这种误写别字现象说明古代文字不够规范，造成了字形上的分歧和使用上的混乱”とまで述べるが、仮借の年代や文字に規範がないという点はやや誇張が過ぎるのではないだろうか。さらに孫（1990:73）は他の研究者と同様に仮借が厳密に同音字を用いるのに対して、通仮は字音の幅が仮借より広いとするが根拠に乏しいと言わざるを得ない。

「固定的」な当て字は古くからの用字習慣であり、出土資料においてもしばしば見られる。したがってこの「固定的」な当て字が実際にその時代の音を反映しているかどうかについてはやはり慎重にならなければならない。反対に「臨時的」な当て字はその時代の音韻体系を忠実に反映している可能性が高い。とは言え先述のとおり、この「固定的」な当て字と「臨時的」な当て字を明確に区別すること自体が極めて困難であるため、本稿では特に「固定的」な当て字と「臨時的」な当て字の区別は特に設けない。この方面の研究としては用字法（用字習慣）の研究が盛んである¹⁰⁴。大西（2015:21）は用字論について以下のように述べている：

用字論は、このような「表語文字」としての性質に基づき、ある語をどの字形で表記するかという視点から考察を進め、語と字との配当関係の規範性と地域性、時代的な特性と変遷を論じる。なぜこのようなことを問題にするのかというと、その背景には春秋後期から戦国時代にかけての用字の多様化が存在する。この時代には文字と社会・経済・文化との結びつきが、それ以前と比較にならないほど密接化する。法律・文書による統治体制の整備、科学技術や経済の発展、外交や商業の展開、諸子百家の著述などにより、甲骨文や金文などの時代から使われてきた文字では賄い切れない大量の語を文字化する必要が生じた。統一を欠いた時代に文字化が地域ごとに行われたことが、文字の多様化をもたらしたのである。

実際に出土資料を見てみると、戦国出土資料における用字法（文字使い、用字習慣）は想像以上に成熟しており、音が近いからと言って自由に通仮できるわけではない。出土資料に見える当て字例の多くが「固定的」な当て字であり、「臨時的」と思われる当て字はそれほど多くない。「固定的」な当て字の中で特に多いのが常用語や虚詞のような機能語である。たとえば {有 have} という語を表す際、楚簡では必ず「又」と表記する。これに対して、{又 also} という語を表す際には「或」という字が用いられる。このように楚簡における「又」- {有 have} と「或」- {又 also} という当て字の習慣は厳密には「固定的」と考えられる¹⁰⁵。

ただし「固定的」であっても、「臨時的」であっても、当て字と被当て字（＝表される語）の音が大きく離れる例はそれほど多くないため、「固定的」な当て字も「臨時的」な当て字も上古音研究の資料として十分有用である。またある当て字が「固定的」か、あるいは「臨時的」であるかを見極めることは現実的には困難であり、この点に関しては経験的あるいは統計的な見地から判断せざるを得ない¹⁰⁶。

¹⁰⁴ 楚系文字を対象に用字法をまとめたものに陳斯鵬（2011）、周波（2012）等がある。

¹⁰⁵ 趙彤の「固定的＝仮借」という考え方によれば、「又」で {有} を表し、「或」で {又} を表すこの用法は仮借となるが、伝統的な仮借の定義（本無其字＝仮借、本有其字＝通仮）によれば、「又」や「有」は「本有其字」であるから、寧ろ通仮と見なされるはずである。

¹⁰⁶ 人名や地名のような固有名詞の当て字は「臨時的」に見えることが多い。つまり表記に違いが見られる

このように仮借と通仮をめぐってはその違いを明確に定義することが難しい上、仮借と通仮という語を敢えて区別する必要性も無いだろう¹⁰⁷。本稿では特に仮借と通仮の区別は設けず、通仮という語を主に用いる。

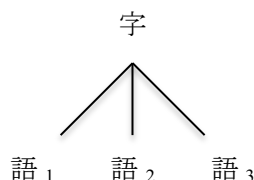
2.1.1.4 形音義の関係について

通仮の範囲については後述するが (§ 2.4 「諧声・通仮可能範囲」)、趙彤 (2006:7) や Baxter and Sagart (2014:64-66) には字と語の関係に関する言及があり興味深い。たとえば趙彤 (2006:7) は以下のように述べている：

从楚简的情况来看，用字虽然与今天有很大的差别，但是在楚简内部还是相当固定的，并非只要音近的字都可以随便通假。把郭店简的《缁衣》和《性自命出》同上博简的《缁衣》和《性情论》相比，就会发现两者在用字上有相当大的一致性，正说明这一点。因此，所谓“通假”其实往往是一种“一形多用”，即一个字形可以用来表示几个不同的词，而具体表示哪几个词则是比较固定的。这种现象在今天也是存在的，比如“花朵”的“花”和“花费”的“花”都写作“花”。

趙彤 (2006:7) は、「通仮」とは「一形多用」、すなわち一つの字形で幾つかの語を表すことができる」と述べている。これを図式化すると以下のようなになるだろう：

図 2.1.1.3.1 「一形多用」



Baxter and Sagart (2014:64-66) は音節という視点から述べている：

① (p.64) The system [筆者注：pre-Qín script] was word-based in the sense that a given graphic token in a given text represented a word-length unit, rather than a single phonetic segment as in alphabetic system. But from the standpoint of how graphs were learned, remembered, retrieved, and read, we suggest that the system was primarily syllable-based, not word-based.

② (p.65) In the most cases, each phonetic element represented a type of syllable with a certain position of articulation in the onset, a certain main vowel, and a certain coda: for example, the

ことが多い。たとえば上博楚簡『曹沫之道』の「曹沫」には数種の字形が用いられており面白い。

¹⁰⁷ すでに述べたとおり、「臨時的」「固定的」という概念は常に注意しておかなければならない。

element 皮 pí ‘skin’ came to represent syllables of the general shape *P(r)aj; here P represents any oral labial stop, pharyngealized or not. There might or might not have been a prevocalic *-r-, and there might or might not have been a presyllables.

③ (p.65) Some syllables could be represented by more than one phonetic element; for example, syllable of the form *ŋ^(ʕ)(r)aj(?) had two possible representations:

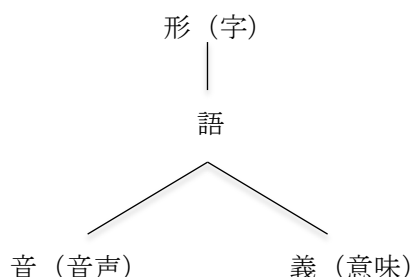
- (156) 我 *ŋ^ʕaj? > *ngaX wǒ* ‘we, I’
 宜 *ŋraj > *ngje* > *yí* ‘proper; should’

These two phonetic elements seem to have been more or less interchangeable: the word now written as

- (157) 義 *ŋ(r)aj-s > *ngjeH* > *yí* ‘duty; justice’

①では、先秦時代の言語表記システムはアルファベットのような表記システムではなく、語 (word) を基礎とするシステムであったと述べている。語 (word) を基礎とするというのはつまり表語文字 (logogram) ということである。表語文字については河野 (1994a:1-29) に詳しいが、いま大西・宮本 (2009:2) によって図式化すると以下ようになる：

図 2.1.1.3.2 「表語文字」



漢字がいわゆる表語文字である点について異論は無い。興味深い点は、Baxter and Sagart (2014) が文字の習得、記憶、復元、読解という観点から言えば、先秦の表記システムは語を基礎とするというよりは寧ろ音節を基礎とする体系であったとする点である (①下線部分)。すなわち語と表記の関係を一対一で記憶しているというわけではなく、「音節」と表記 (形 (字)) を結びつけているということになる。たとえば③では、ひとつの音節が二つの以上の声符によって表される点について言及している：*ŋ^(ʕ)(r)aj(?)という音節には幾つかの表記があり、たとえば「我」*ŋ^ʕaj?、「宜」*ŋraj が {義} *ŋ(r)aj-s を表す。

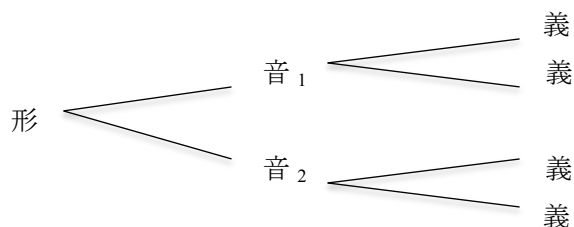
この「音節」にはある程度の幅があり、この幅は諧声・通仮原則の範囲と一致する。たとえば、声母の調音点が一致していれば諧声の範囲内であり、咽頭化 (pharyngealized)、*-r-

presyllable、音節末子音 (*-ʔ, *-s) の有無は諧声原則の範囲に影響しない (②「皮」の例を参照されたい)。

趙彤 (2006:7) が「一形多用」という視点から通仮を説明するように、Baxter and Sagart も「一形多用」については言及しているが¹⁰⁸、「一つの音節が二つの以上の声符によって表される」という視点は興味深い。

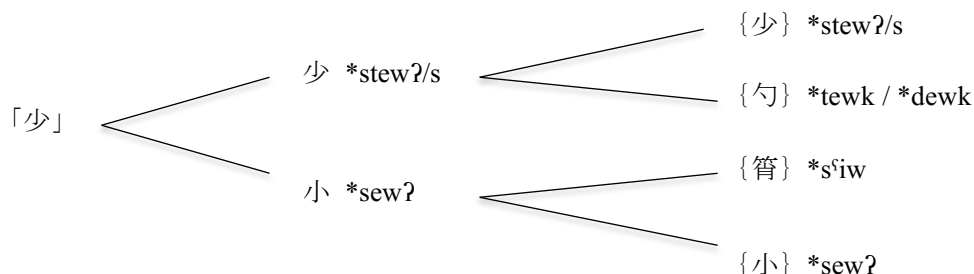
このほか出土資料中には一つの表記で二つ以上の異なる音節—音韻論的に関係のない語一を表すと思しき例が見られる。たとえば「氏」と「氏」(大西 2007:70-71)、「少」と「小」(野原 2015:57-75) 等がある。これを図にすると以下ようになる：

図 2.1.1.3.3 「混用例」



この図は一見すると、趙彤 (2006:7) の考え (図 2.1.1.3.1 「一形多用」) に似ているが、趙彤の案は音₁と音₂が諧声・通仮可能な関係にある場合である。この図は音₁と音₂は音韻論的な関係を有しない場合を表している。たとえば「少」は中古音書母 *sy-* であるが、楚簡などの出土文献中でしばしば中古音心母 *s-* {小} や中古音疏母 *sr-* に相当する語 ({筭} 等) を表す。中古音書母 *sy-* と中古音心母 *s-* は直接諧声・通仮することはないため、「少」という表記は一音韻論的な関連性がないにも拘らず—中古音書母 *sy-* と中古音心母 *s-* に相当する 2 種の字音を表していたと考えられる¹⁰⁹：

図 2.1.1.3.3 「混用例—「少」」



¹⁰⁸ Baxter and Sagart (2014:65) では「皮」という表記が {皮 *skin*}、{彼 *that*}、{疲 *weary, exhausted*}、{破 *break*}、{跛 *walk lame*} を表すとしており、趙彤や他の研究者が通常指摘するような「一形多用」のことである。

¹⁰⁹ 音韻論的には説明できないが、「少」と「小」は意味的にも、音声的 (韻部) にも近似していることから、このような現象が生じやすい下地があったと考えることができる。

「少」の字音*stewʔ/s はいわゆる T-type の語である {少} と {勺} 等を表す。一方、「小」の字音*sewʔは声母*s-を有する語の {筍} と {小} 等を表す。「少」と「小」の上古音再構については § 4.3 「書母 sy-の再構」、§ 4.4 「少の上古音再構」にて述べる。

2.2 形声文字について

「漢字は形声文字の原理を確立することによって表語文字のほぼ完全な体系を造りだした」(河野 (1978/1980:144)) とされるように、形声文字は漢字という文字体系の根幹を為すものであり、その発展の礎でもあった。甲骨文字の段階では全体の 20%前後しか存在しなかった形声文字であるが、金文では 50%を占めるようになり、後漢の『説文』小篆では 8割を超えと言う¹¹⁰。社会の発展に伴って言語を記述する需要が高まり、それが形声文字の増加を促したことは想像に難くない。

その形声文字について、『説文解字』は「以事爲名、取譬相成、江河是也」としている。「事」が「意味」を表し、「名」が「字」を表すとするのが通説である。「取譬相成」について、段玉裁は「江河之字、以水爲名、譬其聲如工可、因取工可、成其名」と注している。上で見たように説文解字の定義は四字句で構成され、尚且つ押韻していることから、その意味するところを理解するのがやや困難ではあるが、おおよその意味は段玉裁の記述のように考えれば良いだろう。すなわち形声文字とは「意符」と「声符」の二つの構成要素によって形作られた漢字である。

形声文字の形成過程には少なくとも二つのルートが考えられる。一つは「語の意味分化を表すために意符が加えられた形声文字」、もう一つは「音の区分を明確にするために声符が加えられた形声文字」である。河野 (1953/1980:11-12) は前者の例として「支」「枝」「肢」、「求」「裘」を挙げ¹¹¹、後者には「年」を挙げる。

前者「支」「枝」「肢」は {分岐} という共通の語義を有していたが、{branch} という語を表す場合には意符「木」が加えられ、{lims} という語を表す場合は意符「肉」が加えられることによって、「枝」や「肢」が形成されたと考えられる。これが「語の意味分化を表すために意符が加えられた形声文字」の形成過程である。

一方、{harvest} を表す場合、甲骨文では「禾」が用いられるが、その字音は「禾」戸戈切ではなく、*nin (あるいは*nin) のような字音であった。そこで「禾」の字音戸戈切の意味(粟苗 {millet seedings}) との混乱を避けるため—あるいは {harvest} 「禾」の字音を明確にするため—to 声符「人」が加えられ、「秊 (年)」という字が作られたと考えられる。このような漢字の造字法は一種の「声符化」とも称され¹¹²、近年の出土資料でもしばしば見られる

¹¹⁰ 古屋 (2010:26)、李豊娟 (2008:208, 394)。Karlgren (1923/1974:4) 等も早い段階で同様の見解を述べている : it is obvious that just this side plays an extremely important part, as nine tenths of all Chinese characters consist of one “signific” and one “phonetic.”

¹¹¹ 「求」は「裘」の本字とするのが通説だが、「求」は幽部*gru であり、「裘」は之部*gwə である。

¹¹² 声符化にはある程度の幅があると考えられる。たとえば「喪」の声符「亡」も声符化の一種と考えられるが、中古音の声母がそれぞれ異なり、「喪」が中古音心母 s-、「亡」が明母 m-であるため、諧声関係その

現象である。

出土資料中にも様々な形声文字風の文字が見られる。しかしながら「口」や「土」のように単なる飾筆と思しきものもあり、これらを直ちに「形声文字」と言えるかどうかについては判断しがたい。

2.3 研究対象とする通仮例

一言で「通仮」と言っても実際には様々な形式の通仮があり、その種類によっては音韻研究の役に立たないもの、さらには誤った結果を導くものがある。そこで本節では本論文で基本的に用いる通仮の種類を限定しておきたい。

古屋（1984:19-50）は俗文学資料に見える用字を以下のように分類する¹¹³：

- I 異體 例：无（無），竜（龍），庄（莊）
- II 假借 a. 字體の上で関連のないもの
例：川（穿），失（識），由（猶）
b. 字體の上で関連のあるもの
例：伴（絆），剛（鋼），運（暈）
- III 偏旁 a. 同音のもの
例：呈（程），成（城），云（雲）
b. 非同音のもの
例：包（鮑），艮（銀），堯（饒）

俗文学と戦国出土資料では時代がかなり異なるが、この分類は戦国文字資料にも当てはまると言って良いだろう。本稿では古屋（1984:19-50）に従い、原則として声符を異にする例一すなわち「II 假借 a. 字體の上で関連のないもの」一を中心に扱う。ただし、興味深い通仮や特に牙喉音等のように中古音の破裂音と摩擦音が関連する場合については、声符を同じくする通仮についても取りあげる。

2.4 諧声・通仮可能範囲

すでに先行研究でも明らかだが、諧声可能範囲と通仮の範囲は概ね一致する。まずは李方桂（1971:8）に見える諧声原則を挙げておこう：

- （一）上古發音部位相同的塞音可以互諧。
- （a）舌根塞音可以互諧聲，也有與喉音（影及曉）互諧的例子，不常與鼻音（疑）諧。
- （b）舌尖塞音互諧，不常跟鼻音（泥）諧。也不跟舌尖的塞擦音或擦音相諧。

ものを否定する研究者もあれば、*sm-という声母を再構する研究者もある（§ 4.2「preinitial *s-と「西」「訊」の上古音再構」）。

¹¹³ 古屋（2008:222）でも同様の見解が示されているが、本稿では1984年の論文に拠った。

(c) 唇塞音互諧，不常跟鼻音（明）相諧。

（二）上古的舌尖擦音或塞擦音互諧，不跟舌尖塞音相諧聲。

つまり調音点を同じくする場合は諧声可能であり、特に牙音に関しては喉音とも諧声関係を有することがある。またいずれの破裂音も鼻音とはあまり諧声関係を有しない。

この範囲を逸脱する場合、二重子音や無声鼻音などの声母が再構されることになる。古屋（2008:216-222）は通仮の範囲を以下のように3段階に分けて論じている：

第1レベル：

最も一般的な通用範囲であり、李方桂（1971）で示される諧声原則とはほぼ一致する。牙音と喉音の通用もここに収められる。舌音についてはA系とB系の2系列がある（本稿のT-typeとL-type）。

第2レベル：

鼻音や舌音B系（L-type）、来母 *l*- が心母 *s*-、疏母 *sr*-、曉母 *x*- 等と通用する例がここに収められる。したがって無声鼻音、preinitial **s*-、**r*- 等が推定される語が多く含まれる。

第3レベル：

第1レベル、第2レベル以外の通用例がここに含まれる。唇音系のものと来母 *l*-、牙喉音系と来母 *l*- のような通用例が中心となる。また現在でも議論の対象となるような難解な通用例等もここに含まれる。

第1レベル、第2レベルまでは、牙喉音を除けば研究者の見解は概ね一致していると言える。牙喉音の諧声・通用の分布は甚だ複雑であり、研究者によって見解が異なる。中古音に基づくならば、牙音は破裂音 *K* であり、喉音は摩擦音 *H* である。したがって牙音と喉音の通用をめぐって、以下の様な見解の違いが見られる：

- ① 破裂音と摩擦音の諧声関係を認める
- ② 破裂音と摩擦音の諧声関係を認めない

表 2.4.1 牙喉音の諧声関係（古屋（2008:217））

見 <i>k</i> -	溪 <i>kh</i> -	群 <i>g</i> -	疑 <i>ng</i> -	影 <i>ʔ</i> -	曉 <i>x</i> -	匣 <i>h</i> -	于 <i>hj</i> -
經	輕	煙	煙	莖	脛	脛	
	誇			汙	吁	鄠	于

①を支持する場合、中古音喉音に対応する上古音が摩擦音であっても問題ない。したがっ

たとえば表 2.4.1 の𠂔声字の場合、中古音見母 *k*-の「經」を破裂音で再構し (**kʰeng*)、曉母 *x*-の「𠂔」を中古音から投影させ摩擦音を再構しても (**xʰeng*)、通用可能と見なされる。先述の李方桂 (1971)、古屋 (2008) を含む殆どの研究者が基本的にこの立場を取る。

これに対して、②を支持する場合、牙音と喉音に破裂音 (經: *kʰeng*) と摩擦音 (𠂔: **xʰeng*) を再構すると、通用不可になってしまう。そこで潘悟云 (1997) はすべての喉音に口蓋垂破裂音を再構することで、牙音と喉音の通用関係を破裂音同士のものに見なしている。たとえば表 2.4.1 の𠂔声の場合、「經」を **keenj*、「𠂔」を **qheenj* のように再構し¹¹⁴、どちらも破裂音であるから通用可能であると見なす。このように牙喉音に関しては未解決な点が多いと言って良いだろう¹¹⁵。

以下、実際に出土資料に見える通仮例を挙げておこう。

2.4.1 声母（音節初頭子音）の喉頭特徴

たとえば中古音見母 *k*-の「工」という表記は上博楚簡『孔子詩論』第 5 号簡において、同じく中古音見母 *k*-の「功」という語を表す。これに対して上博楚簡『容成氏』第 23 号簡では同じ「工」という表記で中古音溪母 *kh*-の「空」を表す。「工」と「功」は中古音見母 *k*-であるから、無声無気軟口蓋破裂音と考えられるが、「空」は中古音溪母 *kh*-、すなわち無声有気軟口蓋破裂音である：

表 2.4.1.1 声符「工」

	OC	Baxter & Sagart	MC
工	<i>*kʰong</i>	<i>*kʰoŋ</i>	見東一平 <i>kuwng</i>
功	<i>*kʰong</i>	<i>*kʰoŋ</i>	見東一平 <i>kuwng</i>
空	<i>*khʰong</i>	<i>*kʰʰoŋ</i>	溪東一平/上 <i>khuwng</i> / <i>khuwngX</i>

このように出土資料においても伝世文献と同様に声母の有気／無気、有声／無声等は諧声・通仮を考える際にあまり役に立たない。換言すると、諧声・通仮において声母の喉頭特徴は何の基準にもならないということになる。

2.4.2 声調

声母の喉頭特徴と同様に、(入声を除き) 声調が異なる場合においても諧声・通仮はある程度可能と言って良いだろう。この点に関しては更なる検証が必要である。本稿では Haudricourt (1954) に従い、上声に **-ʔ*、去声に **-s* を再構する。なお **-s* を接尾辞 (suffix) と見なす研究者も多い。一例を挙げておこう：

¹¹⁴ 潘悟云氏の再構音は <http://www.eastling.org/oc/oldage.aspx> に基づく (2016 年 1 月 13 日参照)。

¹¹⁵ Baxter and Sagart (2014:159, 192) では「經」が「筵」と語源的に関係があると見做し、「經」を **k.lʰeŋ* と再構するが、その正否については判断しがたい。

表 2.4.2.1 *-s suffix

*-s suffix 名詞化 (nominalization)

	OC		MC		
納 {send in}	*n ^s up	>	<i>nop</i>	>	nà
内 {inside}	*n ^s ups > *nuts	>	<i>nwojH</i>	>	nèi

ただし接尾辞 (suffix) の機能は一致しておらず、脱名詞化 (denominalization) の例もある：

表 2.4.2.2 *-s suffix

*-s suffix 脱名詞化 (denominalization)

	OC		MC		
家 {household}	*k ^s ra	>	<i>kae</i>	>	jiā
嫁 {go (as a bride) to one's home }	*k ^s ras	>	<i>kaeH</i>	>	jià

このように見かけは同じように見える *-s suffix であっても、個別적으로見るとその機能は異なる。これら接辞の機能の違いは時代的あるいは地域的な違いを反映していると考えられる。接辞の機能は時代によって生産的である時期とそうでない時期があるからである。

2.4.3 開合の違い (円唇性の有無)

声母の喉頭特徴、声調等は許容範囲がある程度広いが、殊に開合ということになると状況は大きく異なる。開合と言うのは周知の如く、母音の円唇性の有無についてである。たとえば現代中国語で -an は開口であり、介音 -u- を伴った -uan は合口とされる。この違いは上古の円唇性を帯びた声母 *KW (KW で代表) と円唇母音 *-o-、*-u- に由来し¹¹⁶、それぞれ中古音までに介音 -u- を生じたと推定されている。

従来から、介音 *-j- を有する三等韻と非三等韻が諧声・通仮可能であるのに対して¹¹⁷、なぜ介音 *-u- がある場合には諧声・通仮不可能であるのかという疑問があったが、上古音に *KW と円唇母音が再構されることによってこの疑問は解消された：

表 2.4.3.1 開合の音変化

開口

*Kan > Kan

¹¹⁶ 円唇性を帯びた声母は軟口蓋音 (k^w, k^{hw} 等) だけでなく声門破裂音 ?^w や、h^w 等も含むがここでは KW で代表する。

¹¹⁷ 本稿では咽頭化仮説を採用している。

合口

*K^wan > *Kuan*

*K^wen > *Kuen*

*Kon > *Kuan*

従来、合口韻母というのは-u-介音を持つ韻母のことであるから、上古の円唇軟口蓋音*KWと円唇母音を伝統的な術語の「合口」という語で表現することにはやや抵抗があるが、本稿では便宜的に*KWと円唇母音*-o-、*-u-を併せて「合口」と称す¹¹⁸。

上古音においてこの開合が異なる場合、原則として諧声・通仮は不可能である。古屋(2008:212)は以下のように定義している：

上古音において二つの字が同声母あるいは類似した声母を持ち且つ同韻部あるいは対転の関係にある韻部に属するとしても、合口的要素を持つ字と持たない字の間では通仮の関係が成り立たないのが原則。

これは通仮だけでなく諧声関係にも当てはまる原則である。従来の研究者はあまりこの点が明確ではなかったようで、出土資料を扱う際に開合が異なるにもかかわらず通仮可能であると判断し、誤った解釈をしている例も少なくない¹¹⁹。

この開合に関して興味深い例も確認されている。たとえば清華簡『繫年』第99号簡では「間」が{縣}を表しているが、前者は開口であり、後者は合口である¹²⁰：

「間（間一縣） 陳（陳） 邵（蔡）」



清華簡『繫年』第99号簡

「間」、「縣」は開合を異にするが、いずれも主母音が*-enであるため通用可能であったと考えられる：

表 2.4.3.2 「間」「縣」の再構音

	OC		MC		BS2014	
間	*k ^ɿ ren	>	<i>kean</i>	>	jiān	*k ^ɿ re[n]
縣	*gw ^ɿ ens	>	<i>hwenH</i>	>	xiàn	*[g] ^w ɿe[n]

¹¹⁸ 古屋(2008:212)は「合口的要素」という語を用いる。

¹¹⁹ 古屋(2008)を参照されたい。

¹²⁰ たとえば「縣」は中古音 *hwenH* となる。また「間」を「間隙をうかがい、これに乗じて攻略する」と読む可能性もある。たとえば『国語』呉語「罷弊楚国，以間陳蔡」の韋昭注「間、候也。候其隙而取之」とある。ただし前後の文脈からみて{縣}に読むのが妥当である。

いずれにせよ開合が異なる場合、原則として諧声・通仮が不可能であることには注意が必要である。

2.5 戦国竹簡を研究対象とする意義

まずは上古音研究を取り巻く問題について述べ、戦国竹簡を研究対象とする意義について考えてみたい。

2.5.1 押韻、諧声関係の欠如と「復元の強度」:

清朝考証学者は『詩経』等の經典の押韻字を分類することによって上古の韻部を明らかにしたが、すべての語が『詩経』において押韻字となるわけではない。また段玉裁は諧声系列を整理することで韻部の更なる細分化を試みたが、諧声関係を有しない語も少なくない。このように押韻もせず、諧声関係も有しない語の再構については中古音から上古音を投影して再構せざるを得ない。平田（2010:64）は「水」を例に以下のように述べている：

“水”のような文字の字音について上古音を復元するのは困難である。Minimal Old Chinese という着想が提出されているが（Schuessler2009）、むしろ個別の字音の復元自体の「強度」を、確かめることも必要である。字音の正確な復元の試み自体を放棄せねばならない場合もあることは認めておくべきだろう。

このように平田（2010）はデータの欠如によって再構困難となる語を「復元の強度」が低い語とする。

「水」と同様に「復元の強度」が低い例として「田」がある。「田」は『詩経』の脚韻字として現れるため、韻母について議論すべき点は多くないが¹²¹、声母に目を向けると、再構の手掛かりを欠くため「復元の強度」が低い語と言えよう。「田」は中古音定母 *d-* であるが、中古音定母 *d-* の語は少なくとも T-type (**dʰ->d-*) か L-type (**lʰ->d-*) に由来する可能性がある。したがって「田」も T-type か L-type に由来するはずであるが、「田」はそもそも他の声母と諧声関係を有しないため、T-type か L-type かを判断することができない。従来の研究では、中古音から投影し **dʰin* と再構せざるを得なかった¹²²。

このように従来の研究では資料の面で大きな制約があり、これが上古音研究を阻む障碍の一つでもあった。しかし 20 世紀後半以降になると、長江流域を中心に出土資料が陸続と発見されており、伝世文献には見られない通仮がしばしば確認されている。たとえば上に挙げた「田」については、戦国楚簡において L-type の「申」と通仮関係にあることから、

¹²¹ 『詩経』鄘風・定之方中では「零」「人」「淵」「千」と押韻する。ただしここで「零」と押韻しているため、真部 **-in* なのか **-ing* なのか定かではない。Baxter and Sagart (2014) は **-in* とする。

¹²² たとえば Baxter (1992) では **din* と再構する。Baxter and Sagart は後に **lʰin* と再構する。また Bodman (1980:99) はチベット語 *lings* との比較からすでに **l-* を再構している。

*din ではなく *l'in と再構される¹²³。このように出土資料の登場によって伝世文献に基づく研究の空白が埋められ、各語の「復元の強度」を高めることが可能である。

2.5.2 対象とする時代・地域の限定

上古音研究のもう一つの問題点は、研究対象となる資料の時代や地域が均一でないことである。たとえば『詩経』は周の初めから春秋中期までの詩を収めており、少なくとも 500 年という長い歳月をかけ取捨されたものである。また『詩経』に関連する地域も広範であり、陝西、山西、河南、河北、湖北省北部等に跨る。したがって、『詩経』に反映する音系——詩経音系——には少なくとも 500 年に渡る歳月の音変化と広範囲の方言が含まれていることになる。また形声文字も同じように異なる時代、異なる地域の要素を含んでいるため、可能な限り音変化と方言性を考慮しなければならない。虞万里（1982/2001:28-29）は前者（異なる時代の形声文字）を「層次性」、後者（異なる地域の形声文字）を「方言性」と定義している¹²⁴。特に『説文』は後漢時代の字書であるからいわゆる後期上古音であり、虞万里（1982/2001:28-29）が指摘するような「層次性」が存在することは否定できない。たとえば一言で諧声関係と言っても、西周金文に見られる諧声関係と『説文』において初めて見られる諧声関係とでは、その意味するところが大きく異なる。また『説文』には方言性を示す記述がしばしば見える。たとえば「聿」の説解には「聿、所以書也。楚謂之聿、吳謂之不聿、燕謂之弗」とあり、楚、吳、燕の方言について言及している¹²⁵。

このように上古音研究の中心的役割を担ってきた『詩経』や『説文解字』は長い年月による音変化や、広範な地域の特徴を含んでいるため、これらの資料を利用して再構された祖形には矛盾が生じやすく類型論的に支持できないような問題点を孕んでいる可能性が高い。その点、出土資料はある程度時代を限定して議論することが可能である。時代の明確な出土資料は上古中国語の音韻史にひとつの定点を与えるものであり、詳細な音変化を推定する上でも重要な役割を担うと考えられる。本稿では戦国中期から後期の楚地出土の竹簡を研究対象として扱うため、再構された音韻体系は戦国中期から後期のものということができよう。

同様に出土資料は出土地域が明確であるため、ある程度地域を限定することが可能である。本稿で主に扱う出土資料は楚簡と称される資料であり、基本的に楚地の言語を多く反

¹²³ 「田」と「申」の関係については出土資料以外でも言及されるが、実際に出土資料において通仮が見られることに意義がある。ここでは分かりやすい例として「田」を挙げた。復元強度の低い語（由来不明の語）については § 3.2.4 「由来不明の語」にて述べる。

¹²⁴ ここで言う「層次性」とは諧声符 A がある音変化を経て B 音となり、後世の人がこの B 音を基に新たな諧声字を造りだすことを指す。

¹²⁵ 『説文解字』卷三下十。これは各方言の声母と preinitial が異なる音変化を被ったということを示唆しているのではないだろうか。つまり {筆} *prut という語が、楚では *p- の脱落によって「聿」 *rut (> ywit) となり、吳では *ə- が挿入され「不聿」 *pə.rut となり、燕では *r- が脱落し、「弗」 *put と変化したと推定される。これはもちろん推測の域を出ないが、声母の変化が地域によって異なるということは自然なことである。地域ごとに平行する例を見つければより鮮明に音変化を捉えることができるはずである。preinitial や prefix の振る舞いの違いについては Matisoff (2015) に詳しい。

映していると考えられる。ただし楚簡に見える言語現象のすべてが楚地の言語を反映しているとは限らない。他の地域の要素も少なからず存在すると考えられる。たとえば馮勝君（2007:319）は「郭店《唐虞之道》、《忠信之道》、《語叢》一～三以及上博《緇衣》是“具有齊系文字特點的抄本”」として、郭店楚簡『唐虞之道』、『忠信之道』、『語叢』一～三、上博楚簡『緇衣』は齊系文字の特徴を備えていると指摘する。したがって楚簡を扱う場合はできる限り楚の言語を反映していると考えられる資料を扱わなければならない¹²⁶。ただし本稿では基本的にその制約を厳密に設けてはおらず、いわゆる楚簡と称されるものはみな研究対象としている。その結果、矛盾や問題が生じた場合には、あらためて方言差や言語層について検討を加えるという姿勢で研究を進める。

2.5.3 後世の修正が加えられていない資料

伝世文献は長い年月をかけて人々の手から手へと世代を超えて伝わってきた資料であり、後世の人々による加筆・修正が認められる。音変化による声符の交替・添加ならまだしも、言語変化とは関係のない理由によって修正が加えられることも少なくない。したがって伝世文献に反映する言語事象のすべてが当時のありのままの姿を反映しているとは言い難い。このような伝世文献に依拠して再構された上古音体系には何らかの問題が生じる可能性が高いが、後世の手垢がついていない（あるいは少ない）出土資料を扱うことで、このような問題を少しでも取り除くことができるはずである。

本稿で扱う資料は基本的には考古学的に発掘された資料であるが、骨董市場から入手されたいわゆる盗掘資料も研究の対象としている。非発掘簡の扱い方については大西（2014b）を参照されたい。

2.5.4 出土資料の欠点


このように出土資料は言語研究にとって極めて貴重な資料である。とは言え、従来の上古音研究つまり伝世文献を用いた研究が孕んでいた問題と同様の問題がある。

たとえば、李方桂（1971:8）で述べられるように調音点を同じくする場合は基本的に諧声関係が成り立つため、声母の有声性や気音の有無、介音の有無、Type-A（非三等韻）か Type-B（三等韻）か、声調の調値はもとより調類等も諧声関係から推定することはできない。

これは出土資料中の通仮に関しても同様のことが言える。通仮だけでは声母の有声性や気音の有無、声調を確定することができないため、常に中古音から上古音を投影するほかない。一例を挙げておこう。たとえば楚簡において〔病〕を表す場合、「方声字」が表記される例が見える：

¹²⁶ 大西（2013:127-149）を参照されたい。上博楚簡に見える楚王の故事や包山楚簡、新蔡楚簡等がこれにあたる。

表 2.5.4.1 「方」と「病」

図版		OC	BS2014	MC	出典
	方	*pang	*C-paŋ/pan ¹²⁷	<i>pjong</i>	<u>S 孔詩 9</u>
	病	*brangs	*[b]raŋ-s	<i>bjaeng</i>	

「方」は中古音で無声音 *pj-* であり、「病」は有声音 *bj-* であるから、中古音の無声音 *p-* と有声音 *b-* が通仮関係にあるということになる。したがって上古の段階では無声音 *p-* と有声音 *b-* が通用可能であったと考えるほかない。

また仮説の一つとして、どちらの声母も上古音では無声音の **p-* であり、何らかの事情—たとえば preinitial **N-* 等—により中古音では「病」が有声音 *b-* へと変化した等と推測することもできるが、この変化を示す根拠は伝世資料だけでなく出土資料からも見出すことはできない¹²⁸。したがって現時点では中古音の音価に基づき「方」は **pang* と再構され、「病」は **brang* というように再構される。

子音の有声性、気音の有無と同じように、声調についても出土資料のみでは再構できない。「方」は中古音平声であるが、「病」は中古音去声であるため、中古音から投影して「病」に **-s* を認め、中古音去声-*H* へと変化したと推測する。

このように出土資料は多数の貴重なデータを提供するが、当時の音体系のすべてを鮮明に映し出すものではない。出土資料を用いたとしても、伝世文献と同様に根本的な問題点は依然として残されたままであるため、中古音はもとより閩語や他言語への漢語の借用語等も研究対象として視野に入れなければならない（閩語については第 4 章にて触れる）。

¹²⁷ **C-pang* については {square} の意味の語に再構する。これは「方」「匡」「匚」に語源的な関係性があることを示唆したものである。「匡」は「从匚王聲」とされるが、「匚声」の可能性があるというのである。「方」「匚」は幫母陽部であり、「匡」は見母陽部合口であるから、「匡」に **k-p^hang* > *k^{wh}ang* > *khjwang* という音変化を推定する。ただし同源かどうかについては判断しかねる。また **k-p^h-* という声母を再構するべきかどうかについてもやや疑問である。**p^hang* と **k^{wh}ang* の初頭子音の音声的特徴が類似していることは周知の如くであり、わざわざ **k-p^h-* を再構する必要もないのではないか。もちろん語源的に関係があるとすれば語根を同じくする必要があるだろう。

¹²⁸ これとは反対に、どちらも本来は有声音 **b-* であったと仮定し、preinitial（或いは prefix）の **s-* が **b-* を無声化したと推定することも理論的には可能である。



第3章 出土資料の通仮と声母体系

第3章では出土資料中に見える通仮例を挙げ、戦国中期から後期の声母体系について概観したい。本稿では上古音声母体系の全体像を捉えるため、§3.1「唇音 P（両脣破裂音）、鼻音 M」、§3.2「T-type（歯茎破裂音）と L-type（歯茎側面音、鼻音 N）」、§3.3「牙音 K と喉音 H（軟口蓋破裂音・摩擦音と口蓋垂破裂音）、鼻音 NG」、§3.4「歯音 TS（歯茎破擦音と摩擦音）」として、検討を加えたい。§3.3「牙音 K と喉音 H」に関して、牙喉音の再構は極めて複雑であり網羅的に検討を加えていない。特に「第一口蓋音化」に関しては稿を改めて論じたい。

凡例

本文中の表について：

本稿ではしばしば以下の様な表を挙げる。表中の「例」の一行目が出土資料に見える「表記」を示し、二行目が表される {語} を示す。たとえば「𡗗」が {短} を表す場合、以下のような表になる：


図版	例	OC	BS2014	MC	出典
① 	𡗗	*tʰon	*tʰor	<i>twan</i>	G 老甲 16, S 曹 30, S 天乙 11
	短	*tʰonʔ	*tʰorʔ	<i>twanX</i>	
② 	陞	*stəŋ	*s-təŋ	<i>syŋ</i>	S 容 31, B5
	登	*tʰəŋ	*tʰəŋ	<i>tong</i>	

- ・ 図版：出典下線部より引用。
- ・ 「OC」は本論文の再構音である。「MC」は中古音。
- ・ BS2014 : Baxter, William H. and Laurant, Sagart 2014a. *OLD CHINESE: A NEW RECONSTRUCTION*. OXFORD UNIVERSITY PRESS. または Baxter, William H. and Laurant, Sagart 2014b に基づく。
- ・ 出典：B=包山楚簡、G=郭店楚簡、GX=葛陵新蔡楚簡、M=望山楚簡、Q=清華簡、S=上博楚簡
- ・ 出典に挙げられる例には字形がやや異なるものも含まれる。たとえば下段②の「陞」：{登} という通仮が S 容 21（上博楚簡『容成氏』第 21 号簡）に見えるが、声符を同じくするが字形の異なる「𡗗」が {登} を表す B5（包山楚簡第 5 号簡）の例も同じ表に挙げている。

3.1 唇音 P（両唇破裂音）、鼻音 M

3.1.1 先行研究

すでに述べたとおり（§ 1.1「清朝考証学者の声母研究」）、諧声関係、異文、諸方言からみて、上古音に軽唇音（唇齒音）は存在しない。もちろんこれは出土資料に見える通仮例からも支持される。たとえば以下で示すように中古音奉母の「方」が中古音並母の「病」を表す：

図版	例	OC	BS2014	MC	出典
	方	*pang	*C-paŋ/paŋ	<i>pjon</i>	S 孔詩 9, G 老甲 36, GX 乙四 5
	病	*brangs	*[b]raŋ-s	<i>bjaeng</i>	

上古音の*p-が先行する prefix *N-等によって有声化し、中古音並母 *b-*へと変化したという見解や¹²⁹、これとは反対に上古音*b-が prefix *s-によって無声化し、中古音幫母 *p-*へと変化したとする見解もあるが¹³⁰、出土資料からその違いを見出すことはできない。

3.1.2 破裂音*p-、*ph-、*b-

両唇破裂音 P については特筆すべきことはない。以下、楚簡に見える通仮例をいくつか挙げておこう：

- (1) 甘棠之保（報）  上博楚簡『孔子詩論』第 10 号簡
- (2) 天用弗𠄎（保）  清華簡『皇門』第 12 号簡
- (3) 𠄎（鮑）𠄎（叔）𠄎（牙）  上博楚簡『鮑叔牙與隰朋之諫言』第 9 号簡

通仮例（1）では中古音幫母 *p-*「保」が同じく幫母 *p-*{報}を表す。さらに（2）では中古音幫母 *p-*の缶声「𠄎」が{保}を表す。（3）では同じく缶声の「𠄎」が{鮑叔牙}の{鮑}を表す。

¹²⁹ Sagart and Baxter (2012:29-59)。

¹³⁰ Mei (2012:1-28)。

表 3.1.2.1 「保」「缶」「報」の再構音

	OC		MC		Baxter and Sagart (2014)	
保	*p ^ɿ u?	>	<i>pawX</i>	>	bǎo	*p ^ɿ u?
報	*p ^ɿ uks	>	<i>pawH</i>	>	bào	*p ^ɿ uk-s
缶	*pu?	>	<i>pjuwX</i>	>	fǒu	*p(r)u?
鮑	*b ^ɿ ru?	>	<i>paewX</i>	>	bǎo	—

次に「備」の例を見てみよう。

(4) 長民者衣備（服）不改（改）



上博楚簡『緇衣』第 9 号簡

(5) 戎備（服）



清華簡『耆夜』第 6 号簡

(6) 備（佩）璧



新蔡葛陵楚簡乙一第 13 号簡

(7) 備（佩）玉一環



望山楚簡第 130 号簡

通仮例（4）、（5）では中古音並母 *b*-「備」が並母（奉母）*b*-{服}を表しているが、これは楚系文字の特徴である。（6）、（7）では同じ「備」が並母 *b*-{佩}を表す。それぞれの音価は以下のとおり：

表 3.1.2.2 「備」「服」「佩」の再構音

	OC		MC		Baxter and Sagart (2014)	
備	*brəks	>	<i>bijH</i>	>	bèi	*[b]rək-s
服	*bək	>	<i>bjuwk</i>	>	fú	*[b]ək
佩	*bʰəks	>	<i>bwojH</i>	>	pèi	*[b]ʰək-s

続いて必声字について。

(8) 𠂔（必）見其成



上博楚簡『緇衣』第 21 号簡

*郭店楚簡『緇衣』第 40 号簡「必見其」

(9) 天下𠂔(必)壞



郭店楚簡『唐虞之道』第28号簡

通仮例(8)、(9)では、幫母 *p*- 𠂔 声(?)の「𠂔」が幫母 *p*- {必}を表す。𠂔 声であるとすれば幫母脂部となり、「必」は幫母質部であるから通用可能である。「𠂔」の「才」は意符である可能性もあり、「𠂔」は「閉」の異体字かもしれないが、いずれにしても「𠂔」が声符として機能している。そこで「閉」に関する通仮例を見てみよう。

(10)、(11)では必声の「𠂔」が幫母 *p*- {閉}を表す：

(10) 朝啓夕𠂔(閉)



九店楚簡第60号簡

(11) 𠂔(閉) 𠂔(其) 門



郭店楚簡『老子』乙本第13号簡

このほか必声と「馬」に作る𠂔が「匹」を表す例が郭店楚簡『緇衣』第42号簡に見える。

「𠂔」「必」「閉」「匹」の再構音は以下のとおり：

表 3.1.2.3 「𠂔」「必」「閉」「匹」の再構音

	OC		MC		Baxter and Sagart (2014)	
𠂔	*pij?	>	<i>pjiX</i>	>	bǐ	*pij
必	*pit	>	<i>pjit</i>	>	bì	*pi[t]
閉	*pʰits	>	<i>pejH</i>	>	bì	*pʰi[t]-s
匹	*phit	>	<i>phjit</i>	>	pǐ	*phi[t]

次に「𠂔」一すなわち「弁」が表す語について見ていきたい¹³¹。

(12) 少(小) 𠂔(弁)、考(巧)言



上博楚簡『孔子詩論』第8号簡

(13) 𠂔(其) 聖(聲) 𠂔(變)



郭店楚簡『性自命出』第32号簡

¹³¹ {弁}が戦国楚簡で「𠂔」で表記されることについては李家浩(1979:391-395)を参照。

例（13）は「𠂔（弁）」が{變}を表している。（唇音のため開合を考える必要はないが）「弁」も「變」もどちらも並母合口であるから、通仮については問題ない。次に例（14）を見てみよう：

（14） 四矢𠂔（反、變）兮



上博楚簡『孔子詩論』第22号簡

例（14）は『詩経』「齊風・猗嗟」の「四矢反兮」に対応する箇所である。したがってここでは{反}を表していると考えられるが、『經典積文』によると『韓詩』では「反」ではなく「變」に作るようである¹³²。『詩経』「齊風・猗嗟」の押韻字を見てみると「變」*-onʔ、「婉」*-onʔ、「選」*-onʔ、「貫」*-ons、「反」*-anʔ、「亂」*-ons が押韻しており、「反」を除く語はみな*-on であり、「反」のみ*-an である。『韓詩』はこれを「變」とするが、「變」は円唇母音*-on であるから『韓詩』の方が脚韻字としてはより相応しい¹³³。したがって（14）についても円唇母音*-on の{變}に読むのが良いかもしれない。例（15）についても同様のことが言える：

（15） 民此以𠂔（煩、變）



上博楚簡『緇衣』第10号簡、郭店楚簡『緇衣』第18号簡

ここで{煩}に読まれるのは、今本『礼記』緇衣篇で「煩」とあることによる¹³⁴。もちろん例（14）も（15）も主母音が同じ*-on である{變}に読むほうが蓋然性は高い。ただし唇音声母は開合に対して弁別的ではないため、通仮の面では必ずしも開合を論じる必要はない。以下、「弁」、「變」、「反」、「煩」の再構音を挙げておく：

表 3.1.2.4 「弁」「變」「反」「煩」の再構音

	OC		MC		Baxter and Sagart (2014)	
弁	*brons	>	<i>bjenH</i>	>	biàn	*C.[b]ro[n]-s
變	*prons	>	<i>pjenH</i>	>	biàn	*pro[n]-s
反	*panʔ	>	<i>pjonX</i>	>	fǎn	*Cə.panʔ
煩	*ban	>	<i>bjon</i>	>	fán	*[b]a[n]

¹³² 『經典積文』卷五「反兮。如字、復也。韓詩作變、變易。」

¹³³ Baxter (1992:364)。

¹³⁴ 季旭昇 (2004:108) 「今本作「煩（奉紐元部）」，《考工記・工人》注：「煩，亂也。」二字音義俱近。」

3.1.3 鼻音*m-

鼻音に関しても破裂音 P と同様に上古に軽唇音はない。以下、鼻音*m-の通仮例を挙げる：

- (1) 母𠂔 (以) 少 (小) 𠂔 (謀) 𠂔 (敗) 大𠂔 (圖)



上博楚簡『緇衣』第 12 号簡

- (2) 君又 (有) 𠂔 (謀) 臣即壞𠂔 (地) 不鈔 (削)



郭店楚簡『語叢四』第 22-23 号簡

- (3) 𠂔 (謀) 𠂔



清華簡『耆夜』第 7 号簡

このように明母 *m-*「母」を声符に持つ「𠂔」は同じく明母 *m-*の{謀}を表す¹³⁵。当該字は中古音曉母 *x-*の語(「誨」「悔」等)とも通仮するため、無声鼻音についても検討を加えなければならない。無声鼻音については § 4.1.1 「出土資料に見える無声鼻音の例」を参照されたい。

表 3.1.3.1 「母」「謀」の再構音

	OC		MC		Baxter and Sagart (2014)	
母	*mʰəʔ	>	<i>muw</i>	>	mǔ	*məʔ
謀	*mə	>	<i>mjuw</i>	>	móu	*mə

次に「𠂔」の例を見てみよう。

- (4) 天下皆智 (知) 𠂔 (美) 之爲𠂔 (美)



郭店楚簡『老子』甲本 15 号簡

- (5) 𠂔 (好) 𠂔 (美) 女 (如) 𠂔 (好) 𠂔 (緇) 衣



上博楚簡『緇衣』1 号簡

¹³⁵ 母声字の韻母に関しては問題が多い。

例（４）、（５）に有るように「微」の異体字が明母 *m*- {美} を表している。「美」の韻部の帰属に関しては研究者によって見解が異なるが、この通仮によって微部である蓋然性が高まったと言えよう。

表 3.1.3.2 「美」「微」の再構音

	OC		MC		Baxter and Sagart (2014)	
美	*mrəjʔ	>	<i>mijX</i>	>	měi	*[m]rəjʔ
微	*məj	>	<i>mj+i</i>	>	wēi	*məj

3.1.4 小論

唇音（両唇音破裂音・鼻音）に関しては、特筆すべきことはない。清朝考証学者が異文や諧声関係によって上古に軽唇音が存在しなかったと推定したように、実際に出土した資料においても軽唇音の痕跡は見られない。またすでに述べたとおり、諧声・通仮からは声母の喉頭特徴について議論することはできない。無声鼻音 *hm-[m] に関しては § 4.1 「無声鼻音 HN」にて述べる。

3.2 T-type（齒茎破裂音）と L-type（齒茎側面音）

3.2.1 先行研究

Karlgren 以来、中古音の舌音（端組）と正齒音（章組一部）はすべて上古音の舌音 (*t-, *th-, *d-) に由来すると見なされてきたが¹³⁶、Pulleyblank (1962: 114-115) は諧声系列の分布に着目し、Karlgren 以降の研究者が *t-, *th-, *d-（あるいは *dh-）と再構した上古音の舌音を 2 種に分類するという仮説—The L-type hypothesis—を示している。本論文ではこれら 2 種の声母をそれぞれ T-type / L-type と称す（または舌音 A、舌音 B と称されることもある）。T-type と L-type の諧声分布は以下のとおりである：

¹³⁶ Karlgren (1954/1992) は中古音の全濁声母（有声音）に *bh*-（並母）、*dh*-（定母）、*gh*-（群母）、*dzh*-（從母）のような有声有気音を再構し、これに対応する上古音も *bh-, *dh-, *gh-, *dzh- が再構される。これは後の研究者によって完全に否定されるが、中古音以母 *y*- や于母 *hj*- にシンプルな *b-, *d-, *g- を使う余裕が生まれたように、全く利点がないわけではない。このほか有声有気音が Starostin (1989) によって再構されるが、これは閩祖語（Proto-Min）の弱化声母（Softened initial）との音韻対応に基づくものである。

表 3.2.1.1 T-type の諧声分布例（古屋 2006:213）

諧声符	端	透	定	知	徹	澄	章	昌	禪	書	船	以	邪
	<i>t-</i>	<i>th-</i>	<i>d-</i>	<i>tr-</i>	<i>thr-</i>	<i>dr-</i>	<i>tsy-</i>	<i>tsyh-</i>	<i>dzy-</i>	<i>sy-</i>	<i>zy-</i>	<i>y-</i>	<i>z-</i>
旦	旦	坦	但	鱸			氈		澶	羶			

T-type は中古音端母 *t-*、知母 *tr-*、章母 *tsy-*、禪母 *dzy-* と諧声関係を有すが、船母 *zy-*、以母 *y-* とは諧声関係を有しない点に注意されたい。これに対して、L-type の諧声分布は以下のとおりである：

表 3.2.1.2 L-type の諧声分布（古屋 2006:213）

諧声符	端	透	定	知	徹	澄	章	昌	禪	書	船	以	邪
	<i>t-</i>	<i>th-</i>	<i>d-</i>	<i>tr-</i>	<i>thr-</i>	<i>dr-</i>	<i>tsy-</i>	<i>tsyh-</i>	<i>dzy-</i>	<i>sy-</i>	<i>zy-</i>	<i>y-</i>	<i>z-</i>
余		庖	塗			除				賒	荼	余	徐

T-type の諧声分布とは異なり、L-type は端母 *t-*、知母 *tr-*、章母 *tsy-* と諧声関係を有しないが、船母 *zy-* や以母 *y-* と諧声関係を有している。以上の点をまとめると以下ようになる：

表 3.2.1.3 T-type と L-type の諧声分布

	端	透	定	知	徹	澄	章	昌	禪	書	船	以	邪
	<i>t-</i>	<i>th-</i>	<i>d-</i>	<i>tr-</i>	<i>thr-</i>	<i>dr-</i>	<i>tsy-</i>	<i>tsyh-</i>	<i>dzy-</i>	<i>sy-</i>	<i>zy-</i>	<i>y-</i>	<i>z-</i>
T	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	○
L	×	○	○	×	○	○	×	○	○	○	○	○	○

< T-type >

端母 *t-*、知母 *tr-*、章母 *tsy-* と諧声関係を有すが、船母 *zy-*、以母 *y-* とは諧声関係を有しない

< L-type >

端母 *t-*、知母 *tr-*、章母 *tsy-* と諧声関係を有しないが、船母 *zy-*、以母 *y-* とは諧声関係を有す

* 透母 *th-*、定母 *d-*、徹母 *thr-*、澄母 *dr-*、昌母 *tsyh-*、書母 *sy-*、邪母 *z-* は T-type、L-type のどちらの諧声系列にも出現し得る

Pulleyblank が示したとおり、中古音の舌音（章組含む）は諧声系列の分布により少なくと

も2種に分類されるが、問題となるのはその音価である。当初、Pulleyblank (1962:116) は後者—すなわち L-type—を従来の舌音 (Karlgren の *t-, *th-, *dh-) とは異なるグループとして歯摩擦音 *θ- と *ð- を再構するが¹³⁷、後にこれを *lh- と *l- に改める (Pulleyblank (1973:116-117))。これは主にチベット語との比較に拠るものであり、たとえば以下の様な対応関係が見える：

表 3.2.1.4 L-type とチベット語 (Pulleyblank 1962:116 より)

羊	MC. <i>yaŋ</i> “sheep”	Tib. <i>lug</i>
葉	MC. <i>yep</i> “leaf”	Tib. <i>lub</i>
脱	MC. <i>thwat</i> , <i>dwat</i> “take off,” “escape,” MC. <i>thwai</i> “easy, leisurely”	Tib. <i>lhod-pa</i> “loose, relaxed”

このほかたとえば『漢書』「西域伝」にしばしば見える「烏弋山離」が「*Alexandria*」を表しており、中古音以母である「弋」*yik* が「*lex*」に対応していること、また漢語からの借用語である「酉」(十二支) がタイ語で *r-* に実現されることを根拠にする¹³⁸。現在ではこのように L-type に *l- を再構することが通説となっている。

従来の研究において *l- は中古音来母 *l-* に対応する上古音に再構されてきた。近年では中古音来母 *l-* に対応する上古音には *r- が再構される。L-type の音変化については以下のとおりである：

¹³⁷ *θ- は中古音透母 *th-*、*ð- は中古音定母 *d-* に変化すると推定されている。

¹³⁸ タイ語に見える漢語の借用語「酉」が Ahom: *rāo*、Lü: *hrau4*、Dioi: *thou3* のように実現されることから Proto-Tai (primitive-Tai) に *r- が再構されることに拠る (Li Fang-kuei (1945:336))。また「酉」が『史記』「律書」、『白虎通』「五行」で「老」、『漢書』「律歴書」で「留」のような中古音来母 *l-* と声訓関係にあることにも言及がある。ただし『史記』や『漢書』がいわゆる後期上古音 (Late Old Chinese) に分類される点は注意が必要である。

表 3.2.1.5 L-type の音変化

	OC	MC	例
Type-A	*l̥-	d- (定)	兌 *l̥ots > <i>dwajH</i>
	*hl̥- [l̥]	th- (透)	脱 *hl̥ot > <i>thwat</i> ¹³⁹
	*hl̥- [l̥]	x- (曉) : 西方	— *hl̥- > x-
Type-B	*l-	y- (以母)	悅 *lot > <i>ywet</i>
	*hl- [l]	sy- (書母)	說 *hlot > <i>sywet</i>

*T-type-A=1、2、4 等韻、 Type-B=3 等韻

3.2.2 T-type

ここでは戦国竹簡にみえる T-type の通仮例を見てみよう。ここで挙げる T-type の語は確実に T-type であると言える語—すなわち諧声関係から明らかに T-type であると判断し得る語—を挙げる。諧声関係を欠くため確実に T-type であると言えない語についてはここでは挙げない (§ 3.2.4 「由来不明の語」 参照)。

「𡗗」: {短}

たとえば今本『老子』第二章には「難易相成，長短相形」とあるが、これに対応する戦国時代の郭店楚簡『老子』甲本第 16 号簡には以下のようにある：

(1) 難易之相成也，長𡗗 (短) 之相型也



郭店楚簡『老子』甲本第 16 号簡

今本『老子』で「短」とある箇所が郭店楚簡では「𡗗」とある。したがって郭店楚簡の「𡗗」は {短} を表していることが分かる。ここで音韻論的な裏付け、すなわち「𡗗」と {短} の通仮が上古音体系において通仮可能であるかを判断する根拠が必要となる。そこでそれぞれの中古音の音韻地位を見てみると、「𡗗」は山攝桓韻一等合口平声端母 (*twan*) であり、「短」は山攝桓韻一等合口上声端母 (*twanX*) である。してみると上古ではそれぞれ端母元部合口と考えられ、「𡗗」*ton、「短」*ton? と再構される。つまり「𡗗」と「短」の通仮は T-type と T-type の通仮ということになる。

¹³⁹ Baxter and Sagart (2014:180) では中古音透母 *th-* の「脱」を *m̥-l̥ot と再構する。これは Proto-Mien で *ʔdut (“to peel off / escape”) と再構されることに拠る。pMien の *ʔdut は *nt- の有声化が起きた後のものと推定されるため (*nt- > ʔd-)、漢語側で *m̥-l̥ot から *m̥-l̥ot に変化した後に勉語 (Mien languages) に借用されたと推定される。Proto-Mien は Ratliff (2010) に拠る。

表 3.2.2.1 「𪔐」と「短」の再構音

	OC		MC			Baxter and Sagart (2014)
𪔐	*tʰon	>	twan	>	tuān	*tʰor
短	tʰonʔ	>	twanX	>	tuǎn	*tʰorʔ

Baxter and Sagart (2014) で*-r 韻尾が再構されるが、これは「𪔐」の諧声系列上に上古音歌部合口に相当する「瑞」(中古音：支韻去声(寘) *dzyweH*)があり、また「短」(桓韻上声(緩) *twanX*)が閩東語等で[toi]のように開音節で実現されることによる¹⁴⁰。

「主」：{重}

次の例は「主」を声符に持つ「至」が{重}を表す例である：

(2) 至 (重) 𪔐 (絶) 寶 (富) 貴



上博楚簡『緇衣』第22号簡

「主」は中古音章母 *tsy-*であり、「重」は澄母 *dr-*である。「主」は章母 *tsy-*であるから Type に由来することが確実であるが、「重」は澄母 *dr-*であり、澄母は L-type の可能性もあるため、諧声関係の分布を確認しなければならない。下表は「重」の諧声分布表である：

表 3.2.2.2 「重」の諧声分布表（ここでは童は除く）

諧声符	端	透	定	知	徹	澄	章	昌	禪	書	船	以	邪
	<i>t-</i>	<i>th-</i>	<i>d-</i>	<i>tr-</i>	<i>thr-</i>	<i>dr-</i>	<i>tsy-</i>	<i>tsyh-</i>	<i>dzy-</i>	<i>sy-</i>	<i>zy-</i>	<i>y-</i>	<i>z-</i>
重	𪔐		動	堽		鍾	鍾						

「重」の諧声関係を見てみると、端母 *t-*「𪔐」、知母 *tr-*「堽」、章母 *tsy-*「鍾」があるため T-type と判断される。してみると「主」と{重}の通仮は T-type と T-type の通仮ということになる。

また「重」と「童」には密接な関係があり、たとえば『説文』において「童」は「重省声」とされる。戦国楚簡においても「童」が{重}を表し、童声の「𪔐」が{董}を表す通仮例が見える：

¹⁴⁰ 「短」、「酸」のような合口的な(円唇母音)語が-iのように実現される傾向にある。

(3) 飢 (食) 不童 (重) 香 (味)



上博楚簡『容成氏』第 21 号簡

(4) 遽 (董) 之用畏



清華簡『祭公』第 11 号簡

「主」「重」「童」の再構音は以下のとおりである：

表 3.2.2.3 「主」と「重」の再構音

	OC		MC		Baxter and Sagart (2014)	
主	*toʔ	>	<i>tsyuX</i>	>	zhǔ	*toʔ
重	*dronɡ	>	<i>drjownɡX</i>	>	zhónɡ	*N-t<r>onʔ
童	*dʰonɡ	>	<i>duwngX</i>	>	tónɡ	*[d]ʰon

「豉」：{注}

豆声と思しき「豉」が {注} を表す例を見てみよう。

(5) 壘 (禹) 迴 (通) 淮與沂 (沂)，東豉 (注) 之泐 (海)



上博楚簡『容成氏』第 25 号簡

例 (5) では「豉」という表記が {注} を表している。「注」自体が中古音知母 *tr-*であるから主声字が **T-type** であることは確実である。またここで「豉」が {注} を表していることから、「豉」は中古音止摂支韻三等開口去声禪母 (*dzɣeH*) に相当する字音ではなく、豆声の字音に読まれていると考えられる。そこで「豆」の諧声系列を見てみると、端母 *t-*「郢」等があることから「豆」も **T-type** である。したがって「豆」と {注} の通仮は **T-type** の通仮ということになる。

さらに「豉」が {誅} を表すこともある：

(6) 大皐而大豉 (誅) 之



郭店楚簡『五行』第 35 号簡

「誅」は「朱」を声符とする。「朱」は中古音章母 *tsy-*、「誅」は中古音知母 *tr-*であるから、

やはり上古音の T-type に由来する。さらに以下の例では、豆声の「𡵓」が {屬} を表している：

(7) 君王𡵓 (屬) 僕於子左尹



『包山楚簡』第 15 号簡

「屬」には中古音章母 *tsy-* と禪母 *dzy-* の字音があるため、やはり T-type である。「豆」、「注」、「誅」、「屬」の再構音は以下のとおり：

表 3.2.2.4 「主」と「重」の再構音
















	OC		MC		Baxter and Sagart (2014)	
豆	*dʰos	>	<i>duwH</i>	>	dòu	*[N.t]ʰo-s
注	*tros	>	<i>trjuH</i>	>	zhù	*tro(?)s
誅	*tro	>	<i>trju</i>	>	zhū	*tro
屬	*tok/*dok	>	<i>tsyowk/dzyowk</i>	>	zhǔ/shǔ	*tok / *N-tok ¹⁴¹

以下、T-type の通仮例を幾つか挙げる（幾つか声符を同じくする例も含む）：

表 3.2.2.5 T-type の通仮例

	図版	例	OC	BS2014	MC	出典
①		𡵓 淑	𡵓 *tʰiwk *diwk	*tʰ[i]wk/s *[d]iwk	<i>tek</i> <i>dzyuwk</i>	S 緇 3, 16, S 平間 7, G 緇 4, 32, 39, G 窮 8,
②		𡵓 叔	*tʰiwk *stiwk	*tʰ[i]wk/s *s-tiwk	<i>tek</i> <i>syuwk</i>	Q 耆 2, Q 金 7, Q 繫 18, S 鮑 9
③		𡵓 德(惠)	*tʰək *tʰək	*tʰək *tʰək	<i>tok</i> <i>tok</i>	S2 民 12
④		𡵓 周	舟 *tu *tiw	*tu *tiw	<i>tsyuw</i> <i>tsyuw</i>	G 太 6
⑤		𡵓 斷	專 *ton *tʰon?	*ton *tʰo[n]?	<i>tsywen</i> <i>twanX</i>	G 六 42, 43, 44, G 語二 35, S 曹 62

¹⁴¹ Baxter and Sagart (2014:117-118) の「屬」の再構音 *N-tok は {be attached} の意味に再構され、*tok は {to assemble} の意に再構される。これはいわゆる清濁別義の例である。通仮例 (5) では「屬」に後に目的語「僕」が続くためここでは禪母 *dzy-* ではなく章母 *tsy-* の字音を表に入力している。

⑥		審 湛	*stəmʔ *drəmʔ	*s.t ^h [ə]mʔ —	<i>syimX</i> <i>dremX</i>	S1 孔詩 21
⑦		眚 識	之 *tə *stək	*tə *s-tək	<i>tsyi</i> <i>syik</i>	S 緇 2
⑧		嘗 詩	之 *tə *stə	*tə *s.tə	<i>tsyi</i> <i>syi</i>	S 孔詩 1, 4, S 緇 2, 5, 21, 22
⑨		戠 特	*tək *dʰək	*tək *[d]ʰək	<i>tsyik</i> <i>dok</i>	B215, 214, 200, 203,205
⑩		上 尚	*dangʔ *dangs	*daŋʔ ¹⁴² *daŋʔ-s	<i>dzyang</i> <i>dzyangH</i>	Q 耆 2
⑪		詁 召	勺 *tewk/*dewk *dawʔ	*tewk/*m-tewk *[d]awʔ	<i>tsyak / dzyak</i> <i>dzyewX</i>	Q 繫 37
⑫		迺 蹠	石 *dAk *tAk	*dAk —	<i>dzyek</i> <i>tsyek</i>	S 平木 1 「席」については p.137
⑬		𦉳 庶	石 *dAk *stAks	*dAk *s-tAk-s	<i>dzyek</i> <i>syoH</i>	S 魯 2
⑭		𦉳 炙	*stAks *tAk/s	*s-tAk-s *tAk/s	<i>syoH</i> <i>tsyek / tsyaeH</i>	B258, B190-1
⑮		種 春	*drong *stong	— *s-tonŋ	<i>drjowng</i> <i>syowng</i>	S 容 21
⑯		登 蒸	*tʰəŋg *təŋg	*tʰəŋ *təŋ	<i>tong</i> <i>tsyng</i>	S 競 8, B257
⑰		登 徵	*tʰəŋg *trəŋg	*tʰəŋ *trəŋ	<i>tong</i> <i>tring</i>	S 性 13
⑱		陞 登	*stəŋg *tʰəŋg	*s-təŋ *tʰəŋ	<i>syng</i> <i>tong</i>	S 容 31, B5
⑲		陞 拯	*stəŋg *təŋg	*s-təŋ *təŋʔ	<i>syng</i> <i>tsyngX</i>	S 周 48
⑳		𦉳 著	毛 *thʰak *traks	— *t<r>ak-s	<i>thak</i> <i>trjoH</i>	S 緇衣 23, G 緇 44

¹⁴² Baxter and Sagart (2014) は「上」を *Cə-daŋʔ、*m-daŋʔ、*daŋʔ-s 等とする。

以上のように、戦国竹簡において T-type は T-type の語とのみ通仮関係にあり、L-type とは通仮しない。このほか中古音書母 *sy-*へと音変化する T-type は *st-*と再構されるが、語根**t-*を共有する場合、preinitial **s-*の存在は通仮に影響しない（②⑥⑦⑧⑬⑭⑮⑱⑲）。

次に戦国楚簡における L-type の振る舞いを見てみよう。

3.2.3 L-type

上述したように、L-type とは「端母 *t-*、知母 *tr-*、章母 *tsy-*と諧声関係を有しないが、船母 *zy-*、以母 *y-*とは諧声関係を有す」語である。

「涅」：{盈}

たとえば今本『老子』第 45 章に「大盈若冲」とあるが、これに対応するものが郭店楚簡『老子』に見える：

(1) 大涅若中



郭店楚簡『老子』乙本第 214 号簡

例 (1) では「涅」が {盈} を表している。どちらも中古音以母 *y-*であり、上古の L-type に由来する語である。「涅」と「盈」の諧声系列は以下のとおり：

表 3.2.3.1 「涅」と「盈」の諧声関係

端	透	定	知	徹	澄	章	昌	禅	書	船	以	邪
<i>t-</i>	<i>th-</i>	<i>d-</i>	<i>tr-</i>	<i>thr-</i>	<i>dr-</i>	<i>tsy-</i>	<i>tsyh-</i>	<i>dzy-</i>	<i>sy-</i>	<i>zy-</i>	<i>y-</i>	<i>z-</i>
	梃			逞	呈						涅	
											盈	

「涅」の諧声関係を見てみると、端母 *t-*、知母 *tr-*、章母 *tsy-*と諧声関係がなく、以母 *y-*が現れるため L-type であることは確実である。また「盈」に関しては、そもそも以母 *y-*以外の声母と諧声関係を有しないため、L-type である蓋然性が高い¹⁴³。それぞれの再構音は以下のとおり：

¹⁴³ もちろん口蓋垂音**g-*や**r-*に由来する以母 *y-*である可能性を完全に排除することは出来ないが、ここで「涅」と諧声関係にあることから L-type であることは確実。




表 3.2.3.2 「涅」と「盈」の再構音

	OC		MC		Baxter and Sagart (2014)
涅	*lengʔ	>	yengX	>	yǐng —
盈	*leng	>	yeng	>	yíng *leŋ

以下、L-type と L-type の通仮を挙げる：

表 3.2.3.3 L-type の通仮例

	図版	例	OC	BS2014	MC	出典
①		遯 陳	申 *hlin *lrin	*[l]i[n] *lri[n]	syin drin	S 緇 20,10,
②		聖 聽	*hlengs *hlʰeng	*[l]eŋ-s *[l]ʰeŋ	syengH theng	G 成 24, Q 皇 8, S 性 15,
③		聖 聲	*hlengs *hleng	*[l]eŋ-s *[l]əŋ	syengH syeng	S 性 3, 14(2), 15,
④		繇 由	繇 *lu *lu	— *[l]u	yuw yuw	G 成 6, 14, G 尊 3, 10, G 六 7, G 語一 1, 19, 20, 21
⑤		涅 盈	*lengʔ *leng	— *[leŋ] (<liŋʔ?)	yengX yeng	G 老乙 14, Q 繫 93
⑥		咼 悠	*liw *liw	— *liw	yuw yuw	S 緇 23
⑦		玳 飭	弋 *lək *hlrək	*lək —	yik trhik	Q 耆 5
⑧		𢇛 覃	尋 *sələm *lʰom	*sə-ləm *N.rʰ[o/a]m	zim dom	S 孔詩 16 「由」「覃」の通仮の可能性あり
⑨		𢇛 覃	尋 *sələm *lʰom	*sə-ləm *N.rʰ[o/a]m	zim dom	G 成 34,
⑩		詞 辭	*sələ *sələ	*sə.lə *sə.lə	zi zi	S 緇 4, Q 皇 8
⑪		詞 始	*sələ *hləʔ	*sə.lə *[ləʔ]	zi syiX	S 孔詩 23, G 五 18, S 性 2(2), 8, Q 繫 4, 12, 16

⑫		向	*hlang	*ŋaŋ-s	syangH	Q 傳 1
		像	*səlang?	*s.[d]aŋ?	zjangX	
⑬		乘	*mləŋ ¹⁴⁴	—	zying	G 成 8, 7, 9, 36, G 尊 1, S 從乙
		勝	*hləŋ	*ləŋ/-s	sying	3, S 曹 33
⑭		述	*mlut	*Cə-lut	zywit	G 成 6, 17, 23, S 容 34, G 老甲
		遂	*səluts	*sə-lu[t]-s	zwijH	39, G 五 34

T-type の通仮が T-type に限られるように、L-type は L-type とのみ通仮可能であり、戦国竹簡では T-type と L-type が明確に区別される。これは諧声符の分類に基づき中古音の舌音（正歯音を一部含む）を上古の T-type と L-type に分類した Pullyblank (1962) の仮説が正しかったことを意味している。したがって以下のような仮説が成り立つ（例外的に T-type と L-type が通仮する例が数例見られる。詳細は野原（2009:79-81）参照）：

【仮説 1】 戦国竹簡において T-type は T-type とのみ通仮可能であり、L-type とは通仮しない。同様に L-type は L-type とのみ通仮可能であり、T-type と通仮しない。

【仮説 2】 T-type と L-type は少なくとも戦国時代中頃には未だ合流していない。

さらに【仮説 1】と【仮説 2】に基づき、以下の様な仮説を設けることができる：

【仮説 3】 諧声関係を欠くため T-type か L-type かを判断することのできない語に関して、戦国竹簡で T-type と通仮する語は T-type と判断することができ、L-type と通仮する語は L-type と判断することができる。

つまり次のように推定することが可能である：

A 字が戦国竹簡で T-type と通仮 → A 字も T-type

B 字が戦国竹簡で L-type と通仮 → B 字も L-type

以下、この【仮説 3】を基に、従来の研究では再構困難であった語に対して検討を加えていきたい。

¹⁴⁴ 「舌」「食」「船」等のような船母 zy-への preinitial *m-に関しては、TB のような親族関係にある言語（および隣接する言語）との比較によって再構される。Schuessler (2007:89-90) 等に詳しい。

3.2.4 由来不明の語

すべての語が脚韻字ではないのと同様に、すべての語が諧声関係を有するわけではない。たとえば「田」は中古音定母 *d-* であるため、その上古音は T-type (**dʰin*) と L-type (**lʰin*) の二つの可能性がある。そこで「田」の諧声関係を調べてみると、中古音定母 *d-* の「甸」があるのみであり、Type か L-type かを判断する基準である端母 *t-*・知母 *tr-*・章母 *tj-*・以母 *y-*・船母 *zy-* の語がない：

表 3.2.4.1 「田」の諧声関係

端	透	定	知	徹	澄	章	昌	禅	書	船	以	邪
<i>t-</i>	<i>th-</i>	<i>d-</i>	<i>tr-</i>	<i>thr-</i>	<i>dr-</i>	<i>tsy-</i>	<i>tsyh-</i>	<i>dzy-</i>	<i>sy-</i>	<i>zy-</i>	<i>y-</i>	<i>z-</i>
		田										
		甸										

このように諧声系列上に手掛かりが無い場合、従来の研究では中古音から投影して再構せざるを得ないため、「田」は中古音定母 *d-* から投影して **dʰin* のように再構される¹⁴⁵。

しかしすでに述べたとおり、戦国楚簡において T-type と L-type は互いに通仮しないため、「田」の通仮関係を調べることによってその由来を明らかにすることができる(【仮説 3】)。そこで楚簡に見える「田」の通仮例を見てみよう：

(1) 競(景)平王命王子木^𠂔(𠂔)城父^𠂔(過)繻(申)

繻

上博楚簡『平王與王子木』第 1 号簡

(1) では田声と思しき「繻」が中古音書母 *sy-* {申} を表している。「申」はその諧声系列上に中古音以母 *y-* の「𠂔」があるため、「申」は L-type と考えられる。したがって戦国竹簡において L-type 「申」と通仮関係にある「田」もまた【仮説 3】に基づき **lʰin* と再構される。

「田」と「申」の再構音は以下のとおりである：

¹⁴⁵ Bodman (1980:99) は TB との比較から「田」等を **ling* と再構する。

表 3.2.4.2 「田」と「申」の再構音

	OC		MC		Baxter and Sagart (2014)
田	*l'in	>	<i>den</i>	>	tián
申	*hlin	>	<i>syin</i>	>	shēn
					*[i[n]

「斂」: {奪}

次に「斂」と {奪} の通仮例を見てみよう。「奪」は中古音定母 *d-* であるため T-type と L-type に由来する可能性があるが、他の声母との諧声関係を欠くためどちらか判断することができない:

(2) 連尹襄老與之爭, 斂 (奪) 之少盂



清華簡『繫年』第 76 号簡







例 (2) は兌声字「斂」が {奪} を表している例である。「兌」の諧声系列上には「悦」「説」のような中古音以母 *y-* があることから、「兌」は上古の L-type に由来することが確実である。このように {奪} は戦国竹簡において L-type の兌声字「斂」と通仮しているため、【仮説 3】により L-type と推定される。よって「奪」を以下のように再構することができる(「斂」の字音が明確ではないため、諧声系列から類推して L-type 月部合口に相当する字音に再構してある):

表 3.2.4.3 「斂」と「奪」の再構音

	OC		MC		Baxter and Sagart (2014)
斂	*lʰot	>	dwat	>	duó —
奪	*lʰot	>	dwat	>	duó *Cə.lʰot

以下、同様に諧声関係を欠くためその由来が明らかでない語の例を挙げる。網掛けがある語が諧声関係を欠くため由来不明の語である:

表 3.2.4.4 由来不明の語の再構

図版	例	OC	BS2014	MC	出典
① 	煮	者 *tAʔ	*tAʔ	<i>tsyaeX</i>	S 緇 12,
	圖	*dʰa	*[d]ʰa	<i>du</i>	
② 	斂	*lʰots	—	<i>dwat</i>	S 緇 19, Q 繫 76
	奪	*lʰot	*Cə.lʰot	<i>dwat</i>	
③ 	迴	*lʰongs	—	<i>duwngH</i>	S 容 25,26,27, G 語一 102
	通	*hlʰong	*lʰoŋ	<i>thuwnɡ</i>	
④ 	迴	*lʰongs	—	<i>duwngH</i>	G 語三 41
	踊	*long	*loŋ	<i>yowngX</i>	
⑤ 	道	*lʰus	*lʰuʔ-s	<i>dawH</i>	S 容 44
	蹈	*lʰus	—	<i>dawH</i>	
⑥ 	𪔐	申 *hlin	*li[n]	<i>syin</i>	S 子羔 11
	吞 ¹⁴⁶	*hlʰin	—	<i>then</i>	
⑦ 	𪔐	兆 *lrawʔ	*lr[a]w	<i>drjewX</i>	S 容 6, G 老甲 1,31
	盜	*lʰaws	—	<i>dawH</i>	
⑧ 	𪔐	*lAk	—	<i>yek</i>	Q 耆 1
	𪔐	*hlAK	*[q ^h](r)Ak	<i>syek</i>	
⑨ 	𪔐	申 *hlin	*li[n]	<i>syin</i>	S 緇 20, 10, G 緇 19, 39
	陳	*lirin	*liri[n]	<i>drin</i>	
⑩ 	𪔐	土 *thʰaʔ	*thʰaʔ	<i>thuX</i>	S 武王 1
	𪔐	*tʰaʔ	*tʰaʔ	<i>tuX</i>	

このように【仮説 3】に基づき、従来の研究では諧声関係を欠くために T-type か L-type かを判断することができなかった語を再構することが可能となる。

3.2.5 小論

上述のとおり、Pulleyblank によって分類された T-type と L-type 仮説は諧声関係の分布に基づき導き出された仮説であり、その音価は親族関係にある言語との比較や上古音体系内部の根拠に基づき再構されたものである。本稿で示したとおり、戦国竹簡において T-type は T-type とのみ通仮関係にあり、L-type とは関係しない。また L-type は L-type とのみ通仮

¹⁴⁶ ここでは『説文』で天声とされることと先韻への変化を想定し *hlʰin と再構する。

関係にあり、T-type と交流しない。これにより Pulleyblank の諧声系列に基づく L-type 仮説が正しいことが明らかとなった。そこで本稿では下記のように仮説を設けた：

【仮説 1】 戦国楚簡において T-type は T-type とのみ通仮可能であり、L-type とは通仮しない。同様に L-type は L-type とのみ通仮可能であり、T-type と通仮しない。

【仮説 2】 T-type と L-type は少なくとも戦国時代中頃には未だ合流していない。

【仮説 3】 諧声関係を欠くため T-type か L-type かを判断することのできない語に関して、戦国竹簡で T-type と通仮する語は T-type と判断でき、L-type と通仮する語は L-type と推定することができる。

これらの仮説、特に【仮説 3】を用いることで由来不明の語（復元強度の低い語）を再構することが可能となった。このように戦国竹簡の通仮は従来の再構音の確度を高めることが可能であり、これが出土資料の利点一つである。

3.3 牙音 K と喉音 H（軟口蓋破裂音・摩擦音と口蓋垂破裂音）、鼻音 NG

牙音と喉音に関しては、研究者によって見解が異なる。これは諧声・通仮の原則に対する考え方の違いに起因すると思われる。まずは以下の諧声分布を見てもらいたい：

表 3.3.1 牙喉音の諧声関係（古屋（2008:217））

	見 <i>k-</i>	溪 <i>kh-</i>	群 <i>g-</i>	疑 <i>ng-</i>	影 <i>ʔ-</i>	曉 <i>x-</i>	匣 <i>h-</i>	于 <i>hj-</i>
①	經	輕	羶	姪	莖	脛	脛	
②		誇			汗	吁	鄠	于

「𠂔」を声符とする①は破裂音の見母 *k-*、溪母 *kh-*、群母 *g-*、影母 *ʔ-* から摩擦音の曉母 *x-*、匣母 *h-* まで諧声関係を有す。②の于声も「𠂔」と同様に破裂音の溪母 *kh-*、影母 *ʔ-* だけでなく摩擦音の曉母 *x-*、匣母 *h-* まで諧声関係を有す。このような諧声関係の分布に対して二つの見方がある：

- ① 破裂音と摩擦音の諧声関係を認める
- ② 破裂音と摩擦音の諧声関係を認めない

歴史的に見ても、多くの研究者が①「破裂音と摩擦音の諧声関係を認める」という立場から牙喉音を扱っている。たとえば李方桂（1971:8）の諧声原則には次のようにある：

（一）上古發音部位相同的塞音可以互諧。

（a）舌根塞音可以互諧聲，也有與喉音（影及曉）互諧的例子，不常與鼻音（疑）諧。

李方桂（1971）に拠れば、調音点を同じくする破裂音であれば互いに通仮可能であり、舌根音に関しては喉音（中古音影母ʔ-と曉母x-）と通用可能ということである。したがって殆どの上古音研究者がこの諧声原則に基づき中古音の破裂音（見母k-、溪母kh-、群母g-、影母ʔ-）と摩擦音の曉母x-を中古音から投影して、*k-、*kh-、*g-、*ʔ-、*x-のように再構している。念のため主な研究者の再構音を確認しておこう（匣母h-については後述する）：

表 3.3.2 見母、溪母、群母、影母、曉母

	見母 k-	溪母 kh-	群母 g-	影母 ʔ-	曉母 x-
Karlgren	*k-	*kh-	*gh-	*ʔ-	*x-
王力	*k-	*kh-	*g ¹⁴⁷	*ʔ-	*x-
董同龢	*k-	*kh-	*g-	*ʔ-	*x-
李方桂	*k-	*kh-	*g-	*ʔ-	*x-
Baxter ¹⁴⁸	*k-	*kh-	*g-	*ʔ-	*x-

以上の例は中古音開口の再構音であるから、中古音合口についても述べて置かなければならない。中古音合口に対応する上古音には 2 種の合口的要素が用意されており、一つは円唇性を帯びた軟口蓋音 KW (HW)、もう一つが円唇母音*-on と*-un である。たとえば以下のとおり（K で牙喉音を代表する）：

¹⁴⁷ 王力（1957/1988）の段階では*gh-を再構する

¹⁴⁸ Baxter（1992）。

開口

*Kan > Kan

合口

*K^wan > Kuan

*K^wen > Kuen

*Kon > Kuan

中古音影母 ʔ -合口字に対応する上古音には* ʔw- (* qw-)、中古音曉母 x -には* xw- (* qhw-) のように円唇性を帯びた摩擦音（口蓋垂破裂音）が再構される。

次に②「破裂音と摩擦音の諧声関係を認めない」という見解について見てみよう。潘悟云（1997:10-24）は、破裂音は破裂音とのみ諧声・通仮可能であり、摩擦音とは諧声関係を有しないとの見解を示し¹⁴⁹、摩擦音を含む影組に口蓋垂音を再構する：

表 3.3.3 潘悟云（1997）「喉音考」

OC		MC
*q-	> ʔ-	影母
*qh-	> x-	曉母
*g- (Type-B)	> gi-	群母
*g- (Type-A)	> h-	匣母
*g- (Type-A)	> h-	匣母
*g- (Type-B)	> hj-	于母

口蓋垂音という音価は親族関係にある言語との比較¹⁵⁰、『漢書』等にみえる漢訳語から得られた結果である。Sagart and Baxter (2009)、Baxter and Sagart (2014) も潘悟云（1997）の口蓋垂音仮説に一部修正を加えて採用している。以下、簡単に修正点をまとめる。

修正点①：

たとえば潘悟云（1997）は中古音影母 ʔ -はみな上古の*q-に由来するとしているが、Baxter

¹⁴⁹ 潘悟云（1997:21）「到目前为止，几乎所有的音韵学家都把晓母的上古音拟作擦音*h-或*x-。如果它是一个擦音的话，那么它与见母的关系就相当于心母与端母的关系： $\text{h}:\text{k}=\text{s}:\text{t}$ 。但是在谐声关系上，两者却大相径庭。心母与端母几乎不谐声，而晓母与见母的谐声例子可以举出很多。」

¹⁵⁰ 潘悟云（1997）はタイ・カダイ語（Kra-dai languages）をシナ・チベット語族に帰属させている。これは Li (1936-37) 以降の見解を踏襲するものである。

and Sagart (2014:44) は中古音影母ʔ-の語の中には上古*q-だけでなく*ʔ-にも由来する語もあるとする。

また潘悟云 (1997) は中古音の牙音と喉音の諧声関係を説明するために喉音に口蓋垂音を認め、軟口蓋破裂音と口蓋垂破裂音の調音方法の一致によりこのような諧声関係が成り立つと考えるが、Sagart and Baxter (2009)、Baxter and Sagart (2014) はそのような諧声関係があるのは、そもそも牙音の一部が口蓋垂音に由来するからであると考えている¹⁵¹。

たとえば「景」は「影」の声符であるが、「景」は中古音見母 *k-* であり、「影」は影母ʔ- である。この諧声関係に対して、従来の研究者は「景」を**k-*と再構し、「影」を*ʔ-と再構するに留まっていた。潘悟云 (1997) は「景」を**k-*とし、「影」を**q-*と再構することで調音方法が一致するため通用可能であると考えている。Baxter and Sagart (2014) は寧ろ「景」と「影」が語根を同じくするため諧声関係が成り立つとして、「景」を**C.q-*と再構し¹⁵²、「影」を**q-*と再構する。このような見解の違いは牙喉音の諧声原則に対する姿勢の違いを反映していると考えられる。これを大まかにまとめると以下のようになる：

表 3.3.4 「景」と「影」

	景	：	影
先行研究	<i>*k-</i>	：	<i>*ʔ-</i> 牙喉音であれば諧声可能
潘悟云	<i>*k-</i>	：	<i>*q-</i> 調音方法（破裂音）が一致しているから諧声可能
Baxter and Sagart	<i>*C.q-</i>	：	<i>*q-</i> 語根の声母が口蓋垂音で一致しているから諧声可能

修正点②：

潘悟云 (1997) の体系において、**g-* (Type-B) は中古音于母 *hj-* へ変化する語に再構される。中古音于母 *hj-* はその殆どが合口であるが、潘悟云は口蓋垂音**g-* の調音点が後ろ寄りであることによって円唇性が生じ、中古で合口になると推定している¹⁵³。つまりもともと開口的であったが、後に合口化したと考えているようである。中古音于母 *hj-* には少数ながら開口もあるが、これは何らかの理由で合口化しなかったとする。たとえば円唇性を帯びた韻尾を有す語—「炎」、「燁」—は韻尾の**-m*、**-p* による異化作用 (dissimilation) により、介音-*w-* が生じなかったとする。また語気助詞 (「焉」、「矣」) は保守的であり、開口のまま

¹⁵¹ Baxter and Sagart (2014:45) “the Middle Chinese velars are the regular reflexes of Old Chinese uvulars with certain preinitials.”

¹⁵² Sagart and Baxter (2009) の時点では**Cə.q-* > *k-* というように loosely attached preinitial として再構していたが後に**C.q-* に改める。

¹⁵³ 潘悟云 (1997:20) 「前元音往往不圓唇，后元音往往圓唇，这是一个语言的普遍现象。辅音也是如此，后舌位的辅音有圓唇化的趋势。所以拉丁语的**q-*后总是带着 *u*。云母**g*后面产生一个过度音 *w*，变成合口字，也是这个道理。」

であったと考えている¹⁵⁴。これに対して、Baxter and Sagart (2014) は于母 *hj-* に **g^w*- を再構し、**g-* については牙喉音と諧声関係のある中古音以母 *y-* の語に再構する。中古音以母 *y-* の「羊声字」の例を見てみよう：

表 3.3.5 「羊声」

羊	* <i>g(r)aŋ</i> > <i>yang</i> > <i>yáng</i>	‘sheep’	PTB: * <i>yaŋ</i> ~ * <i>g-yaŋ</i> ‘sheep / yak’ ¹⁵⁵
洋	* <i>g(r)aŋ</i> > <i>yang</i> > <i>yáng</i>	‘a great expanse of water’	WT: <i>yangs-pa</i> ‘wide, broad, large’
祥	* <i>s-qaŋ</i> > <i>zjang</i> > <i>xiáng</i>	‘auspicious’	WT: <i>g.yang</i> ‘happiness, blessing’
羌	* <i>C.q^haŋ</i> > <i>khjang</i> > <i>qiāng</i>	‘Western tribes’	
姜	* <i>C.qaŋ</i> > <i>kjang</i> > <i>jāng</i>	‘a family name’	

Sagart and Baxter (2009:231) ¹⁵⁶

修正点③：

さらに Baxter and Sagart (2014:45) は中古音疑母 *ng-* が上古の **ng-* だけでなく、**N-* あるいは **m-* が先行する口蓋垂音—たとえば **N.q-*—にも由来すると考えており、「五」を **C.ŋaʔ* と再構する一方で、「午」を **[m].q^haʔ* と再構する。

冒頭で述べたとおり、李方桂 (1971) 等の先行研究、潘悟云 (1997)、Baxter and Sagart (2014) は牙喉音の諧声原則に対してそれぞれ異なる態度を示している。この見解の差によって、牙喉音の音価再構に差異が生じているため極めて重要である。

ここで本稿の立場をある程度明確にしておきたい。まず本稿では口蓋垂音を認める。ただし Baxter and Sagart (2014) ほど厳格な諧声原則を設けていない。現時点では口蓋垂破裂音と軟口蓋破裂音は調音点が異なるけれども、基本的に諧声・通仮可能であると考えている。上述の「景」「影」については「景」に **k-*、「影」に **q-* を再構する。下表が本稿の喉音に関する再構音である：

¹⁵⁴ これは李方桂 (1971:13-14) と真逆の考え方である。李方桂は本来合口であった「炎」や「燁」は円唇韻尾 **-m*、**-p* の影響に拠って開口へと変化したと考え、語気助詞 (「焉」、「矣」) についても例外的に合口性を失ったと考える。李方桂案のほうが自然さ (naturalness) という点では優れていると言えよう。

¹⁵⁵ Matisoff (2003:523)。

¹⁵⁶ 「羌」「姜」等の上古音価に関しては、Baxter and Sagart (2014) に基づき、筆者が修正を加えている。


表 3.3.6 喉音の再構音

MC		OC	
影母 ʔ-	<	*q ^(ʕ) -	Type-A Type-B
影母 ʔ-	<	*ʔ ^(ʕ) -	
曉母 x-	<	*qh ^(ʕ) -	Type-A、Type-B
匣母 1 類 h-	<	*g ^ʕ -	Type-A
匣母 2 類 h-	<	*g ^ʕ -	Type-A
以母 y-	<	*g-	Type-B
于母 hj(w)-	<	*gw-	Type-B

匣母 1 類とは、いわゆる見組 K と諧声関係を有する匣母である¹⁵⁷。たとえば中古音匣母 *h-*「亥」と見母 *k-*「該」のような諧声関係が見える時、匣母 *h-*「亥」は上古の **g^ʕ-* に由来すると推定される。匣母 1 類に関しては、§ 3.3.2 「牙音 K : 匣母 1 類」にて詳述する。

3.3.1 牙音 K : 牙音 K

ここでは確実に破裂音 K と破裂音 K の通仮と思われる例を挙げる。§ 3.1 「唇音 P (両唇破裂音)、鼻音 M」で述べたとおり、諧声関係や通仮からは声母の有声性等については不明であるため、中古音から投影するほかない。たとえば上博楚簡『緇衣』第 14 号簡では中古音見母 *k-* の「金」を声符に持つ「𦣻」が、群母 *g-* 「琴」を表す：

(1) 「𠂔 (以) 𦣻 (琴) 𠂔 (瑟) 之斂 (悦)」  上博楚簡『緇衣』第 14 号簡


『説文』で「金」は今声とされるため「𦣻」と「琴」の通仮は自然であるが、それぞれ見母 *k-* と群母 *g-* であり声母の清濁が異なる。


表 3.3.1.1 「金」「琴」の再構音

	OC		MC		Baxter and Sagart (2014)	
金	*krəm	>	<i>kim</i>	>	jīn	*k(r)əm
琴	*grəm	>	<i>gim</i>	>	qín	*[C.g](r)əm

¹⁵⁷ 邵榮芬 (1991:118)。

次の例は中古音群母 *g*-「董」の通仮例である。郭店楚簡『老子』に以下のような通用例が見られる：

- (2) 天道員員，各復其董（根）  郭店楚簡『老子』甲本第 24 号簡
*今本『老子』第十六章「各復歸其根」

- (3) 骨溺（弱）董（筋）柔  郭店楚簡『老子』甲本第 33 号簡
*今本『老子』第五十五章「骨弱筋柔」

(2) では中古音群母 *g*-「董」が見母 *k*-{根}を表し、(3) では見母 *k*-{筋}を表す。「董」「根」「筋」の再構音は以下のとおり：

表 3.3.1.2 「董」「根」「筋」の再構音

	OC		MC		Baxter and Sagart (2014)	
董	*gʷrənʔ	>	ginX	>	jǐn	—
根	*kʰən	>	kon	>	gēn	*[k]ʰə[r]
筋	*kən	>	kj+n	>	jīn	*C.[k]ə[n]

もう一つ例を挙げておこう。上博楚簡『緇衣』第 6 号簡では以下のような通仮例が見える：

- (4) 晉各（冬）耆（祁）寒  上博楚簡『緇衣』第 6 号簡

通仮例 (4) では中古音群母 *g*-「耆」が同じく群母 *g*-の{祁}を表している。当該箇所は今本『尚書』「君牙篇」の「冬祁寒」に対応しており、「耆」が{祁}を表すことは確実である。「耆」と「祁」の再構音は以下のとおり：

表 3.3.1.3 「耆」「祁」の再構音

	OC		MC		Baxter and Sagart (2014)	
耆	*grij	>	<i>gij</i>	>	qí	*[g]rij
祁	*grij	>	<i>gij</i>	>	qí	*[g]rij

牙音 K と牙音 K の通用に関しては特筆すべきことはない。以下、牙音 K の通仮例を幾つか挙げる：

表 3.3.1.4 牙音 K の通仮

	図版	例	OC	BS2014	MC	出典
①		其 己	*gə *krəʔ	*gə *k(r)əʔ	gi kiX	S 孔詩 9, S 性 6
②		東 簡	*kʰranʔ *kʰrenʔ	*kʰr[a]nʔ *kʰre[n]ʔ	keanX keanX	G 五 22, 39, G 性 45, 66, G 六 32
③		舊 久	*gwəs *kwəʔ	*N-kʷəʔ-s *[k]ʷəʔ	giuwH kiuwX	G 老甲 37, G 老乙 1, G 性 26
④		級 急	*kəp *kəp	*k(r)əp *[k](r)əp	kip kip	G 語四 5
⑤		競 景	*grangs *krangʔ	*m-kraŋʔ-s *C.qraŋʔ	gjaengH kjaengX	S 競 1
⑥		期 忌	*gə *gəs	*[g](r)ə *m-k(r)ək-s	gi giH	G 老甲 30
⑦		寡 顧	*kwʰraʔ *kwʰas	*[k]ʷaʔ *[C.k]ʷraʔ	kwaex kuH	S 緇 12, 17, 孔詩 9, S 天乙 6

例①では「其」が{己}を表す。楚簡中で{其}を表す場合、簡略字の「𠂔」が用いられるため、「其」と「𠂔」の表記が弁別的に用いられているようである。例⑤は「競公」という表記が{景公}を表す通仮例である。Baxter and Sagart (2014) は「景」が影母ʔ-「影」と諧声関係にあるため、中古音見母 *k*-である「景」にも口蓋垂音を考える点に注意されたい。仮にそれが正しいとした場合、「競」にも同じように口蓋垂音を考えなければならない。本稿では軟口蓋破裂音と口蓋垂破裂音が通用可能と考えているため、「影」には口蓋垂音を再

構するが、「景」と「競」には軟口蓋破裂音 K を再構する：



表 3.3.1.5 「競」「景」「影」の再構音

	OC	MC	Baxter and Sagart (2014)
競	*grangs	> <i>gjaenH</i>	> jìng
景	*krangʔ	> <i>kjaengX</i>	> jǐng
影	*qraŋʔ	> <i>ʔjaengX</i>	> yǐng

3.3.1.1 「仇讎」の上古音再構



ここでは「仇讎」という語の上古音再構を試みたい。「仇讎」という語は清華簡『耆夜』第 6 号簡に見える：

清華簡『耆夜』第 5 号簡～第 6 号簡：

(1) 𠂔 (克) 𠂔 (變)  𠂔 (仇)  𠂔 (讎), 嘉𠂔 (爵) 速𠂔 (飲), 後𠂔 (爵) 乃復 (復)。

〔仇敵をよく協和させた。嘉爵を速飲せよ、後爵はまた返ってくる。〕

「𠂔」についての詳しいことはよく分からないが、戦国竹簡において「仇」や「速」のような語と通仮関係にあることから、見母幽部に相当する字音 (*Ku) に読まれていたことは確実である。二つ例を挙げておこう：

- (2) 執我𠂔 (仇) 𠂔 (仇)  郭店楚簡『緇衣』第 19 号簡
- (3) 君子𠂔 (好) 𠂔 (速)  上博楚簡『緇衣』第 22 号簡

(2) の郭店楚簡『緇衣』第 19 号簡の「執我𠂔𠂔」に対応する今本『礼記』緇衣篇では「執我仇仇」とあるため、「𠂔」が {仇} を表していると考えられる。また (3) の「君子𠂔 (好) 𠂔 (速)」に対応する今本『詩経』周南・關雎では「君子好逑」とあり、「𠂔」と「逑」が通用関係にある。

いずれにせよ {仇} {述} を表す「𢇛」や「𢇛」が見母幽部に相当する字音を有していたことは間違いない。よって本稿では以下のように再構する¹⁵⁸：

表 3.3.1.1.1 「𢇛」「仇」の再構音

	OC	MC		Baxter and Sagart (2014)
𢇛	*gu	> —	> —	—
仇、述	*gu	> gjuw	> qiú	*g(r)u

次に「𢇛」の上古音について検討を加えたい。まずは「𢇛」の諧声関係を見てみよう：

表 3.3.1.1.2 「𢇛」の諧声分布

端	透	定	知	徹	澄	章	昌	禪	書	船	邪	以
t-	th-	d-	tr-	trh-	dr-	tsy-	tshy-	dzy-	sy-	zy-	zj-	y-
							𢇛	𢇛				

このように「𢇛」の諧声系列上には禪母 *dzy-*があるため T-type である可能性が高い。実際に、Karlgren (1954) や李方桂 (1971) も舌音 T-type の声母を再構する¹⁵⁹。これに対して Baxter (1992) や鄭張尚芳 (2003) は「仇」だけでなく「𢇛」も牙喉音系声母に由来すると考えており、Baxter (1992) は *Gju と再構し、鄭張尚芳 (2003) は *gju と再構する。Baxter (1992) の *G-は例外的に第一口蓋音化を経る語に再構される¹⁶⁰。これは恐らく『説文』に「仇，𢇛也。从人九聲」というような恰も声訓と思しき説解があるからであろう。仮に「仇」だけでなく、「𢇛」も牙喉音系声母に由来するとなると、「仇𢇛」は双声疊韻語になる。いま Baxter (1992) の音価を借りると、「仇𢇛」は *grju *Gju となる¹⁶¹。

例 (1) で挙げたとおり、清華簡『耆夜』第 6 号簡では {𢇛} が𢇛 (壽) 声字の「𢇛」で表わされている。そこで「𢇛 (壽)」の諧声分布を確認しておきたい：

¹⁵⁸ 「𢇛」の声母の清濁や声調に関しては不明であるため、「仇」「述」と同じ音価にしておく。

¹⁵⁹ 李方桂 (1971) は *djəgwX と再構する。


¹⁶⁰ 「𢇛」の主母音は後舌母音 *-u- であり、前舌母音 *-i-、*-e- の前で口蓋音化が生じるという仮説に反するため例外的とされる。

¹⁶¹ Baxter (1992) の段階では三等韻に *-j- を認めている。

表 3.3.1.1.3 𣵀（壽）声字の諧声系列

端	透	定	知	徹	澄	章	昌	禪	書	船	邪	以
<i>t-</i>	<i>th-</i>	<i>d-</i>	<i>tr-</i>	<i>trh-</i>	<i>dr-</i>	<i>tsy-</i>	<i>tshy-</i>	<i>dzy-</i>	<i>sy-</i>	<i>zy-</i>	<i>zj-</i>	<i>y-</i>
禱		濤	壽		壽		醜	壽				

このように𣵀（壽）声字は端母 *t-*「禱」、知母 *tr-*「壽」と諧声関係を有すことから、舌音 T-type と見て間違いないだろう。したがって戦国竹簡において T-type の𣵀（壽）声字と通仮関係にある{𣵀}も舌音 T-type であると推定される（【仮説 3】）。

戦国竹簡における𣵀（壽）声字の振る舞いも確認しておこう。同じ清華簡『耆夜』において、「𣵀」は中古音禪母 *dzy-* {酬}を表す¹⁶²。「酬」は中古音章母 *tsy-*の「州」を声符に持つことから、舌音 T-type と見なされる。【仮説 3】に基づき、T-type「酬」と通用関係にある「𣵀」およびそ𣵀（壽）声字が T-type に由来することは確実である。

このように「仇𣵀」は牙喉音系声母の双声疊韻語ではなく、疊韻語である。「仇𣵀」の再構音は以下のとおりである：

表 3.3.1.1.4 「仇」「𣵀」「𣵀」「酬」の再構音

	OC		MC		Baxter and Sagart (2014)	
仇	*gu	>	<i>giuw</i>	>	qiú	*[g](r)u
𪚩	*du	>	<i>dzyuw</i>	>	chóu	*[d]u
壽	*duʔ/s	>	<i>dzyuwX/H</i>	>	shòu	*[N-t]uʔ/ʔ-s
酬	*du	>	<i>dzyuw</i>	>	chóu	—

3.3.1.2 牙音 K：牙音 K一合口

すでに述べたとおり、中古音合口は上古音の円唇軟口蓋音（labio-velars, labio-laryngeals）と円唇母音（rounded vowels）の*-on、*-un に由来すると考えられている。まず前者の円唇軟口蓋破裂音・摩擦音 KW であるが、これは中古音の合口字が唇音か牙喉音声母の後にしか現れないという分布に基づき再構されたものである。たとえば Pulleyblank (1962:96) “It is only after velar and laryngeal initials that one can find a systematic contrast between syllables with and without -w-.”とし、李方桂（1971）「切韻系統裏有許多合口韻母，只見於唇音及舌根音聲母，在別的聲母後絕對不見或極少見，…我們可說合口介音多半是受唇音及圓唇舌根音聲母

¹⁶² 「酬」と「壽」を声符に持つ「壽」は異体字の関係にある。

的影響而起的。唇音の開合口字在切韻時期已不能分辨清楚，在上古時期也沒分開合的必要，只有舌根音の開合口應當區別。…就大體而言可以立一套圓唇舌根音*kw-, *khw-, *gw-, *ngw-, *hw-, 及*ʔw-」と述べている。

このように合口韻母は唇音および牙喉音の後という環境にのみ現れるが、一部の韻ではすべての声母の後に合口韻母が現れる。たとえば「歌（戈）、寒（桓）、哈（灰）、泰、祭、山、刪、仙、痕（魂）等」があり、これらの韻の韻尾はみな上古の*-n (-t)、*-jに相当する。この場合、円唇母音*-on、*-un が再構され、円唇母音が中古音までに二重母音化（diphthongization）したと推定される。以下、円唇軟口蓋音と円唇母音の例を挙げる：

表 3.3.1.2.1 元部 KW

管	guǎn	<	kwanX	<	*kw ^h anʔ
寬	kuān	<	kwhan	<	*kwhan

「管」は中古音合口字（kwanX）であるため、上古の円唇軟口蓋音*kw-か、円唇母音*-onのどちらかに由来すると考えられる。そこで『詩経』を見てみると、「管」は開口の「瘳」*tʰan、「然」*nan、「諫」*kʰrans等と押韻するため、「管」も*-anであったと推定される。してみると「管」の中古音の合口性は円唇軟口蓋音の*kw-に由来すると考えられる。

「寬」も中古音合口字であるため、*KW と*-onの可能性があるが、『詩経』「衛風・考槃」において、*-anの「澗」*kʰrans、「言」*ngan等と押韻するため、円唇母音*-onであったとは考え難いため円唇軟口蓋音の*KW が考えられる。

次に円唇母音の例を見てみよう：

表 3.3.1.2.2 元部*-on

短	duǎn	<	twanX	<	*tʰonʔ
貫	guàn	<	kwanH	<	*kons





「短」は舌音声母（端母 t-）であるから自動的に円唇母音*-on が再構される。これに対して「貫」は牙喉音声母であるから円唇軟口蓋音*KW と円唇母音*-on の二つの可能性がある。そこで『詩経』を見てみると、「貫」は中古音合口の「選」*sonʔ、「亂」*rʰons、「變」*pronsと押韻している（「齊風・載驅」）。「變」の声母は両唇音*p-であるから開合はあまり関係ないが、「選」と「亂」の声母は齒茎音（心母 s-と来母 l-）であるから、自動的に上古の円唇母音*-on に遡ると推定される。したがってこれら*-on と押韻する「貫」も円唇母音*-on に

由来すると考えられる。

このように脚韻字を整理することで、中古音合口の由来を明らかにすることが可能である。ところが一部の語は押韻もせず諧声関係をも欠くため、*KW に由来するのか、それとも円唇母音*-on に由来する合口字なのか判断できないこともある。その場合、出土資料の通仮例が根拠とされることもある（下表例②の「顧」は多くの研究者が開口と考えていた）。

以下は中古音合口字の戦国竹簡における通仮例の一例である：

表 3.3.1.2.3 牙音合口

	図版		再構音	BS2014	MC	例
①		關	*kʰrons	*kʰro[n]-s	<i>kwaen</i>	S 孔詩 10,11
		關	*kʰron	*[k] ʰro[n]	<i>kwaenH</i>	
②		寡	*kwʰraʔ	*[k]ʷaʔ	<i>kwaex</i>	S 緇 12, 17, 孔詩 9
		顧	*kwʰas	*[C.k]ʷraʔ	<i>kuH</i>	
③		卷	*konʔ	*[k](r)o[n]ʔ	<i>kjwenX</i>	S 孔詩 4, 29
		患	*gʰrons	*gʰrons	<i>hwaenH</i>	
④		矣	*konʔ	*[k](r)o[n]ʔ	<i>kjwenX</i>	G 窮 6
		管 ¹⁶³	*kʰonʔ	*[k]ʰo[n]ʔ / *kwa[n]ʔ	<i>hwaenH</i>	

3.3.2 牙音 K：匣母 1 類

中古音群母 *g*-と匣母 *h*-の関係についても述べて置かなければならない。Karlgren (1923) は群母 *g*-と匣母 *h*-が相補分布 (the complementary distribution) を成しているを見て、群母と匣母に *gh-を再構し、中古音于母 *hj*-については *g-に由来すると考えている。この Karlgren の見解に対して、匣母 *h*-と于母 *hj*-を一つと見なす見解もある (たとえば曾運乾 (1927/1996)、董同龢 (1944) 等)。このように群母 *g*-、匣母 *h*-、于母 *hj* の関係性をどのように位置づけるかについては研究者によって異なる。

さらに問題を複雑化させているのが、匣母 *h*-と見組 K との諧声関係である。匣母 *h*-が見組 K と諧声関係を有す例は大量にあり、曾運乾 (1927/1996) や董同龢 (1944) 等のように匣母 *h*-と于母 *hj*-の関係性のみを認める場合、匣母 *h*-と見組の関係性をうまく説明することができない。匣母再構の難しさについて、潘悟云 (1997:17-18) は次のように述べている：

中古的群母和云母都只有三等，匣母则只有一二四等，它们之间的配合安排是一个令人烦恼

¹⁶³ 「矣寺虞」が {管夷吾} の {管} を表す。「管叔」を表す場合、清華簡『耆夜』第 1 号簡では「官」で {管} を表す。

筋的事。如果认为群母与匣母互补，云母就只有三等，没有一二四等；反过来，如果认为匣，云互补，那么群母就只有三等，一二四等无着落。

つまり匣母 *h*- が群母 *g*- と相補分布を為しているとみなすと、于母 *hj*- は三等韻のみになってしまうし、反対に匣母 *h*- と于母 *hj*- が相補分布を為しているとみなすと、群母 *g*- は三等韻のみになってしまう。ここで主な研究者の見解を挙げておこう（邵榮芬（1991:118））：

表 3.3.2.1 主な研究者の再構音—匣母—

イ)	Karlgren	匣母 <i>h</i> - と群母 <i>g</i> - を同源とし（* <i>gh</i> -）、于母 <i>hj</i> - を破裂音 * <i>g</i> - と再構する
ロ)	曾運乾、董同龢	匣母 <i>h</i> - と于母 <i>hj</i> - を同源とする（* <i>ɣ</i> -）
ハ)	周法高 ¹⁶⁴	匣母 <i>h</i> - を群母 <i>g</i> - と同源とし（* <i>g</i> -）、于母 <i>hj</i> - は中古音と同じ（* <i>ɣ</i> -）とする
二)	李方桂	匣母 <i>h</i> -、于母 <i>hj</i> -、群母 <i>g</i> - の 3 声母を一つにする（開口 * <i>g</i> -、合口 * <i>gw</i> -）
ホ)	陳新雄 ¹⁶⁵	匣母 <i>h</i> -、于母 <i>hj</i> -、群母 <i>g</i> - の 3 声母を一つにする（* <i>ɣ</i> -）
ヘ)	羅常培 ¹⁶⁶ Pulleyblank 邵榮芬	匣母 <i>h</i> - を 2 種に分類する。見母 <i>k</i> -、溪母 <i>kh</i> - と諧声関係にある匣母 <i>h</i> - を群母 <i>g</i> - と同源とし（* <i>g</i> -）、曉母 <i>x</i> - と諧声関係ある匣母 <i>h</i> - を于母 <i>hj</i> - と同源とする（* <i>ɣ</i> -あるいは* <i>ɦ</i> -）

本稿では、ヘ) の案—すなわち匣母を 2 種に分類する見解を採用している。たとえば邵榮芬（1991:119）は以下の様な条件を示している：

1. 凡与 K 类（包括 *kh*, *g* 下同）有谐声关系的归为匣 1 类，假定与群母相同，读 *g*。
2. 凡与 K 类没有谐声关系的归为匣 2 类，假定与云母相同，读 *ɣ*。
3. 凡与 K 类及云母都有谐声关系的，其归类以造成较少例外为推测。

このように K 類（見母 *k*-、溪母 *kh*-、群母 *g*-）と諧声関係のある匣母を匣母 1 類として、**g*- を再構し、K 類と諧声関係のない匣母を匣母 2 類として、于母 *hj*- と同じ音価の **ɣ*- を再構するというのが、邵榮芬（1991）の見解である。幾つか例を挙げておこう。

「可」：{何}

たとえば中古音匣母 *h*- の「何」の諧声関係は次のとおりである：

¹⁶⁴ 周法高（1984）。

¹⁶⁵ 陳新雄（1999）。

¹⁶⁶ 羅常培（1937/1963）のこの見解は李方桂との私信に基づくらしい（羅常培（1937/1963:120））。

表 3.3.2.2 「何」の諧声関係

見 <i>k-</i>	溪 <i>kh-</i>	群 <i>g-</i>	疑 <i>ng-</i>	影 <i>ʔ-</i>	曉 <i>x-</i>	匣 <i>h-</i>	于 <i>hj-</i>
𠂔	𠂔			阿	訶	何	

匣母 *h-*「何」は見母 *k-*「𠂔」や溪母 *kh-*「𠂔」と諧声関係を有す。したがって「何」は匣母 1 類と見なされ、**g-*が再構される。出土資料の例も見ておこう：

(1) □□女(如)此可(何)



上博楚簡『孔子詩論』第 27 号簡

(2) 子曰：可言不可行



上博楚簡『緇衣』第 16 号簡

(1) では中古音溪母 *kh-*「𠂔」という表記で匣母 *h-*の{何}を表しており、(2) では「可」という表記で溪母 *kh-*の{可}を表している。このように戦国竹簡では「可」という表記で{可}を表すこともあれば、{何}を表すこともあるため、当時の人々は文脈に依存して読み分けていたと考えるほかない。いずれにせよ溪母 *kh-*と諧声・通仮関係にある「何」は匣母 1 類**g-*に由来すると見なして良い。「何」と「可」の再構音は以下のとおり：

表 3.3.2.3 「何」「可」「阿」の再構音

	OC		MC		Baxter and Sagart (2014)	
何	*g ^ʰ aj	>	ha	>	hé	*[g] ^ʰ aj
可	*kh ^ʰ ajʔ	>	khaX	>	kě	*[k]h ^ʰ a[j]ʔ
阿	*q ^ʰ aj	>	ʔa	>	ā, ē	*q ^ʰ a[j]／*ʔ ^ʰ a (<*q ^ʰ aj)

「可」と「何」は声符を同じくするため、音韻研究のための理想的な通仮例ではない。そこで声符の異なる字の通仮例を見てみよう：

「句」：{后} {後}

「句」が単独で現れる場合、{苟}を表すことが多い：

(1) 子曰：句(苟)又(有)車



上博楚簡『緇衣』第 20 号簡

例（１）は中古音見母 *k*-の「句」が同じ見母 *k*-の {苟} を表す例である。次に「句」が匣母 *h*- {后} を表す例を見てみよう：

（２）句（后）稷之見貴也，即𠄎（以）文武之惠（德）也。

𠄎

上博楚簡『孔子詩論』第 24 号簡

ここでは見母 *k*-「句」が {后稷} の {后} を表している。「后」の諧声関係は以下のとおり：

表 3.3.2.4 「后」の諧声関係

見 <i>k</i> -	溪 <i>kh</i> -	群 <i>g</i> -	疑 <i>ng</i> -	影 ʔ-	曉 <i>x</i> -	匣 <i>h</i> -	于 <i>hj</i> -
垢	詬 ¹⁶⁷				詬	后	

このように「后」は見母 *k*-「垢」、溪母 *kh*-「詬」と諧声関係を有することから匣母 1 類、すなわち上古の **g*-に由来すると推定される。さらに例（２）では見母 *k*-「句」が {后} を表しており、これは「后」が破裂音 **g*-であったことを示唆するものである。このように「句」という表記は見母 *k*- {苟} だけでなく匣母 *h*- {后} も表すため、それぞれ文脈に依存して読み分けられていたと考えられる。

このほか「敏」が見母 *k*-の {姤} を表す例（上博『周易』第 40 号簡𠄎）や句声と思し

𠄎

き「𠄎」が {厚} を表す例（郭店『老子』甲 36 号簡𠄎）、匣母 *h*-「侯」が {后} を表す例

𠄎

（『包山楚簡』第 213 号簡「侯（后）土」𠄎）等も見え、「句」「后」「厚」「侯」が同音あるいは類音であったことは明白である¹⁶⁸。

𠄎

さらに「后」は閩語において破裂音[k]で実現されるため、上古音の段階で **g*-であった蓋然性が高い。また「厚」の説文古文「𠄎」は「后声」の可能性が高いが¹⁶⁹、この「厚」（中古音匣母 *h*-）も閩語ではやはり *kau*⁶ のように破裂音[k]に読まれる。このように「后」が **g*-に由来することは多くの資料からも明白である。

¹⁶⁷ 「詬」は見母上声、溪母去声、曉母去声の字音あり。

¹⁶⁸ 「侯」も見母 *k*-との諧声関係があるため匣母 1 類である。

¹⁶⁹ 『説文』「古文厚从后土。」

「句」：{後}

通仮例（3）では、見母 *k*-「句」が {而後} の {後} を表す。

（3）𠂔（待）勿（物）而句（後）乍（作）



上博楚簡『性情論』第1号簡

「後」は「后」と同様に中古音匣母 *h*-である。してみると「後」も匣母 1 類であり、**g*-に由来すると推定されるが、「後」の再構はそれほど単純ではない。上述のとおり、たとえば閩語において「后」や「厚」は福州：*kau*⁶、厦門：*kau*⁶というように破裂音の[k]で現れるが、「後」は福州：*au*⁶、厦門：*au*⁶というようにゼロ声母である。さらに「句」、「后」、「後」の諧声関係を見てみると、「後」のみが見組 K との諧声関係を有しない：

表 3.3.2.5 「句」「后」「後」の諧声関係

見 <i>k</i> -	溪 <i>kh</i> -	群 <i>g</i> -	疑 <i>ng</i> -	影 ʔ-	曉 <i>x</i> -	匣 <i>h</i> -	于 <i>hj</i> -
句苟姁	𠂔	胸			𠂔	詢	
垢	詬				詬	后屋	
						後	

このように「後」は他の声母との諧声関係を欠くためその由来が不明である。また閩語でもゼロ声母（あるいは[h]）で現れるため、閩語の音価も「後」を匣母 1 類と見なす手掛かりとはならない。したがって多くの研究者が「後」には**g*-を再構せず、**y*-や**h*-を再構する¹⁷⁰。しかし「後声」と思われる字が {厚} を表していると思われる通仮例もある：

（4）既爲金桎，或（又）爲酉（酒）沱（池）。𠂔（厚）樂於酉（酒）



上博楚簡『容成氏』第45号簡

このように戦国竹簡において見母 *k*-の「句」が {後} を表し、後声字が {厚} を表すような通仮例があるため、「後」も匣母 1 類である可能性が高い。しかし「後」は閩語でゼロ声母あるいは[h]で実現されるため、積極的に「後」を匣母 1 類とは認められない。しかも本

¹⁷⁰ Baxter (1992:763) は*f(r)oʔ/s と再構し、鄭張尚芳 (2003) は*gooʔ/s と再構する。

稿では軟口蓋破裂音と口蓋垂破裂音が通用可能であると認めているため、仮に「後」に口蓋垂音を再構したとしても諧声原則に矛盾しない。したがって現時点では「後」を口蓋垂音に由来する匣母としておく。以下それぞれの上古音を挙げる：

表 3.3.2.6 「后」「厚」「後」「侯」「句」「苟」「姁」「侯」の再構音

	OC		MC		Baxter and Sagart (2014)		
后	*g ^s os	>	<i>huwX</i>	>	hòu	*g ^s (r)o?	厦門:kau、福州:kau
厚	*g ^s os	>	<i>huwX</i>	>	hòu	*Cə.[g] ^s (r)o?	厦門:kau、福州:kau
後	*go?	>	<i>huwX</i>	>	hòu	*g ^s (r)o?	厦門:hau、福州:au
侯	*g ^s o	>	<i>huw</i>	>	hóu	*[g] ^s (r)o	閩語:hau、福州:xau
句	*k ^s os	>	<i>kjuH kuw</i>	>	gōu gòu	*k ^s (r)o-s	
苟	*k ^s o	>	<i>kuwX</i>	>	gōu	*[k] ^s (r)o?	
姁	*k ^s os	>	<i>kuwH</i>	>	gòu	—	

「句」、「后」、「後」に関する興味深い点は、張光裕（2006:223-228）による指摘である。通常、戦国楚簡では{然後}{而後}という語を表す際、「然句」「然后」「而句」「而后」というように「句」や「后」が用いられる。ところが{先後}{前後}{之後}という語を表す場合、「先句」や「前句」のような表記は見えない。{先後}{前後}{之後}という語を表す場合は「句」ではなく「後」や「後」の説文古文である「逡」で表わされる¹⁷¹。

「亥」：{改}

中古音匣母 *h*- の「亥」について見てみよう。「亥」の諧声関係は以下のとおり：

表 3.3.2.7 「亥」の諧声関係

見 <i>k</i> -	溪 <i>kh</i> -	群 <i>g</i> -	疑 <i>ng</i> -	影 <i>ʔ</i> -	曉 <i>x</i> -	匣 <i>h</i> -	于 <i>hj</i> -
該	欸			欸	刻	亥孩	

中古音匣母 *h*- 「亥」や「孩」は見母 *k*- 「該」や溪母 *kh*- 「欸」と諧声関係を有すため匣母 1 類、すなわち **g*- に由来すると考えられる。戦国竹簡では見母 *k*- 「改」と通仮関係にある：

¹⁷¹ たとえば上博楚簡『性情論』第 9 号簡：「觀其先後」。

(5) 蜀(獨)立不亥(改)



郭店楚簡『老子』甲第21号簡

例(5)の郭店楚簡『老子』「蜀立不亥」に対応する今本『老子』二十五章では「獨立不改」とあり、「亥」が{改}を表している。「改」は中古音見母 *k-*であるから、これと通仮関係にある「亥」は**g-*であると考えられる。下表は「亥」と「改」の再構音である：

表 3.3.2.8 「亥」「改」の再構音

	OC		MC		Baxter and Sagart (2014)
亥	* <i>gʰəʔ</i>	>	<i>hojX</i>	>	<i>hài</i> * <i>[g]ʰəʔ</i>
改	* <i>kʰəʔ</i>	>	<i>kjuH kuw</i>	>	<i>kǎi</i> * <i>C.qʰəʔ</i>

Baxter and Sagart (2014) が「改」に口蓋垂音 (**C.qʰəʔ*) を再構するのは、戦国竹簡において「改」の「己」が中古音邪母 *z-* (以母 *y-*) 「巳 (巳)」で表記されるからである。中古音邪母 *z-* 「巳」は**s-[ɕ]əʔ*、以母 *y-* は**g(r)əʔ*と再構されたため、「改」にも口蓋垂音が再構されている。上博楚簡にみえる「改」の字形は次のとおり：



上博楚簡『孔子詩論』第10号簡



上博楚簡『緇衣』第9号簡




上博楚簡『三德』第5号簡

Baxter and Sagart (2014) は{改}の声符が「巳」から「己」へと変化するのとは{改}の声母が**C.qʰ-*から**k-*へ変化した後のことであると推定しており、仮にこの仮説が正しいとすると、後漢(『説文』成立)以前には**C.qʰ-*から**k-*への変化が起こっていたことになる。

ただし、本稿ではすでに述べたとおり、牙音(見組・軟口蓋破裂音)と喉音(影組・口蓋垂破裂音)は調音点がやや異なるが、調音方法を同じくするため通用可能であったと考えている。したがって「改」は**kʰəʔ*と再構し、「巳」については中古音邪母 *z-* への変化を考慮して**sgəʔ*と再構し、以母 *y-* は**gəʔ*と再構する。「改」の声符が「巳」であるかどうかについては直ちに判断できないが、仮に「巳」が声符であったとしても、本稿では軟口蓋破裂音と口蓋垂破裂音が通用可能であると考えているため矛盾しない。

「𠂔」：{患}

次に中古音匣母 *h*-の「患」について見てみよう。邵榮芬（1991:122）が「患」を匣母 1 類に収めるように、「患」は戦国竹簡において「𠂔」を声符に持つ「𠂔」と通仮関係にある：

（6）「民之又（有）𠂔（感）𠂔（患）」  上博楚簡『孔子詩論』第 4 号簡

「𠂔」は「卷」の声符であるから見母 *k*-に相当する字音を有していたと考えられるため、これを声符に持つ「𠂔」と通仮関係にある「患」も匣母 1 類である蓋然性が高い¹⁷²。また「患」と声符を同じくすると思しき「𠂔」が上博楚簡『孔子詩論』で見母 *k*-「關」を表す：

（7）𠂔（關）疋（睢）  上博楚簡『孔子詩論』第 10 号簡

ここでは「𠂔疋」が『詩経』の「關雎」を表している。「關」が中古音見母 *k*-であることからみて、「患」はやはり匣母 1 類と見て良いだろう。以下、「患」「卷」「關」の再構音を挙げる：

表 3.3.2.8 「患」「卷」「關」の再構音

	OC		MC		Baxter and Sagart (2014)
患	*g ^s rons	>	<i>hwaenH</i>	>	huàn *g ^s rons
卷	*konʔ	>	<i>kjwenX</i>	>	juǎn *[k](r)o[n]ʔ
關	*k ^h ron	>	<i>kwaen</i>	>	guān *[k] ^s ro[n]

以上のように、本稿では基本的に邵榮芬（1991）の見解に沿って匣母を再構している。

3.3.3 牙音 K：喉音 H

ここでは牙音 K と喉音 H（匣母除く）の通仮例について見ていきたい。

¹⁷² 郭店楚簡『六徳』第 6 号簡「𠂔寺𠂔」が{管夷吾}を表すことから、「𠂔」が K 類であることは確実。

「往」: {廣}

(1) 灘 (漢) 往 (廣)



上博楚簡『孔子詩論』10号簡

上博楚簡『孔子詩論』第10号簡に「灘往」という語が見える。これは『詩経』の篇名である「漢廣」を表しており、「灘」が{漢}を表し、「往」が{廣}を表す。「灘」と{漢}については、§4.1.1「出土資料に見える無声鼻音の通仮例」にて検討を加える。ここでは「往」と{廣}について見ていきたい。

「往」は中古音于母合口 *hɿw-* であり、上古の **gʷ-* に由来すると考えられる。この「往」が中古音見母 *k-* 「廣」を表している。したがって本稿では以下のように再構する：

表 3.3.3.1 「往」「廣」の再構音

	OC		MC			Baxter and Sagart (2014)
往	* <i>ɣʷangʔ</i>	>	<i>hwangX</i>	>	wǎng	* <i>ɣʷaŋʔ</i>
廣	* <i>kʷʰangʔ</i>	>	<i>kwangX</i>	>	guǎng	* <i>kʷʰaŋʔ</i>

本稿では軟口蓋音と口蓋垂音は諧声・通仮可能であると認めているため、「往」を口蓋垂破裂音で再構し、「廣」を軟口蓋破裂音とする。

Baxter and Sagart (2014) では見母 *k-* が喉音（口蓋垂音）と諧声関係をもつ場合は見母 *k-* にも口蓋垂音が再構されるという仮説を導入しているため、「廣」は **C.qʷʰ-* のように再構されるはずである（黄声のため）。ところが Baxter and Sagart (2014:81) は「廣」の声符である「黄」と「光」が語源を同じくするという仮説に基づき、「廣」を **kʷʰangʔ* と再構する。また pHM において、{bright} が **ʔgʷiəŋ^A* と再構され、{bright, light, yellow} が **gʷaŋ^A* と再構されることを根拠として挙げる¹⁷³。本稿ではこの仮説については採用しない。

「化」: {過}

次に「化」の通仮例を見てみよう。


(2) 即忠敬不足而實 (富) 貴已 (已) 進 (過)



上博楚簡『緇衣』第11号簡

¹⁷³ pHM は Ratliff (2010:249, 272) を参照。

ここでは中古音曉母 *x-* の「化」を声符に持つ「𪛗」が見母 *k-* の {過} を表している。上博楚簡『緇衣』に対応する郭店楚簡『緇衣』第 20 号簡でも同様に「𪛗」が {過} を表している。また通仮例 (3) では「化」が中古音匣母 *h-* の {禍} を表す：

(3) 化(禍) 莫大(乎) 𪛗(乎) 不智(知) 足  郭店楚簡『老子』甲本第 6 号簡

このように曉母 *x-* 「化」は見母 *k-* 「過」、匣母 *h-* 「禍」を表しているため、口蓋垂破裂音が考えられる。「禍」については見母 *k-* 「過」と諧声関係を有するため、匣母 1 類である：

表 3.3.3.2 「化」「過」「禍」の上古音

	OC		MC		Baxter and Sagart (2014)	
化	*qwh ^h rajs	>	<i>xwaeH</i>	>	huà	*q ^w h ^h <r>aj-s
過	*kwajs	>	<i>kwaH</i>	>	guò	*Cə.k ^w aj-s
禍	*gw ^h aj?	>	<i>hwaH</i>	>	huò	*[g] ^w aj?

このように「化」と「過」は調音点が異なるが、みな破裂音であるから通用可能である。ところが「化」は疑母 *ng-* 「訛」の声符でもあり（「中山王方壺」）、「訛」との諧声関係を重視する場合、「化」は *hngw^hrajs のように無声鼻音が再構されなければならない¹⁷⁴。しかし本稿では通仮例 (2) (3) で破裂音の「過」「禍」と通仮関係にあることから、現時点ではこの通仮例を重視して「化」を *qwh^hrajs として再構おくことにする¹⁷⁵。

Baxter and Sagat (2014) は疑母 *ng-* の一部が「*N- (または *m-) + 口蓋垂音」に由来すると考えているため「訛」は *m-qwh^haj-s と再構される。

3.3.4 鼻音 NG : 鼻音 NG

先行研究では特に異論のない疑母 *ng-* であるが、Baxter and Sagat (2014) は疑母 *ng-* が上古の *ng- に由来するものと、「*N + 口蓋垂音」に由来するものの 2 種を想定している。一つ例を挙げておこう：

¹⁷⁴ たとえば Schuessler (2009:221) は「化」を *hgrôih (or hwâih?) とするように、一般的には疑母 *ng-* 「訛」との諧声関係を重視して無声鼻音が再構される。


¹⁷⁵ 「譌」との関係も考えなければならない。「爲」は見母 *k-*、曉母 *x-*、疑母 *ng-*、于母 *hj-* と諧声関係を有しており、「化」と同様に口蓋垂音を考えるのが良いだろうか。郭店楚簡『老子』甲本第 13 号簡では「萬勿(物) 𪛗(將)  (化)」とあるように、戦国楚簡では爲声字が {化} を表す。




表 3.3.4.1 Baxter and Sagart (2014:128) 「吾」「午」

	OC		MC	
吾	*ŋʰaʔ	>	nguX	> wǔ
午	*[m].qʰaʔ	>	nguX	> wǔ

Baxter and Sagart (2014) 以前の研究者はみな「吾」と「午」を同音として*ngaʔのような音価を再構するが、Baxter and Sagart (2014:128) は前者を従来通りの*ŋ-で再構し、後者を*m.qʰ-とする。また「午」と諧声関係にある「杵」は*t.qʰaʔ、「許」は*qʰ(r)aʔと再構され、「所」*s-qʰ<r>aʔや「處」*t.qʰaʔ/s と語源的に関係があると思なしているようである。

興味深い点は、Baxter and Sagart (2014) では、*ŋ-に由来する疑母 *ng-*と「*N+口蓋垂音」に由来する疑母 *ng-*は上古で通用しないと見なしている点である。つまり「午」(*[m].qʰaʔ)と「吾」(*ŋʰaʔ)は通用不可ということになる。

ところが戦国楚簡では Baxter and Sagart (2014) の再構音に対する反証例と思しき通仮例が見える：

- (1) 可𠂔 (御) 也  郭店楚簡『成之聞之』第 16 号簡
- (2) 𩺰 (謹) 惡𠂔 (以) 慮 (御) 民淫  上博楚簡『緇衣』第 4 号簡
- (3) 𩺰 (𩺰—禦) 之  上博楚簡『從政』甲本第 17 号簡

通仮例 (1) では、午声「𠂔」が {御} を表している¹⁷⁶。通仮例 (2) では、魚声の「慮」が {御} を表す。さらに (3) では、吾声と思われる「𩺰」が {禦} を表す¹⁷⁷。このように午声「𠂔」、魚声「慮」、吾声「𩺰」がみな {御} あるいは {禦} を表していることから、これら「午」、「魚」、「吾」、「御」はみな同音あるいは類音であったと考えられる。戦国楚簡では「午」と「吾」はどちらも {御} を表すため、Baxter and Sagart (2014) の再構音に関しては再考の余地があるだろう。

本稿ではこれらすべての語に*ng-を再構する。ちなみに「午」に*ng-を再構することから、これと諧声関係を有す中古音曉母 *x-*「許」については*hnngaʔというように無声鼻音を再構す

¹⁷⁶ 『説文』には「御」の古文として「𠂔」があるが、「𠂔」は「御」「𠂔」の異体字か。

¹⁷⁷ 郭店楚簡『五行』第 34 号簡には「語」が {禦} を表す例もみえる。

る。中古音疑母 *ng-*「午」、「魚」、「吾」、「御」の再構音は以下のとおりである：

表 3.3.4.2 「午」「魚」「吾」「御」の上古音

	OC		MC		Baxter and Sagart (2014)	
午	*ngʰaʔ	>	<i>nguX</i>	>	wǔ	*[m].q ^h aʔ
魚	*nga	>	<i>ngjo</i>	>	yú	*[r.ŋ]a
吾	*ngʰaʔ	>	<i>nguX</i>	>	wǔ	*ŋʰaʔ
御	*ngaʔ	>	<i>ngjoX</i>	>	yù	*m-[qh](r)aʔ

「午」と「吾」に関して、Baxter and Sagart (2014) の再構音には疑義を呈したが、中古音疑母が 2 種以上の祖形に由来するということを否定しているわけではない。これはすでに述べた「化」、「訛」、「過」、「禍」の関係からも明らかである (3.3.3)。この点に関しては今後の研究に委ねたい。

3.3.5 小論

牙喉音に関して、「牙音 K：牙音 K」、「牙音 K：牙音 K—合口」、「牙音 K：匣母 1 類」、「牙音 K：喉音 H」、「鼻音 NG」というように牙喉音の中でも特に議論の対象となるものに関して検討を加えた。牙喉音に関しては諧声原則に対する見解の違いが顕著であり、その結果、再構音に差異が生じている。いま見母 *k-*「景」と影母 *ʔ-*「影」を例にすると以下のようにまとめることができる：

表 3.3.5.1 「景」「影」

	景	：	影
①	*k-	：	*ʔ- 牙音と喉音はある程度自由に諧声可能
②	*k-	：	*q- 調音方法（破裂音）が一致しているから諧声可能
③	*C.q-	：	*q- 語根の声母が口蓋垂音で一致しているから諧声可能

①から③になるにつれて、より厳密な諧声原則が採用されていることが分かる。本稿では②の立場から、牙音と喉音の再構を試みた。したがって本稿では軟口蓋破裂音と口蓋垂破裂音は基本的に自由に通仮できると考えている。しかし今後の研究如何によって、③の原則のようにより厳密な原則のもとで各語の再構を進めなければならないかもしれない。牙喉音に関しては今後さらなる検討を加える必要がある。

3.4 歯音 TS (歯茎破擦音・摩擦音 S)

3.4.1 歯茎破擦音 TS

Karlgren (1954/1992) は歯音に関しては、*ts-、*tsh-、*dz-、*s-だけでなくそり舌の*tʂ-、*tʂh-、*dzʂ-を再構するが、董同龢 (1944) 以降、そり舌音は排除される。これは精組と莊組の諧声系列からも明らかであり、歯上音は歯音に帰すと考えられる。後の研究者は声母ではなく*-i-介音等によって莊組と精組・章組を区別するが¹⁷⁸、李方桂 (1971) 以降はむしろ*-r-を莊組と知組に再構することによってそり舌音への変化を説明する仮説が主流となっている。李方桂 (1971:11) の示す知組と莊組の再構音は次のとおり：

上古 *tr-, *thr-, *dr-, *nr-, > 中古知 t-, 徹 th-, 澄 d-, 娘ŋ-¹⁷⁹

上古 *tsr-, tshr-, *dzr-, *sr-, > 中古照 (二) tʂ-, 穿 (二) tʂh-, 牀 (二) dz-, 審 (二) ʂ-

このほか、心母 s-と牙喉音が諧声関係をなす例—たとえば中古音溪母 kh-「契」と心母 s-「楔」—には*sk-を再構し、従母 dz-「造」と見母 k-「告」の諧声関係を説明するために*sg-等を再構する。「造」と「告」の諧声関係は『説文』を根拠とするが、大西 (2006:81-96、2007:62)

は精組系声母と通用関係にある字形𪛗と牙喉音系声母と通用関係にある字形𪛘に区別が為されているとして¹⁸⁰、「造」に*sg-を認めることに疑義を呈している。このように破擦音 (心母を除く歯音) と牙喉音の諧声関係に関しては議論の余地があるが、心母 s-と牙喉音が諧声関係を為す例に関しては、やはり preinitial *s-を再構せざるを得ない。これは心母 s-だけでなく邪母 z-と牙喉音が諧声関係を為す例—見母 k-「公」と邪母 z-「訟」—についても同様である¹⁸¹。

近年になって新たな見解も示されている。たとえば鄭張尚芳 (2003:92) は「精組除心母字有一部分来源于 s 及 s 冠外，多数更是上古后期才成为塞擦音的」というように、精組 TS のほとんどが上古では破擦音ではなかったとしている¹⁸²。これは親族言語にある言語において破擦音が音変化によって生じたものであるという見解に基づいており、たとえば中古音精母 ts-には*ʔs-、*sl'-、*st-、*sq-、*sk-、*sp-、*sml'-等の上古音声母が再構される。

¹⁷⁸ 陸志韋 (1947:285/1985:257) は介音*-i-を莊組と知組に再構し、*-i-を精組と章組に再構する。

¹⁷⁹ 李方桂 (1971:11) のそり舌音の表記は/t/の下に黒丸を打つが、便宜上 IPA で表記しておく。

¹⁸⁰ 𪛗は郭店楚簡『窮達以時』第 11 号簡、𪛘は郭店楚簡『緇衣』第 47 号簡にそれぞれ見え、前者は「造」に読まれ、後者は「告」に読まれる。

¹⁸¹ 「訟」の再構音について、李方桂：*sgjungh、鄭張尚芳 (2003)：*sglonʂ、Schuessler (2009)：s-loŋh、Baxter and Sagart (2014)：*s.[g]onʂ-s と再構する。

¹⁸² 葉玉英 (2009:228-229) も鄭張 (2003) と同様に破擦音を後の音変化によるものとしており、歯音の破擦音化は漢代後期から南北朝までとする。

しかし親族関係にある言語の破擦音が後の音変化の産物であるからといって、上古中国語に破擦音が無かったことの論拠とはならないはずである。本稿では鄭張尚芳（2003）のような仮説を採用せず、原則として中古の齒音と齒上音は TS、TSr と再構する（TS と TSr で齒音と齒上音を代表させる）。

以下、戦国竹簡にみえる齒音 TS の通仮例を挙げる：







表 3.4.1.1 齒基破擦音の通仮例

図版	再構音	BS2014	中古音	出典
① 	雀 *tsewk	*[ts]ewk	<i>tsjak</i>	S 孔詩 20, G 魯 6, 7, G 緇 28,
	爵 *tsewk	*[ts]ewk	<i>tsjak</i>	Q 耆 4, 6, 8, 9,
② 	薺 *dz ^h ij?	*dz ^h [ə]j?	<i>dzij / dzejX</i>	S 孔詩 28,
	茨 *dzij	—	<i>dzejX</i>	
③ 	淒 *tsh ^h ij	—	<i>tshej</i>	G 成 25, 26
	濟 *ts ^h ijʔ/s	*[ts] ^h [ij]ʔ/-s	<i>tsejX/H</i>	
④ 	才 dz ^h ə	*[dz] ^h ə	<i>dzoj</i>	G 太 10, 12, G 老甲 21
	字 *dzəs	*mə-dzə(?) -s	<i>dziH</i>	
⑤ 	戚 *tsh ^h iwk	*s.th ^h iwk	<i>tshek</i>	G 尊 7
	造 *dz ^h u?	*[dz] ^h u?	<i>dzawX</i>	
⑥ 	臧 戕 *dzang	—	<i>dzjang</i>	S 孔詩 19
	藏 *dz ^h ang/s	*m-t ^h saŋ/s	<i>dzang / H</i>	
⑦ 	贊 戕 *dzang	—	<i>dzjang</i>	S 孔詩 21
	將 *tsang/s	*[ts]aŋ	<i>tsjang / H</i>	
⑧ 	紂 才 *dz ^h ə	*[dz] ^h ə	<i>dzoj</i>	S 緇 1,
	緇 *tsrə	*[ts]rə	<i>tsri</i>	
⑨ 	薦 薦 *ts ^h ən	*Cə.ts ^h ə[r] -s	<i>tsenH</i>	S 緇 5
	存 *dz ^h ən	*[dz] ^h ə[n]	<i>dzwon</i>	
⑩ 	臧 *ts ^h ang	*[ts] ^h aŋ	<i>tsang</i>	B91, 155, 267
	葬 *ts ^h angs	*[ts] ^h aŋ-s	<i>tsangH</i>	
⑪ 	族 *dz ^h ok	*[dz] ^h ok	<i>dzuwk</i>	G 語三 14
	足 *tsok	*[ts]ok	<i>tsjowk</i>	
⑫ 	梟 *s ^h aws	—	<i>sawH</i>	G 唐 28
	肖 *sew	*[s]ew-s	<i>sjew/H</i>	

⑫は摩擦音の通仮である。

基本的に破擦音は破擦音と通仮関係にあり、摩擦音（心母 *s-*、疏母 *sr-*）との通仮関係は多くない：

表 3.4.1.2 破擦音と摩擦音の通仮

	𠂔	*sra	*sra	<i>srjo</i>	S 孔詩 10, 11
	𠂔	*tsha	*[ts ^h]a	<i>tshjo</i>	
	𠂔	*tshit	*[ts ^h]i[t]	<i>tshit</i>	S 孔詩 27, Q 耆 10, 11
	𠂔	*srit	*srit	<i>srit</i>	
	𠂔	*srəʔ/s	*s-rəʔ/-s	<i>sriX/H</i>	S 緇 12
	𠂔	*dzrəʔ	*[m-s-]rəʔ	<i>dzriX</i>	

3.4.2 小論

すでに述べたとおり、歯音に関しては諧声可能範囲を逸脱するものが少なくない。たとえば「叔」を声符とする諧声関係を見てみると、舌音から歯音まで幅広く諧声関係を有しており、精母 *ts-*「椒」、従母 *dz-*「寂」、端母 *t-*「督」、禅母 *dzj-*「淑」、書母 *sy-*「叔」等があるため、やはり再構が困難である。この「叔」を例に本稿の方針を明確にしておきたい。

本稿では禅母 *dzj-*「淑」と書母 *sy-*「叔」に関しては **T-type** の声母を再構する。これは戦国竹簡において、いわゆる **T-type** の「𠂔」が禅母 *dzj-* {淑}、書母 *sy-* {叔} を表すからである。これに対して「椒」や「寂」については **T-type** との通用関係が見えないため、現時点では中古音から投影し、「椒」を **ts-*、「寂」を **dz-* と再構する。「叔」という表記が **T-type** の字音と **TS** の字音の二つの諧声系列を有していた可能性もある。それぞれの再構音は以下のとおり：

表 3.4.2.1 叔声の再構音

	OC		MC		Baxter and Sagart (2014)	
椒	*ts ^h iw	>	<i>tsew</i>	>	jiao	*s.t ^h iw
寂	*dz ^h iwk	>	<i>dzek</i>	>	ji	*s-[d] ^h iwk
淑	*diwk	>	<i>dzyuwk</i>	>	shu	*[d]iwk
叔	*stiwk	>	<i>syuwk</i>	>	shu	*s-tiwk

Baxter and Sagart (2014) は精母 *ts-*「椒」と従母 *dz-*「寂」に **s.t-*、**s.d-*（**Type-A** に限る）

を認めることによってこれらの諧声関係をうまく説明している。この場合、「椒」と「寂」は T-type と認められ、「淑」と「叔」等との諧声関係をうまく説明することができる。今後、戦国竹簡等で T-type の語が {椒} や {寂} を表す例が見られるとすればこのように再構するほうが良いだろう。ただし現時点ではすでに述べたとおり中古音から投影し *ts-、*dz- と再構しておくこととする。

第4章 無声鼻音*HN、preinitial *s-、書母 sy-の再構

第4章では、「無声鼻音 HN」、「preinitial *s-」、「書母 sy-の再構」について、検討を加えていきたい。

4.1 無声鼻音再構の歴史

近年、上古音研究者の多くが上古音声母体系に無声鼻音の再構を認める。その根拠となるのが、以下に挙げるような諧声関係である：

表 4.1.1 明母 *m*-と曉母 *x*-の諧声関係

	MC	呉音	漢音
墨	<i>mok</i>	モク	ボク
黒	<i>xok</i>	コク	コク
毎	<i>mwoj</i>	マイ	バイ
海	<i>xojX</i>	カイ	カイ

このように中古音明母 *m*-「墨」は曉母 *x*-「黒」を声符としており、明母 *m*-の「毎」は曉母 *x*-「海」の声符である。このような諧声関係を説明するために、Karlgren (1954/1992:69) は中古音曉母 *x*-となる「黒」と「海」に**xm*-を再構し、明母 *m*-の「墨」と「毎」には**m*-を再構する。しかし、この Karlgren による処置は解釈し得ずして生まれた窮余の一策にすぎないとの指摘がある¹⁸³。

これに対して、董同龢 (1944:12-14) はこの諧声関係をより自然に説明するために、無声鼻音[*ɱ*]を再構し、**ɱ*->*x*-という音変化を推定している。したがって中古音で曉母 *x*-に読まれる「黒」と「海」は**hm*-と再構され、明母 *m*-の「墨」と「毎」は**m*-と再構される。董同龢以降の研究者の多くが明母 *m*-と曉母 *x*-の諧声関係には無声鼻音**hm*-([*ɱ*])を推定する。

以下は主な研究者の再構音である：

表 4.1.2 主な研究者の再構音—明母 *m*と曉母 *x*—

Karlgren	董同龢	Jaxontov	Pulleyblank	李方桂	Baxter	鄭張尚芳	BS
* <i>xm</i>	* <i>ɱ</i> -	* <i>sm</i> -	* <i>mh</i> -	* <i>hm</i> -	* <i>hm</i> -	* <i>hm</i> -	* <i>ɱ</i> -
二重子音	無声鼻音	二重子音	無声鼻音	無声鼻音	無声鼻音	二重子音	無声鼻音

無声鼻音を再構するのは、董同龢 (1944)、Pulleyblank (1962)、李方桂 (1971)、Baxter (1992)、

¹⁸³ 董同龢 (1944:12-13) は「他〔筆者注：Karlgren〕這種做法自然算不得問題的正式解答。只可以說他在表示有那麼一層關係而已」と述べている。

Baxter and Sagart (2014) であり、二重子音(複声母)を再構するのが Karlgren (1954)、Jaxontov (1960a/1986)、鄭張尚芳 (2003) である。ただし先述のとおり Karlgren の *xm- は一時的な処置に過ぎないため、Jaxontov や鄭張尚芳の二重子音とは意味合いが異なる。Jaxontov (1960a) は *sm- > *x^wm- > x(ʷ)- という音変化を想定しており、これは諧声関係だけでなく親族関係にある語との比較に基づくものである¹⁸⁴

また表には挙げていないが、Mei (2012:7) も Jaxontov 等と同様に明母 *m*- と諧声関係を有す曉母 *x*- の語に *sm- を再構するが、これは比較言語学的な根拠に基づくとして以下のように述べている：

Some of Yakhontov's [筆者注: Jaxontov] formulas have been confirmed by comparative evidence. For example, for OC *sm- > x-, we have #135 and #287 in Gong's (2002:101, 113) list of Proto-Sino-Tibetan comparative lexicon.

135. OC 焜 *smjəd > xjwěi 'fire, burn', WT *me* < *mye* < *smye* 'fire', WB *mí* 'fire, light'

287. OC 墨 *mək > mək 'ink, black', 黑 *smək > xək 'black', WT *smag* 'dark, darkness', WB *mang* 'ink', *hmang* 'ink'

このように Mei (2010) は「焜」に *sm- を再構する根拠として {fire} の意の *smye* を挙げ、また「黒」に *sm- を再構する根拠として {ink} の意の *smag* を挙げる。ところがこの点に関して、Hill (2013:60-71) はそもそも {fire} の意の *smye* という語が歴史的にも存在しないとして Mei (2012) の見解に否定的である¹⁸⁵。

TB との比較がどこまで有効かについて直ちに判断することができないが、本稿では明母 *m*- と曉母 *x*- の諧声関係に Jaxontov や Mei のような *sm- を認めることはできない。これは本稿の上古音体系において、*s- が鼻音の前に先行する場合 (*sN-)、中古音心母 *s*- に音変化すると推定しているからである (N で鼻音を代表する)：

*sN- > s- 例：「𪛗」 *snas > sjoH > xù 「𪛗」 *sng'a > su > sū

ただし、上古音より以前の段階—たとえばシナ・チベット祖語—に *sm- という声母が存在した可能性については否定しない (否定するだけの根拠を持ち合わせていない)。上古音以前の段階で *sN- がすでに *xN- (あるいは無声鼻音) へと音変化していたと仮定するならば矛盾は生じないからである：

¹⁸⁴ Jaxontov (1960a/1986:50) は「黒」 *smək、とチベット文語 *smag* {dark, darkness} を挙げる。

¹⁸⁵ Hill (2013:70) “In fact, *smye* ‘fire’ is a ghost word; the real word for fire in Old Tibetan, namely *mye*, provides no support for an s-prefix in Old Chinese.”

Pre-OC		OC		MC	例
**sN-	>	*xN-	>	x-	「漢」 **snans > *xnans > xanH > hàn
**??	>	*sN-	>	s-	「信」 **?? > *snins > sinH > xìn

いずれにせよ上古音の段階では*sN-ではなく無声鼻音*hm- ([ɱ]) を再構するほうがより蓋然性が高いと言えよう。鄭張尚芳 (2003) の二重子音*hm-は音韻体系全体の整合性を重視したものであって、やはり Karlgren の二重子音とは異なる (後述する)。

Pulleyblank (1962)、李方桂 (1971)、Baxter (1992)、Baxter and Sagart (2014) 等の再構音はそれぞれ表記方法が異なるが、本質的には一致しており、いずれも無声鼻音を表している。このように現在では多くの研究者が董同龢 (1944) に従い明母 *m*-と曉母 *x*-の諧声関係に無声鼻音を再構する。その一方で、中古音の体系や中国語諸方言からすると、上古音に無声鼻音が存在したとは考え難いとする研究者もあるが¹⁸⁶、無声鼻音を再構することに関しては類型論的にも自然言語としても問題ない。

このように董同龢 (1944) は無声鼻音再構の嚆矢的存在であるが、その体系は整合性に欠けると評される。これは以下のような諧声関係に無声鼻音を再構していないからである：

表 4.1.3 疑母 *ng*-と曉母 *x*-の諧声関係

	MC	呉音	漢音
午	<i>nguX</i>	ゴ	ゴ
許	<i>xjoX</i>	コ	キョ
義	<i>ngjeH</i>	ギ	ギ
犧	<i>xje</i>		キ

このように中古音曉母 *x*-は明母 *m*-だけでなく疑母 *ng*-とも諧声関係を有す。現在ではこの諧声関係を説明するために無声鼻音*hnɡ-[ɲ]が再構される。たとえば中古音疑母 *ng*-の「午」は*ng-と再構され、曉母 *x*-の「許」は*hnɡ- ([ɲ]) とされる。主な研究者の再構音は以下の

¹⁸⁶ そもそも王力は二重子音を認めないため、Karlgren 案には否定的である。しかし王力の再構音は*mx-であり、これは二重子音ではないのだろうか。この点に関して、孫玉文 (2005:4) は次のように述べている：「王力先生《同源辞典》把“黑”拟作 mx-，可能是认为这个“黑”是一个擦化单辅音，跟董先生的意见有相同处。我们认为，王力先生把“黑”拟成单辅音而不是复辅音，有三点理由：一是他拟成 mx-而不是 xm-，是为了表明“黑”原来读唇音。至于这个 x-，既可以理解为表明前面的 m-的擦音性质或清鼻音性质，mx-是单辅音；也可以理解为一个辅音，mx-是复辅音。两种可能都存在，不能得出王力先生 mx-构拟一定是复辅音这一结论，按王力先生体系，只能是前者，不能是后者；二是《同源辞典》写于 70 年代，50 年代的《汉语史稿》和 80 年代的《汉语语音史》都明确表示不能接受高本汉等人的上古复辅音声母拟测；三是郭锡良先生《历史音韵学研究中的几个问题》指出，王力先生说““黑”的古音可能是 mxək’，是想到了董同龢的清鼻音，也只想说可能是一个与一般的双唇鼻音有别的 m-。”」このように述べるがやや牽強附会の嫌いがあり、真相については不明である。ただ王力 (1985/1987:21) では「董同龢提出，上古应该有一个声母 [ɱ] ([m] 的清音)，这也是从谐声偏旁推测出来的。…高本汉对于这一类字的声母则定为复辅音 [xm]。上文说过，谐声偏旁不足为上古声母的确证，所以我们不采用董说或高说」と述べており、はっきりと Karlgren 案と董同龢案を否定している。

とおり：

表 4.1.4 主な研究者の再構音一疑母 *ng* と曉母 *x*—

董同龢	Jaxontov	Pulleyblank	李方桂	Baxter	鄭張尚芳	BS
—	*sŋ-	*ŋh-	*hng-	*hng-	*hŋ-	*ŋ̊-
—	二重子音	無声鼻音 ¹⁸⁷	無声鼻音	無声鼻音	二重子音	無声鼻音

次に泥母 *n*-について見てみよう。泥母 *n*-は明母 *m*-や疑母 *ng*-よりも複雑な諧声関係を有しており、注意が必要である。まずは泥母 *n*-と曉母 *x*-の関係を見ておこう：

表 4.1.5 泥母 *n*-と曉母 *x*-の諧声関係

	MC	呉音	漢音
難	<i>nan</i>	ナン	ダン
漢 ¹⁸⁸	<i>xanH</i>	カン	カン

このように泥母 *n*-は他の鼻音（明母 *m*-と疑母 *ng*-）と同様に中古音曉母 *x*-と諧声関係を有するため、*hn->*x*-という音変化を推定すべきであると思われるが、実際には多くの研究者がこれを認めない：

表 4.1.6 主な研究者の再構音一泥母 *n* と曉母 *x*—

董同龢	Jaxontov	Pulleyblank	李方桂	Baxter	鄭張尚芳	BS
—	—	—	—	—	*hn-	*ŋ-
—	—	—	—	—	二重子音	無声鼻音

泥母 *n*-と曉母 *x*-との諧声関係を認めるのは、鄭張尚芳（2003）と Baxter and Sagart（2014）のみである。では他の研究者はどうするのかというと、泥母 *n*-と透母 *th*-の諧声関係に無声鼻音あるいは二重子音を認める：

表 4.1.7 泥母 *n*-と曉母 *x*-の諧声関係

	MC	呉音	漢音
難	<i>nan</i>	ナン	ダン
灘	<i>than</i>	タン	タン

¹⁸⁷ Pulleyblank の音価は実際には無声鼻音ではない。Pulleyblank (1962:92) “...aspirated phoneme ŋh. This is an extension of the proposal made by Tung T’ung-ho to reconstruct voiceless ŋ̊...”

¹⁸⁸ 「漢」の声符に関しては様々な議論があったが、たとえば上博楚簡『孔子詩論』第 11 号簡に於いて「水+難」に作る字が見え、{漢水}の{漢}を指すことから「漢」の声符を「難」と見て良いだろう。

この諧声関係を説明するために、大部分の研究者が無声鼻音[ŋ]を考える。たとえば李方桂 (1971:14-15) はミャオ語で[ŋ]が[ŋth]に聞こえることを根拠に挙げ、*hn->hnth->th-という音変化を想定している¹⁸⁹。すなわち「灘」を*hnan とし、「難」を*nan と再構する。

表 4.1.8 主な研究者の再構音—泥母 *n* と透母 *th*—

董同龢	Jaxontov	Pullyblank	李方桂	Baxter	鄭張尚芳	BS
—	*sn-	*nh-	*hn-	*hn-	*nh-	*ŋ-
—	二重子音	無声鼻音	無声鼻音	無声鼻音	無声鼻音	無声鼻音

このように多くの研究者が泥母 *n*-と透母 *th*-の諧声関係に無声鼻音を再構している。鄭張尚芳と Baxter and Sagart (2014) のみが泥母 *n*-と曉母 *x*-の諧声関係および泥母 *n*-と透母 *th*-の関係を認める。主な研究者の再構音は以下のとおりである：

表 4.1.9 主な研究者の再構音

	明母 <i>m</i> - 曉母 <i>x</i> -	疑母 <i>ng</i> - 曉母 <i>x</i> -	泥母 <i>n</i> - 曉母 <i>x</i> -	泥母 <i>n</i> - 透母 <i>th</i> -	
董同龢	ŋ				無声鼻音
藤堂明保 ¹⁹⁰	ŋ				無声鼻音
Jaxontov	sm	sŋ		sn	二重子音
Pulleyblank	mh	ŋh		nh	無声鼻音
李方桂	hm	hng		hn	無声鼻音
Baxter	hm	hng		hn	無声鼻音
鄭張尚芳	hm	hng	hn	nh	hm-, hŋ-, hn-: 二重子音、nh-:無声鼻音
Baxter Sgart	ŋ	ŋ̥	ŋ̥	ŋ̥	無声鼻音 ŋ̥->x-: West dialect

董同龢 (1944)、藤堂明保 (1957) は明母 *m*-と曉母 *x*-の関係にのみ無声鼻音[ŋ]を再構しているが、これは自然なことである。たとえば Maddieson (1984:6) は類型論的な視点から鼻音の含意法則 (implicational rule) に関して次のように述べている：

¹⁸⁹ 李方桂 (1971:14) 「我在貴州調查黑苗的語言的時候，就發現他們的清鼻音 *ŋ* 聽起來很像是 *ŋth*，因此我們也可以想像 *hn- 變為 *hnth-，再變為 *th*- 的可能。」

¹⁹⁰ 藤堂明保 (1957) を参照。藤堂 (1957:306-307) は無声鼻音[ŋ]に関して、「思うに上古の */m/* と */h/* は複声母ではなしに、恐らく */m/* の方言的ななまり、すなわち無声の *ŋ* が *[h]* となったのではあるまいか。前漢の揚雄の「方言」をみると、「火」・「燬」 */h-/* のことを齊の方言では *焜* と */m-/* と言ったことがみえる。思うに火・燬・焜は同一の語源に由来するもので **/mwər/* が上古のある方言で *[hwər]* と発音せられ、ついには **/hwar/* ということばとして雅言のうちに借用されたものであろう。従って上古の複聲母として **/hm/* を認めるには當るまいと考えられる」と述べている。このほか『詩經』周南・汝墳「王室如燬」に関して『經典釈文』は「齊人謂火曰燬…楚人名火曰燥，齊人曰燬，吳人曰焜。此方俗訛語也」と注しており、「燬」と「焜」の関係が方言の差である可能性が高い。いずれにしても「燬」と「焜」は **/hm-* に由来すると考えられる。

- i. If a segment is a nasal, it is voiced.
- iv. A voiceless nasal is more likely to have a bilabial place of articulation than any other place.
- v. Most languages have at least one nasal.
- vi. A language with any nasals has /*n/.
- vii. The presence of /m/ in a language implies the presence of /*n/.

Maddieson (1984) によると、最も一般的な鼻音が[n]であるのに対して、無声鼻音に関しては両唇音 [m]が最も普遍的である。この点から見ても董同龢、藤堂明保がはじめに無声鼻音 *ɱ- を再構した点は鋭い見識であると言えよう。

鄭張尚芳は泥母 *n*- と曉母 *x*- の関係に二重子音 *hn-[^hn] を再構し、泥母 *n*- と透母 *th*- の諧声関係には無声鼻音 *nh-[ɱ] を再構する。これに対して Baxter and Sagart (2014) はどちらの諧声関係にも無声鼻音 *ɱ- を再構し、中古音曉母 *x*- への音変化を “West dialect” のものとするように方言差を想定している：

表 4.1.10 鄭張尚芳と Baxter and Sagart の再構音—無声鼻音

鄭張尚芳

*hn- [^h n]	>	<i>x</i> -	漢 *hnaans > <i>xanH</i> > han
*nh- [ɱ]	>	<i>th</i> -	灘嘆 *nhaan > <i>than</i> > tan

Baxter and Sagart

*ɱ-	>	<i>x</i> - (West dialect)	漢 *ɱans > <i>xanH</i> > han
*ɱ-	>	<i>th</i> -	灘嘆 *ɱan > <i>than</i> > tan

鄭張尚芳案はすべての諧声関係を説明することができるため整合性という面で優れているが¹⁹¹、*hn- と *nh- という音素が一つの音韻体系に存在していたとは類型論的に見ても考えにくい¹⁹²。したがって方言のような言語層の違いを要因の一つとして考える必要がある。本稿では Baxter and Sagart (2014) のように無声鼻音 *hn- ([ɱ]) が *th*- に変化する方言と *x*- に変化する方言があったと推定する¹⁹³。

¹⁹¹ このほか鄭張尚芳 (2003) は明母 *m*- と滂母 *ph*- の関係 (「撫」) を説明するために、*mh[ɱ] > *ph*- という音変化等も想定しているが、このような諧声関係は他に例がないため例外的な現象と考えられる。詳細は第1章「上古音声母体系再構の歴史」1.9「鄭張尚芳、潘悟云」を参照されたい。


¹⁹² 2012年に開催された日本中国語学会第62回全国大会(同志社大学)にて「戦国出土資料から見た上古中国語無声鼻音再構」という題名で発表した際に、遠藤光暁氏よりアタヤル語に *hm*- と *mh*- の対立が存在するとのこと意見を賜った。

¹⁹³ *hn- が方言に拠って透母 *th*- と曉母 *x*- に分かれるが、無声流音 *hl- も同様に透母 *th*- へと変化した方言と曉母 *x*- へと変化した方言があったと推定される。『釋名』「天、顛也」というのもこれを示唆するものである。

4.1.1 出土資料に見える無声鼻音の例


ここでは戦国竹簡に見える無声鼻音の通仮例を見ていきたい。すでに述べたとおり、本稿では*hn-[ŋ]が中古音曉母 x-へと変化した方言と、中古音透母 th-へと変化した方言が存在したと考えている。以下、*hn-の例を挙げる：

表 4.1.1.1 *hn-の通仮例

	図版		再構音	BS2014	中古音	出典
①		難	*nʰan/s	*nʰar/-s	nan/H	S 孔詩 10,11
		漢	*hnʰans	*ŋʰar-s	xanH	
②		難	*nʰan/s	*nʰar/-s	nan/H	S 性 15
		嘆	*hnʰan/s	*ŋʰar-s	thanH	

①：『△（漢）往（廣）』

②：「卽悸女（如）也彩斯△（嘆）」



通仮例①のは「水」と「難」から構成され、中古音曉母 x-の{漢}を表す。当該字は楚簡では基本的に{漢水}を表す。*hn-が西方の方言（West dialect）で摩擦音化して*x-に音変化するというのはこの『漢廣』や「漢水」の例にも依拠している。

通仮例②は「難」が中古音透母 th- {嘆}を表す例である。このように同じ難声字であっても、一方では中古音曉母 x-の{漢}を表し、もう一方では中古音透母 th-の{嘆}を表している。これら通仮例①、②は*hn-が曉母 x-だけでなく、透母 th-へも変化したことを示す好例である。





そもそも「難」は透母 th-「灘、嘆」だけでなく、中古音曉母 x-「漢」とも諧声関係を有するため方言差を考えなければならないことは明白だが、これは諧声関係だけでなく「灘」の字音からも明らかである。「灘」には中古音透母 th-と曉母 x-の字音があり¹⁹⁴、これも方言の存在を示唆するものである。

次に中古音明母 m-と曉母 x-の関係を見てみよう：

表 4.1.1.2 *hm-の通仮例

	図版		再構音	BS2014	MC	例
③		愬	母*mʰəʔ	*məʔ/mʰoʔ	muwX	S 孔詩 26,
		悔	*hmʰəʔ	*mʰəʔ	xwojX	
④		愬	母*mʰəʔ	*məʔ/mʰoʔ	muwX	G 六 21, S 周 1 9, 26
		誨	*hmʰəs	*mʰəʔ(?) -s	xwojH	

¹⁹⁴ 「灘」：中古音透母：thanH（他干切）、中古音曉母：xanX（呼肝切）。

⑤		昏	昏*hm ^s un	*m ^s u[n]	<i>xwon</i>	S 緇 19, S 性 14(2)
		聞	*m ^s um	*mu[n]	<i>mjun</i>	
⑥		昏	昏*hm ^s un	*m ^s u[n]	<i>xwon</i>	B130b, 157
		問	*muns	*C.mu[n]-s	<i>mjunH</i>	
⑦		無	無*hma	—	<i>xjoX</i>	B212, 12, 18, 58, 126, 131, 132b, 140, 141
		許	*hnga?	*qh(r)a?	<i>xjoX</i>	
⑧		亡	亡*mang	*maŋ	<i>mjang</i>	B129
		許	*hnga?	*qh(r)a?	<i>xjoX</i>	

③：「『陞（隰）又（有）長（長）楚』曼（得）而△（悔）之也」

④：「或（又）從而教△（誨）之」

通仮例③、④は中古音明母 *m*-の「母」を声符とする「𢀛」が中古音曉母 *x*-の{悔}、{誨}を表す例である。このほか「𢀛」は中古音曉母 *x*-に変化する語を表すだけでなく、中古音明母 *m*-の{謀}を表す際にも用いられる。したがって「𢀛」「悔」「誨」「謀」はみな*hm-あるいは*m-に由来すると見なすことができる。

⑤：「古（故）君子多△（聞），齊而守之」

⑥：「將以△（問）之」

通仮例⑤では「𢀛」が中古音明母 *m*-{聞}を表し、同じく 14 号簡の「昏」が{聞}を表す。「𢀛」は中古音曉母 *x*-の昏声字であるため、「昏」は*hm-に由来し中古音までに摩擦音化を経て曉母 *x*-へ変化したと推定することができる。通仮例⑥では同じく明母 *m*-の{問}を表す。

⑦：「東周之客△（許）𢀛」

⑧：「東周之客△（許）𢀛」


通仮例⑦の𢀛は「無声字」であり、通仮例⑧𢀛は「亡声字」であるが、おそらくどちらも中古音曉母 *x*-の「𢀛」の異体字である¹⁹⁵。「𢀛」と「𢀛」は「無」を声符とするが、曉母 *x*-へ変化することから*hm-に由来すると考えられる。同様に「𢀛」は「亡」が声符であり、*hm-が再構される。後に「許」という字で表記されるようになるのは「𢀛」と「𢀛」と「𢀛」の声母（*hm-）が摩擦音化してからのことであろう。「許」は午声であるから*hng^saと再構され、戦国時代においては通用不可である¹⁹⁶。

以下の例は中古音疑母 *ng*-と曉母 *x*-（書母 *sy*-）が関わる例である：

¹⁹⁵ 包山楚簡には「𢀛」もある（包山楚簡 87 号簡「𢀛陽」）。

¹⁹⁶ Baxter and Sagart (2014:128-129) は「許」を*q^h(r)a?と再構し、「許」の声符である「午」を*[m].q^ha?と再構する。

表 4.1.1.3 *hng-の通仮例

⑧		執	*nget	*ŋet-s	ngjiejH	S 性 2, 5, 6(2)
		勢	*hngets	*ŋet-s	syejH	

⑧：「所善所不善，△（勢）也」

通仮例⑧は「執」が同じく執声字の「勢」を表す例である¹⁹⁷。「執」は中古音：蟹摂祭韻開口重紐 A 疑母 (ngets)であり、本来第一口蓋音化を経るはずの語である¹⁹⁸。

「勢」は中古音疑母 ng-の「執」を声符に持つことから、*hng-に由来する書母 sy-と考えられる：

表 4.1.1.4 「執」「勢」の再構音

	OC			MC		
執	*ngets	>		>	ngjiejH	> yì
勢	*hngets	>	(*x-)	>	syejH	> shì

「勢」はおそらく*x-を経由して、中古音書母 sy-へと変化したと推定される¹⁹⁹。「執」が口蓋音化しない理由については不明だが、言語層あるいは方言の差異を考えるしかない²⁰⁰。

4.1.2 「好」と丑声字

4.1.2.1 「好」について

ここでは具体的な事象（「好」と丑声字）を例に無声鼻音について検討を加えたい。

『説文解字』および段注によると「好」は会意字である：

『説文解字』：「美也。从女子」

『説文解字注』：『説文解字注』：「媿也。各本作美也。今正与上文媿為轉注也。好本謂女子引伸為凡美之称。凡物之好惡引伸為人情之好惡。本無二音而俗強別其音。从女子。（会意。呼皓切。古音在三部。）」

いずれも「好」を会意字と見なしており、異論は皆無である。藤堂（1965）『漢字語源辞典』、白川静（1984）『字統』も同様に会意字であるとする：

¹⁹⁷ 当該字には「女」が付加されている。

¹⁹⁸ 同じく執声字とされる「熱」*nget > nyet > rèのように口蓋音化するはずだが、口蓋音化していない。同様の音変化を経るものとして、「兒」等（*nge > nye > ér）がある。

¹⁹⁹ Type-A の無声鼻音の変化と並行する変化である（*hng^s- > x-）。Schuessler（2009:228）は*hjets > nhets と考えている。

²⁰⁰ Baxter and Sagart（2014:384）は“The failure of *ŋ- to palatalize to ny- in 執 *jets > ngjiejH > yì ‘to plant’ in unexplained, but it is worth noting that the *Guāngyùn* has no such syllable “nyeH,” which would be the expected result.”と述べるに留まる。「執」には書母 syejH の字音もあり、こちらは*hngets と再構され「勢」と同じように第一口蓋音化を経たと考えられることから、何らかの言語層の違いに起因すると考えるほかない。

藤堂明保『漢字語源辞典』

「女＋子（こども）」の会意字で、女性が子供を大切にかばってかわいがるさまを示す。だ
いじにしてかわいがる意を含む。

白川静『字統』:

会意……ト文に女を母の形に作り、あるいは子を抱く形に作るものがあって、婦人がその
子女を愛好することを示す字である。

藤堂、白川のどちらも「女性が子どもを抱く、大事にする様」であると述べているが、
これは甲骨文𡚦（『甲骨文合集』154）や金文𡚦（『殷周金文集成（一）』88）からもおそら
く正しいだろう。このほか金文には「女」が二つ表記される字形もある：𡚦（「婦好鼎」
『殷周金文集成（三）』1328）。

いずれにしても「好」は会意文字であるから、その上古音を再構するには中古音に依ら
ざるをえない。

4.1.2.2 「𡚦」について

次に「𡚦」について見ていきたい。「𡚦」という字は『説文』には見当たらないが、これ
に似た字形の「𡚦」が『説文』に見える：

『説文解字』: 𡚦，人姓也。从女丑声。商書曰、無有作𡚦。

『説文』によると「𡚦」は丑声であり、『商書』に「無有作𡚦」とあるようである。この『商
書』「無有作𡚦」に対応する今本『尚書』「洪範」には「無有作好」とあり、さらに『古文
尚書』では「亡有作𡚦」とあることから²⁰¹、「𡚦」と「𡚦」が{好}を表していることが
分かる²⁰²：

今本『尚書』:「無有作好」

『説文』:「商書曰、無有作𡚦」

『古文尚書』:「亡有作𡚦」

このような手順を踏まなくとも、「好」・「𡚦」・「𡚦」の関係性は以下に挙げる文献からも明
らかである：

²⁰¹ 『古文尚書』「亡有作𡚦」の「有」は月が無い字形。

²⁰² 『古文尚書』「𡚦」については、羅振玉『雲窗叢刻』「隸定古文尚書」卷七（民国三年景石印本 東洋文
庫所蔵）を参照。

『玉篇』:「𠂔, 古文好字。」

「𠂔」, 呼道切, 姓也。亦作𠂔。」

『広韻』:「𠂔, 人姓。」(上声、「好」の小韻に収められる)

「𠂔, 姓也。或作𠂔。」

『汗簡』:「𠂔, 好。」

『正字通』:「蓋𠂔即古文好。」

このような例から見ても「好」・「𠂔」・「𠂔」が異体字の関係にあることは間違い。しかしこれらの文献は伝世文献であり、後世に何らかの修正が加えられた可能性もある。そこで実際に出土資料に見える「好」と関連する例について見てみると、伝世文献だけでなく、戦国竹簡でも「好」と「𠂔」が見られる:

今本『礼記』「緇衣篇」:

子曰,「好賢如緇衣, 惡惡如巷伯」

郭店楚簡『緇衣』第1号簡「𠂔」:

夫子曰,「好𠂔(美)女(如)好茲(緇)衣, 亞(惡)=女(如)亞(惡)𠂔(巷)伯」

上博楚簡『緇衣』第1号簡「𠂔」:

子曰,「𠂔(好)𠂔(美)女(如)𠂔(好)𠂔(緇)衣」

*「𠂔」と「𠂔」は「丑」の位置が異なるが、本質的には同じことである。本稿では「𠂔」に統一する。

このように今本『礼記』緇衣篇と郭店楚簡『緇衣』において「好」とある箇所が上博楚簡

『緇衣』では𠂔「𠂔」とあることから、伝世文献の記述のように「好」、「𠂔」、「𠂔」が異体字の関係であると見て良いだろう²⁰³。この点に関して、研究者の見解は一致しているが、「𠂔」の説明にはやや違いがある。たとえば上博楚簡原注釈は「𠂔」を「从丑从子」と述べており、会意文字であると考えているようである²⁰⁴。これに対して、季旭昇(2004:80)は「「丑」可能是聲符,「丑」古屬透紐幽部,「好」古屬曉紐幽部,韻同,聲稍遠」として、

²⁰³ 「𠂔」という字は上博楚簡だけでなく、郭店楚簡『語叢二』第21号簡、22号簡にもみえる。ただし「丑」の字形がやや異なる:上博楚簡『緇衣』第1号簡:𠂔、郭店楚簡『語叢二』第22号簡:𠂔。馮勝君(2007:65-67)は郭店楚簡『語叢』の𠂔「𠂔」の「丑」は標準的な楚系文字であるとするが、上博楚簡『緇衣』の𠂔「𠂔」は齊系の字形と見なしている。

²⁰⁴ 原注釈(2001)「𠂔」从丑从子,「好」古文。《汗簡》「好」作「𠂔」。「好」或又作「𠂔」,从丑从女。」

「丑」を声符とみなしている。以下、「𡵓」が丑声であるかどうかについて検討を加えたい。

4.1.2.3 「𡵓」「𡵔」は会意文字か、形声文字か

「𡵓」と「𡵔」は果たして会意文字であろうか。それとも季旭昇（2004:80）が指摘するように「丑声」の形声文字であろうか。「好」字については、上述したように許慎以来の会意字説に従うのが妥当である。「𡵓」と「𡵔」は会意文字の「好」と異体字の関係にあるのだから、「𡵓」と「𡵔」も会意文字であるとする研究者もいるだろう。

そこで再び「𡵔」の『説文』説解を見てみたい：

『説文解字』：𡵔、人姓也。从女丑声。商書曰、無有作𡵔。

このように『説文』は「𡵔」を「从女丑声」と説解し、丑声の形声文字とする。では「𡵔」と「𡵓」はどのような字音を有していたのかということ、たとえば『玉篇』には次のようにある：

『玉篇』：「𡵓」、呼道切、姓也。亦作𡵔。」

『玉篇』には「呼道切」（豪韻上声曉母）とあり、「好」と同音である²⁰⁵。本稿では「好」を会意文字と見なし、「𡵓」「𡵔」を形声文字と考える。「𡵓」と「𡵔」を形声文字と見なすためには音韻論的な解釈を要する。換言すると、音韻論的に解釈できなければ形声文字であると見なすこともできない。

4.1.2.4 丑声字と無声鼻音

まずは丑声の諧声関係を確認しておきたい：

表 4.1.2.4.1 丑声の諧声関係

MC			
a.	丑	流摂尤韻三等開口上声徹母	<i>trhjuwX</i>
b.	紐	流摂尤韻三等開口上声娘母	<i>nrjuwX</i>
c.	粗	流摂尤韻三等開口上声日母	<i>nyuwX</i>
d.	羞	流摂尤韻三等開口平声心母	<i>sjuw</i>

丑声字の韻部に関しては、幽部*-uである²⁰⁶。声母に目を向けると、丑声字は中古音徹母 *trh-*、娘母 *nr-*、日母 *ny-*、心母 *s-*と諧声関係を有す。娘母 *nr-*と日母 *ny-*と諧声関係を有すことか

²⁰⁵ 「𡵔」は『広韻』「好」の小韻に収められるから、「好」「𡵔」は中古音で同音。去声は呼号切。

²⁰⁶ 丑声字の「𡵔」*trhjuwX*が『詩経』「唐風・山有枢」で「桮」、「埽」、「考」、「保」と押韻する。

ら、徹母 *trh-* と心母 *s-* は上古の **n-* から音変化したと推定される。**s- > n-* や **trh- > n-* というような音変化は自然さ (naturalness) に欠けるため適当ではない²⁰⁷。

本稿では*中古音徹母 *trh-* への音変化を考慮し、無声鼻音 **hn-* ([ŋ]) を「丑」に再構する：

表 4.1.2.4.2 丑声の音変化

OC		MC		例
<i>*hnr-</i>	>	徹母 <i>trh-</i>	丑	<i>*hnruʔ > trhjuwX > chǒu</i>
<i>*nʰ-</i>	>	泥母 <i>n-</i>	—	(<i>*nʰu</i>) > (<i>naw</i>) > (<i>náo</i>)
<i>*nr-</i>	>	娘母 <i>nrj-</i>	紐	<i>*nruʔ > nrjuwX > niǔ</i>
<i>*n-</i>	>	日母 <i>ny-</i>	粗	<i>*nuʔ > nyuwX > róu</i>
<i>*sn-</i>	>	心母 <i>n--</i>	羞	<i>*snu > sjuw > xiū</i>

このように「丑」に無声鼻音 **hn-* を再構することで、徹母 *trh-*、娘母 *nr-*、日母 *ny-* への音変化を説明することが可能である²⁰⁸。また preinitial **s-* を認めることで、中古音心母 *s-* への変化も推定することができる。

ここで思い出してもらいたいのが中古音曉母 *x-* の「𪛗」である。すでに述べたとおり、本稿では「𪛗」を丑声の形声文字と考えている。したがって以下のように「𪛗」に無声鼻音 **hn-* を再構する：

𪛗 **hnuʔ > xawX > hǎo* (西方の方言) 去声：**hnus > xawH > hào*

このように西方の方言で無声鼻音 **hn-* が中古音曉母 *x-* へ変化したと考えることによって、徹母 *trh-* 「丑」との諧声関係、曉母 *x-* 「𪛗」との諧声関係を説明することが可能である。これはちょうど泥母 *n-* 「難」の諧声関係と同様のものである（透母 *th-* 「灘」、曉母 *x-* 「漢」）：

難 **nʰan > nan > nán*

灘 **hnʰan > than > tān*

漢 **hnʰans > xanH > hàn* (西方の方言)

²⁰⁷ 方言に拠っては、端母が [l] や [n] に変化するものもある。たとえば劉綸鑫 (1999:155) によると、贛語新余方言で端母が [l] に読まれる例があり、たとえば「店」や「低」等がある。また顔森 (1981:110) によると、高安 (老屋周家) 方言でも「釣」が [l] に読まれる。このほか呉語の一部 (呉語処衢方言) で端母 *t-* [n] に読まれる例があり (『現代漢語方言概論』2002:78)、贛語撫州方言では来母 *l-* が [t-] に読まれる例が見られる。

²⁰⁸ Li (1945:333-342) によるとタイ語における漢語からの借用語「丑」は **pl-* と再構されるが、これについては起源が異なると考えるほかない。

4.1.2.5 「好」の上古音再構

では「好」の上古音はどのように再構したら良いだろうか。従来の研究によると、「好」は他の声母と諧声関係を有しないため、中古音から投影して* $x^s u?$ (* $x^s us$) のように再構されてきた²⁰⁹。

「好」と「𢞰」は異体字であるから同音のはずである。本稿では「𢞰」を* $hnu?$ (* $hnus$) と再構するため、「好」についても同様に* $hn^s u?$ (* $hn^s us$) と再構する。下表は丑声字の音変化をまとめたものである：

表 4.1.2.5.1 丑声字の音変化

	OC		MC		例
①	* n^s -	>	泥母 n -	—	(* $n^s u$) > (naw) > ($náo$)
②	* nr -	>	娘母 nrj -	紐	* $nru?$ > $nrjuwX$ > $niǔ$
③	* n -	>	日母 ny -	粗	* $nu?$ > $nyuwX$ > $róu$
④	* hn^s -	>	曉母 x -	好	* $hn^s u?$ > $xawX$ > $hǎo$ (West dialect)
⑤	* hn^s -	>	透母 th -	—	(* $hn^s u$) > ($thaw$) > ($tāo$)
⑥	* hnr -	>	徹母 trh -	丑	* $hnru?$ > $trhjuwX$ > $chǒu$
⑦	* hn -	>	書母 sy -	(手)	(* $hnu?$) > ($syuwX$) > ($shǒu$)
⑧	* sn -	>	心母 s -	羞	* snu > $sjuw$ > $xiū$

①は Type-A (非三等韻) の音変化である。これに対して Type-B (三等韻) は③のように中古音日母 ny -へと変化する。無声鼻音の④～⑦のうち、Type-A の④と⑤は方言によって中古音曉母 x -に変化するものと、(丑声の諧声系列には無いが) 理論的には透母 th -へ変化するものがある。⑦のように無声鼻音* hn -が Type-B の声母となる場合、中古音書母 sy -へと変化する²¹⁰。丑声の諧声系列にはこのような語は見えないが、たとえば「手」がこれに当たると考えられている²¹¹。また⑧のように preinitial * s -が付加される場合、中古音心母 s -へと変化する。

4.1.2.6 丑声字と単語家族

同じ声符を持つ漢字は、ある程度近似した意味を持つことが多いということは容易に推

²⁰⁹ 鄭張尚芳 (2003) は* $qhuu?$ 、Baxter (1992) は* $xu?(s)$ と再構する。さらに Baxter (2005) では楚簡の例を根拠に* hn -を考えるが Sagart and Baxter (2009:221-244)、Baxter and Sagart (2014:341) では* $qh^s u?$ とする。

²¹⁰ * hn - > * xj - > sy -というように* xj -の段階を経ている可能性がある。

²¹¹ 王力 (1982:231) は「𢞰」と「𢞰」が異文関係にあることを根拠に、「手」と「丑」を同じ単語家族に収める。

察できる²¹²。本稿では丑声字および「好」、さらには「手」が一つの単語家族を構成する可能性があると考えている：

表 4.1.2.6.1 語根 {NU} の単語家族

透母	徹母	泥	娘母	日母	心母	書母	曉母	基本義： 「手」で何かを持つ、抱く等、 手の動きに関すること
<i>th-</i>	<i>trh-</i>	<i>n-</i>	<i>nr-</i>	<i>ny-</i>	<i>s-</i>	<i>sy-</i>	<i>x-</i>	
	丑 <i>*hnru?</i>		紐 <i>*nru?</i>	粗 <i>*nu?</i>	羞 <i>*snu</i>	手 <i>*hnu?</i>	𢵿、好 <i>*hn^su?</i>	

「手」に関しては、王力（1982:231）が「𢵿」と「𢵿」を異体字とみなして同じ単語家族に収めている。また Unger（1995:131-137）は「𢵿」と「𢵿」の関係を根拠に「手」に鼻音**n-*を考えている²¹³。これ以降、「手」に**hn-*を考える仮説が多くの研究者によって支持されている²¹⁴。

藤堂（1965）は「肘」を「丑」や「手」と同じ単語家族に収める。白川静（1984）も「肘」の「寸」を「おそらく丑の省略形であろう」として「丑」との関係を指摘する。しかしながら「肘」は中古音知母 *tr-*—すなわち上古の *T-type*—であり、鼻音**n-*とは通用可能ではないため、「肘」を同じ単語家族に収めることはできない²¹⁵。

4.1.2.7 「好」と「𢵿」

唯一「好」と諧声関係があるとされるのが、中古音曉母 *xaw* の「𢵿」である。「𢵿」は『説文』によると「拔去田艸也。从蓐，好省聲。𢵿，籀文𢵿省。𢵿，𢵿或从休」とあり、「𢵿」は「好省声」、「𢵿」は「𢵿」の或体らしい。してみると「𢵿」、「𢵿」も**hn^su*に由来するかもしれない。さらに想像を逞しくさせると、「𢵿」の構成要素でもある「休」にも鼻音**n-*を再構することができるかもしれない：

²¹² たとえば『段注』一上四 *b* の「禪」の注に「聲與義同源。故諧聲之偏旁多與字義相近」とある。『説文入門』（p.131）を参照されたい。

²¹³ 偶然にも Unger（1995）と鄭張尚芳（1995）は同じ 1995 年に同様の見解を示しているようであるが、鄭張尚芳（1995）については筆者未見。鄭張尚芳（2003:154）を見てみると、「“手” *hnjuw*’。（“手”与“𢵿”为同族词，跟泰文手指 *niu*’，緬文 *hnjouh*、基诺语 *qu* 同源）」としており、やはり「手」に**hn-*を再構する。

²¹⁴ Sagart（1999:155-156）。*L-type*「首」と「手」に関しては、Unger（1995:131-137）を参照。

²¹⁵ 「肘」は戦国竹簡でしばしば「守」を表し、*T-type*と考えられる。4.3.5「由来不明の書母 *sy-*」を参照されたい。

表 4.1.2.7.1 「𦵏」と「休」の再構音

	OC	BS2014	MC
𦵏	*hn ^s u	*q ^h u	<i>xaw</i>
𦵏	*hn ^s u	*q ^h u	<i>xaw</i>
休	*hnu	*q ^h (r)u	<i>xjuw</i>

ただし「好」*hnuʔ/s が摩擦音化した後に (*hn- > x-)、「𦵏」や「𦵏」が好声字と見なされたとすると、「𦵏」「𦵏」に*hn-を考えることはできない。「𦵏」や「𦵏」そのものが鼻音*n-を有することを示す直接的な証拠が必要である。

4.1.3 戦国期の無声鼻音と摩擦音化

それでは無声鼻音は一体いつ頃摩擦音化したのだろうか。本稿で挙げた通仮例によると、戦国期にはまだ摩擦音化しておらず、鼻音性を有していたと考えられる。

たとえば中古音明母 *m*-の「母」を声符に持つ「𦵏」は一方では中古音曉母 *x*-の「悔」や「誨」を表し、もう一方で中古音明母 *m*-の「謀」を表す。これと同様に「𦵏」あるいは「昏」は明母 *m*-の{聞}や{問}を表す。「昏」は中古音曉母 *x*-であり、仮にすでに摩擦音化していたとすると戦国竹簡で{聞}や{問}を表すことはできないはずである。

これは*hn-についても同様である。たとえば上博楚簡『孔子詩論』第 10 号簡において「𦵏」は中古音曉母 *x*-{漢}を表す。その一方で、上博楚簡『性情論』第 15 号簡では「難」が中古音透母 *th*-の{嘆}を表す。したがって、*hn-も戦国時代には鼻音性を保っていたに違いない。仮に*hn-が *th*-へと破裂音化あるいは *x*-へと摩擦音化していたとすると、「難」で{漢}と{嘆}を表すことはできないからである。

漢代の馬王堆帛書『老子』に見える「惚恍」の「惚」は明母 *m*-「勿」が声符であるから「惚」は諧声系列に拠れば無声鼻音字*hm-である²¹⁶。ところが、「恍」の方は中古音曉母 *x*-である。したがって「惚恍」という語は上古で双声語ではなかったように見えるが(*qhw^sangʔ *hm^sət)、馬王堆『老子』ではこれを「沕望」と表記しており、「望」は中古音明母 *m*-であるから、やはり双声語である。この例から{惚恍}という語は前漢初期まで*hm^sət *hm^sang というように鼻音性を有していたことが分かる。仮に「沕(惚)」のほう摩擦音化していたとすると、明母 *m*-の「望」と双声ではなくなるからである。

以上の例から無声鼻音*hm-や*hn-が戦国時代まで鼻音性を保っていたと推定される。藤堂(1957:306-307)が述べるように、無声鼻音がすでに鼻音化した[h̥]のように変化していた可能性もあるが、その場合*hm-、*hn-、*hng-に由来する語が自由に通仮できたはずである。しかしそのような通仮例は戦国竹簡に見えないことから、少なくとも戦国末期までは[h̥]のように変化していなかったと考えられる。

²¹⁶ 今本『老子』14章、20章、21章に対応。

4.2 preinitial *s-と「西」「訊」の上古音再構

4.2.1 preinitial について

20 世紀中葉以降、多くの研究者がシナ・チベット祖語を視野に入れた上古音研究を進め、上古中国語の prefix や suffix に関する議論を活発に繰り広げている(梅祖麟(1989, 2000, 2012 等)、Handel (2012:81-82)、Sagart and Baxter (2012) 等)。近年では prefix や suffix だけでなく、たとえば Sagart (1999) や Baxter and Sagart (2014) のように infix*r-を認める研究者もある。

本稿では prefix を扱わないが、その可能性自体を否定しているわけではない。今後の研究、たとえば単語家族の体系的研究によって明らかにされるものと考えている。本稿では prefix を扱わないが、諧声系列から preinitial *s-を認める必要があることは 4.1「無声鼻音再構の歴史」でも述べたとおりである。

Baxter (1992:222) は「Clusters with *s-」として、*s-が付加されるタイプを 2 種に分類している。一つが「*s-+resonants (共鳴音)」であり、もう一つが「*s+stops (破裂音)」である。まずは Preinitial *s-が必要とされる共鳴音 (resonant) の諧声関係を見てみよう：

表 4.2.1.1 「女」の諧声関係

絮	： 心母 <i>sjoH</i>	< *snas	← Preinitial *s-により心母 <i>s</i> -へ変化
奴	： 泥母 <i>nu</i>	< *n ^h a	← Type-A
女	： 娘母 <i>nrjoX</i>	< *nra?	
恕	： 書母 <i>syoH</i>	< *hnas	← *hn- > sy- (Type-B)
帑	： 透母 <i>thangX</i>	< *hna ^h ng?	← *hn ^h - > th- (Type-A)

このように女声字には*n-が再構されるが、「絮」は中古音で心母 *s*-になるため preinitial *s-が再構される。次に中古音明母 *m*-と関連する例を見てみよう：

表 4.2.1.2 「戌」の諧声関係

戌	： 心母 <i>swit</i>	< *smit	← Preinitial *s-により心母 <i>s</i> -へ変化
滅	： 明母 <i>mjiet</i>	< *met	
威	： 曉母 <i>xjwiet</i>	< *hmet	← *hm- > xy- (Type-B)

さらに以下の様な例もある：

表 4.2.1.3 「喪」の諧声関係

喪	： 心母 <i>sang</i>	< *sm ^h ang	← Preinitial *s-により心母 <i>s</i> -へ変化
荒	： 曉母 <i>xwang</i>	< *hm ^h ang	← *hm ^h - > x- (Type-A)
亡	： 明母 <i>mjang</i>	< *mang	

このように中古音明母 *m*-も心母と諧声関係があるため、preinitial **s*-が認められる。ただし後者の例（「喪」）に関しては異論もある。たとえば甲骨文字を見てみると、「喪」は本来「亡声」ではなく、「𣎵」のように「桑」と「口」から構成される。西周金文になると、「𣎵」のように「桑」の根が「亡」へと変化する。これについて大西（2007:62）は「「亡」（*mjang）の音が「喪」（*sang）と似ていたために、象形的な根の形を書くより単独の文字としても存在する「亡」を書いたほうが覚えやすいからに違いない。また「亡」は「なくなる」「うしなう」等の意味があり、「喪」と意味的にも通じること、このような変化をもたらした要因に数えることができよう」と述べ、「喪」に**sm*-を再構する考えに否定的である。このように語義の類似と音系の類似によって、諧声原則に反するにも拘らず、文字の一部分を声符としてしまう例は少なくない²¹⁷。Baxter and Sagart (2014:143) では依然として「喪」に**s-m*-を再構し、**s*-を prefix と考えているが、出土資料に依拠するならば「喪」と「亡」の諧声関係については否定的にならざるを得ない。もちろん「桑」そのものが**sm*-という声母を有しており、「亡」を加えることによってその字音をより明確に表したというように考えることもできる。

このほか中古音疑母 *ng*-と関連する心母 *s*-もある：

表 4.2.1.4 「魚」の諧声関係

穌	： 心母 <i>su</i>	< <i>*sngʰa</i>	← Preinitial <i>*s</i> -により心母 <i>s</i> -へ変化
魚	： 疑母 <i>ngjo</i>	< <i>*nga</i>	

このように中古音疑母 *ng*-も心母 *s*-と諧声関係があり、preinitial **s*-が再構される。このほか Baxter and Sagart (2014:52) は「魚」と中古音来母 *l*-の「魯」との諧声関係も認めており、「魯」を**r.ŋʰaʔ*、「魚」を**[r.ŋ]a*と再構するが、その正否については不明である。

次に流音と心母 *s*-が諧声関係を有す例を見てみよう：

表 4.2.1.5 「攸」の諧声関係

修	： 心母 <i>sjuw</i>	< <i>*sliw</i>	← Preinitial <i>*s</i> -により心母 <i>s</i> -へ変化
條	： 定母 <i>dew</i>	< <i>*fiw</i>	← Type-A
悠	： 以母 <i>yuw</i>	< <i>*liw</i>	← Type-B
條	： 透母 <i>thaw</i>	< <i>*hlʰiw</i>	← <i>*hlʰ-</i> > <i>th</i> (Type-A)

諧声系列上に以母 *y*-「悠」があることから、攸声字は L-type である。このように L-type の諧声系列上にも中古音心母 *s*-があり、preinitial **s*-が再構される。

²¹⁷ 孫玉文（2005:3）、梅祖麟（2007:1-2）等も同様に「喪」に**sm*-を再構することに否定的である。

すでに述べたとおり (3.5.1)、Jaxontov (1960a/1986)、Mei (2001:1-28) 等は中古音曉母 x -と鼻音 n -, m -, ng -の諧声関係を説明すべく $*s$ -を鼻音の前に再構するが (例: $*sm$ - > $x^{(w)}m$ - > $x^{(w)}$ -)、本稿では無声鼻音を再構することはすでに述べたとおりである (4.1)。以下は無声鼻音の例である：

表 4.2.1.6 無声鼻音







	OC	BS2014	MC	呉音	漢音
墨	$*m^{\circ}\acute{a}k$	$*C.m^{\circ}\acute{a}k$	<i>mok</i>	モク	ボク
黒	$*hm^{\circ}\acute{a}k$	$*\eta^{\circ}\acute{a}k$	<i>xok</i>	コク	コク
難	$*n^{\circ}an$	$*n^{\circ}ar$	<i>nan</i>	ナン	ダン
灘	$*hn^{\circ}an$ (East)	$*\eta^{\circ}ar$ -s (East)	<i>than</i>		タン
漢	$*hn^{\circ}an$ (West)	$*\eta^{\circ}ar$ -s (West)	<i>xanH</i>	カン	カン
午	$\eta^{\circ}a?$	$*m-qh^{\circ}a?$	<i>nguX</i>	ゴ	ゴ
許	$h\eta a?$	$*q^h(r)a?$	<i>xjoX</i>	コ	キヨ


もちろんこれらの無声鼻音が上古音以前の段階において $*s$ -に由来する可能性もあるが ($*sN$ - > $*N$)、ここで $*s$ -を認めることによって体系上の矛盾が生じる。したがって本論文では諧声系列上で中古音鼻音 m -, n -, ng -、流音 l -と関係があり、尚且つ中古音心母 s -へと変化する語に $*s$ -を再構する ($*sN$ -、 $*sl$ - > s -)。

4.2.2 声符「人」と preinitial $*s$ -

具体的な例として、ここでは「信」について見てみよう。「信」は『説文解字』において会意文字とされるが、実際には「人」が声符の役割を担っており、上古音の段階で $*n$ -を有していたと考えられている²¹⁸。「人」を声符に持つと考えられる語とそれぞれの上古音価は以下の通りである：

表 4.2.2.1 声符「人」

	図版		OC	BS2014	中古音	出典
①		人	$*nin$	$*ni[\eta]$	<i>nyin</i>	S 緇 3
②		年	$*n^{\circ}in$	$*C.ni[\eta]$	<i>nen</i>	S 周 24
③		千	$*s\eta^{\circ}in$	$*s.\eta^{\circ}i[\eta]$	<i>tshen</i>	S 容 51
④		身	$*hnin$	$*\eta in$	<i>syin</i>	S 緇 7
⑤	 	信 躬	$*snins$	$*s-ni[\eta]s$	<i>sinH</i>	S 孔詩 22 梁十九年鼎

説文古文「信」：

²¹⁸ 元の戴侗『六書故』。古屋昭弘 (2006:217) ではこれらが単語家族である可能性について言及されている。

⑥	仁				睡秦律 95	説文古文「仁」:
	𠂔	*nin	*niŋ	nyin	S 容 51	𠂔
	𠂔				S 緇 7	𠂔

中古音清母 *tsh-*「千」、書母 *sy-*「身」、日母 *ny-*「仁」、心母 *s-*「信」はみな「人」を声符とすることから **n-* が再構される。Baxter and Sagart (2014) は「身」を除く語に **-ŋ* を再構する可能性を示している²¹⁹。実際に「年」は楚簡中で上古音耕部 **-eng* の {佞} (*nʰengs > nengH*) を表すこともあり²²⁰、これも「年」に **-ng* を再構する証拠の一つとなるだろう。例⑥の「仁」の図版は睡虎地秦簡のものである。通常、楚簡では身声字や千声字によって {仁} が表される。説文古文には「千」に作る字 (𠂔) も収められている。

4.2.3 「千」の上古音価

「千」は **sqʰin* と再構されるように無声鼻音 **ŋ-* が考えられているが、「信」には **snins* のように有声鼻音 **n-* が再構される。つまり **s+* 無声鼻音 **sqʰ-* が中古音清母 *tsh-* へと変化するのに対して (「千」)、**s-* 有声鼻音である **snʰ-* は中古音心母 *s-* へ変化する (「信」) :

「千」: **sqʰ-* \rightarrow **sthʰ-* \rightarrow *tsh-*

「信」: **snʰ-* \rightarrow *s-*

「信」と「千」はそれぞれ中古音三等韻と四等韻である。してみると三等韻 (Type-B) と非三等韻 (Type-A) が相補分布 (complementary distribution) を成しているかのようであるため、鼻音に有声・無声の対立を負わせることは余剰的に見える。したがって以下のように音韻論的に処理を加えることができるかもしれない :

Type-A 「千」: **snʰ-* \rightarrow *tsh-*

Type-B 「信」: **sn > s-*

ところが実際には Type-A でも中古音心母 *s-* に変化する例が見られるため (後述「西」)、やはり **sn-* と **sqʰ-* のように鼻音の有声性に対立を設けなければならない。また **shn-* (*[sq]*) \rightarrow **sth-* \rightarrow *tsh-* を認めることにより、無声鼻音 **hn-* (*[ŋ]*) の音変化が **hn-* (*[ŋ]*) \rightarrow *th-* という音変化と並行した関係になるため (「灘」等)、より整合的である :

千: **shn-* (*[sq]*) \rightarrow **sth-* \rightarrow *tsh-*

灘: **hn-* (*[ŋ]*) \rightarrow **th-* \rightarrow *th-*

²¹⁹ ただし角括弧[]が付されており、現時点で確定しているわけではないようである。

²²⁰ 孔子詩論 8 号簡等。ちなみに「佞」自体が『説文解字』において「信」の省声とされる。

以下、「人」の諧声系列の音変化を挙げる：

表 4.2.3.1 声符「人」の音変化

OC	MC	例
*n ^ς -	> 泥母 <i>n-</i>	佞 *n ^ς ings > <i>nengH</i> > nìng
*n-	> 日母 <i>ny-</i>	人、仁 *nin > <i>nyin</i> > rén
*sn ^(ϕ) -	> 心母 <i>s-</i>	信 *snins > <i>sinH</i> > xìn
*sŋ ^(ϕ) -	> 清母 <i>tsh-</i>	千 *shnin > *sthin > <i>tshen</i> > qiān
*ŋ ^ς -	> 曉母 <i>x-</i>	(*hn in) > (<i>xen</i>) > xiān
*ŋ ^ς -	> 透母 <i>th-</i>	(*hn in) > (<i>then</i>) > tiān
*ŋ-	> 書母 <i>sy-</i>	身 *hnin > <i>syin</i> > shēn

理論的には中古音曉母 *x-*、透母 *th-*へと変化する語があるはずだが、「人」の諧声系列上には現れない。以下では preinitial *s-の具体的な例として「西」と「訊」の上古音価について検討を加えたい²²¹。

4.2.4 「西」の上古音再構

まずは「西」の『説文解字』の説解を確認しておこう：

𠂔 鳥在巢上。象形日在西方而鳥棲，故因以為東西之西。凡西之属皆从西。棲，西或从木妻。𠂔，古文西。𠂔，古文西。𠂔，籀文西。先稽切。

『説文』によると、「西」は「鳥が巢の上にいる様」を表す象形文字であり、「日が西方に位置すると鳥は棲るので、それを東西の西とした。「棲」は「西」の異体字で、「木」「妻」から構成される」とある²²²。このように『説文解字』には「西」の音価を示す直接的な記述が見られない。したがってこれまでの研究では中古音から投影し、シンプルに声母*s-を再構するのが一般的であった：

²²¹ 「西」「訊」の音価は The 48th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics (ICSTLL48: University of California Santa Barbara)にて口頭発表した The reconstruction of the word WEST in Old Chinese Phonology に基づく。

²²² 訳は『漢字海』を参照。

表 4.2.4.1 「西」の先行研究

西 {WEST}	
Karlgren 1954	*siər
李方桂 1971	*siəd
Baxter 1992	*sij
鄭張尚芳 2003	*suuul

これは『説文』だけでなく中国諸方言や多言語への借用語に目を向けても有用なデータが得られないため、*s-を再構する以外に術が無かったためであろう²²³。

これに対して Unger (1990:60) は「西」が「迺」の声符の役割を担っているとして、*sn-を推定する。Sagart (2004:69-76) や Baxter and Sagart (2014) も Unger (1990) の仮説を支持し、「西」を*s-nʰər と再構する²²⁴。

ところが問題はそれほど単純ではない。いまそれぞれの韻部に目を向けると、「西」は微部*-ər であり、「迺」は之部上声*-əʔであるため、「西」と「迺」は韻尾が合わないのである（「西」:*-r 韻尾、「迺」:ゼロ韻尾）。これについて Baxter and Sagart (2014:146-147) は“Perhaps the apparent confusion of rhymes result from the occurrence of the adverb ‘then’ in an unstressed position.”として、ストレスとの関連性に言及している。

また「迺」という語はすでに甲骨文に見えるが、同義と思われる「乃」も同時期に存在しており、二つの語の違いも明確ではない。

このように幾つか問題点があり、「西」が「迺」の声符であるということを示す直接的な証拠はないが、その可能性を否定するだけの根拠もまた持ち合わせていない。以下、甲骨文と金文に見える「西」と「迺」を挙げる：

表 4.2.4.2 「西」「迺」の甲骨文・金文

西		(西) 土受年 (甲骨文合集 9742 正)
		(西) 方受年 (甲骨文合集 33244)
迺	九日  至 (甲骨文合集 19449)	
		唯是喪或 (國) (毛公鼎)

「迺」と「西」の諧声関係に加えて、Sagart (2004: 69-76) は①「西」を声符とする語、②「尼」との語源的関係、③「東」との関係、④TB との関係等から「西」の上古音再構を試みている。

まず①「西」を声符とする語について見てみよう。「西」を声符に有していると思われる代表的な語は以下の通りである：

²²³ 中国語諸方言では[ɕ] (北京)、[s] (蘇州)、[ʃ] (広州)、[θ] (福鼎)、[tʃ] (陽江) 等と実現される。

²²⁴ Sagart (2004) では*s-nil とする。

表 4.2.4.3 声符「西」の諧声系列

			MC	Meanings
西	xī	<	<i>sej</i>	west
迺	nǎi	<	<i>nojX</i>	then
哂	shěn	<	<i>syinX</i>	smile
茜	qiàn	<	<i>tshenH</i>	madder
洒	sǎ	<	<i>sreaH</i> ²²⁵	wash, sprinkle
哂 ²²⁶	xùn	<	<i>sinH</i>	interrogate

まず重要なのが中古音書母 *sy-*「哂」である。後述するが（3.6「書母 *sy-*の再構」）、中古音書母 *sy-*は近年の上古音研究によって、少なくとも5種の上古音声母に由来することが明らかとなっている²²⁷：

- (イ) *st-に由来する書母—「書」
- (ロ) *hl-[l]、無声流音に由来する書母—「説」
- (ハ) *hn-[ŋ]、無声齒茎鼻音に由来する書母—「恕」
- (ニ) *hng-[ŋ̊]、無声軟口蓋鼻音に由来する書母—「勢」
- (ホ) *qh-[q^h]、無声有気口蓋垂音に由来する書母—「赦」

してみると中古音 *sy-*である「哂」もこのいずれかの上古音声母に由来する可能性が高い。いま仮に「迺」との諧声関係を重視した Unger (1990:60)、Sagart (2004:69-76)、Baxter and Sagart (2014:147) に従うならば、「哂」は(ハ) *hn-[ŋ]に由来すると考えられる。

このほか Baxter and Sagart (2014:147) は形態論的な視点から「西」の声母を *snʰ- とする。参考として挙げておこう：

“In terms of morphology, 西 xi < *s-nʰər can be connected to the words meaning ‘stop’ or ‘rest’; *s- is the prefix forming oblique nominal from verb roots:”

(14) 尼 *nʰər? > *nejX* > ní “to stop” (intransitive?)

尼 *nʰər?-s > *nejH* > ní “to stop, obstruct” (transitive?); cf.

柅 *n<r>[ə]r? > *nrijX* > nǐ “a stopper for carriages”

西 *s-nʰər > *sʰər > *sej* > xī “(a place for stopping:) west”; the same word as

棲 *s-nʰər > *sej* > qī “bird’s nest.” (Mandarin qī is irregular.)

Baxter and Sagart (2014:147)

²²⁵ 『広韻』には先禮切、所賣切の二音が収められる。

²²⁶ 「訊」の古文。「言」と「西」の古文から構成される。正確には「𠂔」に作る方がいいと思うが、便宜上「哂」に作る。

²²⁷ 野原・秋谷 (2014:340-350)。このほか少数だが、*ɾ-が中古音書母とも関係する（「爍」*ɾewk）。

このように Baxter and Sagart (2014) は「西」を {stop} あるいは {rest} という意味の語と関係があるとし²²⁸、*s-を prefix と考えているようである。

さらにこれに関連して Sagart (2004:73) が『説文解字』の「東」の説解にも注目している点は実に興味深い。『説文解字』は「東」を「東，動也」と説解しており、これはまさに {stop}、{rest} という意味と語源的に関係がある（とされる）「棲」「西」と正反対の意味を成すからである²²⁹：

表 4.2.4.4 「東」と「西」

東	西
*tʰung	*sʰnər
East	West
{start moving}	{stop, rest}
日の出	日の入り

「尼」等との形態論的な関係性については正否を判断しかねるが、本稿でも「西」が上古音の段階において鼻音*n-を有していたと考えている。それは以上の論拠に加え他の例からも*sn-再構が支持されるからである。以下、「訊」の上古音再構を試みるとともに「西」との関係性について検討を加えたい。

4.2.5 「訊」の上古音再構

『説文』は「訊」の古文が「西」の古文を文字構成要素の一部として有していると述べている：

訊，問也。从言𠂔聲。 (𠂔𠂔)，古文訊从𠂔。

「𠂔」は「西」の古文である。すなわち古文「訊」は「西」を声符に有していた可能性が高い。以下、「訊」の甲骨、金文、戦国文字についてそれぞれ確認していきたい。まず甲骨文には以下のようにある：

貞：勿訊。

²²⁸ 「尼」等の意味は『五音集韻』、『広雅』、『広韻』、『爾雅』郭璞注等から得ており、時代としてはやや遅い。

²²⁹ Sagart(2004:73): “The meaning ‘rest, stop,’ which can be assigned to root *nɿl, is a good counterpart to the meaning ‘start moving,’ which *Shuōwén* tells us underlies 東 ‘east.’” 「日の出」「日の入り」という対は古屋昭弘教授からヒントを頂いた。

庚戌卜，賓，貞：其訊。



とが{訊}に相当する字である。これら二字は「口」と跪いた「人」から構成されており、さらに「人」は後ろで手を縛られている。したがって多くの研究者が当該字を{interrogate}という意の「訊」に同定している。またこれに「絲」が加えられることもあり²³⁰、縄で縛られている様がより具体的に表されている字形もある：



『甲骨文合集』36389

次に金文を見てみよう：



(多友) 執訊廿又三人。



(『多友鼎』)

公車折首百又十又五人，執訊三人。



これは多友が二十三人を捉え尋問したこと、兵車が百十五人の首を落とし、三人を捉え尋問したことを伝えるものであるが、とが{訊}を表している²³¹。甲骨文字と比べても、「足」が強調されている点を除けばあまり変化はない。これが戦国楚簡になるとやや形が変化する：

競（景）平王就鄭壽，





之於廟…，鄭壽辭，不敢答，王固





之…

上博楚簡『平王問王子木』第1号簡

これは景平王が宗廟において鄭壽に質問をする場面である。鄭壽は辞して答えないが、そ

れでも王が執拗に訊いてくるという場面である。これら二字とは{訊}を表している

²³⁰ 「絲」は本来「きぬいと」等を指すが、ここでは手を縛り自由を奪うことのできる「縄」のようなものであると推察される。

²³¹ 「執訊」という語は『詩経』「鹿鳴之什・出車」等にも見える（「執訊獲醜」）。このほか同様の例として、（『號季子白盤』）等がある。また裘錫圭（1978/2012:6）は『史牆盤』に見えるも「訊」に隸定するが、これは「索」「人」「口」に从う字である。



と考えられているが、多くの研究者がこれを「𠂔」と隸定する²³²。したがって「係」と「言」に作ると考えられるが、先述したとおり、甲骨の「訊」には「絲」が加えておらず、「口」と「人」から構成されることから「係」というのは後の変化であろう²³³。

これに対して蘇建洲（2007）は「人」が声符の役割を担っているという重要な指摘をしている。さらに「訊」の字形変化を次のように描写している：



𠂔 → 𠂔 → 𠂔 → 𠂔 → 𠂔 → 𠂔 → 訊

蘇建洲（2007）は「人」が「千」へと変化し、その後「千」が「𠂔」へと変化したと考えているようである。この蘇建洲案の正否については判断しかねるが、「人」が声符の役割を担っているという点は極めて重要な指摘である。「人」が{訊}の声符を担っているとする、{訊}も*n-相当の声母を有していたと推定されるからである。ここでもうひとつ{訊}が*n-と関連すると思われる例を挙げておこう：

禹乃建鼓於廷，以為民之有謁告者  焉。 上博楚簡『容成氏』第22号簡

これは「禹が廷に鼓を用意し、民の中で謁見し報告することを望むものがあれば、知らせることができるようにした」ということを述べている。ここに見える  は従来「𠂔」と「支」からなる字と隸定されていたが、蘇建洲（2003）はこれを「𠂔」と「千」から構成されると述べており、いまではこれが定説となっている。では当該字は何という語を表しているのだろうか。陳剣（2003）は『管子』「桓公問」に近似した文が見えるとして、上に挙げた「容成氏」の  を「訊」に読む：

禹立諫鼓於朝而備訊唉。 『管子』「桓公問」
「禹は諫鼓を朝に設け、問訊と哀嘆に備えた」²³⁴

陳剣（2003）はさらに「訊」と  の声符である「千」は音が近いと通仮可能であるとも述べている。このように「訊」と  はそれぞれ「人」と「千」を声符としている可能性が高い。すでに述べたとおり、「人」と「千」はそれぞれ*nin、*sq'inと再構される。してみると「訊」も*sninsのように再構されるであろう。

ここで思い出してもらいたいのが、「訊」の説文古文である。『説文』によると「訊」は

²³² 郭永秉（2007）等参照。

²³³ 「係」へと変化したのはおそらく{縛る}という意味が影響しているのであろう

²³⁴ ここでの「訊」は{問}というよりは、『爾雅』「釋詁」「…訊…，告也」や「釋言」「訊，言也」のような意味である。

「訊，問也。从言卂聲。」²³⁵ (誦訊)，古文訊从囟」と説解され、「訊」の古文は「西」の古文を文字構成要素として有している。したがって「西」自体も声母に**n*-を有していた可能性が高い。もちろん「西」は微部**-ər*であり、「人」「千」「訊」等は真部**-in*であるため韻部がやや異なるが、脂部と微部、真部と文部はしばしば交流する²³⁵。よって本稿では以下のように再構する：

表 4.2.5.1 「人」「千」「訊」「西」の再構音

	OC	BS2014	MC
人	* <i>nin</i>	* <i>ni[ŋ]</i>	<i>nyin</i>
千	* <i>sn̥in</i>	* <i>s.ŋ̊i[ŋ]</i>	<i>tshen</i>
訊	* <i>snins</i>	* <i>[s]i[n]-s</i>	<i>sinH</i>
西	* <i>sn̥ər</i>	* <i>s-n̥ər</i>	<i>sej</i>

4.2.6 「西」を声符とする語

ここで他の「西」を声符とする語を見ておこう：

表 4.2.6.1 声符「西」の諧声系列

			MC	Meanings
西	<i>xī</i>	<	<i>sej</i>	west
迺	<i>nǎi</i>	<	<i>nojX</i>	then
晒	<i>shěn</i>	<	<i>syinX</i>	smile
茜	<i>qiàn</i>	<	<i>tshenH</i>	madder
洒	<i>sǎ</i>	<	<i>sreaH</i>	wash, sprinkle
訊 (訊)	<i>xùn</i>	<	<i>sinH</i>	interrogate

「晒」{smile}については、すでに述べたとおり、中古音書母 *sy-*であることから、無声鼻音**ŋ̊-*が再構される。

「茜」{madder}については、**sn̥əns* > **sthəns* > *tshenH* という音変化を想定しており、これはちょうど「人」を声符に持つ「千」の音変化と並行するものである(**sn̥in* > *sthin* > *tshen*)。

「洒」{wash, sprinkle}については、**snrərʔs* > **srərʔs* > *sreaH* というように**n-*の脱落を考えている。これに対して Baxter and Sagart (2014:57) は「洒」および「灑」を**Cə.s<ɾ>ərʔ-s* というように再構する。「灑」に関しては、出土資料中には管見の限り見えないが、「洒」

²³⁵ たとえば『老子』「玄之又玄，眾妙之門」では真部「玄」と文部「門」が押韻する。このほか『楚辞』「天問」等でも真文通押例が確認される。伝世文献だけでなく、出土資料中でも真部と文部が通用される例が見られる。ただしこれが方言的なものなのか、臨時的なものなのかについてはよく分からない。真文、脂部微部等の通押例は王力『詩経韻読』等を参照されたい。

は甲骨文にすでに見える。ただし甲骨では地名に用いられるだけであり、その音価推定の助けにはなりそうにない。時代を下ると、睡虎地秦簡日書甲種 58 背壹では「洒以沙」とあり、同簡貳には「西」で {洒} を表す例も見られる（「取白茅及黄土而西（洒）之」²³⁶）。またやや時代が下るが、馬王堆帛書『五十二病方』にも「傳（敷）樂（藥）前洒以温水」とある。

「灑」は出土資料中には見られないが、面白いことに『説文解字』では「灑、汎也」とあり、「汎」を引いてみると「汎、灑也」とある。本論文ではすでに「汎」を *snins と再構したが、同じく「汎」を声符に持つ「汎」も *snins である蓋然性が高い。してみると「洒」「灑」「汎」はみな *sn- を声母に有していたと考えられる。

このほか Baxter and Sagart (2014:57) は「洒」および「灑」は「洗」{wash} と形態論的な関係があるという見解を示し²³⁷、「洗」を *[s]ər? と再構するが、現時点では「洗」との関係について有効な解答を持ち合わせていない。

それぞれの上古音を付したものが下表である：

表 4.2.6.2 声符「西」の上古音

	OC		MC		BS2014	Meanings	
西	*sn̥ər	>	<i>sej</i>	>	xī	*sn̥ər	west
迺	*n̥əʔ	>	<i>nojX</i>	>	nǎi	*n̥ərʔ (MC irreg.)	then
晒	*hnənʔ	>	<i>syinX</i>	>	shěn	*n̥ərʔ	smile
茜	*shn̥əns	>	<i>tshenH</i>	>	qiàn	—	madder
洒灑	*snrərʔ	>	<i>sreaX</i>	>	sǎ	*Cə.s<r>ərʔ-s	wash, sprinkle
汎	*snins	>	<i>sinH</i>	>	xùn	—	wash, sprinkle
洒（汎）	*snins	>	<i>sinH</i>	>	xùn	*[s]i[n]-s	interrogate

4.2.7 他の例—「娥」、「洒」

4.2.7.1 「娥」

「洒」が {娥} を表すという興味深い例もある。上博楚簡『子羔』第 10 号簡に以下の様な文例が見られる：

契之母，又（有）迺（娥）是（氏）之女也。



上博楚簡『子羔』10 号簡


〔契の母は有娥氏の娘である〕

²³⁶ 当時は「白茅（チガヤ）」と「黄土」で鬼を払うことができると信じられていたようである（劉樂賢（1993：243））。

²³⁷ *Cə.s- はベトナム語の High-register [z] が中古音心母 s- に対応する際に再構される（Baxter and Sagart (2014:186-187)）。また「灑」は出土資料には管見の限り見られない。

「又迺是」を「有娥氏」に読むことに関しては伝世文献等から支持される²³⁸。また「又」を{有}に、「是」を{氏}に読む用法は楚系文字資料の特徴である。ここで問題になるのは「迺」を{娥}に読む点であるが、中古音心母 *s*-の「娥」は日母 *ny*-「戎」を声符としていることから **snung* と再構される。したがって「迺」 **snʰəʔ* と「娥」 **snung* の通仮が考えられるが、それぞれ之部 **-ə* と冬部 **-ung* であり、韻部に問題があるため直ちに通仮とは考え難い。これは「迺（娥）」の一文字前の「又（有）」の影響によって、本来「娥」と書くべきところを「迺」と誤記してしまったのかも知れない²³⁹。つまり本来は「有娥氏」 **gʷəʔ *snung *deʔ* と表記すべきところを、一文字前の「有」の主母音 **-ə* の影響によって、「娥」 **snung* を「迺」 **snʰəʔ* と誤記した可能性がある²⁴⁰。

表 4.2.7.1 「娥」

図版		OC	BS2014	MC	出典
	迺	<i>*nʰərʔ</i>	<i>*nʰərʔ</i>	<i>nojX</i>	S 子羔 10
	娥	<i>*snung</i>	—	<i>song</i>	

4.2.7.2 「誨」

「誨」の説文古文「誨」が楚簡にも見えるためここで簡単に紹介しておきたい。以下の例は上博楚簡『姑成家父』第1号簡の例である：

姑（苦）成蒙（家）父事刺（厲）公，爲士宛（怨），行正（政）強，以誨（惡）於刺（厲）公。 上博楚簡『姑成家父』第1号簡

〔苦成家父は厲公に仕えていたが、士に怨まれていた。激しく強い政治を行っていたので厲公からも悪まれた²⁴¹〕

下線部「強」について、上博楚簡の原注釈は「強」を「地名」とするが、沈培（2005）は孟逢生（2005）が上博楚簡『相邦之道』第4号簡に見える「誨」を「誨」の説文古文「誨」であると指摘したことを受け、当該字についても「誨」に隸定する。「誨」の意味に関しては、裘錫圭（1978/2012:6）が『史牆盤』に見える「誨」を「誨圉」に隸定し{迅猛強圉}の意味に読むことと、当該箇所も「誨」と「強」が並列して現れていることに着目し、同様の意味を表しているとする。いずれにしても、当該箇所は「誨強」を「誨強」あるいは「迅強」であるとして、「迅猛（激しい）」の意味に読まれる。

²³⁸ 『史記』「殷本紀」「殷契，母曰簡狄，有娥氏之女」。

²³⁹ 古屋昭弘先生から助言を賜った。「戎」は出土資料中でしばしば{農}を表す。

²⁴⁰ これは当時どのように書写していたかにもよる。読み手と書き手が居たのではないだろうか。

²⁴¹ 日本語訳は戸内俊介（2010）参照。当該箇所における「厲公」を指す「刺」はやや形が特殊であり（𠂔）、
「宛」の字釈についても諸説ある。

4.3 書母 sy-の再構

4.3.1 先行研究

近年の上古音研究によって中古音書母 sy-は少なくとも 5 種の上古音声母に由来することが明らかとなっている：

(1) *ST に由来する書母 (T-type) : *st- > sy-

上述したとおり (3.2 「T-type と L-type」)、中古音書母 sy-は T-type だけでなく L-type の諧声系列にも出現する²⁴²。したがって諧声分布に基づき T-type に由来する書母 sy-なのか、L-type に由来する書母 sy-なのか判断するほかない。

たとえば下表 3.6.1.1 は「者声」の諧声分布を表したものであるが、者声の諧声系列には中古音端母 t-の「都」、知母 tr-「猪」、章母 tsy-「諸」があるため、上古の T-type に由来すると推定される。したがって中古音書母 sy-の「書」も T-type に由来する書母 sy-—すなわち *ST に由来する書母 sy-—であると推定される。「書」は*sta と再構される。

表 4.3.1.1 *ST に由来する書母 (T-type) の諧声分布—者声—

端	透	定	知	徹	澄	章	昌	禅	書	船	以	邪
t-	th-	d-	tr-	thr-	dr-	tsy-	tsyh-	dzy-	sy-	zy-	y-	z-
都		屠	猪			諸		署	書			緒

鄭張尚芳 (2003) の体系には*st-に由来する書母 sy-がないため、「書」も*hlja と再構される。しかし T-type と L-type は諧声系列だけでなく、戦国楚簡の通仮においても明確に区別されるため鄭張尚芳 (2003) のように T-type に由来する語に*hlj-を再構することはできない。

(2) 無声側面音 [ʰ] に由来する書母 (L-type) : *hl- > sy-

T-type と同様に、L-type の諧声系列上にも書母字 sy-が現れる。たとえば兌声の諧声系列には中古音以母 y-の「悦」があるため、兌声の語は L-type であると推定される。したがって中古音書母 sy-の「説」は*hlot と再構される (以母 y-「説」は*lot)。下表は兌声の諧声分布である。

表 4.3.1.2 無声側面音 L-type に由来する書母 sy-の諧声分布

端	透	定	知	徹	澄	章	昌	禅	書	船	以	邪
t-	th-	d-	tr-	thr-	dr-	tsy-	tsyh-	dzy-	sy-	zy-	y-	z-
	脱	兌							説		悦	

²⁴² 同じように透母 th-、定母 d-、昌母 tshy-、禅母 dzy-、邪母 z-は T-type の諧声系列にも、L-type の諧声系列にも現れる。

(3) 無声鼻音[ŋ]に由来する書母 *sy-* : *hn- > *sy-*

泥母 *n-*や娘母 *nr-*、日母 *ny-*と諧声関係を有す書母 *sy-*には無声鼻音[ŋ]が再構される。無声鼻音に Type-B (三等韻) の音節が後続する場合、中古音書母 *sy-*に音変化する (*HN > *sy-/__Type-B syllable*)。Type-A (非三等韻) が後続する場合は中古音曉母 *x-*へと変化するこ
とについてはすでに述べたとおりである²⁴³ (4.1 「無声鼻音再構の歴史」)。

表 4.3.1.3 無声鼻音[ŋ]に由来する書母 *sy-*

泥	娘	日	書
<i>n-</i>	<i>nr-</i>	<i>ny-</i>	<i>sy-</i>
	女	如	恕

(4) 無声鼻音[ŋ]に由来する書母 *sy-* : *hng- > *x- > *sy-*

疑母 *ng-*と諧声関係にある書母 *sy-*にも無声鼻音が推定される。*hng- > *xj- > *sy-*のような音変化が推定される。

表 4.3.1.4 無声鼻音[ŋ]に由来する書母 *sy-*

疑	日	書
<i>ng-</i>	<i>ny-</i>	<i>sy-</i>
執	熱	勢

(5) 口蓋垂音に由来する書母 : *qh- > *sy-*

中古音以母 *y-*のうち、牙喉音と諧声関係のあるものには口蓋垂音**g-*が再構される。亦声字の諧声系列には曉母 *x-*等があるため、「亦」は**gAk*のように再構される。これに伴って、「亦」を声符に持つ「螯」や「赦」も口蓋垂音に由来する書母 *sy-*である蓋然性が高い。

表 4.3.1.5 口蓋垂音に由来する書母

曉	以	書
<i>x-</i>	<i>y-</i>	<i>sy-</i>
赫	亦	螯、赦

「螯」も従来の研究では牙喉音と考えられてきたが、大西 (2007:66) は {螯} を舌音系に由来するとしている。これは {螯} が郭店楚簡『老子』甲本第 33 号簡において「𪛗 (𪛗)」のように若声で表記されているからである。してみると語としての {螯} はおそらく無声鼻音**hnak* (> *syak*) と再構される。「螯」という表記は後の表記である可能性が高い。「赦」

²⁴³ 無声鼻音に Type-B が後続する場合も *xj- のような音を経由している可能性が高い (*hn- > (*xj-) > *sy-*)。

に関しては、*qhAks と再構される²⁴⁴。

以下、出土資料中に見える書母 sy- について検討を加えたい。

4.3.2 *ST に由来する書母 sy- (T-type)

すでに述べたとおり、T-type と通用関係にある中古音書母 sy- は *ST に由来する。以下、出土資料に見える書母字の振る舞いを確認したい。

(1) 「著」: {書}、**「韻」**: {奢}

「書」は『説文』で「書，著也。从聿者聲」と説解される。声符「者」は中古音章母 tsy- であることから T-type である。したがって「書」の上古音は *sta と再構される。出土資料中においても中古音知母 tr- 「著」が {書} を表す：

①：𠂔 (詩) 著 (書) 豐 (禮) 樂



上博楚簡『性情論』第 8 号簡

②：𠂔 (詩) 著 (書) 豐 (禮) 樂



郭店楚簡『性自命出』第 15 号簡

また者声の **「韻」** も中古音書母 sy- の {奢} を表す：

③：連尹 **韻** (奢)



清華簡『繫年』第 81 号簡

以下、「者」「著」「書」「奢」の再構音である：

表 4.3.2.1 「者」「著」「書」「奢」の再構音

	OC		MC		BS2014	
者	*tAʔ (馬三)	>	tsyaeX	>	zhě	*tAʔ
著	*traks	>	trjoH	>	zhù	*t<r>aks
書	*sta	>	syo	>	shū	*s-ta
奢	*stA (麻三)	>	syae	>	shē	*s.t ^h A ²⁴⁵

(2) 「升」「陞」: {登} {拯}

「升」と「升」を声符に持つ「陞」はどちらも中古音書母 sy- である。「升」「陞」の諧声系列上には中古音章母 tsy- 「拊」があるため、T-type の書母一すなわち *ST に由来する書母

²⁴⁴ 「赦」の声符と思われる中古音以母 y- 「亦」は *gAk と再構する。

²⁴⁵ 中古音書母 sy- に変化する上古の *st- は Proto-Min の *tʃ- に対応するが、「奢」は Proto-Min の *tʃh- に対応するため、*s.t^h が再構される (Baxter and Sagart (2014:138))。「暑」も同様に *s.t^haʔ と再構される。

sy-と考えられる。実際に、「陞」は戦国楚簡において中古音端母 *t*-の {登}、章母 *tsy*-の {拯} を表す：

④：不陞 {拯} 丌 (其) 隨



上博楚簡『周易』第 48 号簡

参考：馬王堆『周易』「不登 (拯) 其隨」、今本『周易』「不拯其隨」

⑤：高山陞 (登)



上博楚簡『容成氏』第 31 号簡

このほか「登」と登声字は {蒸} を表すこともある：

⑥：𤇗 (蒸) 一𤇗 (膳)



包山楚簡『遺索』第 257 号簡

⑦：今新 (薪) 登 (蒸) 思 (使) 吳 (虞) 守之



上博楚簡『競公瘡』第 8 号簡

参考：『春秋左氏伝』「昭公二十二年」、『晏子春秋』「外篇第七」「藪之薪蒸，虞侯守之」。

さらに「登」が {證} あるいは {徵} を表すこともある：

⑧：幣帛，所以爲信與登 (證、徵) 也



上博楚簡『性情論』第 13 号簡

このように T-type 「登」「拯」「蒸」「證、徵」と通用関係にある「升」「陞」も T-type に由来する書母 (*ST) であると推定される²⁴⁶。

表 4.3.2.2 「登」「拯」「蒸」「證、徵」「拊」「升、陞」の再構音

	OC		MC		BS2014	
登	*tʰəŋ	>	<i>tong</i>	>	dēng	*k-təŋ / *təŋ
拯	*tʰəŋʔ	>	<i>tsyŋX</i>	>	zhěng	*təŋʔ
蒸	*təŋ	>	<i>tsyŋ</i>	>	zhēng	*təŋ
證	*təŋs	>	<i>tsyŋH</i>	>	zhèng	*təŋ-s
徵	*trəŋ	>	<i>tring</i>	>	zhēng	*trəŋ
拊	*təŋʔ	>	<i>tsyŋX</i>	>	zhěng	*təŋʔ
升、陞	*stəŋ	>	<i>syŋ</i>	>	shēng	*s-təŋ

²⁴⁶ 「登」「蒸」「升」は語根を同じくすると考えられるが、Baxter and Sagart (2014:59-60) は Type-A と Type-B は単語家族を構成しないと考えているようであり、「登」と同じ単語家族に所属するのは「増」、「層」である。

(3) 「種」: {春}

「種」は中古音定母 *d-*、澄母 *dr-* の字音を有し、『説文』によると「種」は童声である。「童」と「重」は密接な関連があり、たとえば「童」は『説文』で「重省声」とされる。戦国楚簡に目を向けると、「童」がしばしば {重} を表し、「𣎵」が {董} を表す：

⑨：飤（食）不童（重）春（味）



上博楚簡『容成氏』第 21 号簡

⑩：𣎵（董）之用畏



清華簡『祭公』第 11 号簡

「重」の諧声系列には中古音端母 *t-*、知母 *tr-*、章母 *tj-* があるため、「重」「童」「種」はみな T-type である。その「種」が戦国楚簡において中古音書母 *sy-* の {春} を表す：

⑪：飤（食）不童（重）春（味），朝不車逆，種（春）不糲（穀）米



上博楚簡「容成氏」第 21 号簡

【仮説 3】に従い (3.2.4)、T-type 「種」と通仮関係にある「春」は *ST に由来する書母 *sy-* と考えられる²⁴⁷。各語の再構音は以下のとおり：

表 4.3.2.3 「童」「重」「春」の再構音

	OC		MC		BS2014	
童	*dʰong	>	<i>duwng</i>	>	tóng	*[d]ʰon
重	*drongʔ	>	<i>drjowngX</i>	>	zhòng	*N-t<r>onʔ
種	*dʰong	>	<i>duwng</i>	>	tóng	—
	*drong	>	<i>drjowng</i>	>	zhǒng	—
春	*stong	>	<i>syowng</i>	>	chōng	*s-ton

(4) 「識」: {職}、{特}

『説文』に「識，常也。一曰知也。从言戠聲」とあり、「戠」は中古音章母 *tsy-* である。さらにその諧声系列上には中古音章母 *tsy-* 「職」がある。よって戠声の「識」は *ST に由来する書母 *sy-* である。以下の例は「戠」が {職} を表す例である：

²⁴⁷ 『説文』新附字には中古音知母 *tr-* 「椿」が見える。

⑫：夫生而又（有）𣪠（職）事者也



郭店楚簡『尊德義』第 18 号簡

このほか「𣪠」は中古音定母 *d-* {特} を表す：

⑬：賽禱邵（昭）王，𣪠（特）牛饋之



包山楚簡 第 214 号簡

「特」は中古音邪母 *z-* の寺声である²⁴⁸。邪母 *z-* の扱いは研究者によって異なり、たとえば鄭張尚芳（2003：472）は *ljus と再構する²⁴⁹。しかし、「寺」はそもそも「之声」であり、「之」が中古音章母 *tsy-* であることから、L-type ではなく T-type である。したがって本稿では「寺」を *sdəs と再構する。以下、「𣪠」「職」「特」「識」の再構音を挙げる：

表 4.3.2.4 「𣪠」「職」「特」「寺」「識」の再構音

	OC		MC		BS2014
𣪠	*tək	>	<i>tsyik</i>	>	zhí
職	*tək	>	<i>tsyik</i>	>	zhí
特	*dʰək	>	<i>dok</i>	>	tè
寺	*sdəs	>	<i>ziH</i>	>	sì
識	*stək	>	<i>syik</i>	>	shí

（5）「石」：{庶}

「石」は中古音禪母 *dzy-* であり、上古の T-type に由来する。これは出土資料の通仮例からも支持される。たとえば石声字「𠂔」が中古音章母 *tsy-* {庶} を表す：

⑭：競（景）平王命王子木𠂔（𠂔）城父



上博楚簡『平王與王子木』第 1 号簡

さらに「𠂔」が中古音書母 *sy-* {庶} を表す：

⑮：𠂔（庶）民智（知）𠂔（説）之事𠂔（鬼）也



上博楚簡『魯邦大旱』第 2 号簡

²⁴⁸ 『説文』「朴，牛父也。从牛寺聲。」

²⁴⁹ 野原（2009:70）では、舌音のうち「以母・船母・邪母と諧声関係のある語は L-type と再構する」として、中古音邪母 *z-* は L-type に由来すると述べていたが、現在では *sd- に由来する中古音邪母 *z-* もあると考えている。したがって野原（2009:79）で例外と位置付けた中古音邪母 *z-* 「庶」も T-type—すなわち *sd- に由来すると考えられる。

このように石声字が中古音書母 *sy-*「庶」と庶声の章母 *tsy-*「蹠」を表す。さらに包山楚簡では「庶」が中古音章母 *tsy-* {炙} を表す例が見える：

⑬：庶（炙）鷄



包山楚簡『遣策』第 258 号、『筴牌』第 190-1 号簡

以上の⑭～⑯の例により、本稿では「庶」を*ST に由来する書母 *sy-*と推定する。このほか石声字の「筴」が中古音邪母 *z-* {席} を表すこともある：

⑰：君子筴（覃）筴（席）



郭店楚簡『成之聞之』第 34 号簡

研究者によって「席」を L-type と見なす研究者もあるが²⁵⁰、『説文』には「席，从巾庶省。古文席从石省」とあるように「席」は「庶」や「石」と関係がある。さらに例⑰で挙げたように、石声字「筴」が {席} を表していることから「席」が T-type であることは確実であり、*sdAk と再構される。「石」「蹠」「庶」「炙」「席」の再構音は以下のとおり：

表 4.3.2.5 「石」「蹠」「庶」「炙」「席」

	OC		MC		BS2014
石	*dAk	>	<i>dzyek</i>	>	shí
蹠	*tAK	>	<i>tsyek</i>	>	zhí
庶	*stAks	>	<i>syoH</i>	>	shù
炙	*tAk/s	>	<i>tsyek / tsyaeH</i>	>	zhì
席	*sdAk	>	<i>zjek</i>	>	xí

(6)「弔」: {叔}

「𠂔」、「叔」は中古音書母 *sy-*であるが、その諧声関係は甚だ複雑である。たとえば中古音端母 *t-*「督」、禪母 *dzy-*「淑」、精母 *ts-*「荼」、從母 *dz-*「寂」等があり、諧声系列からではその音価を再構しがたいが、戦国竹簡から手掛かりを見つけることができる：

⑱：𠂔（鮑）𠂔（叔）𠂔（牙）



上博楚簡『鮑叔牙與隰朋之諫言』第 9 号簡

⑲：周公弔（叔）旦爲主（主）



清華簡『耆夜』第 2 号簡

²⁵⁰ たとえば鄭張尚芳 (2003) は *ljaag、潘悟云は *sclag と再構する。注 249 で述べたとおり、野原 (2009:79) でも同様に「席」を T-type の例外字として扱っている。

②⑩：官（管）弔（叔）



清華簡『金縢』第7号簡

このように中古音端母 *t*-「弔」が{叔}を表す。「弔」と{叔}の通仮は特に人名によく見られる通仮であるが、弔声は禪母 *dzy*-{淑}も表す：

②⑪：𠂔（淑）人君子



上博楚簡『緇衣』第3号簡

以上の通仮例⑩～⑪によって、中古音書母 *sy*-「叔」は上古の**ST*に由来すると推定される：

表 4.3.2.6 「弔」「淑」「叔」の再構音

	OC		MC		BS2014
弔	* <i>t</i> iwk	>	<i>tek</i>	>	diào
淑	* <i>d</i> iwk	>	<i>dzyuwk</i>	>	shū
叔	* <i>sti</i> wk	>	<i>syuwk</i>	>	shū
					* <i>t</i> [i]wk/s
					*[d]iwk
					* <i>s</i> -tiwk

(7)「商」：{賞}

「商」は『説文』によると「从尙章省聲」とあるため、「商」に**ST*に由来すると考えられる。出土資料中の通仮例に目を向けると、「商」は金文で{賞}を表す。たとえば『小子啟尊』に「子光商（賞）小子…」とある。「賞」も中古音書母 *sy*-であるが、「賞」の声符「尙」は中古音禪母 *dzy*-であるから、「賞」は**ST*に由来する書母 *sy*-であることが分かる。ここでは中古音禪母 *dzy*-「尙」の通仮例を見ておこう：

②⑫：𠂔（呂）上（尙）甫（夫）



清華簡『耆夜』第2号簡

「上」も中古音禪母 *dzy*-である。このように「尙」「上」はみな *T*-type であり、これらと諧声・通仮関係にある「賞」と「商」も**ST*に由来する書母 *sy*-であると推定される：

表 4.3.2.7 「尙」「賞」「上」「商」の再構音

	OC		MC		BS2014
尙	* <i>dangs</i>	>	<i>dzyangH</i>	>	shàng
賞	* <i>stang</i> ?	>	<i>syangX</i>	>	shǎng
上	* <i>dang</i> ?	>	<i>dzyangX</i>	>	shàng
商	* <i>stang</i>	>	<i>syang</i>	>	shāng
					*[d]aŋ-s
					* <i>s</i> -taŋ
					*daŋ?-s
					* <i>s</i> -taŋ

以上（１）～（８）が戦国竹簡に見える中古音書母 *sy-* と関係のある通仮例である。すでに 3.2 「T-type と L-type」で述べたように、T-type と L-type は戦国竹簡において通仮しない（【仮説 1】～【仮説 3】）。これは書母 *sy-* においても同様であり、*ST に由来する書母は T-type とのみ通仮関係にあり、Ltype に由来する書母（無声側面音*hl-）とは通仮しない。このことは戦国時代において*st-が未だに*t-を有していたことを示すと言えるかもしれない。

以下では L-type の書母 *sy-* について見ていきたい。

4.3.3 無声側面音*hl- ([ɿ]) に由来する書母 *sy-* (L-type)

L-type に関しては本稿 3.2 「T-type と L-type」で述べたとおりであるが、ここでもう一度 L-type の音変化を確認しておきたい：

表 4.3.3.1 L-type の音変化

	OC	MC	例
Type-A	*ɿ-	<i>d-</i> (定)	兌 *ɿots > <i>dwaɟH</i>
	*hlʰ- [ɿ]	<i>th-</i> (透)	脱 *hlʰot > <i>thwat</i> ²⁵¹
	*hlʰ- [ɿ]	<i>x-</i> (曉) 西方方言	— (*hlʰot) > (<i>xwat</i>) ²⁵²
Type-B	*ɿ-	<i>y-</i> (以母)	悦 *lot > <i>ywet</i>
	*hl- [ɿ]	<i>sy-</i> (書母)	説 *hlot > <i>sywet</i>

無声側面音*hl- ([ɿ]) は、無声側面音*hl-[ɿ]+Type B という環境のもとで、中古音書母 *sy-* に変化する：*hl ([ɿ]) > *sy-* / __Type B

これに対して、無声側面音*hl- ([ɿ]) +Type A という環境にある場合、無声側面音*hl- ([ɿ]) は中古音透母 *th-* へと音変化する：*hlʰ ([ɿ]) > *th-* / __Type A。また西方の方言 (West dialect) では中古音曉母 *x-* へと変化したと推定する：*hlʰ ([ɿ]) > *x-* / __Type A (West dialect)

以下、出土資料中に見える無声側面音 [ɿ] (L-type) に由来する書母 *sy-* の通仮例を見ていきたい。

（８）「乗」：{勝}

「乗」は中古音船母 *zy-* であるから、L-type であると推定される。この「乗」を声符に有す「𨔵」は楚簡において {勝} を表す：

²⁵¹ Baxter and Sagart (2014:180) では中古音透母 *th-* の「脱」を *mə-ɿʰot と再構する。これは Proto-Mien で *ʔdut (“to peel off / escape”) と再構されることに拠る。pMien の *ʔdut は *nt- の有声化が起きた後のものと推定されるため (*nt- > ʔd-)、漢語側で *mə-ɿʰot から *mə-ɿʰot に変化した後に勉語 (Mien languages) に借用されたと推定される。Proto-Mien は Ratlif (2010) に拠る。

²⁵² 理論的には *hlʰ- に由来する曉母 *x-* が有るはずであるが、兌声の諧声系列上には見えない。

②③：一宮之人不𢇛 (勝)



郭店楚簡『成之聞之』第8号簡

戦国竹簡において、L-type「𢇛」「乘」と中古音書母 *sy-* の「勝」が通仮関係にあるということは、「勝」も L-type に由来すると考えることができる。実際に、「勝」の諧声系列を見ると、中古音以母 *y-*「勝」、船母 *zy-*「勝」があり「勝」が L-type であることは確実である。

表 4.3.3.2 「乘」「勝」「勝」「勝」

	OC		MC		BS2014
乘	*mləŋ	>	zyiŋ	>	chéng
勝	*hləŋ/s	>	syiŋ	>	shēng
勝	*ləŋs	>	yŋH	>	yìng
勝	*mləŋ	>	zyiŋ	>	chéng

(9)「司」: {始}

戦国楚簡において、中古音心母 *s-*「司」はしばしば中古音書母 *sy-* {始}、邪母 *z-* {辭} を表す：

②④：子之爲善也，又（有）與𢇛 (始)



郭店楚簡『五行』第18号簡

②⑤：不肯惠聖（聽）亡（無）𢇛之詞（辭），乃不訓（順）是𢇛（治）



清華簡『皇門』第8号簡

「始」と「治」は台声であり、「台」は以声であるから、いずれも L-type であると推定される。したがってこれら L-type の語と通仮する「司」もまた L-type の可能性が高い。「司」は中古音心母 *s-* であるから、*sl- のように preinitial *s- が再構される (*sl- > s-)。

また中古音邪母 *z-* の「辭」は他の声母と諧声関係を有しないため、諧声系列からは上古音を推定しがたいが、戦国竹簡において L-type の「司」と通仮していることから「辭」も L-type であり、*sələ (あるいは *zələ?) と再構される。

表 4.3.3.3 「詞」「司」「辭」「始」の再構音

	OC		MC		BS2014	
詞	*sələ (zlə?)	>	zi	>	cí	*sə.lə
司	*slə	>	si	>	sī	*s-lə
辭	*sələ	>	zi	>	cí	*sə.lə
始	*hlə?	>	sviX	>	shǐ	*lə?

(10)「聖」: {聽}

「聖」は楚簡中で {聽} や {聲} を表す。「聖」と「聽」には語源的な関係があると考えられている。『説文』によると「聖」は呈声であるが、甲骨文や金文から見て、「聖」は呈声字と見なすことはできないだろう。たとえば金文では「聖」は「𠂔」と「人」から作られるが、後に「人」が「𠂔」へと声符化し、さらに「口」と「𠂔」が「呈」となったと考えられる。いずれにせよ『説文』の「呈声」という説解は必ずしも正しくないと言えよう。以下に挙げる通仮例は、戦国竹簡に見える「聖」の通仮例である：

②⑥：不肯惠聖（聽）亡（無）皐之詞（辭） 清華簡『皇門』第8号簡

また「聖」は {聽} だけでなく {聲} も表す。通仮例②⑧は一字目の「聖」が {聽} を表し、二字目が {聲} を表していることから、文脈に依存して {聽} と {聲} を読み分けていたと考えるほかない：

②⑦：凡聖（聲），其出於情也信



郭店楚簡『性自命出』第23号簡

②⑧：聖（聽）𠂔（琴）𠂔（瑟）之聖（聲）



郭店楚簡『性自命出』第24号簡

従来、「聲」は第一口蓋音化の代表的な例とされており、本来牙喉音系の声母を有していたと考えられてきた。

たとえば鄭張尚芳（2003:445）は「聲」を *qhjeŋ とするように「聲」に口蓋垂音を再構する。古屋（2006:212-215）は「聖」と {聲} の通仮を根拠に、「しかも（同音であるからには）「聖」はもとより「聲」も śjeŋ のように口蓋音化していた可能性が高い」として、第一口蓋音化の時期を戦国まで遡らせる。Schuessler（2009:136）も同様に第一口蓋音化の例と見なし、「聲」を *hjeŋ と再構する。これに対して大西（2007:68-69）は「聲」が牙喉音系であったと認められる直接的な証拠がないとして、これを舌音系と見なしている。Baxter and Sagart（2014b）は具体的に音価として、無声側面音 [ɬ] を再構する²⁵³。

²⁵³ Baxter（1992）では *xjeŋ としている。

「殷」の諧声系列を見てみると、梗摂清韻三等開口平声書母 *sy-* の「聲」のほか、梗摂青韻開口四等去声溪母 *kh-* の「磬」「罄」、曉母 *x-* の「馨」のみである。この分布によれば、Type-B の「聲」が第一口蓋音化を経て、Type-A が牙喉音を保存したと考えるのが自然である：

表 4.3.3.4 「聖」「聲」

MC		中古音音韻地位		
聖	<i>syengH</i>	梗摂清韻三等開口去声書母	Type B	元々無声側面音 *hl-
聲	<i>syeng</i>	梗摂清韻三等開口平声書母	Type B	← 口蓋音化 ?
磬	<i>khengH</i>	梗摂青韻四等開口去声溪母	Type A	← 咽頭化 (ʕ) が口蓋音化を阻止
馨	<i>xeng</i>	梗摂青韻四等開口平声曉母	Type A	← 咽頭化 (ʕ) が口蓋音化を阻止

この分布に基づく、「聲」が牙喉音に由来する蓋然性が高いが、大西（2007:68-69）で述べられるとおり、「聲」が牙喉音系であることを示す直接的な根拠はない。現時点ではどちらの可能性も否定することができないため、本稿では「聲」に無声側面音 [ɿ] を再構しておくことにする。

本稿 3.2 「T-type と L-type」で述べたとおり、T-type と L-type は戦国竹簡中で通仮しない。したがって、T-type に由来する書母 *sy-* の *ST と L-type に由来する書母 *sy-* の *hl- は合流していなかったはずである。仮に「聲」が牙喉音に由来する書母 *sy-* であり、L-type の「聖」と通仮しているとすると、「聖」はすでに *hl- ではなかった可能性が高い。そうすると【仮説 1】～【仮説 3】に矛盾が生じてしまう。よって本稿では「聲」を *hl- と再構しておくことにする²⁵⁴：

表 4.3.3.5 「聖」「聽」「聲」の再構音

	OC		MC		BS2014
聖	*hlengs	>	<i>syengH</i>	>	*[ɿ]eŋ-s
聽	*hlʰeng	>	<i>theng</i>	>	*[ɿ]ʰeŋ
聲	*hleng	>	<i>syeng</i>	>	*[ɿ]eŋ

4.3.4 無声鼻音 *hn- ([ŋ]) に由来する書母 *sy-*

本稿 3.5 「無声鼻音 HN」で述べたとおり、無声鼻音も咽頭化の有無によって異なる音変化を被る：

²⁵⁴ 4.4 「『少』の上古音再構」でも述べるように、「少」という表記は戦国竹簡において {少} も {小} も表す。「少」と「小」は音韻論的に関係しないため、当時は文脈に依存してそれぞれ読み替えていたと考えるほかない。つまり「少」という表記は {少} の字音と {小} の字音を表すことが可能であったということになる。これは字音の近似性と語義の近似性に起因すると思われるが、「聖」と {聽}、{聲} の関係も同様に「聖」が L-type の {聽} の字音と牙喉音 {聲} の字音を表すことができたと考えすることはできないだろうか。

表 4.3.4.1 無声鼻音の音変化

	OC	MC	例
Type-A	*n ^ʰ -	<i>n-</i> (泥)	難 *n ^ʰ an > <i>nan</i>
	*hn ^ʰ - [ŋ]	<i>th</i> (透)	灘 *hn ^ʰ an > <i>than</i>
		<i>x-</i> (曉母) 西方方言	漢 *hn ^ʰ ans > <i>xanH</i>
Type-B	*n-	<i>ny-</i> (日母)	如 *na > <i>nyo</i>
	*hn- [ŋ]	<i>sy-</i> (書母)	恕 *hnas > <i>syoH</i>

無声鼻音*hn- ([ŋ]) は無声鼻音+Type B という環境のもとで中古音書母 *sy-*へと音変化する：
*hn- ([ŋ]) > *sy-* / __Type B

以下、出土資料中に見える無声鼻音*hn-[ŋ]に由来する中古音書母 *sy-*の通仮例に検討を加えたい：

(11) 「身」：{仁}

すでに述べたとおり (3.5.5.2 「声符「人」と preinitial *s-))、「身」は人声である。「人」の諧声系列上には「身」「年」「千」「仁」等があり、みな*N-に由来すると考えられている。楚簡中では身声字の「愬」がしばしば中古音日母 *ny-* {仁} を表す：

㉑：百𠂔 (姓) 𠂔 (以) 愬 (仁) 𠂔 (道?)

上博楚簡『緇衣』第7号簡

中古音日母 *ny-* 「仁」と書母 *sy-* の「身」が通用関係にあるということは、「身」はこの時まだ鼻音性を有していた蓋然性が高い。戦国期における無声鼻音の鼻音性に関しては、4.1.3 「戦国期の無声鼻音と摩擦音化」で述べたとおりである。

表 4.3.4.2 「身」「仁」

	OC		MC		BS2014	
身	*hnin	>	<i>syin</i>	>	shēn	*[ŋ]i[ŋ]
仁	*nin	>	<i>nyin</i>	>	rén	*niŋ

4.3.5 由来不明の書母 *sy-*

2.6 「戦国竹簡を研究対象とする意義」で述べたとおり、語によっては押韻もせず諧声関係を欠く語もあり、再構すら難しい語も少なくない。これはいわゆる「復元の強度」の低い語であるが²⁵⁵、本稿ではそのような語を「由来不明の語」と称す。

²⁵⁵ 「復元の強度」については平田 (2010:62-65) 参照。

本節で扱う書母 *sy-* にも復元強度の低い由来不明の語がある。以下、由来不明の書母 *sy-* の再構を試みたい：

(12) 「獸」: {守}

中古音書母 *sy-* 「守」は『説文』によると会意文字であり（「从宀从寸」）、他の声母と諧声関係を有しないため、由来不明の書母 *sy-* と考えられる。しかし甲骨文字や金文によると、「守」は本来会意文字ではなく「肘声」の字であると指摘される²⁵⁶。たとえば何琳儀（1989）は「守...又下加飾筆，並非寸字。戰國文字承襲商周文字，或从肘聲」と述べている。「肘」は中古音知母 *tr-* であり、その上古音は *T-type* 以外あり得ない。実際に戦国竹簡でも「肘」が {守} を表している例が見られる：

⑩：敬𠂔（慎）呂（以）肘（守）之



郭店楚簡『成之聞之』第3号簡

このように *T-type* の「肘」が書母 *sy-* の {守} を表していることから、【仮説3】に基づき、「守」は **ST* に由来する書母 *sy-* であると考えられる。

このほか「守」は「獸」とも通用関係にある。『説文』によると、「獸」は会意文字であるが（「从兽从犬」）²⁵⁷、楚簡中でしばしば {守} を表す：

⑪：古（故）君子多𠂔（聞）齊而獸（守）之



郭店楚簡『緇衣』第38号簡

参考：「古（故）君子多𠂔（聞）齊而守之」 上博楚簡『緇衣』第19号簡

中古音書母 *sy-* の「獸」が **ST* に由来する「守」を表していることから、【仮説3】に基づき、「獸」も **ST* に由来すると考えられる：

表 4.3.5.1 「肘」「守」「獸」の再構音

	OC		MC		BS2014
肘	<i>*tru?</i>	>	<i>trjuwX</i>	> zhǒu	<i>*t-[k]<r>u?</i>
守	<i>*stu?</i>	>	<i>syuwX</i>	> shǒu	<i>*s-tu?</i>
獸	<i>*stus</i>	>	<i>syuwH</i>	> shòu	<i>*s.t^hu(?)s</i> ²⁵⁸

²⁵⁶ 『甲骨文合集』4899 .

²⁵⁷ 鄭張尚芳（2003:467）は「獸」を形声文字であると見なし、**qhljus* と再構する。

²⁵⁸ Baxter and Sagart（2014:139）において、「獸」が **s.t^h-* というように有気音の **-t^h-* が再構されるのは客家語の一部で *[ts^h-]* と実現されるためである。また「獸」以外に、「奢」のような閩祖語で **tsh-* と再構される書母 **ST* にはやはり **s.t^h-* が再構される。

鄭張尚芳 (2003:467) は「獸」を *qhljus と再構するが、楚簡の通仮例に基づくならば *ST の方がより蓋然性が高いと言えよう。

Baxter and Sagart (2014:31-32) は「肘」と「九」の語源的な関係を認めるため、prefix *t-* を **-k-* の前に再構する。「九」を「肘」の象形文字であるとするものに、丁山 (1928:94)、季旭昇 (2010:991) 等がある²⁵⁹。Baxter and Sagart (2014) も **t-k-* という再構は一時的な処置であるとする一方で、チベット文語 (WT) の *khru* ‘cubit (腕尺)」、ギャロン語 (rGyalrong) の *tə²²kru³³* ‘elbow’ を挙げる²⁶⁰。TB との比較による仮説がどれほど有効かは不明だが、興味深い指摘である。

(13) 「𠂔」: {𠂔}

中古音書母 *sy-* の「𠂔」は『説文』で「盛也。从大从𠂔，𠂔亦聲。此燕召公𠂔。讀若郝」とある。「𠂔」は中古音幫母 *p-* であるから、書母 *sy-* 「𠂔」の声符とは考えにくい。多くの研究者が「讀若郝」を根拠に軟口蓋音や口蓋垂音を再構する（「郝」は曉母 *x-*）²⁶¹。ところが戦国竹簡中では「𠂔」が {𠂔} を表す：

③2：召公保𠂔（𠂔）爲夾（介）



清華簡『耆夜』第1号簡

「𠂔」は中古音以母 *y-* であるから、L-type に由来する可能性が高い。してみると L-type 「𠂔」と戦国竹簡で通仮関係にある「𠂔」もまた同様に L-type に由来する書母 *sy-* である蓋然性が高い：

表 4.3.5.2 「郝」「𠂔」「𠂔」

	OC		MC		BS2014
郝	*qh ^h ak	>	xak	>	hǎo
𠂔	*lAk	>	yek	>	yì
𠂔	*hlAk	>	syek	>	shì
					*[q ^h](r)Ak

『説文』で「𠂔，…讀若郝」とある点については、**hl-* が曉母 *x-* のように変化した方言の存在を考えなければならない²⁶²。

²⁵⁹ 丁山 (1928:94) 「九本肘字，象臂節形，舊作謂卽𠂔字，非是，臂節可曲可伸，放有糾屈意。守紂从肘省製者，字皆九製之誤。」季旭昇 (2010:991) 「甲骨文“肘”字作“𠂔”，去掉左下指事符號，確與“九”同形，九（見／幽）、肘（知／幽）韻同，聲紐則見母與知母古有通假例，如《説文》鞠〔筆者注：十竹冠〕（居六切，見紐）从竹（知紐）聲。」

²⁶⁰ ギャロン語の「elbow」については国立民族博物館のデータベース (rGyalrongic Languages Database) を参照されたい (<http://htq.minpaku.ac.jp/databases/rGyalrong/>)。

²⁶¹ たとえば潘悟云は *qhl^hag と再構する (東方语言学 <http://www.eastling.org/oc/oldage.aspx>)。

²⁶² もちろん口語層と文語層というような言語層の違いを考えることもできる。

(14) 「道」: {蹈} — 「首」

中古音書母 *sy-*「首」の再構音に関しては研究者間で一致しており、無声側面音 **hl-* が再構される。しかし「首」の諧声関係を見てみると、中古音定母 *d-* の「道」と「導」と諧声関係を有しているだけである。すでに述べたとおり (3.2 「T-type と L-type」)、中古音定母 *d-* は L-type だけでなく、T-type に由来する可能性もあるため、「首」は原則として諧声系列からその上古音を再構することができない。そこで戦国楚簡に目を向けると、首声字の「道」が {蹈} を表している：

③：思（使）民道（蹈）之



上博楚簡『容成氏』第 44 号簡

「蹈」は中古音定母 *d-* であるが、中古音以母 *y-*「昏」を声符に持つことから L-type である。戦国楚簡で L-type 「蹈」と「道」が通仮していることにより、「道」および「首」も L-type に由来する書母 *sy-* であると推定される（【仮説 3】）：

表 4.3.5.3 「蹈」「道」「首」の再構音

	OC		MC		BS2014
蹈	<i>*lʰus</i>	>	<i>dawH</i>	>	dào
道	<i>*lʰuʔ</i>	>	<i>dawX</i>	>	dào
首	<i>*hluʔ</i>	>	<i>syuwX</i>	>	shǒu

L-type 「首」と T-type 「頭」に関しては Unger (1995:131-137)、Sagart (1999:155-156) を参照されたい。

(15) 「向」: {卿} {像}

従来、「向」は中古音曉母 *x-* であるため **x-* と再構されてきた。楚簡中では牙喉音系の語と通仮する：

③④：向（卿）使（士）



上博楚簡『緇衣』第 12 号簡

③⑤：卿士



郭店楚簡『緇衣』第 23 号簡

「卿」は中古音溪母 *kh-* であるから、曉母 *x-* 「向」との通仮は問題ない。してみると「向」

²⁶³ Baxter and Sagart (2014:184) は閩祖語 (Norman (1996:36) に基づく) とミャオ・ヤオ語を根拠に **kə-* を再構する。

ところが、「向」には中古音曉母 *x*-だけでなく、中古音書母 *sy*-の字音もあるため方言差を考えなければならない²⁶⁴。

しかし本稿では「向」に無声鼻音ではなく無声流音*hl-を再構しておきたい。それは次のような通仮例が見えるからである：



ここでは「向」が中古音邪母 *z*-の「像」を表している。「像」は諧声系列上に「漾」があり、「漾」は定母 *d*-、邪母 *z*-のほか以母 *y*-にも読まれるため(『集韻』)、**L-type** と考えられる。してみるとこれと通仮関係にある「向」も **L-type** である可能性が高い。本稿では中古音曉母 *x*-へと変化した**hl*-と書母 *sv*-へと変化した**hl*-を再構する。

	OC		MC			BS2014
向	*hlangs	>	<i>xjangH</i>	>	xiàng	←西方方言 *ṇaŋ-s
卿	*khrang	>	<i>khjaeng</i>	>	qīng	C.qhrang
向	*hlangs	>	<i>syangH</i>	>	xiàng	*ṇaŋ-s
像	*səlangʔ	>	<i>zjangX</i>	>	xiàng	*s.[d]aŋʔ

4.3.6 閩語と上古音一書母 sy-を例に一

264 「𪛗」にも曉母 *x-* と書母 *sv-* がある。

²⁶⁵ たとえば「灘」には中古音透母 *th*-と曉母 *x*-の字音がある。

表 4.3.6.1 *ST に由来する書母 sy-と閩語

	MC	厦門	OC
升	<i>syiŋ</i> (曾開三平蒸書)	tsin 1	*s-təŋ
書	<i>syo</i> (遇開三平魚書)	tsu 1	*s-ta
叔	<i>syuwk</i> (通合三入屋書)	tsɪk 7	*s-tiwk
水	<i>sywɪjX</i> (止合三上旨書)	tsui 3	*s.tur?

上掲の表は上古の*ST に由来する書母字であるが、厦門ではこれを無声無気破擦音[ts]で実現する。次に下表を見てみよう：

表 4.3.6.2 L-type と鼻音に由来する書母 sy-と閩語

	MC	厦門	OC
拭	<i>syik</i> (曾開三入職書)	tsʰit 7	*lək
試	<i>syiH</i> (止開三去志書)	tsʰi 5	*lək-s
舒	<i>syo</i> (遇開三平魚書)	tsʰu 1	*la
首	<i>syuwX</i> (流開三上有書)	tsʰiu 3	*lu?
手	<i>syuwX</i> (流開三上有書)	tsʰiu 3	*ŋu?

この表の書母字は上古の無声側面音の*hl-あるいは無声鼻音*hn-に由来するが、厦門では無声有気破擦音[tsʰ]で実現される。してみると以下の様な音韻対応があることが分かる：

表 4.3.6.3 上古音・閩語音韻対応

{sy: st: ts}					{sy: hl, hn: tsh}		
MC	OC	厦門	MC	OC	厦門		
升 sy	: st	: ts	拭 sy	: *hl	: tsh		
書 sy	: st	: ts	試 sy	: *hl	: tsh		
叔 sy	: st	: ts	舒 sy	: *hl	: tsh		
水 sy	: st	: ts	首 sy	: *hl	: tsh		
			手 sy	: *hn	: tsh		

平田 (2010:62-65) は「水」を「復元強度の低い」語と位置づけているが、仮にこの対応関係が正しいとすると、「水」は厦門で無声無気破擦音[ts]で実現されるため、「水」の上古音は*st に由来すると考えられる²⁶⁶。

これは上古音と厦門方言に限らず他の方言でも同様の対応関係が確認される。実際に、野原・秋谷 (2014:340-350) では当該仮説の正否を問うべく閩語および呉語、湖南省郷話の

²⁶⁶ 遠藤 (2013:22-31) は「水」を「川」と単語家族を為すと見なして、「水」に牙喉音系の声母を考える。

音韻対応と出土資料に基づく上古音を比較することによって、白一平（2010）の仮説を支持する結果を得ている：

表 4.3.6.4 野原・秋谷（2014:341-342）閩語（網掛けは口語音、括弧内は文語音）

	OC	厦門	永福	福州	古田	中仙	鎮前	石陂	盖竹
書	st	tsu ¹	(si ¹)	tsy ¹	tey ¹	tʃy ¹	(ly ¹)	(ey ¹)	(fy ¹)
水	st	tsui ³	tsui ³	tsuei ³	tey ³	tθɔi ³	(lui ³)	(ey ³)	(fyi ³)
少	st	tsio ³	tso ³	tsieu ³	teieu ³	tʃo ³	—	(eiau ³)	(fu ³)
守	st	tsiu ³	tsiu ³	(sieu ³)	teiu ³	(ʃɔu ³)	(liu ³)	(ɛiu ³)	(fu ³)
孀	st	tsim ³	tsim ³	(siŋ ³)	(siŋ ³)	(ʃiŋ ³)	(leiŋ ³)	(seiŋ ³)	(ʃæŋ ³)
升	st	tsin ¹	tsin ¹	tsiŋ ¹	teiŋ ¹	tʃiŋ ¹	(leiŋ ¹)	(seiŋ ¹)	(ʃæŋ ¹)
叔	st	tsik ⁷	tsok ⁷	tsøy ⁷	teyk ⁷	tʃy ⁵	(ly ³)	(ey ⁷)	(fy ⁷)
春	st	tsɿŋ ¹	tsɿŋ ¹	tsyŋ ¹	teyŋ ¹	tθoŋ ¹	(loŋ ¹)	(sueiŋ ¹)	tʃœŋ ¹

このように上古の*st-に由来する中古音書母 sy-は閩南語、閩東語、尤溪中仙方言の広い範囲において無声無気破擦音で実現される（網掛け部分）。このほか湖南省郷話（古丈、沅陵）、呉語の例については野原・秋谷（2014:342-343）、伍云姬・沈瑞清（2010）を参照されたい。

この音韻対応 {st : ts} が成立するならば、以下の様な仮説を建てるのが可能である：

【仮説 4】閩語で無声無気破擦音 TS の場合、上古の*ST に由来する

【仮説 5】閩語で無声有気破擦音 TSH の場合、上古の無声鼻音、無声流音に由来する

してみると「水」のような諧声関係を欠く「復元の強度」の低い語を再構することが可能である。上掲表 4.3.6.4 にあるように「水」は閩南語、閩東語において無声無気破擦音で実現される。よって「水」は*stur?と再構される。以下、当該仮説と出土資料中の通仮例をもとに「復元の強度」の低い語である「少」の字音再構を試みたい。

4.4 「少」の上古音再構

4.4.1 「少」の諧声関係

「少」の上古音韻部に関しては、『詩経』に押韻例が見えるため宵部*-ew と再構される。一方、声母は複雑な諧声関係を有しているかのようにみえるため、却って再構が難しい。したがって、「少」は諧声関係が複雑ゆえに「復元の強度」が低いと言えるかもしれない。

まずは「少」の諧声関係を見てみよう：

表 4.4.1.1 「少」の諧声関係と中古音韻地位

例字	中古音韻地位	説文解字
少	效摂宵韻三等開口上声/去声書母 <i>sy-</i>	从小ノ声
ノ	山摂屑韻四等開口入声滂母 <i>ph-</i> 蟹摂祭韻三等開口去声以母 <i>y-</i>	
眇、杪、秒	效摂宵韻三等 A 開口上声明母 <i>m-</i>	少声 or 少亦声
小	效摂宵韻三等開口上声心母 <i>s-</i>	
鈔	效摂肴韻二等開口平声初母 <i>tshr-</i>	从金少声

「ノ」は韻が大きくかけ離れており、声符としての役割を担っているとは考え難いが、明母 *m-*「眇」「杪」「秒」、心母 *s-*「小」、初母 *tshr-*「鈔」とは諧声関係を有しているようである。

4.4.2 主な研究者の再構音

以下が主な研究者の再構音である：

表 4.4.2.1 各研究者の再構音—「少」

Baxter1992	潘悟云	鄭張尚芳 2003	Schuessler2009	Baxter&Sagart2014
*h(l)jew?	*mhjew?	*hmjew?	*hjau ?	*s-tew?

潘悟云、鄭張尚芳（2003）は明母 *m-*「杪」「眇」「秒」との諧声関係を認め、「少」に **m-*を再構する。潘悟云と鄭張尚芳は「鄭張-潘体系」と称されるように共通点が多いが、「少」の再構音に関しては、潘悟云は無声鼻音を再構し（**mhjew?*）、鄭張尚芳は二重子音（**hmjew?*）を再構するように、やや違いが見られる。

これに対して、Schuessler（2009:204）は“The element 少 is semantic”として、「少」と中古音明母（「眇」等）との諧声関係を認めない。Baxter and Sagart（2014）も同様に「少」と「眇」等との諧声関係を認めない。Baxter and Sagart2014 の再構音（**s-tew?*）は、3.6.5 で述べたように上古音と閩語の有気・無気破擦音の音韻対応から再構されたものであろう。

心母 *s-*「小」、初母 *tshr-*「鈔」との諧声関係の扱いについても研究者間に違いがある。諧声原則によると、通常書母 *sy-*と心母 *s-*は直接諧声関係をなさないため、書母 *sy-*「少」と心母 *s-*「小」、初母 *tshr-*「鈔」が直接諧声関係を有しているとは考えられない。そこで鄭張尚芳は「仲介役」として明母 *m-*（「眇」「秒」）を介すことで、これらの諧声関係を認める（表 4.4.2.2 「**m-*グループ」）：

表 4.4.2.2 鄭張 2003 の鼻音と心母・書母の諧声関係

*m-グループ	*n-グループ	*ŋ-グループ
「少」：書母 *hmjewʔ/s	「恕」：書母 *hnjas	「勢」：書母 *hnjeds
「秒」：明母 *mewʔ	「女」：泥母 *naʔ	「執」：疑母 *ŋeds
「小」：心母 *smewʔ	「絮」：心母 *snas	「褻」：心母 *sŋed

表 3 の網掛け部分のように鼻音や流音は書母 *sy-*、心母 *s-* としばしば諧声関係を有す。表 3 の *m-グループは *n-グループと *ŋ-グループと並行した関係となり、整合性という点で優れた仮説である。

上述したように Schuessler、Baxter and Sagart はそもそも書母 *sy-* と明母 *m-* の諧声関係を認めないため、心母 *s-* との関係も認めることができない²⁶⁷。たとえば Schuessler (2009:200) は“The element 小 is semantic, not phonetic; MC *s-* and *ś-* do not mix in XS.”として否定的である。以上をまとめると、中古音書母「少」をめぐる次の 2 つの仮説がある：

- ① 中古音明母「秒」との諧声関係を認める。鼻音を介すことで中古音心母「小」、初母「鈔」との諧声関係も認める。(鄭張、潘)
- ② 「秒」、「小」「鈔」のいずれとも諧声関係を認めない。(Schuessler、Baxter and Sagart) 以下、出土資料の通仮例を見てみよう。

4.4.3 出土資料中の「少」

4.4.3.1 甲骨文

甲骨文字から金文、さらには戦国楚簡に至るまで「少」という表記は {少} も {小} も表す。

従来の研究では、甲骨文字において三点で表される¹は {小} を表し、四点で表される²は {少} を表すとされてきたが、実際には区別がない。たとえば以下の様な例が見られる：

A：貞今夕¹其雨 『甲骨文合集』12711

B：壬戌卜甲子²（小）雨 『甲骨文合集』33920

例 A は¹のように三点で表され、例 B は²のように四点で表されるが、いずれも {小} を表しており、表記上の違いが弁別的役割を担っていない。このほか「小臣・少臣」や「小牢・少牢」というようなミニマル・ペアと思しき表記が見られるが意味上の違いはない。

4.4.3.2 金文

金文での状況も甲骨文と変わらない：

²⁶⁷ Schuessler (2009)：「小」*siauʔ、「秒」*miauʔ。Baxter and Sagart (2014)：「小」*[s]ewʔ、「秒」：*[m]ewʔ。

C : 女 (汝) 少 (小) 心畏忌

『叔尸罇』、殷周金文集成 (一) : 272

D : 少 (小) 子

『蔡侯紐鐘』、殷周金文集成 (一) : 210

例 C、例 D はいずれも「少」という表記が {小} を表している例である。このほか「余小子 : 余少子」、「小臣 : 少臣」等のような表記もあり、金文においても甲骨文と同様に「少」と「小」に明確な区別が無い。

4.4.3.3 戦国楚簡

戦国楚簡においても状況は変わらない :

E : 母呂 (以) 少 (小) 憇 (謀) 敗 (敗) 大煮 (鬲)

上博楚簡『緇衣』第 12 号簡

F : 少 (小) 邦尻 (處) 大邦之闕 (間)

上博楚簡『曹沫之道』第 14 号簡

例 E、F はそれぞれ「大煮 (鬲)」、「大邦」と対になっており、「少」が {小} を表していることが分かる。これに対して、例 G は「少」という表記が {少} を表す :

G : 卒 (卒) 谷 (欲) 少呂 (以) 多、少則 (易) 輶 (察?)

上博楚簡『曹沫』46b

例 G では「少」が「多」と対になっていることから、{少} を表していることがわかる。このような例から見て、当時は前後の文脈によって {少} と {小} を読み分けていたと考えるほかないだろう。

4.4.3.4 秦簡

これに対して、西方に位置する秦では「少」という表記は {少} を表し、「小」という表記は {小} を表すように明確な区別が見られる :

H : 今尚血出而少

睡虎地秦簡『封診式』92

I : 爲其器同形者、其小大、短長、廣夾 (狹) 必等

睡虎地秦簡『秦律』96

甘肅省から出土した秦統一後の天水放馬灘秦簡でも同様に「少」と「小」に明確な使い分けが見られる²⁶⁸ :

J : 其狀、類 (類) 益 (嗑)、少稟 (眉)、墨、四支 (肢) 不用

天水放馬灘乙種『丹』志四

²⁶⁸ 天水放馬灘秦簡の年代に関しては諸説あるが、本稿では海老根 (2012:159-170) に拠る。海老根 (2012) によると、天水放馬灘秦簡の年代は文字の使用状況から見て秦統一後である。

K：利築宮室、為小嗇夫，有疾難療

天水放馬灘秦簡甲種『建除』甲十五

このように少なくとも戦国時代以降の秦には「少」と「小」に明確な使い分けが見られる²⁶⁹。

4.4.3.5 漢簡

秦の用字習慣は漢代まで踏襲され、「少」と「小」の使い分けは明確である。以下、『老子』の例を見てみよう：

L：少私寡欲 北京大学蔵西漢竹書『老子』170号簡

＊今本「少私寡欲」、馬王堆「少私寡欲」、郭店「少私寡欲」

例 L は「少」が「寡」と対になっており、{少}を表している。

M：大国以下小国 北京大学蔵西漢竹書『老子』63号簡

＊今本「大国以下小国」、馬王堆「大邦以下小邦」、郭店「大邦以下少（小）邦」

例 M は「大国」と対になっており、「小」が {小} を表している。例 M に対応する戦国時代の郭店楚簡ではやはり「少」という表記で {小} を表している。

以上の関係を極めて大まかに表すと以下のようなになる。戦国期においては秦系と東方系という対立を見いだせるかもしれないが、資料の制約のため明確ではない。また「少」と「小」の区別が明確になる具体的な時期についても不明である（大西 2010:382）：

甲骨・金文

「少」「小」 → {少} {小}

秦簡	楚簡
「少」 → {少}	「少」「小」 → {少} {小}
「小」 → {小}	＊「小」は例が少ない

漢代

「少」 → {少}

「小」 → {小}

このような状況から、「少」と「小」を「二文本一字（「少」と「小」は本は一字）」と見る研究者が多くある²⁷⁰。してみると「少」と「小」は通仮可能であるかのように見えるが

²⁶⁹ 大西（2010:382）では「根據放馬灘秦簡和睡虎地秦簡官方系統文獻的用字看，二字的分工大概在戰國晚期已經基本形成了」とされる。

²⁷⁰ 楊樹達（1931/2013:86）「說少」を参照されたい。段玉裁『說文解字注』には「古少小互訓通用」とある。

(甚だしくは諧声関係を有しているかのようにも見えるが)、本稿ではそのように考えない。それは再構の前提として以下の三点があるからである：

- ① 「少」は中古音書母 *sy-* であり、「小」は中古音心母 *s-* である
- ② 諧声原則では書母 *sy-* と心母 *s-* は諧声関係を有しない
- ③ 通仮可能範囲では書母 *sy-* と心母 *s-* は通仮関係を有しない

以上の点から「少」と「小」が上古の段階で諧声、通仮可能であったと考えることはできない。したがって前後の文脈から {少} と {小} を自由に読み替えていたと考えるほかない。

4.4.4 文字構成要素としての「少」

本節では「少」が文字構成要素となる場合について整理を加えたい。以下に示す通り、特に戦国楚簡において「少」という表記は必ずしも「少」の字音—すなわち書母宵部に相当する字音—の語を表すわけではない。

4.4.4.1 疏母歌部「沙省声」

N：長𠂔（沙）		『包山楚簡』第 61 号簡、59 号簡
O：乃東𠂔（徙）、止于成周		清華簡『繫年』第 9 号簡

例 N、O は少声に見えるが、それぞれ {沙}、{徙} を表しているため疏母歌部の「沙」の省声と見なすべきである（「沙」は疏母 *sr-* であり、「徙」は心母 *s-* である。心母 *s-* と疏母 *sr-* はしばしば諧声関係を有す）。同様の例はたとえば『説文』に「𩚑、从魚沙省声」とある。このような例を「少」の字音再構に用いることはできない。

4.4.4.2 精母藥部「雀省声（？）」

P：古（故）上不可𠂔（以）執（設）型（刑）而𠂔（輕）𠂔（爵）



上博楚簡『緇衣』15 号簡

例 P では「𠂔」が {爵} を表している。「爵」はそもそも精母藥部であるため、「𠂔」を少声と見なすことはできない。通常 {爵} を表す場合、金文や楚の用字習慣では「雀」を用

いる。実際に、例 P（上博『緇衣』）に対応する郭店楚簡『緇衣』では「𠂔」に当たる字を「雀」と表記している。「𠂔」は「雀」の省声かもしれない²⁷¹。このような例も「少」の字音再構には用いることができない。

4.4.4.3 心母宵部【小】の字音と通仮

上述したように（4.4.4.3「出土資料中の「少」」）、甲骨文字、金文、戦国楚簡において「少」「小」という表記は弁別的な役割を担っていない。通仮の場合も同様に「少」という表記であっても、実際には【小】の字音（心母宵部）の語を表す：

Q：「玉𦏧（簫）與淳于之田」 清華簡『繫年』第 71-72 号簡

R：「郢大𦏧（府）之𠂔𦏧（筭）」 「郢大府銅量」『文物』1978, 5 期：96 ²⁷²

S：「君又（有）𦏧（謀）臣則壞陞（地）不𦏧（削）」 郭店楚簡『語叢四』第 22-23 号簡

例 Q、R、S は「少」という表記にも拘らず心母宵部【簫】【筭】、心母藥部【削】を表しており、「少」という表記が【小】の字音を表していると考えられる。このような通仮例も「少」の字音再構には用いることができない。また同様の例として、『説文』は初母宵部「𦏧」を少声とするが、上記の例 S と同様に「𦏧」の「少」が【小】の字音を表していると考えるのが妥当である。

4.4.4.4 T-type 藥部「勺」、宵部「趙」

T：𦏧（趙）文子  清華簡『繫年』第 97 号簡

U：𦏧（趙）桓子  清華簡『繫年』第 111 号簡

例 T では少声「𦏧」が【趙】を表し、例 U では少声あるいは勺声の「𦏧」が【趙】を表す²⁷³。また例 T と同一人物を示す例が例 V に見える：

V：𦏧（趙）文子  清華簡（貳）『繫年』第 96 号簡

²⁷¹ 「雀」は『説文』によると「从小隹。讀與爵同」とある。また「雀」という表記が郭店楚簡『太一生水』第 14 号簡に見え【削】に読まれる。「雀」は精母藥部、「削」は心母藥部である。

²⁷² 廣瀬（2006:219）では馬王堆帛書において「趙」が「勺」と表記されることを根拠の一つとして新蔡楚簡に見える「𦏧」を「筭」に読むが、本稿では「少」と「勺」が類音であったため誤って「勺」と表記したものとする。「𦏧」が実際に表している字音は【小】の字音である。

²⁷³ 馬王堆帛書でも「勺」で【趙】を表す。

少声の例 T「𠂔文子」と勺声の例 V「𠂔文子」が同一人物「趙文子」を指すことから、「少」「勺」「趙」の三字は同音あるいは類音であったと考えられる。以下、この通仮例をもとに「少」「勺」「趙」の字音再構を試みたい。

4.4.5 出土資料から見た「勺」「少」「趙」の字音再構

4.4.5.1 「勺」の上古音

「勺」は中古音章母 *tsy-* あるいは禪母 *dzy-* である。したがっていわゆる上古の T-type (**t-*、**th-*、**d-*) である可能性が高い。しかし『説文』によると、「勺」の諧声系列には幫母藥部「杓𠂔」²⁷⁴、匣母宵部（清母藥部）「𠂔」、影母藥部「𠂔」等があり、諧声原則を大きく逸脱する。そこで例 T、U、V と同じ清華簡『繫年』に見える「勺」の通仮例を見てみたい：

W：秦穆公乃𠂔（召）文公於楚



清華簡『繫年』第 37 号簡

例 W では勺声の「𠂔」が中古音禪母 *dzy-* の {召} を表している。「召」は中古音端母 *t-* の「刀」を声符に持つことから T-type とされる。したがってこれと通仮関係にある「勺」も一少なくとも戦国期には一 T-type である（【仮説 1】～【仮説 3】）。本稿では「勺」を **tewk*、**dewk* と再構する。

4.4.5.2 「少」の上古音

ここでは T-type 「勺」と通仮関係にある「少」の字音について述べたい。すでに述べたとおり（3.2 「T-type と L-type」）、戦国竹簡において T-type と L-type は合流しておらず、通仮にも明確な区別がある。したがって、T-type の「勺」と通仮関係にある「少」も T-type—すなわち **ST-* に由来する書母 *sy-* と考えられる。本稿の再構音は以下のとおりである：

表 4.4.5.2.1 戦国楚簡から見た「勺」「少」「趙」の再構音

	OC		MC		BS2014
勺	* <i>tewk</i> / * <i>dewk</i>	>	<i>tsyak</i> / <i>dzyak</i>	>	<i>zhuó</i> / <i>sháo</i> * <i>tewk</i> / * <i>m-tewk</i>
趙	* <i>drew?</i>	>	<i>drjewX</i>	>	<i>zhào</i> * <i>[d]rew?</i>
少	* <i>stew?</i> /s	>	<i>syewX/H</i>	>	<i>shǎo/shào</i> * <i>[s-t]ew?</i> /s








4.4.5.3 「趙」の上古音

すでに「趙」の字音は **drews* と再構したが、ここで一つ問題がある。それは『説文』が「趙」を「肖声」とする点である。「肖」は中古音心母 *s-* であり、「肖」の声符は「小」であ

²⁷⁴ 「𠂔」は象形文字であろう。

る。しかし「趙」は澄母 *dr-* であるため、心母 *s-* 「肖」「小」と諧声関係があるとは考えられない。すでに述べたとおり、秦を除く多くの地域において「少」という表記は {少} の字音—書母宵部—の語だけでなく、{小} の字音—心母宵部—の語も表す。したがって「趙」の「小」は表記上では「小」であるが、これが表す字音は {少} の字音である可能性が高い。そこで春秋後期の晋の侯馬盟書に見える「趙」を見てみたい（図版は字体の似ている順に配している）：

表 4.4.5.3.1 侯馬盟書「趙」（山西省文物工作委员会編『侯馬盟書』）

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
図版							
典拠	156-4	156-1	200-10	152-2	195-8	156-19	88-1
数	118	113	1	1	2	18	1


侯馬盟書に見える「趙」の例③、④、⑤（網掛け）では「趙」の「小」が「少」に作られており、この点からも当時「小」と「少」に区別がなかったことが明らかである²⁷⁵。本稿では「趙」の「小」が {少} の字音を表していたと考える。

4.4.5.4 閩語の「少」

出土資料の通仮例に基づくならば、T-type「勺」と通仮関係にある「少」は*ST に由来する可能性が高い。これはすでに 3.2「T-type と L-type」で挙げた【仮説 1】～【仮説 3】で述べたとおり、戦国竹簡において T-type は T-type とのみ通仮可能であるからである。

ところが、戦国竹簡中には「勺」が T-type では無いように見える例もある：

X：晋公^勺（弱） 清華簡『繫年』第 103 号簡

Y：士又（有）^勺（謀）友、則言談不勺（弱） 郭店楚簡『語叢四』第 23 号簡

例 X は「勺」が {弱} を表し、例 Y では「勺」が {弱} を表す。「弱」は中古音泥母 *ny-* であり、**n-* に由来すると考えられる。T-type「勺」（**tewk*/**dewk*）と**n-*「弱」の調音点は一致するものの、前者は破裂音であり、後者は鼻音であるから自由に通仮できたとは考え難

²⁷⁵ 「肖」についても「小」ではなく「少」に作る字が見られる。これも「少」と「小」に区別がなかったためと考えられる。また睡虎地秦簡『為吏之道』には「肖人」が {小人} を表す例が見えるが、これは非秦系の用字法とされる（大西 2010:383）。

い。したがってこの通仮例 X と Y は「勺」「趙」「少」を T-type とする本稿の仮説の障碍となる。

本稿ではこれら「勺」は T-type ではなく、「約」の異体字であると考えている。「約」には {行き詰まる} や {弱める} のような意味があり、たとえば『礼記』坊記篇に「小人貧斯約〔庶民は貧困になると行き詰まる〕」、『左伝』定公四年に「乗人之約、非仁也〔人の困窮に乗じるのは仁ではない〕」等とある。さらに清華簡『繫年』第 14 号簡には以下のようにある：

Z：宋悼公朝于楚，告以宋司城²⁷⁶之約公室



清華簡『繫年』第 114 号簡

例 Z の「約公室」に関して、清華簡の原注釈は「削弱〔弱める〕」の意味であるとしている。本稿でもこれに従い例 Z の「約」を {弱める} の意味に読み、例 X、Y の「勺」を「約」の異体字と考える²⁷⁶。

このように「少」を T-type—すなわち *ST—に由来する書母 sy-であると決定づける「勺」にも問題があり、確たる証拠とは言えそうにない。しかしそれでもなお本稿では「少」を *stewʔ/s と再構する。これは閩語において「少」が無声無気破擦音 TS で実現されるからである。すでに述べたとおり (3.6.5 「閩語と上古音—書母を例に—」)、中古音書母 sy-に対応する閩語と上古音には明確な音韻対応が見られる：

表 4.4.5.4.1 上古音・閩語対応関係

{sy: st: ts}						{sy: hl, hn: tsh}					
MC			OC			厦門			MC		
升	sy	:	st	:	ts	拭	sy	:	*hl	:	tsh
書	sy	:	st	:	ts	試	sy	:	*hl	:	tsh
叔	sy	:	st	:	ts	舒	sy	:	*hl	:	tsh
水	sy	:	st	:	ts	首	sy	:	*hl	:	tsh
						手	sy	:	*hn	:	tsh

本稿ではこの音韻対応を根拠に【仮説 4】、【仮説 5】を立てている (3.2.5)：

【仮説 4】 閩語で無声無気破擦音 TS の場合、上古の *ST に由来する

²⁷⁶ 例 X、Y の「勺」が「約」の異体字であるとすれば、「勺」という表記は T-type の字音と中古音影母ʔ-の字音を有していたことになる。これは方言差に起因する可能性もあるし、「少」という表記が {少} の字音だけでなく {小} の字音も有していたのと同様に「勺」が複数の字音を表していた可能性もある。仮に方言差によるものであるとすれば、清華簡『繫年』の出处と関係するかもしれないが、詳細は不明である。清華簡『繫年』に関しては、大西 (2014c:21:46) に詳しい。

【仮説 5】 閩語で無声有気破擦音 TSH の場合、上古の無声鼻音、無声流音に由来する

閩語における「少」は以下の通りである：

表 4.4.5.4.2 閩語および瓦郷方言「少」（野原, 秋谷 2014、伍云姬, 沈瑞清 2010）

厦門	永福	福州	古田	中仙	古丈	沅陵
tsio ³	tso ³	tsieu ³	teieu ³	tʃo ³	tsau ³	tsao ³

「少」はいずれの地点でも無声無気破擦音 TS で実現されている。したがって本稿では【仮説 4】に従い、「少」を*ST に由来する書母 sy- であると考ええる。

表 4.4.5.4.3 「少」の字音

OC		MC		BS2014	
少	*stewʔ/s	>	syewX/H	> shǎo/shào	*[s-t]ewʔ/-s

すでに述べたとおり、戦国竹簡において「少」という表記は {少} の字音だけでなく、{小} の字音の語も表す。したがって研究者によってはこの現象を根拠に「少」と「小」を同音あるいは類音と見なすものもあるが、これには従えない。そもそも歴史言語学の原則として、中古音や閩語で音価が異なる以上、(例外的な音変化や類推、言語層の違い等はあるが) 上古の段階で同音ということはある得ないはずである。中古音でそれぞれ書母 sy- と心母 s- であること、書母 sy- と心母 s- は諧声関係を有しないこと、戦国竹簡での振る舞い、上古音と閩語の音韻対応、これらすべてを説明するためには「少」を*ST- に由来する書母 sy- と見なすほかない。

おわりに

上古音声母研究は清朝考証学者の錢大昕、段玉裁、章炳麟、黄侃らの登場を契機に本格的に始まった。錢大昕の「古無輕唇音」、「古無舌上音」や、黄侃による「古本紐」という概念、さらには段玉裁による「同諧聲者必同部也」という高らかな宣言はまさしくその後の上古音研究を方向付けた画期的な成果である¹。諧声符研究なくして上古音研究は不可能であると言っても過言ではない。

その後、Bernhard Karlgren の登場によって上古音研究は一気に加速する。Karlgren は西洋の比較言語学的手法を基礎にはじめてアルファベットで上古音・中古音を再構し、大きな成果を挙げている。Karlgren の上古音・中古音再構には本当の意味での比較方法が用いられていないという批判もあるが、Karlgren の再構音への反駁・修正が加えられることによって上古音研究が格段に進んだことは間違いない。

Karlgren 以降の上古音研究は中国では董同龢、王力等が活躍し、欧米の研究者では Sergej Jaxontov や Edwin G. Pulleyblank の研究に驚異的な成果がある。特に Jaxontov や Pulleyblank による仮説は現在の上古音体系の基礎を築いたと言っても過言ではない。その中でも円唇母音仮説 (the rounded vowel)、二等韻への*-l-再構 (本稿の*-r-に相当)、L-type 仮説 (the L-type hypothesis) 等は現在でも多くの支持されている仮説である。これら様々な仮説をよりシンプルにまとめたものが李方桂による「上古音研究」(『清華大学学報』1971 年) である。李方桂によって様々な仮説が取捨選択された結果、以前の上古音体系に比べるとより自然 (naturalness) な上古音体系が示された。1992 年には、William H. Baxter の *A Handbook of Old Chinese Phonology* が出版され、当該書は最も信頼の置ける上古音の研究書として今もなお重宝されている。特に著者は上古音研究を進める上での方針として、中国諸方言への変化を説明できること、中古音への変化を説明できること等を挙げているが、これは Baxter (1992:24) において詩経の押韻例や諧声符が研究対象の中心に据えられていることから明らかである。この頃になると中国国内では鄭張尚芳、潘悟云等が目覚ましい活躍を見せる。鄭張—潘体系 (鄭張—潘系統) と称されるように両者の見解は概ね一致しており、かれらが中国の上古音研究を牽引しているとする研究者も少なくない。潘悟云 (1997) の口蓋垂音仮説については本稿でも一部修正を加えて採用している (第3章 §3.3)。

2014 年には 2000 年頃から共同研究を続けてきたという William H. Baxter と Laurent Sagart による *Old Chinese: A New reconstruction* が出版され、書名のごとく新たな試みがなされている。特にミャオ・ヤオ語 (Hmong-Mien) 等の周辺言語に見える借用語 (あるいは同源語)

¹ 古屋 (2010:8)。

や閩祖語（Proto-Min）との比較を積極的に進めており、比較言語学の重要性を強調している点が特徴的である。また Baxter and Sagart（2014）は比較方法のほか、出土資料を用いて研究することの意義も強調している。

このような研究手法の歴史的変遷は極めて自然な流れである。本稿冒頭でも紹介したとおり、広義の「上古音」というと殷から三国時代までを含むため、およそ 2000 年という年月がある。また対象とする地域も極めて広範囲に渡り、このような広義の「上古音」を一つの音韻体系として扱うことは当然のことながら理想的とは言えない。これらはすべて資料の制約に起因する問題であり、上古音研究の最大の障碍でもある。個別的な例では、たとえば平田（2010:62-65）で指摘されるような「水」がある。「水」は諧声関係を欠き、諸方言でも再構の手掛かりを見いだせないため、いわゆる「復元の強度」が低い語である。大部分の語が「水」のように再構する手掛かりを有していないため、中古音に基づいて再構するほかない。幸いにして諧声関係や押韻しているような語であっても、それが後世の人々の手によって修正された結果であるという危険性も潜んでいる。特に漢字はその時代の音韻体系に基づき作り出されることがあるため、すべての形声文字を一律に扱うと何らかの問題が生じる。このような制約下に置かれているため、上古音研究者の中には隔靴搔痒の感を禁じ得ない研究者も少なくないはずである。

ところが 20 世紀後半になると、上古音研究を取り巻く環境は一変する。中国各地、特に長江流域を中心に多数の資料が陸続と発見されているのである。これら新出土資料は、考古学者はもとより歴史や思想を専門とする研究者の注目を集めてきた。歴史言語学の分野に目を向けると、文字学者や文法を専門とする研究者を中心に研究が進められてきたが、音韻史の研究も少なからずあり、趙彤（2006）、李存智（2010）等の専門書がある。本稿でも戦国竹簡に見える通仮例を主な研究の対象としているが、これは戦国竹簡を利用することで上述のような上古音を取り巻く問題点を多少なりとも排除することができるからである。本稿で検討を加えた §3.2 の T-type と L-type に関する仮説、第 4 章「無声鼻音 HN、preinitial*s-、書母 sy-の再構」はまさに出土資料の利点を活かし再構音の確度を向上させたものであり、この点が本稿の貢献でもある。しかし出土資料を研究対象とすることですべての問題を解決できるわけではない。実際の音価再構ではやはり伝統的な手法や中古音の音価に頼らざるをえないのが現状である。今後の展開として、Baxter and Sagart（2014）のような閩語との比較、諸言語に見られる借用語や同源語との比較を視野に入れた研究が必要になるであろう。今後も一つの語に対して、伝世文献、出土資料、閩語、他言語にみえる漢語の借用語等を用いて多角的なアプローチを加えることによって一つ一つの語の復元の強度を高めなければならない。またそうすることで上古音体系全体の確度も自ずと高まるはずである。

参照文献

- 〔唐〕陸德明『經典釋文』（北京：中華書局。1983 年。）
〔宋〕戴侗『六書故』（黨懷興 劉斌點校。中華書局。2012 年）
〔清〕錢大昕『十駕齋養新錄』卷五（上海：商務印書館。1935 年）
〔清〕段玉裁『說文解字注』（上海：上海古籍出版社。1981 年）
〔清〕黃侃『音略』（黃侃撰『黃侃論學雜著』。上海：中華書局。1964 年）
〔清末民初〕章炳麟『國故論衡』（『章氏叢書』臺北：世界書局。1958 年）
〔清末民初〕章炳麟『太炎先生自訂年譜』（上海書店。1986 年）

中国語文献

- 北京大学中国語言文学系語言学教研室編 2003.『漢語方音字彙』第二版。北京：語文出版社。
白一平 2010.「“𠂔”、“勢”、“設”等字的構擬和中古音書母 sy-（書母＝審三）的來源」，
『簡帛』5:161-177 頁。武漢大學簡帛研究中心，上海：上海古籍出版社。
陳劍 2003.「上海楚簡《容成氏》與古史傳說」，『中國南方文明學術研討會論文』。
陳斯鵬 2011.『楚系簡帛中字形與音義關係研究』。中國社會科學出版社。
陳新雄 1978.『音略補證』。臺北：文史哲出版社。
陳新雄 1993.「黃侃的古音學說」，『中國語文』6. 445-454 頁。
陳新雄 1999.『古音研究』。臺北：五南圖書出版公司。
陳新雄 2005.『聲韻學』。臺北：文史哲學集成。
陳偉 2002.『郭店竹書別釋』。武漢：湖北教育出版社
陳偉 2009.『楚地出土戰國簡冊〔十四種〕』。北京：經濟科學出版社。
陳垂平 2004.「論區別假借和通假的必要性」，『河南教育學院學報（哲學社會科學版）』5, 85-87
頁。
大西克也 2006.「戰國楚系文字中兩種“告”字——兼釋上博楚簡《容成氏》的三“𠂔”」，『簡
帛』1. 81-96 頁。上海：上海古籍出版社。
大西克也 2010.「放馬灘秦簡用字的幾個特點」，『第二十一屆中國文字學國際學術研討會論文
集』:375-392 頁，東吳大學。
大西克也 2012.「說“与”和“予”」『古文字研究』2. 644-653 頁。
大西克也 2014a.「從出土資料再論章系字腭化的年代」，『古文字研究』30. 557-562 頁。北京：
中華書局。
丁山 1928.「數名古誼」，『歷史語言研究所集刊』1-1: 89-94 頁。
馮勝君 2007.『郭店與上博簡對比研究』。北京：線裝書局。
龔煌城 2001.「漢藏比較語言學中的幾個問題」，『中央研究院歷史語言所集刊』81-1. 193-226
頁。

- 廣瀨薰雄 2006.「新蔡楚簡所謂“贈書”簡試析」,『簡帛』1:211-221 頁,上海:上海古籍出版社。
- 郭沫若 1978.『甲骨文合集』第二冊。北京:中華書局。
- 郭錫良 1997.「介詞于的起源和發展」,『中國語文』2。131-138 頁。
- 郭永秉 2007.「讀《平王問鄭壽》篇小記二則」, 簡帛網。
- 海老根量介 2012.「放馬灘秦簡抄寫年代蠡測」,『簡帛』第七輯:159-170 頁。上海:上海古籍出版社。
- 韓昞濤 2013.「出土文獻中出現的去聲後綴*-s 痕跡」,『第五屆韓漢語言學國際學術研討會論文集』。179-184 頁。浙江大學。北京:中華書局。
- 何琳儀 1998.『戰國古文字典』。北京:中華書局。
- 河南省文物考古研究所編著 2003.『新蔡葛陵楚墓』。鄭州:大象出版社。
- 侯精一主編 2002.『現代漢語方言概論』。上海:上海教育出版社。
- 湖北省荊沙鐵路考古隊. 1991.『包山楚墓』。北京:文物出版社。
- 湖北省文物考古研究所・北京大學中文系編 2000.『九店楚簡』。北京:中華書局。
- 湖北省文物考古研究所・北京大學中文系編 2000.『望山楚簡』。北京:中華書局。
- 黃德寬 2014.『古漢字發展論』。北京:中華書局。
- 季旭昇主編 2003.『上海博物館藏戰國楚竹書(二)讀本』。臺北市:萬卷樓。
- 季旭昇主編 2004.『上海博物館藏戰國楚竹書(一)讀本』。臺北市:萬卷樓。
- 季旭昇主編 2005.『上海博物館藏戰國楚竹書(三)讀本』。臺北市:萬卷樓。
- 季旭昇主編 2007.『上海博物館藏戰國楚竹書(四)讀本』。臺北市:萬卷樓。
- 季旭昇 2010.『說文新證』。福州:福建人民出版社
- 荊門市博物館 1998.『郭店楚墓竹簡』。北京:文物出版社。
- 李葆嘉 2012.『清代古聲紐學』。上海:上海古籍出版社。
- 李存智 2010.『上博楚簡通假字音韻研究』。臺北:萬樓閣。
- 李方桂 1971.「上古音研究」,『清華大學學報』1.2。1-61 頁。
- 李方桂 1980.『上古音研究』。北京:商務印書館。
- 李方桂 1983.「上古音研究中聲韻結合的方法」,『語言研究』第 2 期, 1-6 頁。
- 李豐娟 2008.「銀雀山漢墓竹簡〔壹〕形聲字研究」,『簡帛語言文字研究』3。297-308 頁。成都:巴蜀書社。
- 李家浩 1979.「釋弁」,『古文字研究』1。39-395 頁。
- 李新魁 1994.「上古音“曉匣”歸“見溪群”說」,『李新魁語言學論集』。1-19 頁。北京:中華書局。
- 李學勤主編 2010.『清華大學藏戰國竹簡戰國竹簡(壹)』。北京:中西書局。
- 李學勤主編 2011.『清華大學藏戰國竹簡戰國竹簡(貳)』。北京:中西書局。
- 劉樂賢 1994.『睡虎地秦簡日書研究』。台北:文津出版社。
- 劉綸鑫主編 1999.『客贛方言比較研究』。北京:中國社會科學出版社。

- 劉釗 2005.『郭店楚簡校釋』。福州：福建人民出版社。
- 陸志韋 1947.『古音說略』。北平：哈佛燕京學社。
- 陸志韋 1985.『陸志韋語言學著作集（一）』。北京：中華書局。
- 羅常培 1931.「知徹澄娘母音值攷」,『國立中央研究院歷史語言研究所集刊』3-2. 121-157 頁。
- 羅常培 1937/1963.「經典釋文和原本玉篇反切中的匣于兩紐」,『羅常培語言學論文選集』。中國科學院語言研究所編。117-121 頁。(『中央研究院歷史語言研究所集刊』8-1.)。
- 馬承源主編 2001.『上海博物館藏戰國楚竹書（一）』。上海：上海古籍出版社。
- 馬承源主編 2002.『上海博物館藏戰國楚竹書（二）』。上海：上海古籍出版社。
- 馬承源主編 2004a.『上海博物館藏戰國楚竹書（三）』。上海：上海古籍出版社。
- 馬承源主編 2004b.『上海博物館藏戰國楚竹書（四）』。上海：上海古籍出版社。
- 馬承源主編 2005.『上海博物館藏戰國楚竹書（五）』。上海：上海古籍出版社。
- 馬承源主編 2007.『上海博物館藏戰國楚竹書（六）』。上海：上海古籍出版社。
- 馬承源主編 2008.『上海博物館藏戰國楚竹書（七）』。上海：上海古籍出版社。
- 梅祖麟 2000.「上古漢語動詞清濁別義的來源—再論原始漢藏語*s-前綴的使動化構詞功用」,『民族語文』第3期, 3-20 頁。
- 梅祖麟 2007.「古文字與上古音札記三則」,『中國語言學集刊』1-2. 1-17 頁。
- 孟逢生 2005.2.15「上博竹書（四）閒詁」。簡帛研究。
- 潘悟云 1997.「喉音考」,『民族語文』5:10-24 頁。
- 平山久雄 1993/2005.「用聲母腭化因素*j 代替上古漢語的介音*r—對上古舌齒音聲母演變的一種說想」,『平山久雄語言學論文集』。北京：商務印書館。
- 裘錫圭 1978/2012.「史牆盤銘解釋」,『裘錫圭學術文集（金文及其他古文字卷）』。上海：復旦大學出版社。
- 裘錫圭 1983/2012.「說“𠩺”」,『裘錫圭學術文集（甲骨文卷）』。上海：復旦大學出版社。206-211 頁。
- 裘錫圭 1988.『文字學概要』。北京：商務印書館。
- 山西省文物工作委員會編 1976.『侯馬盟書』。北京：文物出版社。
- 邵榮芬 1991.「匣母字上古一分为二試析」,『語言研究』第1期。
- 邵榮芬 1995/1997.「匣母字上古一為二再證」,『邵榮芬音韻學論集』。北京：首都師範大學出版社。(『中國語言學學報』第七期)。
- 沈培 2006.2.22.「上博簡《姑成家父》一個編聯組位置的調整」。簡帛網。
- 睡虎地秦墓竹簡整理小組編 1990.『睡虎地秦墓竹簡』。北京：文物出版社。
- 蘇建洲 2003.1.15.「上博楚竹書〈容成氏〉〈昔者君老〉考釋四則」簡帛研究網。
- 蘇建洲 2007.8.20.「對“訊”字的一點補充」,簡帛網。
- 孫凌安 1990.「假借和通假的區別與形体」,『東疆學刊（哲學社會科學版）』第1、2期, 73-77 頁。
- 孫玉文 2005.「試論跟明母諧聲的曉母字的語音演變（一）」,『古漢語研究』第1期。2-8 頁。

- 王力 1956/1986.『漢語音韻學』(『王力文集』第4卷)。山東：山東教育出版社。
- 王力 1980.『詩經韻讀』。上海：上海古籍出版社。
- 王力 1957/1988.『漢語史稿』。(『王力文集』第9卷)。山東：山東教育出版社。
- 王力/1985/1987.『漢語語音史』。(『王力文集』第10卷)。山東：山東教育出版社。
- 魏建功 1935.『古音系研究』。北京大学出版組。
- 魏培泉 1993.「古漢語介詞於的演變略史」,『中央研究院歷史語言研究所集刊』62-4: 717-786 頁。
- 聞宥 1985.「“于”“於”新論」,『中國語言學報』2: 4-48 頁。
- 武漢大學簡帛研究中心 荊門市博物館編著 2011.『楚地出土戰國簡冊合集(一)』。北京：文物出版社。
- 伍云姬·沈瑞清 2010.『湘西古丈瓦鄉話調查報告』。上海：上海教育出版社。
- 邢公畹 1991.「關於漢語南島語的發生關係問題—L.沙加爾《漢語南島語同源論》書評補正一」,『民族語文』3:1-14 頁。
- 雅洪托夫,謝·叶(唐作藩,胡雙寶譯) 1986.『漢語史論集』。北京：北京大学出版社。
- 顏森 1981.「高安(老屋周家)方言的語音系統」,『方言』2. 104-121 頁。
- 楊樹達 1931/2013.『積微居小學金石論叢』。上海：上海古籍出版社。
- 野原將揮 2010.「詩論<<郭店楚簡>>聲母系統」, In Mitsuaki Endo & Yoshihisa Taguchi(eds.) *Papers in Old Chinese and Sino-Tibetan*. Linguistics Circle for the Study of Eastern Eurasian Languages. pp.69-78.
- 野原將揮 2011.「“仇雠”的讀音～以<<清華簡·耆夜>>為例～」,『中國語學研究 開篇』。30: 42-45 頁。東京：好文出版。
- 野原將揮 秋谷裕幸 2014.「也談來自上古*ST-的書母字」,『中國語文』第4期, 340-350 頁。
- 葉玉英 2009.『古文字構形與上古音研究』。廈門：廈門大學出版社。
- 遠藤光曉 2001.「<<廣韻>>中音位頻率的研究」,『中國音韻學論集』。304-317 頁。東京：白帝社。
- 虞万里 2001.『榆枋齋學術論集』。南京：江蘇古籍出版社。
- 曾運乾 1927/1996.「喻母古讀攷」,『音韻學講義』。165-170 頁。北京：中華書局。(『東北大學季刊』第十二期)。
- 張德芳編 孫占宇 2013.『天水放馬灘秦簡集釋』。甘肅：甘肅文化出版社。
- 張光裕 2006.「從簡帛縮見“然句”看“句”“后”、“後”諸字的關係」,『簡帛』第1輯。上海：上海古籍出版社。
- 張茂堯 2007.「也談“假借”與“通假”」,『現代語文(語言研究版)』第5期, 124-125 頁。
- 趙克剛 1985.「古本聲述學」,『重慶師範學院學報』第4期, 59-72 頁。
- 趙彤 2006.『戰國楚方言音系』。北京：中國戲劇出版社。
- 鄭張尚芳 1995/2005.「漢語與親族語同源根詞及符綴成分比較上的扞對問題」,『漢語的祖先』。北京：中華書局。442-462 頁。(JCL Monograph no.8: 269-282)

- 鄭張尚芳 1995.「上古漢語声母系統」未刊行。
- 鄭張尚芳 2003.『上古音系』。上海：上海教育出版社。
- 周法高 1984.『中國音韻學論文集』。中文大學出版社。
- 周波 2012.『戰國時代各系文字間的用字差異現象研究』。北京：線裝出版。
- * 中国語文献は繁体字表記の書はそのまま繁体字とした。

日本語文献

- 秋谷裕幸 2003.《吴语处衢方言(西北片)古音构拟》。好文出版社。
- 遠藤光暁 2013.「水の単語家族」,『太田斎・古屋昭弘両教授紀年中国語学論集』。22-31 頁。
東京：好文出版
- 古屋昭弘 1984.「説唱詩話『花關策傳』と明代の方言」,『中国文学研究』10 号。29-50 頁。
- 古屋昭弘 2006.「儒教と中国語学—出土文献と上古音—」,『近世儒学研究の方法と課題』。
東京：汲古書院。207-221 頁。
- 古屋昭弘 2008.「上古の開合と戦国楚簡の通仮例」,『早稲田大学大学院文学研究科紀要』。
第 54 輯。211-228 頁。
- 古屋昭弘 2010.「上古音研究と戦国楚簡の形声文字」,『中国語学』257 号。4-33 頁。
- 平田昌二 2010.「“水”の字音から」,『日本中国語学会第 60 回全国大会予稿集』。62-65 頁。
- 平山久雄 1986.「上古漢語の声調調値」,『伊藤漱平教授退官記念中国学論集』。東京：汲古書院。
- 河野六郎 1950/1979.「中國音韻史研究の一方向—第一口蓋音化に關聯して」,『河野六郎著作集』第 2 卷。平凡社。227-232 頁。(『中国文化研究会会報』第 1 期 1 誌。東京理科大学)
- 河野六郎 1953/1980.「諧聲文字論」,『河野六郎著作集』第 3 卷。平凡社。3-13 頁。(『東京教育大学漢文学会会報』第 14 号)
- 河野六郎 1971/1979.「中国語の系統と歴史」,『河野六郎著作集』第 2 卷。平凡社。521-534 頁。(服部四郎編『言語の系統と歴史』。岩波書店。1971 年)
- 河野六郎 1978/1980.「轉注考」,『河野六郎著作集』第 3 卷。平凡社。127-144 頁。(『東洋學報』第 59 卷 3・4 号。このほか 1994 年「轉注考」,『文字論』。46-68 頁。東京：三省堂)
- 河野六郎 1980/1994.「假借論」,『文字論』。東京：三省堂。(『池田末利博士古希記念東洋學論集』)
- 河野六郎 1994a.「文字の本質」,『文字論』。1-29 頁。東京：三省堂。
- 河野六郎 1994b.「六書について」,『文字論』。25-31 頁。東京：三省堂。
- 松本克己 1984.「言語史の再建と言語普遍」,『言語研究』86 号。5-32 頁。
- 三根谷徹 1972.『越南漢字音の研究』。東京：東洋文庫。
- 三根谷徹 1993.『中古漢語と越南漢字音』。東京：汲古書院。
- 宮島和也 2015.「戦国楚・秦における前置詞「于」「於」をめぐって」,『中国語学』262: 114-134

頁。

宮本徹 2001.「上古漢語の**l*,**r*について」,『東京大学中国語中国文学研究室紀要』。第4号。1-21頁。

根岸政子 1982.「段玉裁の『説文解字注』にあらわれる凡例についての一考察」,『お茶の水女子大学中国文学会報』Vol.1, 48-63頁。

野原将揮 2009.「上古中国語音韻体系に於ける T-type/L-type 声母について—楚地出土竹簡を中心に—」,『中国語学』256号: 67-85頁。

野原将揮 2010.「上古音研究における中国“新派”の研究」,『中国語学』257: 69-78頁。

野原将揮 2011.「「好」の字音とその単語家族—上古音研究と戦国楚地出土資料から—」,『漢字文化研究』1: 7-24頁。

野原将揮 2015.「少の上古音再構について」,『中国語学』262: 57-75頁。

野原将揮 2015.「William H. Baxter 著 田中孝顕訳『古代中国語音韻学ハンドブック』(きこ書房, 2014年, 1113pp.)」,『歴史言語学』4: 59-71頁。

大西克也 2007.「楚簡における第一口蓋音化に関わる幾つかの声符について」,『佐藤進教授還暦記念中国語学論集』。東京: 好文出版。

大西克也 宮本徹 2009.『アジアと漢字文化』。東京: 放送大学教育振興会。

大西克也 2013.「秦の文字統一について」, 渡邊義浩編『中国新出土資料学の展開』: 127-149頁。東京: 汲古書院。

大西克也 2014b.「非発掘簡を扱うために」, 第66回上博楚簡研究会資料。(2015年『出土文献と秦楚文化』第8号)

大西克也 2015.「清華簡『繫年』の地域性に関する詩論—文字学の視点から」,『資料学の方法を探る: 情報発信と受容の視点から』21-46頁。

頼惟勤監修 説文会編 1983.『説文入門』。大修館書店。

白川静 1984.『字統』。東京: 平凡社。

藤堂明保 1957.『中国語音韻論』。東京: 江南書院。

藤堂明保 1965.『漢字語源辞典』。学燈社。

藤堂明保 1967.「II 音韻論 1.上古漢語の音韻」,『中国文化叢書 I 言語』。大修館書店。33-89頁。

藤堂明保 1980.『中国語音韻論——その歴史的研究——』。東京: 光生館。

藤堂明保 1987.「形態基という考え方」,『藤堂明保中国語学論集』pp.232-241。汲古書院。

戸内俊介 2007.「殷代漢語の時間介詞“于”の文法化プロセスに関する一考察—未来時指向をてがかりに」,『中国語学』254号。164-180頁。

戸内俊介 2010.「上博楚簡『姑成家父』譯注」,『出土文献と秦楚文化』。5号。141-180頁。

戸内俊介・野原将揮 2014.「清濁別義と称される現象について」, TB+OC 配布資料。

欧文

- Baxter, William H. 1992. *A Handbook of Old Chinese Phonology*. Berlin; New York: Mouton de Gruyter.
- Baxter, William H. 2005. 出土文献和上古汉语的构拟, Chicago, May 2005; Shanghai Normal University, 12 Dec 2005.
- Baxter, William H. 2015.11.20. The origins of the Baxter-Sagart reconstruction of Old Chinese. Papers presented at HistLing. University of Michigan.
- Baxter, William H. and Laurent Sagart. 1998. Word Formation in Old Chinese. In Jerome L. Packard (eds.), *New Approaches to Chinese Word Formation : Morphology, Phonology and the Lexicon in Modern and Ancient Chinese*. Berlin; New York: Mouton de Gruyter. 35-76.
- Baxter, William H. and Laurent, Sagart. 2014a. *Old Chinese: New reconstruction*. New York: OXFORD University Press.
- Baxter, William H. and Laurent, Sagart. 2014b. *Baxter-Sagart Old Chinese reconstruction, version 1.1 (20 September 2014)*. <http://ocbaxtersagart.lsa.umich.edu/>
- Benedict, P K. 1972. *Sino-Tibetan: A Conspectus*. Cambridge University Press.
- Bodman, Nicholas C. 1980. Proto-Chinese and Sino-Tibetan: Data Towards Establishing the Nature of the Relationship. In Frans Van Coetsem and Linda R. Waugh (eds.), *Contributions to Historical Linguistics*. Leiden: E. J. Brill. 34-199.
- Edkins, J. 1876. Introduction to the study of the Chinese characters. London: Trubner & co.
- Handel, Zev. 2012. Valance-Changing Prefixes and Voicing Alternation in Old Chinese and Proto-Sino-Tibetan: Reconstructing *s- and *N-Prefixes. *Language and Linguistics* 13-1. 61-82.
- Hill, Nathan W. 2013. Old Chinese *sm- and the Old Tibetan word for 'fire'. *Cahiers de Linguistique Asie Orientale* 42-1. 60-71.
- Jaxontov, Sergej Evgen'evič. 1960a. Consonant combinations in Archaic Chinese. *Papers presented by the USSR delegation at the 25th International Congress of Orientalists, Moscow*, 1-17. Moscow: Oriental Literature Publishing House.
- Jaxontov, Sergej Evgen'evič. 1960b. Fonetika kitajskogo jazyka 1tsysjačeletija do n. e. (labializovannye glasnye). *Problemy Vostokovedenija* 1960(6). 102-115.
- Karlgren, Bernhard. 1923/1974. *Analytic Dictionary of Chinese and Sino-Japanese*. New York: Dover publications, Inc.
- Karlgren, Bernhard. 1926/1968. On the Authenticity and Nature of the Tso Chuan. Taipei: Ch'eng-wen Publishing Company.
- Karlgren, Bernhard. 1933. Word Families in Chinese. *Bulletin the Museum of Far Easter Antiquities* 5:9-120.
- Karlgren, Bernhard. 1954/1992. Compendium of Phonetics in ancient Chinese and archaic Chinese. *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities* 26. 211-367.

- Li Fang-kuei. 1936-37. Languages and Dialects. *The Chinese Yearbook 2nd Issue*. Publisher under the Auspices of Chinese Year Book Publishing Co. 121-128.
- Li Fang-kuei. 1945. Some Old Chinese Loan Words in the Tai Languages. *Harvard Journal of Asiatic Studies* 8, No.3/4. 333-342.
- Li Fang-kuei. 1973. Languages and Dialects. *Journal of Chinese Linguistics* 1-1. 1-13.
- Maddieson, Ian. 1982. *Patterns of sounds*. Cambridge University Press.
- Matisoff, James A. 2003. *Handbook of Proto-Tibeto-Burman: system and philosophy of Sino-Tibetan reconstruction*. Berkeley: University of California Press.
- Matisoff, James A. 2015. The so-called prefixes of Tibeto-Burman, and why they are so called. 48th *International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics*. University of California, Santa Barbara.
- Mei, Tsu-lin. 1989. The causative and denominative functions of the *s-prefix in Old Chinese. *Proceedings of 2nd International Conference on Sinology: Section on Linguistics and Paleography*, 33-51. Taipei: Academia Sinica.
- Mei, Tsu-lin. 2012. The Causative *s- and Nominalizing *-s in Old Chinese and Related Matters in Proto-Sino-Tibetan. *Language and Linguistics* 13. 1-28.
- Norman, Jerry. 1973. Tonal development in Min. *Journal of Chinese Linguistics* 1. 222-238.
- Norman, Jerry. 1974. The initial of Proto Min. *Journal of Chinese Linguistics* 2. 27-36
- Norman, Jerry. 1986. The origin of the Proto-Min softened stops. *Contributions to Sino-Tibetan studies*, ed. John McCoy and Timothy Light, 375-384. Leiden: E. J. Brill.
- Norman, Jerry. 1994. Pharyngealization in Early China. *Journal of the American Oriental Society* 114. 397-408.
- Norman, Jerry and W. South Coblin. 1995. A New Approach to Chinese Historical Linguistics. *Journal of the American Oriental Society* 115-4. 576-584.
- Ostapirat, Weera. 2000. Proto-Kra. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 23. 1-251.
- Pulleyblank, E.G 1962. The Consonantal system of Old Chinese. *Asia Major* 9. 58-144.
- Pulleyblank, E G. 1973. Some New Hypotheses Concerning Word Families in Chinese. *Journal of Chinese Linguistics* 1-1. 111-125.
- Ratliff, Martha. 2010. Hmong-Mien language history. Canberra: Pacific Linguistics.
- Sagart, Laurent 1993. Chinese and Austronesian: evidence for a genetic relationship. *Journal of Chinese Linguistics* 21-1: 1-63.
- Sagart, Laurent 1999. *The Roots of Old Chinese*. Amsterdam: John Benjamins.
- Sagart, Laurent 2004. The Chinese Names of the Four Directions. *The Journal of American Oriental Society* 124. 69-76.
- Sagart, Laurent and Baxter, William H. 2009. Reconstruction Old Chinese uvulars in the Baxter-Sagart system (Version 0.99). *Cahiers de Linguistique – Asie Orientale* 38(2): 221-244.

- Sagart, Laurent and Baxter, William H. 2012. Reconstructing the *s- prefix in Old Chinese. *Language and Linguistics* 13. 29-59.
- Schuessler, Axel. 1996. Palatalization of Old Chinese velars. *JCL* 24-2. 197-211.
- Schuessler, Axel. 1974. R and L in Archaic Chinese. *Journal of Chinese Linguistics* 2-2. 186-199.
- Schuessler, Axel. 2007. *Etimological Dictionary of Old Chinese*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Schuessler, Axel. 2009. *Minimal Old Chinese and Later Han Chinese*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Schuessler, Axel. 2010. The time of emergence of medial yod. *Studies in honor of Jerry Norman*, ed. Anne O. Yue and W. South Coblin, 305-310. Hong Kong: Ng Tor-tai Chinese Language Research Center, The Chinese University of Hong Kong.
- Starostin, Sergej Anatol'evič. 1989. *Rekonstrukcija drevnekitajskoj fonologičeskoj sistemy*. Moskva: "Nauka," Glavnaja redakcija vostočnoj literatury (СТАРОСТИН, С. А. 1989. РЕКОНСТРУКЦИЯ ДРЕВНЕКИТАЙСКОЙ ФОНОЛОГИЧЕСКОЙ СИСТЕМЫ. : НАУКА. Главная редакция восточной литературы.)
- Ting, Pang-hsin. 1977-78. ARCHAIC CHINESE *g, *gw, *ɣ AND *ɣw, *MONUMENTA SERICA Journal of Oriental Studies* 33. 171-179.
- Unger, Ulrich 1990. Die Armbrust und der steigende Ton. *Hao-ku* 36. 44-68.
- Unger, Ulrich 1990. Finger. *Hao-ku* 46. 131-137.